明治三十九年五月五日發行
每月一回五日發行
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

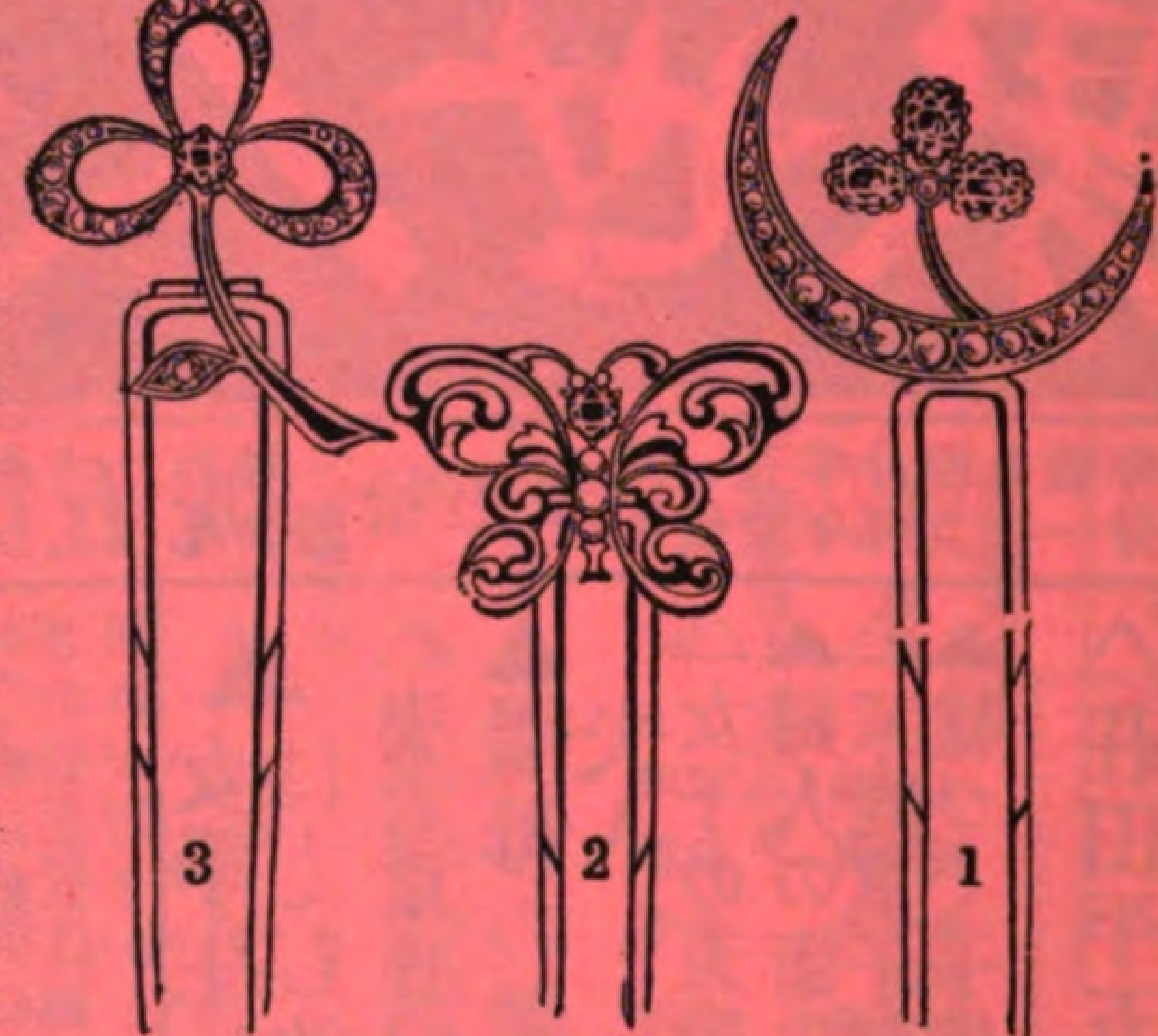
第六巻第七號





女學世界 第六卷第七號 目次

寶石入束髪ピン（大四年ノ三）



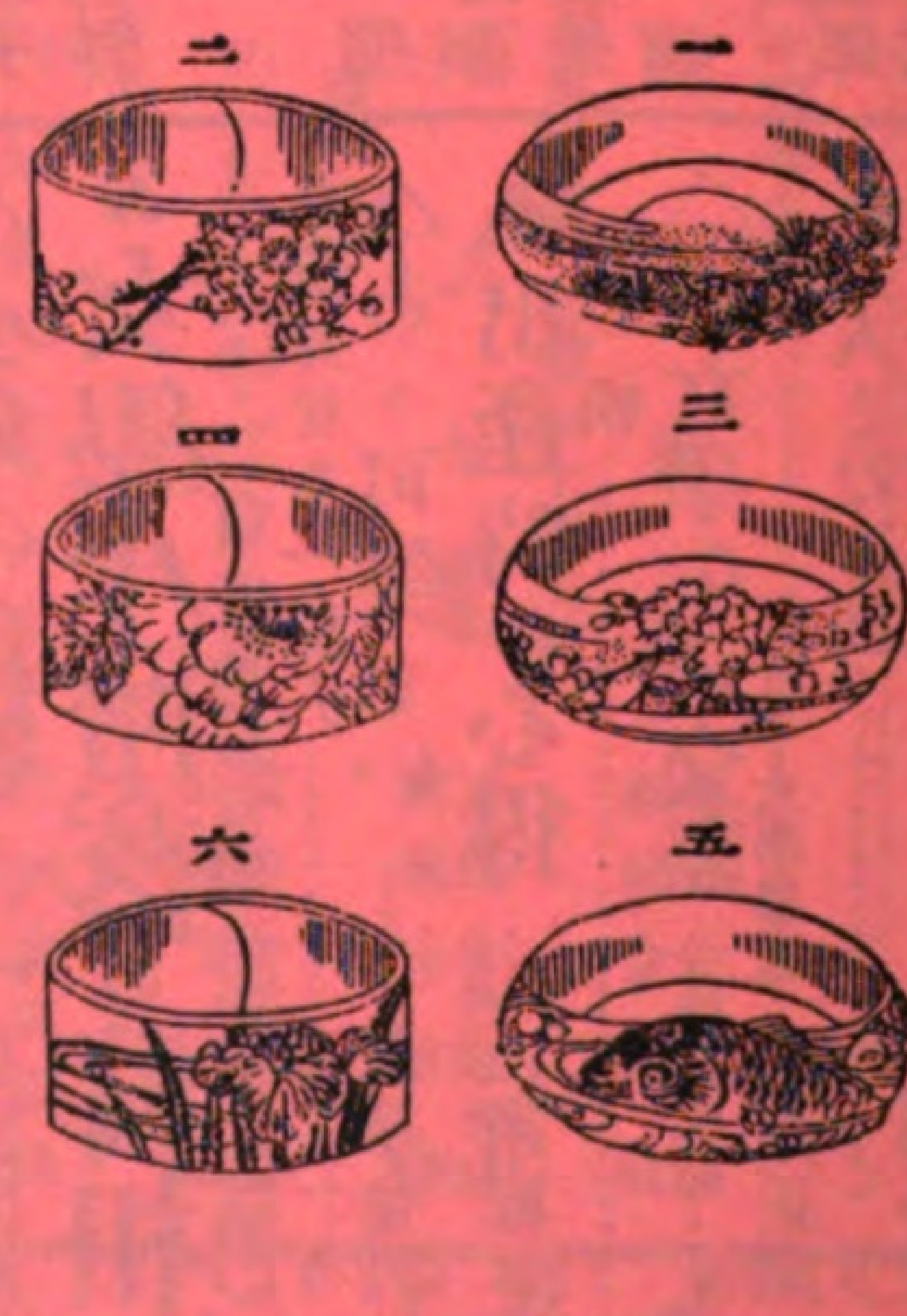
(1)十八金花月形眞珠及ルビー、サフハヤ入甲價參拾五圓、乙價參拾圓、丙價貳拾五圓、同形ダイヤモンド參個入貳百圓以上各種

(2)二十金蝶形眞珠入甲價廿五圓、乙價貳拾圓、同形ダイヤモンド入甲七拾五圓、乙五拾圓

(3)十八金洋花形ダイヤモンド、ルビー、眞珠入甲價壹百圓、乙價八十圓、丙六十圓、丁五十圓

〇此外銀製にて眞珠又は人造石を嵌入して前記の金製品と略ぼ同形のもの甲價七圓半、乙價五圓、丙價參圓、丁價貳圓半

帝室技藝員
香川勝廣先生考案



〇一號三號五號ハ貳拾金高彫ニテ貳拾五圓ヨリ參拾圓迄

〇二號四號六號ハ拾八金象嵌片切彫ニテ拾七圓ヨリ貳拾圓迄

東京市南傳馬町二丁目
大西白牡丹
特 電話本局 三十番

見よ！大發展大擴張の婦人世界！

大好評

婦人世界

大好評

五月三日發行　毎月一回　第五號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共九拾錢　一年分一圓七拾五錢

口繪

◎久邇宮妃殿下と若宮姫宮殿下◎
◎東伏見宮邸内日本婦人衛生會◎
◎各女學校卒業生總代と製作品◎
◎華族女學校及女子大學卒業生◎
◎跡見女學校卒業生幷に教職員◎

彩色石版

繪手本

◎藤見……中澤弘光
◎花と小犬……
◎杜若……跡見花蹊
◎躑躅……中澤弘光

▲婦人の日常生活法……村井弦齋

◎婦人は何が一番大切か◎朝は如何に床を離るべきか◎いろ／＼の悪い習慣◎いろ／＼の善い習慣◎夜具は如何に疊むべきか◎厠には何時行くべきか◎歯は如何に磨くべきか◎體は如何に洗ふべきか◎洗面水は何を交ふべきか◎手拭は如何に使ふべきか◎鼻は如何に洗ふべきか◎石鹸と洗粉とは何れが好きか……

▲女學生に家事を見習はしむ法　星常子……嘉悦孝子
△妻君重寶記……▲便利なる西洋家具
▲繼母の鑑　菊池博士夫人……樂石生
△女子の天職　理科大學長理學博士　箕作佳吉
▲婦人の衞生……醫學士　伊庭秀榮
△家庭菓子製法……▲生花指南
▲噓つく子供の所置……大村仁太郎
△莊田平五郎氏の家庭……古月庵

▲家庭料理　赤堀峰吉、石井泰次郎
△小兒の食物……ドクトル　加藤照麿
▲女學生墮落の眞相（十二頁の長篇女學生父兄必讀）
▲投身せる一婦人……ちどり
△あゝ可笑しい……鶯亭金升
▲出產時の心得……△家庭おぼへ帳
△男女學生の交際　女子大學學監　麻生正藏
▲美人となる法……みどり
▲女子不可見記……鬼門外史
▲育兒問答……▲衞生問答

特別附錄

嬌風悲劇　女道樂　脚本……村井弦齋

懸賞　讀者文藝

發兌元　東京京橋區南紺屋町十二番地　實業之日本社（電話新橋八七四番）　賣捌　各地書店

女（甲の二）

高尙典雅なる繪葉書

小堀鞆音先生畫 佐々木信綱先生歌
羅陵王 壹枚 上製 金参拾五錢 並製 金貳拾五錢 郵税 金貳錢

久保田米齋 鳥居清忠 鏑木清方三畫伯筆
三つのしらべ 三枚 定價 金貳拾五錢 郵税 金貳錢

葉書展覽會金牌受領
藤島武二先生畫 野口米二郎先生詩
三光 三枚 定價 金五拾錢 郵税 金貳錢

寺崎廣業先生畫 巖谷小波先生句
おとぎ葉書 六枚 定價 金五拾錢 郵税 金貳錢

中澤弘光先生畫
天平風俗 野遊
しをり葉書 一葉 定價 金拾錢 郵税 金貳錢

岡田三郎助先生畫
六歌仙葉書 六枚 定價 金四拾五錢 郵税 金貳錢

詩趣横溢せる繪葉書

他に無比の眞美的繪葉書

久保田米齋先生畫
全捷葉書 六枚 定價 金貳拾五錢 郵税 金貳錢

鏑木清方先生畫 岡野知十先生句
元祿ぶり 壹葉 定價 金参拾五錢 郵税 金貳錢

久保田米齋先生畫
世々のおもかげ 上五枚 定價 金貳拾五錢 郵税 金貳錢

鏑木清方先生畫
世々のおもかげ 下五枚 定價 金貳拾錢 郵税 金貳錢

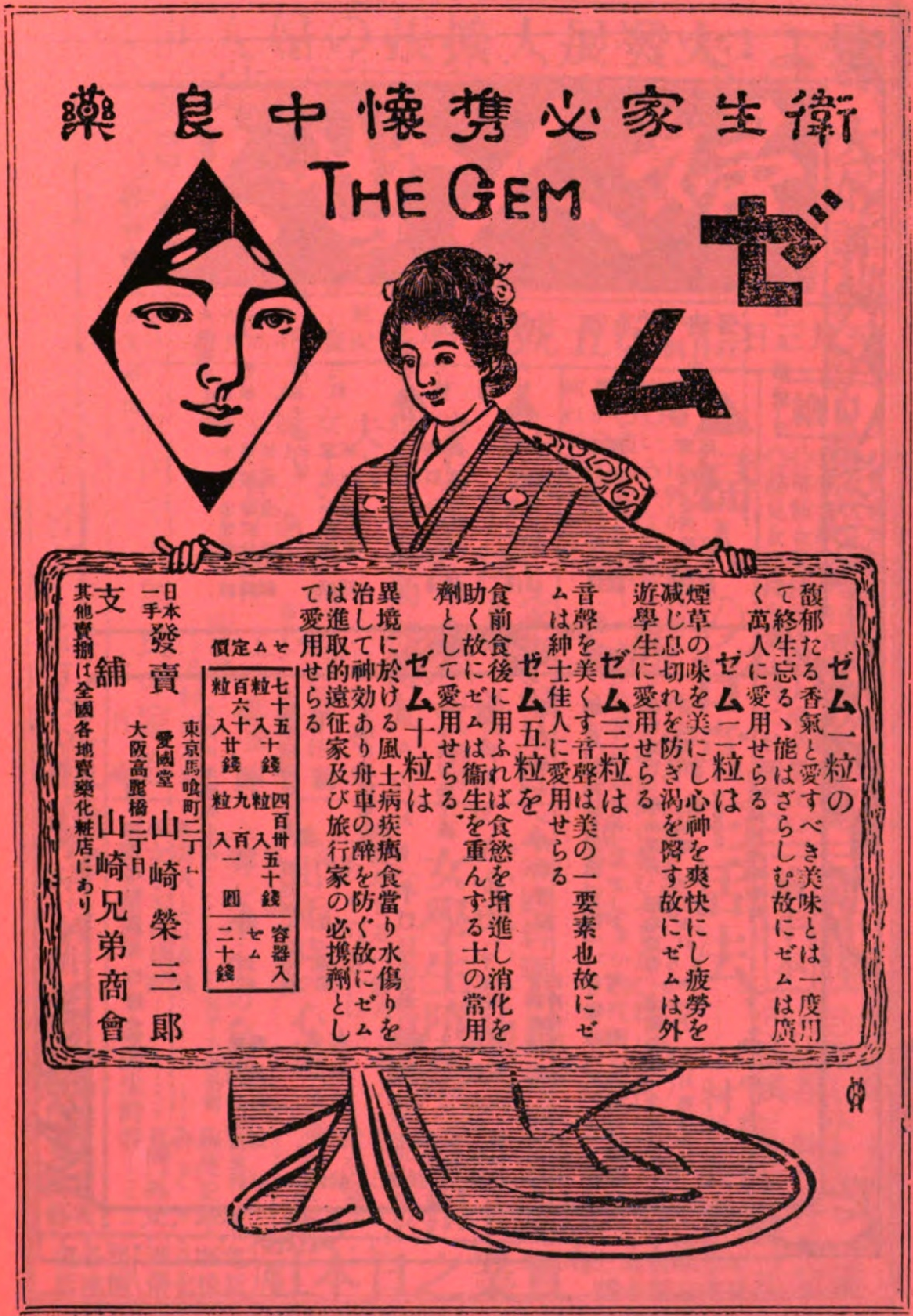
新式リボン付葉書帖 廿四枚挾 金参拾錢 四拾枚挾 金六拾錢

神代杉絹紐付葉書挾 ハート形パレット形 各壹枚 金廿五錢 送料 四枚迄拾錢

組物葉書 舶來葉書 縫取葉書 金銀無地 金銀砂子
金銀泥引 白絹地 アイボレ ケント 其外無地各種

東京兩國藥研堀町 すみや書店

女(甲の三)


衛生家必携懐中良藥
THE GEM
ゼム
ゼム一粒の
馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用
て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣
く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は
烟草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を
減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外
遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は
音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼ
ムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を
食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を
助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用
劑として愛用せらる
ゼム十粒は
異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを
治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼム
は進取的遠征家及び旅行家の必携劑とし
て愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢
百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢
九百粒入一圓
容器入ゼム二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舗 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧店にあり

(甲の四)

はれ間



榊原蕉園女史筆

女(乙の一)

最良煉乳

アメミルク

醫學博士 高橋順太郎
藥學博士 下山順一郎

兩先生の指導製品にして古來滋養品として賞用せらるゝ日本特有の最良水飴を以て精製せるものなれば滋養卓絶氣味又佳快なり殊に本品の特長は鑵詰めに際し殺菌せるを以て鑵を開きし後永く變敗せず

各地有名藥店食料品店にて販賣せらる

▲東京市日本橋區南茅場町二番地
發賣元 三共商店藥品部

育兒者は特に此廣告に注意せらるべし



滋養新劑 グリコナール錠

▲本劑は佐伯矩氏が北里博士研究室に於て牡蠣の滋養成分に就て研究創製せられ多くの醫學者より其効顯卓絶なることを承認せられたる最新滋養劑なり

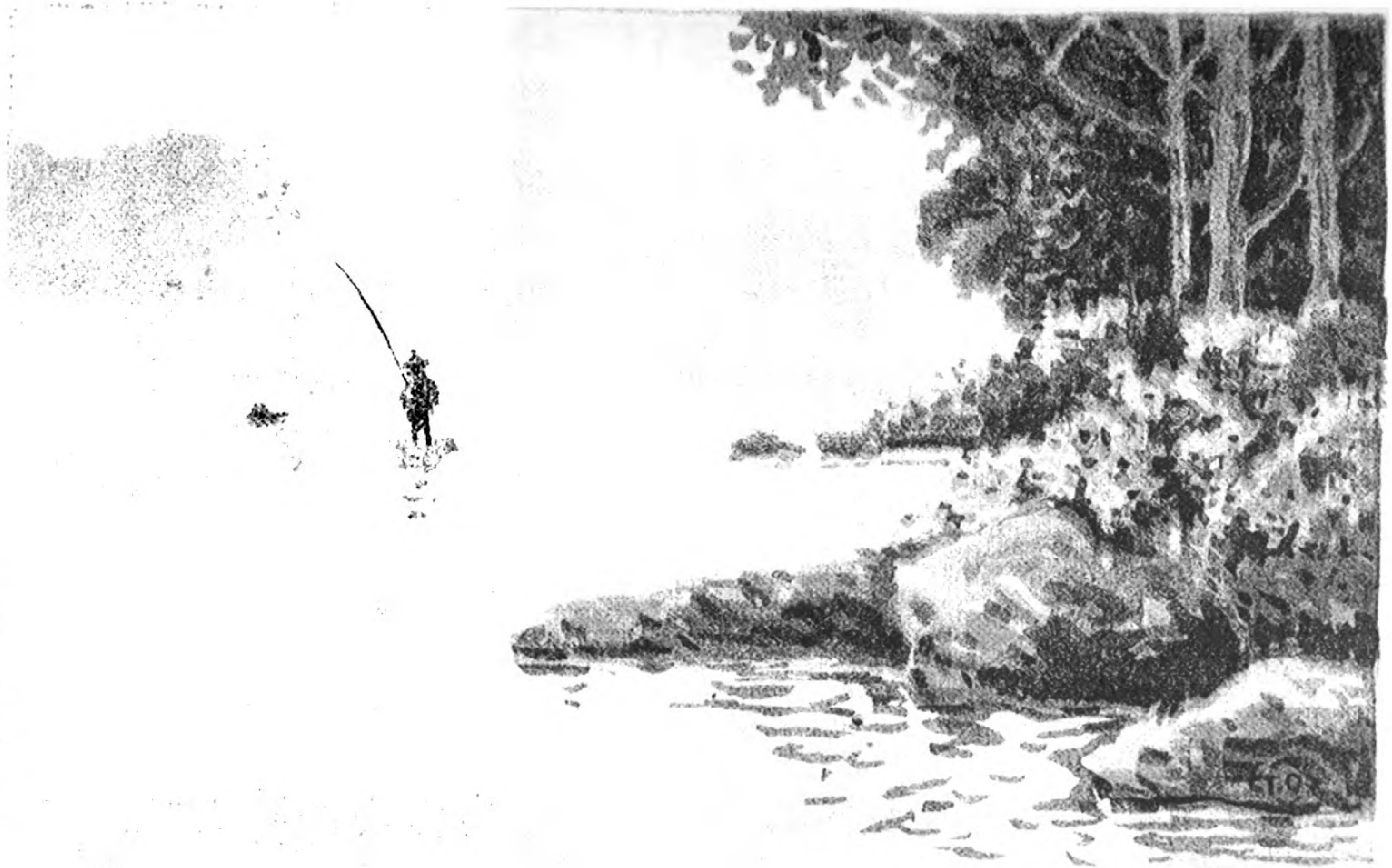
肺病 其他衰弱性の病者は本劑の服用に由て速に其體力を恢復し元氣亢進す

本劑の説明書は御申込次第無代郵送す

發賣元 東京市南茅場町二 三共商店藥品部

女(乙の四)

若鮎



大下藤次郎筆

女(問の一)

文學士 淺野馮虛先生譯註
英文譯註 奇々怪々
洋装(中判)美本 正價金三十錢 郵税四錢

前山口高等學校教授 戸川秋骨先生譯註
英文譯註 世捨人
洋装(中判)美本 正價金三十錢 郵税四錢

文學士 戸澤姑射先生譯註
英文譯註 浮世の旅
洋装(中判)美本 正價二十五錢 郵税四錢

海軍教授 豐島 定先生譯註
英文譯註 帳中說法
洋装(中判)美本 正價三十五錢 郵税六錢

文學士 田中西熊先生譯註
英文譯註 みさを物語
洋装(中判)美本 正價三十五錢 郵税六錢

ハーツホーン、津田梅子兩女史共撰
法螺先生
洋装(袖珍)美本 正價金二十錢 郵税貳錢

津田梅子女史撰 文學士 畔柳芥舟先生解說
ドンキホーテー
洋装(袖珍)美本 正價金三十錢 郵税四錢

エレナー、イ、ワレース女史編
英文 七大家詩抄
洋装(袖珍)特製 正價三十五錢 郵税四錢

文學士 石川林四郎先生撰
英文 花のうた
洋装(袖珍)特製 正價四十五錢 郵税四錢

前東京高等師範學校教授 岸本能武太先生編
英文 海詩百篇
洋装(袖珍)特製 正價四十五錢 郵税四錢

宇野光三郎先生詳註洋
イノックアーデン
○装(袖珍)美本 正價金二十錢 郵税二錢

宇野光三郎先生詳註
エヴァンゼリン
洋装(中判)美本 正價金三十錢 郵税四錢

東京外國語學校教授平井金三先生
東京早稻田大學講師平井廣五郎先生共編
大英文典 前置詞
洋装(大判)美本 上巻訂正再版
▲上巻 正價金壹圓二十錢
●下巻 正價金壹圓三十錢 部税十錢宛

元田作之進先生著
和英 英和 兵語辭典
袖珍總皮頗美裝 正價金壹圓 郵税六錢

岡田市治先生著
二十世紀 英語異同辨
洋装(袖珍)特製 正價金六十錢 郵税八錢

宇野光三郎先生著
シヤルとウイルの用法
洋装(袖珍)美本 正價二十五錢 郵税四錢

東京高等商業學校教授 高島捨太先生著
和文英譯集
和装(中判)美本 正價三十五錢 郵税四錢

英學新報社編纂
英文書簡
洋装(中判)美本 正價四十五錢 郵税八錢

村井弦齋先生著 高柳龍吉君英譯
和英對譯 近江聖人
洋装(袖珍)美本 正價三十五錢 郵税四錢

巖谷小波先生原著新訂
英國リツテル女史英譯
米國グリーン女史英譯
英國コルビー女史英譯
英國ソントン女史英譯

洋装大判頗美製本
毎冊紙數八十餘頁
▲正價一冊十三錢
郵便税四錢宛

和英對譯 日本昔噺

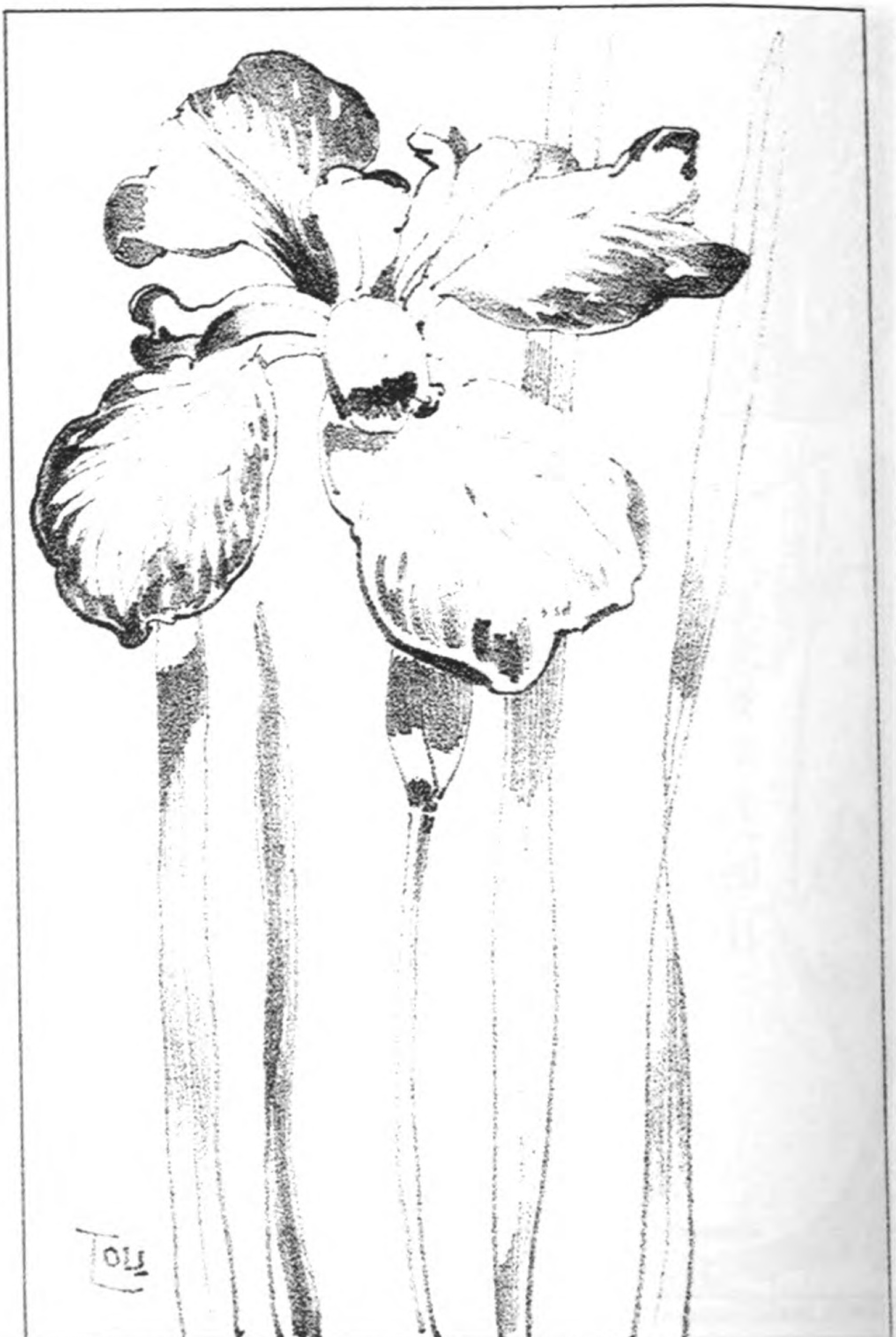
- ● 桃太郎 リツテル女史譯 富岡永洗君畫
- ◎ 玉の井 グリーン女史譯 小林永興君畫
- ● 猿蟹合戰 リツテル女史譯 村田丹陵君畫
- ◎ 松山鏡 リツテル女史譯 武内桂舟君畫
- ● 花咲爺 グリーン女史譯 水野年方君畫
- ◎ 舌切雀 コルビー女史譯 三島蕉窓君畫
- ● 勝々山 ソントン女史譯 寺崎廣業君畫
- ◎ 俵藤太 リツテル女史譯 藤島華僊君畫
- ● 大江山 グリーン女史譯 歌川國松君畫
- ◎ 瘤とり ゴルビー女史譯 山田敬中君畫
- ● 物臭太郎 リツテル女史譯 梶田半古君畫
- ◎ 文福茶釜 グリーン女史譯 鈴木華邨君畫

◎發兌元 東京本町 博文館 東京神田 東京堂◎

女(丙の三)

女(丙の四)

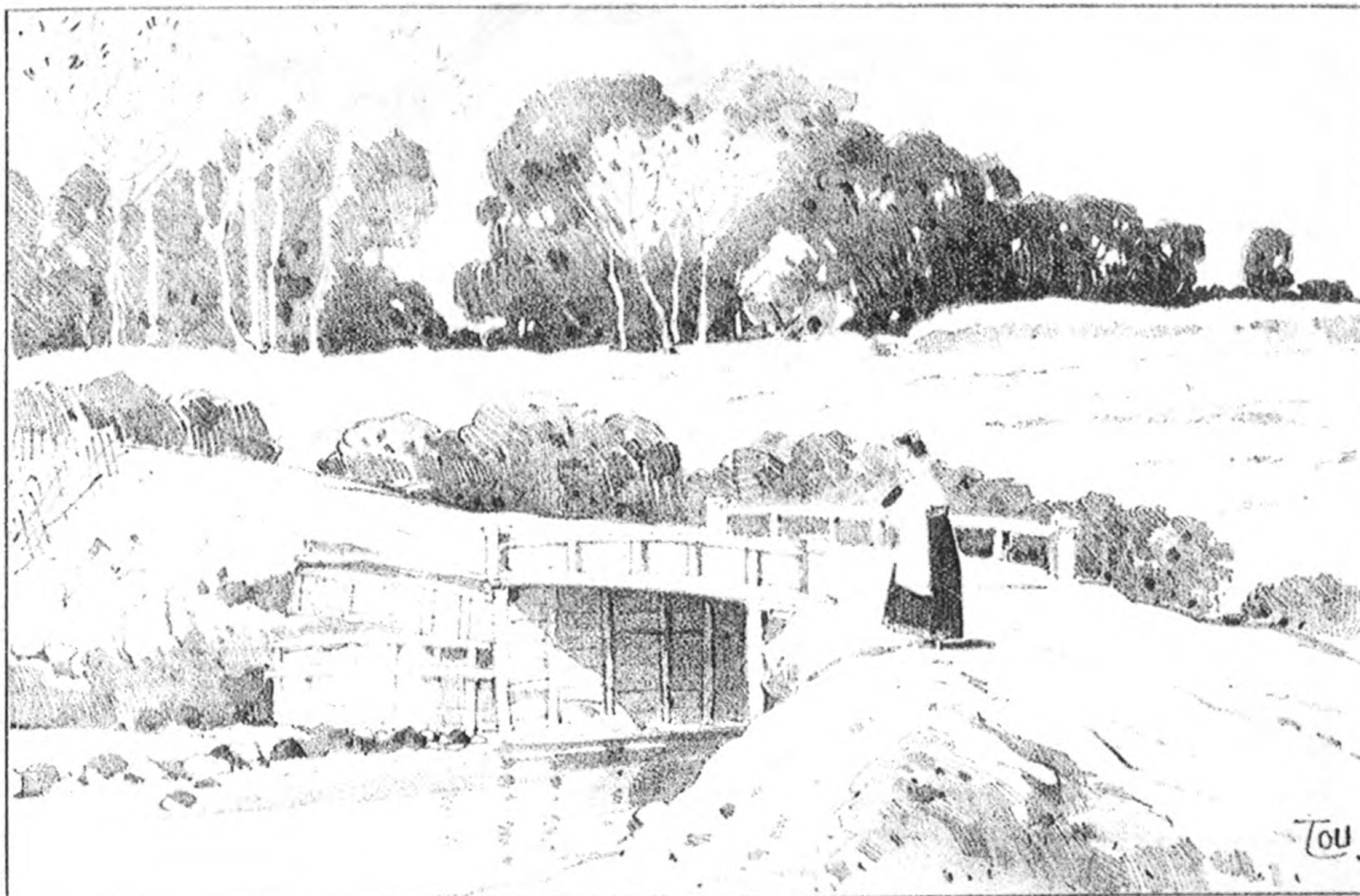
あやめ



織田東禹筆

新緑

織田東禹筆




美術造花材料

女（丁の二）

女子諸君の御高讀を乞ふ

女子學術

每月（一日 十五日）二回◎第一號五月一日發行見本（郵券十三錢）

女子敎育に從事せらるゝ諸先生の意見に基き適切なる學科を擇び斯學專門の師に執筆を乞ひ其他研究發明せしものを江湖に紹介することは又た頗る必要なりと信ず且つ方今世上に流布する女子雜誌は概ね徒に讀者に媚び流行に阿ねり以て不知不識の間に女子の美德を汚損する如き者なるが故に眞面目に女子の文學技藝を發展すべき機關を供給せんとす

修身　女子高等師範學校敎授　東基吉
國語解釋及文法　學習院敎授　大宮兵馬
日本歷史　學習院敎授　馬上孝太郎
東洋史　東京府立女子師範學校敎諭 文學士　高木みつ子
日本地理　山川直五郎
物理　女子高等師範學校敎諭　近藤耕藏
算術　東京府女子師範學校敎諭　堀田要三郎
每號和歌添削　尾上文學士
每號作文添削　敎育新聞記者　秋廣秋郊
每號圖畫添削　渡邊香涯
每號新體詩添削　渡邊光風
每號名家講話　第一號　本多男爵

家事　學習院敎授女子部長　下田歌子
作歌　女子高等師範學校敎授 文學士　尾上八郎
西洋史　高等師範學校敎授　齋藤斐章
外國地理　文學士　山川直五郎
化學　東京府第一高等女學校敎諭　渥美銳太郎
博物　女子高等師範學校講師　中井茂子
裁縫　東京府立第一高等女學校助敎諭　岡本ちか子
看護法　醫學博士　高木兼寛　醫學士　三好常三郎
每號日用和英字典　大日本英語學會編
每號美麗石版書簡箋寫眞名畫三色版
每號雜報には家事衞生育兒園藝等其他興味ある江湖の彙報を滿載す

◉高價なる講義錄を壓して興味ある名家の談叢と實益ある學科を網羅し非常の廉價を以て諸孃に見えんとす

●一冊十二錢郵稅一錢●半年（十二冊）郵稅共一圓五十三錢●一年（廿四冊）同三圓也

發賣所　東京市神田區千代田町二番地　電話本局（二五七二）　博報堂

大賣捌　東京市日本橋區吳服町　北隆館

女（丁の三）

大學目藥

『世の進むに從ひ目藥にもこんな立派な物が出來ました



登録

商標

大學目藥は帝國醫科大學醫院の處方に基き貴重の製劑也世に有古し賣藥の類に非ず

◉定價金十錢（郵税二錢） 中瓶三十錢（郵税四錢） 大瓶五十錢（郵税八錢）

▲各地藥店ニ在

日本大阪北濱（ヘブリシン丸元祖本家）

田口參天堂發行

女（丁の四）

効能の概略

▲はやり目
▲トラホーム
▲星目
▲のぼせ目
▲かすみ目
▲たゞれ目
▲血目
▲打撲目
▲疲勞目

其外眼病一切に驚くべき奇効あり

◉又この藥は目力を強くするの確効あり故に無病の人にても毎日少し宛此藥を用れば眼病一切を豫防するを得べし

はし



蘭香女史筆

にはとり

蘭香女史筆



流行の季節模様



（藻かり舟）

秀方案

(さつきばれ)



秀方案

嬢さん方、坊ッちやんにさいお待兼の知らせて下幼年畫報の六號が出ましたよ

子宮病　自宅療法

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらひ色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安すく〳〵と健兒を擧げ候へば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇陀郡榛原町

笹岡りん

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き懇切叮嚀に根治の法を詳述せし物也◉郵券二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町　衛生書院

登錄商標

佛國天然葡萄酒古「メドック」



此「古メドック」は佛國產純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても慥に人體に有益あるものとして諸大醫及需用者諸彥の稱讃を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候◉御注文之品は直ちに御屆可致候◉代價表は御申越次第進呈す

海外直輸出入和洋酒食料品商

東京新橋竹川町

三組屋　大塚琢造

電話新橋七三六番

女（戊の三）

女(戊の四)

文學博士大槻文彦君序文
文學士物集高量君
文學士長連恒君
共編

散文韻文 美文辭彙

（初版賣切）
（再版近日發賣）

全一冊 洋裝總クロース 三六版函入美本 紙數九百六十頁 正價金壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

文章は其辭の推敲を要するのみならず、又想をも鍛錬せざるべからず、從來世に出でたる此種の書籍は辭の佳麗なるに專らにして其想を度外にしたるもの丶如し、本書は其辭の佳麗なるのみならず想の以て作文の資となすに足るべきものを古今數百種の書籍を涉獵して此を拔摘し一題目毎に部を

戲曲、謠曲、新體詩、和歌、俳句、俗謠、美文の七大部門

に分ち、且つ逐一出典をも附記したれば、直に以て文章の上に引用し得べし。苟も文を學ばんと欲する者は此書に依りて多大の利益を享くべきのみならず、事に操觚に從ふの士と雖も此書を坐右にして其便益する所必ずや尠少にあらず、大槻文學博士序して曰く『此書百家の文より其華を拔き類を以て分ち收めて索引閲讀に便ならしむ文を學ばむ者一たび此書を繙かば左右其原に逢はむ之を索め得て朗讀玩味せば巧妙なるを得むこと俯して地芥を拾ふが如くなるべし』と以て此書が如何に作文壇上の好書なるかを見るべし。

東京本町 博文館

學習院女子部卒業生



日本女子大學國文科卒業生



東京女學館高等科卒業生



美人の新装







農家必携—教育家必携—學生必讀

農學博士　稻垣乙丙先生新著

●既刊發賣●

新撰圖入

農家節用　農業辭典

全一冊

菊判洋装總クロース
紙數八百四十頁
堅牢函入美本
正價金壹圓八拾錢
小包送料拾五錢

▲三十九年五月二十日迄の御注文に限り特價金壹圓五拾錢（外に要送料）

國本たるべき農業にして本邦未だ一の農業辭典を備へざりしは現代の大缺點たりし也、然るに今完全詳密の辭典を出版して此缺を補ひ農業界に巨大の便益を與ふること啻に斯業の幸福のみならんや、本辭典は徹頭徹尾**博士自ら執筆**し多年を費して編成せられしものにして彼の書生擢の編成を監修せしものとは大に其撰を異にせり▲本辭典は農業上必須の知識を**五十音**の順序に排列せしものにして、農家は其知らんと欲する事項を容易く索引し得て丁寧なる其說明に接するを得、**作物**の如きは其性質及栽培法を說き**家畜**の如きは其飼養管理法を述べ**害蟲**に就ては習性及び防除法を擧げ**器械**に就ては構造及び使用法を示せり又別に文字の部を設け讀み方を知らざるの文字に接せば其文字の字畫より之を索引し得る樣に說明せり、尙**言辭の部**には邦語のみならず外國語と雖も現今邦內に通用せらるゝものは加へて排列し**文字の部**には漢字のみならず和字即ち本邦にて作成せし文字及び異字記號等をも掲げたり、故に從來世に行はるゝの字引にては全く知り得べからざる文字も本書に就ては其讀み方を知り隨て又た其說明に接するを得べし▲本辭典は單に農業上の用語文字のみならずして普通に世間の使用する熟語をも網羅し且つ數多の**圖畫**を挿入して解釋の便に資せり、故に農家は此一本を藏せば他に字引あるを要せず眞に**農家の寶典**にして須らく各戶に備ふべきものなり**農學生**は必ず之を坐右に置くべく**農業教師**及び**小學教師**は之を其參考として敎授の資料を採るべし。

東京本町　博文館

女（己の一）

第一高等學校教授 英學專攻 文學士 畔柳都太郎君校閲

法學士 辻宏吉君著

新式 英語作文書取法

全一册

四六判厚表紙	
脊クロース付	
紙數約三百頁	
正價金五拾錢	

（五月上旬發行）

本書の特色は何人も識らず知らずの間に誤り居る英語の發音を矯正し、異同を辨明し類似を甄別し如何なる難辭と雖ども惑りなく書取ることを得せしむるに在り

他の特色は何人も知らず識らずの間に謬り居る英文の語格を正ふし文法と相須つて英文の慣用語に熟達せしめ最も正格に和文を英譯し若しくは英文の眞意を解釋せしむるに在り

說明の方法は固より普通教科書の如く徒らに順に從ひ序を追ふて博く羅列せるものにあらず、一般學生の誤謬を剔抉し一々引例に據りて最も平易に且つ懇切に講述し、我輩は已に卒業したりと云ふ者に向つては特に一段の警覺を與ふるに力めたり

若し夫れ本書の校著者が斯書に就き崭超なる熟達と年來の經驗とを有するを喋々するに至つては抑も亦迂なり、苟も斯學に志ある者一本を繙きて自己の造詣する所と較覈せば夫れ必ず思ひ半に過ぐるものあらん乎

東京本町 博文館

女(己の二)

女（己の三）

女(己の四)

おぼろ夜



上村蕉園筆

春の野

長安雅山筆



春がすみ



上村蕉園筆

東京府立職工學校長　今景彦先生監修

繪入 五行讀本

全部五册

菊判美麗畫表紙
口繪寫眞銅版挿入
正價各拾五錢
郵税各四錢

●水の巻……東京高等工業學校助教授笠原留七君著

（既刊發賣）

水の巻目次

水の性状
空中の逍遙
地下の潜行
地上の旅行
動植物體内の巡行
機關内の運行

（發行之主旨）

人生にとりて極めて必要なものでありながら其ものが餘りに近く吾人に接觸しておるが爲に反て屢々等閑視されておるものがあります木火土金水の如きは其最も大なるものではあるまいか。本書は即ち此等五つのものに就いて其自然美から利用厚生の途に至るまで或は之を詩的に或は之を科學的に極めて廣義に極めて平易に極めて愉快に極めて流暢に記述したるものなり



（續刊）

●火の巻　笠原留七君著
●木の巻　今景彦君著
●金の巻　今景彦君著
●土の巻　河村精一君著

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女（庚の二）

明治畸人傳

目次概要

◉畸字辨
▲渡邊國武子
▲中根香亭氏
▲副島種臣伯
▲田中正造氏
▲中江篤介氏
▲中井弘氏
▲矢野次郎氏
▲守田勘彌氏
▲古河默阿彌
▲先代中村芝翫
▲林鈴二翁

▲田中館愛橘氏
▲田尻稻次郎氏
▲河村清雄氏
▲根本通明氏
▲和田垣謙三氏
▲佐田介石氏
▲西行庵小文師（京都）
▲田村宗立氏（京都）
▲大雅堂定亮氏（京都）
▲眞清水藏六氏（京都）
▲割烹舖魚樂（京都）
以下畧之

全一冊洋裝大判
定價貳拾五錢
郵稅貳錢五厘

女玉手筐

重要目次

▲女一生の大問題……
▲經濟的家庭教育……
▲現代淑女の生活……
▲現代女學生の半面……
▲女學生と論理……
▲女子と家政學……
▲學校の家政と實地家政
▲日本婦人と音樂……
▲女子と美術……
▲婦人と體操の活用……
▲裁縫と女德……

▲裁縫の手ほどき……
▲刺繡の手ほどき……
▲造花の手ほどき……
▲編物の手ほとき……
▲婦人と數學……
▲作文の手ほどき……
▲記憶力の養成……
◉跡見女史の實驗談◉
◉棚橋刀自の經歷談◉
◉三輪田女史の修學談

全一冊洋裝大判
定價貳拾錢
郵稅貳錢

藝人出世譚

藝界の名人が成功談苦心談逸話等を出來得る限り網羅したる者其如何に趣味深く又如何に多方面なるかは左に徵して知り賜へ

藝術の神聖 中村芝翫
三遊亭圓遊
川上音二郎
竹本組廣
春本秀吉
常磐津林中
片岡市藏

片岡我當
岸澤文字兵衛
市川小團次
仲之町なつ
藤澤淺二郎
杵屋勘五郎
高田實
竹本大隅太夫
望月太左衛門
芳村伊十郎
柳家小さん
松旭齋天一
福松家壽滿子
中村福助
歌澤芝喜太夫
岡安喜代八

杵屋六左衛門
藤間勘右衛門
市川女寅
鏡味仙太郎
西幸吉
橘家圓喬
柳川一蝶齋
荒木竹翁
市川高麗藏
豐竹生駒太夫
澤村訥升
竹本攝津大掾
市川莚升
豐年齋梅八
清元延壽太夫
△以下略之

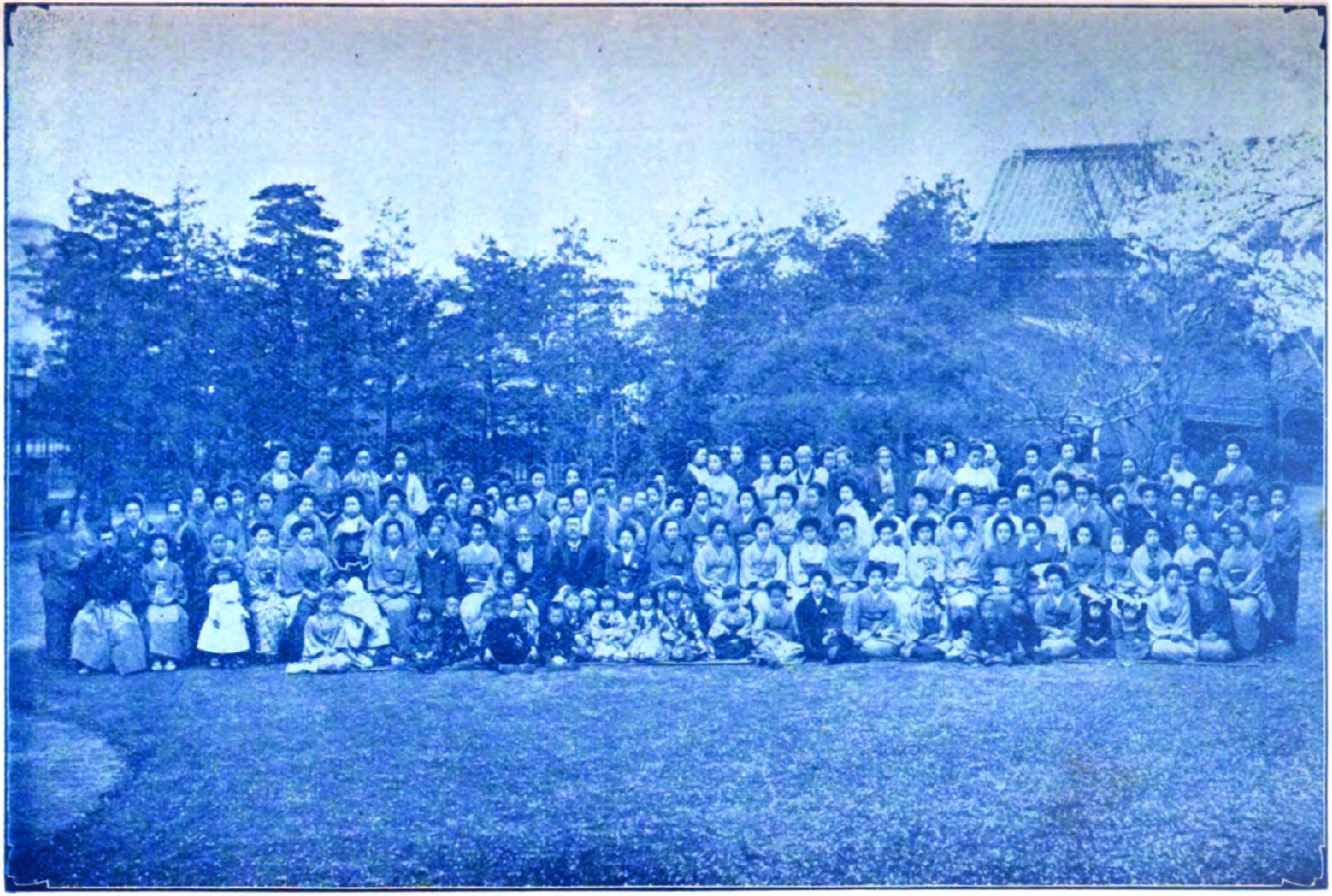
全一冊洋裝大判
定價貳拾五錢
郵稅貳錢五厘

明治畸人傳、藝人出世譚、女王手筐は本年發行文藝俱樂部及女學世界の臨時增刊にして頗る趣味ある好讀本なれば必ず一本を購求あれ。

發兌元
東京日本橋區本町三丁目
博文館

女（庚の三）

竹柏會女子部



華族會館に於ける同會第八回の撮影

山と水







女（辛の一）

交際場裡に於ける紳士淑女の必讀書

マスター、オフ、ロース　宮本桂仙君著

西洋男女交際法

▲五月初旬發行▽

全一冊

袖珍美本紙數二百三十四頁
正價貳拾五錢
郵稅六錢



人間は社交的動物なり、交際の人類に必要なるは世の既に認むる所にして歐米社會の所謂ソサイテイ、ピープルが舞蹈會に於て將た宴會に於て其艶を競ひ其の麗を爭ふ間に於て敵の弱點を見出し之を商業上に政治上に若くは諸種の業務上に利用せんとす是れ交際の巧妙手段といふべし、我國由來禮儀の國と稱するも唯々從來の作法を其儘今日に應用すべきにあらず、須く日進の文化に伴ふて必要の變化を加へざるべからず要するに社交の最大要素は男女交際を以て骨子とせり、而して本書に於て特に女子の要件を詳述したるは女子の社交に最も適し且つ最も人目を引くものなればなり著者久しく歐米の禮式を研究し其實驗に基き今後日本社會に必要なる日常作法を青年士女に懸示し併せて日本禮式と交際法の連絡を通融す實に新旧日本人士が必ず一本を机右に備ふるの要書といふべし



發兌元　東京日本橋區本町　博文館

女(辛の二)

女學世界衛生顧問　糸左近君編

四季應用 通俗治療法 附養生秘訣

全一冊洋装四六判
紙數四百餘頁
五月上旬發行

醫者は病人に取つて命の親なり、救ひの神なり。其の病魔を退治して起死回生の効を奏し、垂死の病人を回復して三千世界に一つしかなき玉の緒を取り止むるものあり、世に神醫仁術の稱ある所以なるべし、さりながら、世間に神醫と稱するものは雨夜の星よりも尠くして難病危病に惱む人は恒河の砂よりも多し、この限りなき病人患者をして限りある神醫の方劑を仰がしめんこと無理の注文といふべし、況んや山間僻地に到つては一度の診察を請ひ、一服の藥を飲むすら容易の事にあらず、病人は手を空ふして病魔の横行するに任すのみ、是に於てか世に醫道の智識を必要とする所以なり著者糸左近氏は仁術に造詣深く、諸病の蘊奥を究めて洩らすなし、今其尤も普通なるもの七十餘種を網羅して備さに治療の方針を說く、蓋し車輿を要せずして千里の遠きに趣き謝儀を求めずして萬病の適藥を授く其功德の大なる昔への耆婆扁鵲にも讓らずといふべし。

▲第一　消食器病
(一)口内炎(二)鵞口瘡(三)食傷(四)中毒性胃炎(五)急性胃加答兒(六)慢性胃加答兒(七)俗に胃病(消化不良)(八)胃痛(癪)(九)消化不良(一〇)胃擴張(一一)胃出血(一二)胃癌(一三)胃潰瘍(一四)腸加答兒(一五)便秘(一六)絛蟲

▲第二　呼吸器病
(一)感冒(二)インフルエンザ(流行感冒)(三)百日咳(四)咽頭閉塞(五)肋膜炎(六)胸水(七)格魯布(實布的里の條に述ぶ)

▲第三　泌尿生殖器病
(一)遺尿(二)生殖器閉塞(三)陰門瘙痒(四)子宮内膜炎(五)子宮實質炎(六)子宮轉位(七)子宮脱出(八)卵巣囊腫(九)姙娠嘔吐(一〇)難產(一一)分娩失神(一二)產蓐熱(一三)乳汁分泌欠乏症(一四)產婦攝生法

▲第四　神經系病
(一)歇私的里(二)精神病(三)アルコール中毒(四)脚氣

▲第五　傳染病
(一)僂麻質斯(二)癜風(三)黒痣(四)面皰(五)雀斑及び母斑(六)無毛症(七)白髮症附赤髮及び縮毛(八)皸裂(九)凍傷(一〇)火傷(一一)耳漏

▲第七　花柳病
(一)痳疾(二)軟下疳(三)梅毒

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女(辛の三)

各國帝室及王家御用

ネッスレス ミルクフウド



歐洲諸國及び本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ小兒病者又ハ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ◉最モ盛カンニ薬舗洋酒食料品店ニ販賣ス

婦女子唯一の

女子文藝

文藝家庭雜誌

定價 一册拾錢 八册七拾五錢 十六册一圓四十錢 郵稅一錢宛

見本 郵券拾錢 各號取揃注文に應ず

繪畫
人間製造博士（木版三色刷） 森岡格雄 渡邊省三

時論
家庭の和樂 早稲田大學講師 安部磯雄
理想の婦人 棚橋絢子
女子と美術 文學士 行く雲小史
子供と衣服 鹿目野徑

家庭
新工夫の朝起 松山芝影
朝顔栽培法 田園居士
和洋切裏料理 村山花子
結婚と悪疾 △△△

衛生
婦人の髪 緒方國手

文藝
やまと花（新體詩） 兒玉花外
うつぼ草（和歌） 與謝野晶子
女學生の自由 一の瀬初子
女皇の戀 橋本春郊
牡丹の春 鳥橋
麗情集 白鷺庵主人
夢の細路 文學士 相馬御風

小說
情の聲 堀内新泉
思ひ出 土屋香葉
東京見物 鈴木秋風

評釋
英詩文評釋 西村醉夢
和歌評釋 安部烏橋

雜錄
迷信雜話 川副櫻春
婦人と演藝 藤澤淺二郎
婦人觀 角帽の人

挿繪 石版摺、水彩畫アート刷、寫眞版等挿入 女子文藝 紙面過半を賑はす

發行所 東京小石川 日本葉書會

賣捌 東京堂、良明堂、至誠堂、東海堂、北隆館、上田屋

女（辛の四）

愛國婦人會麻布支部の小集



根治確證 わきが 新治療藥 ラヒヨン

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を深濟驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ゐよ

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

毛のはへる ベグネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●わけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

色の白くなる ハイーコロン浴液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

月やくおろし

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

根治確證 新治療藥 梅毒

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり●●如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこれかんそ●骨うつき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

輕症は半劑惡性重症も二劑用ゐて奏効す世間種々雜多の無効なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑參圓郵劵代用一割增

らい病 新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣繁館幾多の調劑の實驗に鑑み丸劑となしたる者にて其有効確實なる本劑に優る者なし試に壹劑分丈けも用ひ見よ必ず大効あり壹劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵劵三錢送れ說明書進呈す

獨逸撰方 効驗一夜に顯る

りん病 新治療藥 キーロン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病しよかちも一夜に輕快を覺へ膿血速に止り痛を止め輕きは一劑分重きは二劑分如何なる惡性の頑固慢性症も特製を用よ忽ち根治の目的を達す本劑は內服すれば一種の化學的變化を起し強度の殺菌防腐液となり小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に用て病根を斷絕し苦惱を脫せよ

日本一手發賣本舖 藥價一劑輕症用六十五錢二劑重症用壹圓卅錢特製惡性頑固症用貳圓卅錢

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

女(壬の一)

中等教育

理科講義錄

◉毎月一回發行

◉菊判毎編百三十六頁

◀毎卷全部十二册＝壹ヶ年にて完成▶

第一卷

物理學講義

第壹號 五月上旬發行

毎編の課目及擔當講師

第一編口繪　ニユートン肖像（寫眞銅版）

▲力學及物性論　工手學校講師 理學士　久　茂　榮先生

▲熱　學　在大學院 理學士　日下部四郎太先生

▲音　響　學　理學士　福井　政　一先生

▲光　學　砲工學校敎授 理學士　淺　野　肇先生

▲電氣及磁氣學　理學士　田中館富士郎先生

▲研究資料　理科大學講師 理學士　桑木　或　雄先生

砲工學校敎授 理學士　萩原　拳　吉先生

▲雜錄及雜報

此雜報欄は本講義錄に於て最も各講師の熱情を寄せらるゝ所なれば有益なる材料頗多其欄に掲載せらるべし。而して質疑應答の如く重要なるもの本欄に具備せり。

此講義錄は主として中學敎育程度に由り各中學校生徒が課外研究の資料に備ふるの目的に出つ而して各部を擔當する講師は何れも物理學專攻の名家にして日常各學校に親しく敎鞭を執られある實地の敎授法に由り最も明快に講述す且つ各部の餘白には其學科に關係ある問題を掲出して讀者の知能を啓發するに勉められたり

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

女（壬の二）

既刊

文學博士 高山林次郎君著
●文藝評論
全一册洋上製 小判四八〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

內田不知庵君著
●文藝小品
全一册洋上製 小判六一〇頁 實價貳拾五錢 郵稅六錢

文學士 大町桂月君著
●學生訓
全一册洋上製 小判二四八頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

文學士 大町桂月君著
●續學生訓
全一册洋上製 小判二五六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

太陽記者 長谷川天溪君新著

文學訓

全一册袖珍美本
紙數三百六十頁
正價參拾錢郵稅六錢

近刊

文學の眞義を究め、清新の文章を作らんと欲する諸子試みに本書を繙け。似而非文學の雲霧を拂ひ、如何にせば眞正なる文學の光彩を發揮し得べきかを簡潔明瞭に說述す。これ純正文學の說明也。文學者の心理的解剖也。而して文學鑑評の標準也。

發兌元

東京 博文館 本町

書類

文學士 大町桂月君著
●大紋小紋
全一册洋上製 小判四二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

大和田建樹君著
●新文林
全一册洋上製 小判四三二頁 正價貳拾四錢 郵稅六錢

文學士 大町桂月君著
●青年訓
全一册洋上製 小判三一八頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

文學博士 高山林次郎君著
●時代管見
全一册洋上製 小判五二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

女（五の三）

◉會員大募集＝目下入會の最好機なり

四月廿日第一號發行

▲事情があつて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年間に高等女學校程度の教育を完全に正則に授けます

▲世間の講義錄は乾燥無味で面白味がありません。本會講義錄は此點に注意し、諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし、且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に、美くしい家庭小說を毎號附錄とします。

▲本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです、講義は只親切と云ふ事を主として丁寧懇篤に說いてありますから本會々員は親しく講師の膝下に在りて講義を聞かれると同じ事です。

▲本會講義錄は右に述べた通り最も完全したものでありますが、會費は極めて少額で都會一ヶ月の遊學費で、優に全期を終はる事ができます。

新學期開始

大日本淑女學會

高等女學校程度の講義錄發行

批評一斑

▲中央新聞評　講述何れも平易にして親切を極めたれば初學の講習に最も可也

▲毎日新聞評　米國の通信教授法を參酌せるもの文字平易說明懇篤を盡くせり

▲二六新聞評　高等女學校の全課程を講了すべく各講述者の態度頗る着實なり

▲日々新聞評　講義はすべて平易と親切とを勉めて毫も難解の憂なきに似たり

▲都　新聞評　講義平明用意親切なれば數多き女學雜誌中一領域を拓き得可し

▲報知新聞評　講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

上掲の批評を御覽にならば本會講義錄の眞價がお分りになりませう

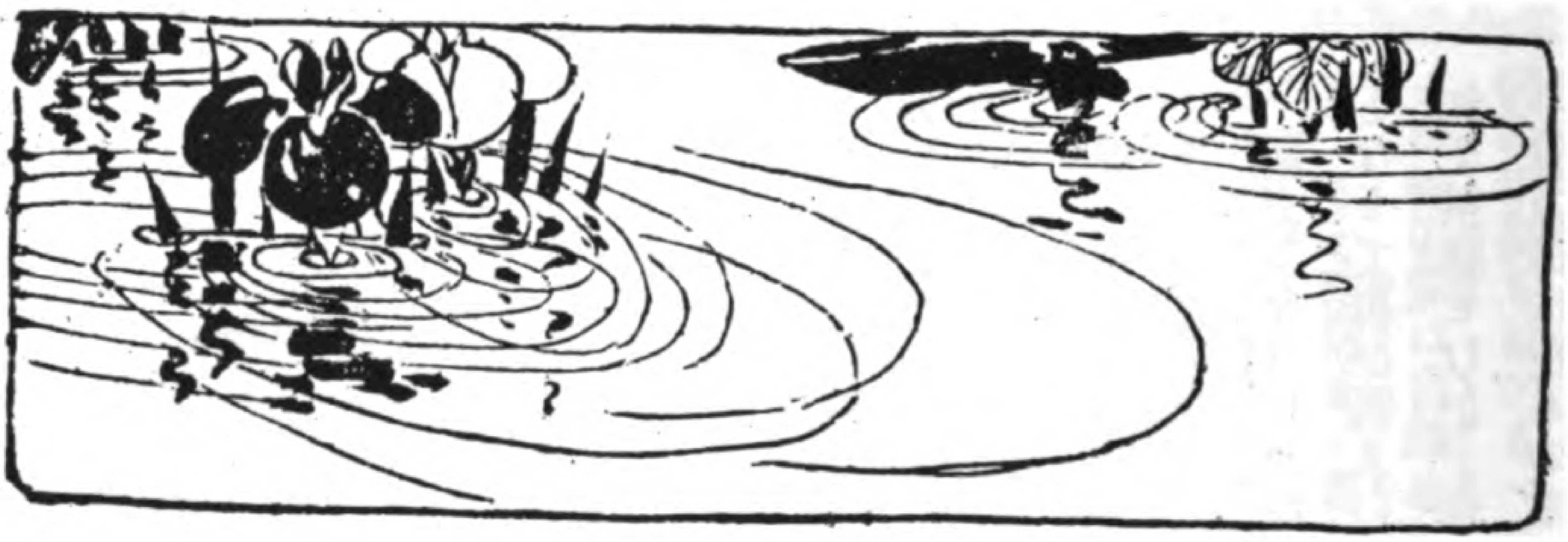
▲本會規則書▼

端書にて申込あれば直に郵送す可し

◎東京神田南甲賀町（電話本局三千四百番）

大日本淑女學會

（壬の四）



女學世界

第六巻第七號

五月五日發行

小兒の耳

小兒の耳は一種の傳話器なり、彼等は無意識の間に聽ける事柄をいつしか意識してこれを人に語るものなり、故に家庭は表裏ともに、眞實、正直ならざるべからず、彼の心なき兒童の面前に於て無遠慮に語りたる事柄が日ならず隣人の知る處ろとなりて惡感情を買ふが如きは即ちこれがよき證據ならずや、欺くべからざるは小兒の耳也。



時論

兩性の愛に就て



海老名彈正

兩性の愛に關して、日本は三たび之が解釋を試みたり。第一回は佛敎渡來の時にして、佛敎は之を絶對的に不潔不淨なりと認め、男女各自に別天地を作らしめむとし、遂に生涯男子に交らざる多くの尼僧と、妻子の恩愛を捨てゝ、身を雲水に托する多くの世捨人とを出すに至りたり。第二回は儒敎の敎訓也。儒敎は家庭に於ける夫婦の高潔と子女の貞操とを嚴守せしむる爲め、男女席を同ふせざるの故を立て、此主義を一貫せしめむとして、徳川時代は、青年男女間に幾多の悲劇を見たり。

斯くて今日に及び、維新以前の格式は全く破れ、古來の禮義は多く變化し、男女間の相愛問題は亦復赤裸々となりて再び吾人の眼前に横はれり。之を第一回の如くに解釋せむか、吾人は其可なるを見ず。之を第二回の如く解釋せむか、吾人は亦其可なるを見ず。然らば竟に之を奈何にすべき。要は之が議論に在らずして實行の手段方法に在るのみ。如何なる好手段にして發見せらるゝとも、各自の精神にして昔日の如くならむか、また

何の甲斐もなかるべきに非ずや故に吾人は須らく先づ吾人の心を改良すべき也。

兩性の愛は自然也、貴きもの也、賤しきものに非ず、敢て斥くべきものに非ず、吾人は其決して罪惡に非ざることを確信す。若し此の神聖なる愛に向て、當然の解釋を下すものあらば、妨ぐる勿れ、汚す勿れ。世に貞節の破棄せらるゝものは、却て愛の神聖を知らざるが故なることを知らずや。かの愛なき家庭、愛なき夫妻が如何に悲むべく傷むべき生活をなすかは、人の熟知する所の如し。高潔なる貞操を以て愛の泉に沐浴せむと希ふは、むしろ神の御心に叶へるものゝみ。

顧ふに如何なる筆、如何なる舌、將た如何なる武器も、竟に滅ぼし能はざるは、其れ愛乎。佛教は之を煩惱として斥けたれども、全く退滅せしめ得ず。儒教は之を罪惡として防禦せむとせしも、其陣今は破れたり。一人にまれ、一家にまれ、一社會一國土にまれ、愛の神聖を認めざるものは、內に紊亂し、外に失敗せるものや稀。むしろ大なる幸福は、よく之が神聖を認むるに於て、始めて受け得べきものなるを見る。

唯注意すべきは、理性に基かざる愛が盲なること也。私なること也。大罪惡の種子なること也。而して理想を發達せしむるには、大なる敎育を要す。

總じて寶石も佳人も風景も善きものは容易に得難し。神聖なる愛も亦然り。只十分の敎育あるもの、大なる忍耐の後に之を得べき也。

翻て現代の青年を見るに、黃口の中學時代高等學校時代にして早くも已に配偶者を見出さむとし、將た定めむとして、煩惱し、苦慮し。世の父母たるもの豈其愛娘を一寄食の書生に與ふるものあらむや。況や其日常の課業をさへ十分に學習し得ざる愚物をや。然るに斯る青年にして其空想の實現せざるに失望し、忽ち厭世して、ハプトマンやショーペンハウェルの哲學を主張し、兩氏の說を口にする青年は必ず失戀者なるかの如き奇

觀を呈し來れり。斯くて或ものは瀧壺心に、或ものは噴火口に、或ものはレールの上に、皆自ら殺して後に已む。眞に悲むべく、誠に笑ふべきのみ。若し之に反して僅に一書生たる身も、よく相當の價値を具ふるまでに耐忍して十分學業に黽勉し、以て、一旦業を卒へ社會に出でむ乎、社會は決して之が希望を達せしむるに吝なるものに非ず。

されば世の青年たるもの、只熱心に勉學せよ、而して其品行は方正なれ、美はしき愛は必ず汝を見舞ふべし總理大臣たらむとしてよりも、むしろ神聖なる愛を得むが爲めに勉學せよ。

今日幾多の女學校は、可憐なる女學生の爲め、精神的にも形式的にも、其自由を束縛するもの甚だ多く、女學校は殆ど一種の監獄の如き觀あり。是れ社會が神聖なる愛を忘れたる結果也。心の改良をなさゞる結果也。吾人は切に今日の女學生に自由を與へむことを要求するもの也。而して之を與ふる道は、文部省の規則に非ず警視廳の命令に非ず、只其れ各自に其心を改め其身を潔ふするの外あるべからず。

高等女學校卒業生の行衞

麗子女史

三月廿一日試驗の成績が發表されて、愈々卒業と定つたら、何だか重荷を下した樣の心地がして、新聞を見ても雜誌を讀むでも、少しも氣に留りません、況して今日此頃の春の錦、花咲ひ鳥歌ふを聞きては、何となく伸氣になつて、些つともぢつとしては居られません、花子樣は昨日汐干をかけて、江の島から鎌倉の方へ阿母さんと三人連で、御出懸け遊ばした相です、嘸お樂しみの事でせう。四月十一日は紀念日をかけての卒業式、

今度新築の大講堂に集まつて、式場には新文部大臣其他朝野の貴紳幾百と云はんばかり、殊に校長からは、卒業後の心得に就き懇々と、御話に預り、難波さんは總代で答辭を讀みましたが、之で愈々此の校の門を二度と出入する事は出來ぬ、今後からは社會の荒波の上を渡り行くのか知ら、嗚恐ろしい事、學校生活は今日でお仕舞ひ、樂しかつた寄宿舍のホームを打捨てゝ、明日よりは互に袂を西と東とに分たねばならぬと思へば、何やら物悲しい樣な氣持がして、思はず涙を翻さずには居られませんでした。

併し愈々卒業の免狀戴いて見れば、不完全ながら先づ之で女子の一人前、勉强にも切りのある事と諦めて、そろ〳〵社會へ出る考へをして見なければなりません、けれど、社會へ出ますと、却々學校で學問をして居るよりは、餘程困難であるとは、前回よりの卒業生の方に伺つて居ますが、自分等は之を恐く思つて、心配で堪りません、尤も昨年卒業なされた千代子樣等は、郷里なる茨城へ歸られて盆栽等頻りに珍らしがつて居らつしやる樣で、此頃の家庭週報等にも寄書が御座いました、彼れは別と致して、先づ妾等の理想としては、女子大學の家政科でも修めて、將來の家庭を作つた時に差支無い樣にし、叶ふものなら洋航でもして、一通りは歐羅巴の人情風俗を見たいと思ひますが、這麽事申した處で迚も行はれるものでなし、却て御友達に笑はれる位ですから默つては居りますが、萬一出來たらと少しは考へもあるのです。

高等師範に這入るのも宜しう御座いますが、彼處は根が教員を作る處ですから、何となく世間から離れた樣な心地がします、妾の鄕には教員根性、醫者根性、坊主根性と申て、此の御三方の根性は普通の人の心持より餘程違つて居ると云ふ事で嫌がる方もあります、夫から高等師範は人數の制限がある誰れでも矢鱈に入學れません、よし入學つたにした處で、卒業の後は義務年限やら何やらで、多少は制裁も受けねばなりませんから、此れも餘程の考へ者です。

成程勉強も素より必要ではありますが、全體女子の本分と申せば、學問をして大なる原理原則を發見して世を驚かさうと云ふのが目的ではありますまい、先日も先生が科外講義の時に演説遊ばしたでせう、今の女子は兎角世の中へ出たがつて困る、男のする事迄も取つてしたがると云ふ風になつて來た、之は大なる間違ひで、女は女の天職がある、其天職とは何であるかと云へば即ち家庭と云ふ事だ、之を齋へる事が女の天職で、能く研究して見ると、男の社會の爲に働く仕事よりもより大にして且つ大切なる事業であると云ふ事でした。成程考へて見れば尤もの事で、古より大聖人賢人と云はれた者は大抵は善良家庭で育て上げられたでせう、孟母を御覽なさい、三度居を遷して其の兒を敎育しました。亦中途學を廢したのを誡める爲に、態々織つて居る機を中程で斷つて見せた、これ等は皆之家庭の敎育でせう、私共は今から此の家庭を作つて前申す大偉人を作り出した方が宜いでせうか、今一段步を進めて高等專門の學校でも修めたものでせうか、何れにしても卒業後の今日此の二途に就いて考へねばなりません。

今一つは女子の獨身といふ事です、妾の兩親は頻りと緣談の事を話して、何卒一日も早く結婚せよといひますが、兩親の命令ですから之に反く譯には參りません、からと云つて、兩親さへ善ければ妾共は何でもよいかと云ふと、決して而うも參りますまい、實際連れ添つて偕老同穴の契を結ぶ者は夫婦二人ですから、將豈に、承知しない者を無理やりに押付ける譯にも參らず。夫に先方の人も何やら氣に入りませんから、獨身を主張して母に御目玉を頂戴致しましたが妾は獨身でも飽くまで構はぬと思ひますけれど、實際は如何なものでせう、下田先生等は獨身主義の方であつて、奥村さんも先づ半獨立位か知ら、して見ると、女の獨身は世間に餘り少ない樣に見えます、其外昨年一昨年の戰爭で、隨分亡夫の身となつて、國家の爲めに死んだのだから一生夫は持たぬ等と、一時は愛國心だか武士道だかの空想に驅られ、新聞からはおだて上げられた者ですから、朝夕、

櫛梳つた黒髪をむざと切つて放つたは可けれど、時經つに連れて其ほとぼりが冷めて、髮も伸ばすやら髷に結ぶやら、中には再婚をした方も隨分ある相で、苟しくも日本の軍人の奥樣でさへ其麼次第ですから、若い人が獨身等とは思ひも寄らぬ事だ等と、親戚の姉からも懇々の書面を貰ひました、して見ると先づ結婚してスキートホームを作るより外に道はありますまい。

結婚と云つた處で、種々あります、今日世間で云ふ自由結婚と云ふ事は、女廿五才男三十才とやら申しますが、日本では餘り流行らぬ樣です、して見れば雙方も承知し、兩方の親々も承知の上で、結婚なさると云ふ方が、卒業後の心懸けとしては、千萬間違ひはありますまい、併し結婚〳〵と申しても世間では今年は午とやらで、丙午の年に生れた女は良人を喰ふとか申して、結婚を見合せる御幣擔ぎもある樣に聞いて居ましたが、這麼事は取るにも足らぬ迷信の悲しむ可き結果で、かりにも今日文明の人の口にすべからざる事だ相ですが、併し婚禮は萬世の基で、一つは緣起も伴つて居る者ですから、多少は其邊も參酌しなければならないかも知れません。

よしや結婚すると云つた處で、配偶の撰擇と時を失はぬと云ふ事は必要な事です、何に致せ一生自分と苦樂を共にする人ですから、氣に入らぬ人と連れ添ふは一世の不幸で、時を失ふと再び結婚する事は出來ませぬ、詩經の何やらには、桃の夭々たる其の葉蓁々たり之子こゝ歸ぐ、其室家に宜しと、云ふ事があります、此の時は女子の初めて嫁入する時の事を申した者で、當時周の文王の德化は家より始まつて廣く國に及ぼし、男女は禮を以て正しく交り婚姻は必ず時を失はざりし爲、時の詩人は興を發し、女子若し出嫁したならば、桃の花の何となく麗はしく厭味のない樣な心持で、一家中の人々に夫れ〳〵美しく事ふ可き者であると云ふ事を咏じたものだ相です、御同樣、能く味はふ可き言葉ではありませんか。

全體婚姻と云ふ事は、一世中の一快事であつて亦一番人の弱點です、男でも女でも皆此の結婚と申す事が尤も氣に懸つて居る樣であつて殊に女の方に多いと申す事を、或る敎會の牧師が云つて居りました、每日曜に說敎を聞きに來て居ましても、果して、此の人は說敎を聽きに來たのか怎うだか、直ちに分る相です、所謂敎會には男も女も聽きに來て居りますから、中には例の結婚の下拵しらへに來て居る者もある樣に見える、餘程熱心になつて年齡も達して居る者は、自ら牧師に申し出づる者もありますが、之れは男の方は餘程年老つて三十以上に及んだ者でなければありません、女は若い二十位の者でも是非彼の人と結婚したい等と云つて來る者もあります、實に不思議なもので、遠くて近きは男女の中、と申してありますが、全くの事で、何時の間にか斯かる仲となるのが多いと云ふ事です、兎に角、高等女學校を卒業後、如何にすべきかに就きては、頗る考へを要すべき事で、敎育者の目から見ますと、今少し學問をさせて自分で金を取る迄にさせて置くと、自然と金の味を知つて他日家庭を作つても、萬事經濟的にすると云ふ習慣を作る事が出來るので、今少し勉强させるのをよいとして居る、尙一說としては女子の十八歲より二十三歲に至る迄の間は、男子よりも女子の方が發達進步が早い、其證據には廿五歲の男子と廿歲の女子とに、同じ仕事を命じて見ると、女子の方が緻密にする整頓の仕方も能く出來る、して見ると女子の頭が男子に劣るとは思はれない、其れであるから高等女學校を卒業しても、尙三四年間は勉强して必ず功果のある者だとしてありますから、出來るものなら、今少し勉强したら、宜いでせう。

津田梅子女史より、左の通告ありしに付こゝに前號の記事を取消す、曰く女學世界第六卷第五號に私の少食だと云ふ事に付て大相お褒めに與りまして、甚だ恐縮の次第です、全體どなたでも活動的に務き働きを爲さんと望むならば申迄もなく健全なる身體が必要である。故に滋養ある食物を多くとりて、よく運動をなし身體を健全にすべき筈でありますから私の少食と云ふ事は決して褒めた事ではないのであります。私の食物の習慣はツイ多忙の爲めに自然運動が不足するのと又元來病氣のためとによるのでありまして、充分の運動をして多量の食物を取り得る事が出來る身體を持つて居るならば、猶よく働き猶よく勉强が出來るならんと、實は殘念に思つて居るのであります。此事が人の誤解を招いては甚だ遺憾であるから、一寸御斷りまでに。

成功者の子と不成功者の子

斯波貞吉

△子を思ふ親ごゝろ

諺に燒野の雉子夜の鶴といふとあり、斯かる鳥類でさへも子については甚だ切なる思ひを爲るに、況して吾人々類が其の子を思ふの切なる、何に譬へんやうも無い。而して親の最も重きを置く所は子女の教育問題であつて如何にすれば其の子が善き者と爲るかといふが彼れの魂である。特に社會が益々複雜と成り、生存競爭が益々劇烈と成るにつれ、斯かる競爭の渦中に投じて奮鬪的生活を營むに適するやう其の子を育成せんが爲めに親は幾許の困難と闘ひつゝあるか、親ならぬ身はちよつと想像も及び難いのである子の爲めには彼れは實に其の一身を犧牲に供してゐる。然るに世はまゝならぬもの、親が斯くまで子女の教育に其の全精力を傾注するに拘らず、花咲き實を結ぶものゝ甚だ尠きは何ぞや。惟ふに人事は複雜である、若し一人一人に就て言ふならば之れには種々様々の事情があらう、去れど余は斯かる特別の事由を外にして、他に尚ほ注目すべき原因があらうと思ふ。その一は親の性格である。

△親の性格と子女

親が若し其の子を善き者にせんとならば、先づ第一に自分の性格を正すべきである。蓋し子供は最も兩親の感化を享け易きものなれば、先づ自らを善き者にせざれば其の子の善く爲らう筈が無いので、此事に就て林子平は其著「父兄訓」に於て奇拔な事を言つてゐる。曰く、子供の價値は親を見れば判かるもので、親の價値は

即ち子供の價値である。子供の偉いのは止だ子供が偉いのでは無く、親が偉いからして子供が偉いのであるといかにも其樣であらうと思ふ。學理上人に精神的遺傳ありといふは寧ろ古き學說で、今日では遺傳は單に肉體的のみに止まり、精神的遺傳は殆んど全く無いといふことに學說一致してゐる。けれ共親の感化力といふ方よりいへば、右の如きは實際あり得ることであらうと思ふ。

△性格感應の妙

子は何んな風に親の感化を享くるかといふと、誠に美妙なる感化作用が行はれてゐるので、近頃大に感じたことがある。彼の太陽や太平洋といふ類の雜誌を見ると、種々なる方面に於ける大家成功者等の家族一同の寫眞が出て居る、之れを幾つも集めて親子の性格を考へて見ると、恰も符節を合すが如くに同一の點を見出すことが出來るので、何れを見ても子は其の生れた時の親の性格を代表してゐるといふことが判つて來る。例へば長男、次男、三男、長女、次女、三女、等澤山の子供が有るとして、女の方は何うも判斷に苦しんだが、男の方で見ると、親が奮闘的の境涯より段々に風波なき境涯に移つた者ならば、その奮闘時代に生れた子は眞面目で立派な者に成つてゐるが、末ッ子になるほど段々に面白からぬ性格が出來て居る。之れと反對に、親が最初平穩なる生活より變じて遂に奮闘的境涯に入りたる者ならば、その平穩時代の子は成績惡く、末になるほど立派な人物が出來て居る。何れに就て見るも此事實は略々相一致してゐるので、是れ明かに親の性格が子を感化するの事實を證明するものであらう。親の放蕩或は遷善等、右の如くにして一々其の子女の性格を造るものとせば世の父母たる人は深く自ら反省すべきであらうと考へる。

△敎育と親切

親の性格に次で、子女の敎育に就て親が親切なるや否やも、亦大に子の將來に影響を及ぼすので、いかに兩

親が其の子の前途を慮るにせよ、實際子女の發育を助成するに不親切であるならば、到底圓滿なる發達は期し難いのである。外國の例に徵するに英國あたりは非常に熱心なもので、例へば我子を大學へ入れるとすれば自分等も其の附近へ引越して親しく其の子の監督に任ずるのみならず、自らも育兒敎育の法を研究し、萬事を抛ちて子供の開發に勉むるが例である。彼の無線電信の發明者マルコニー氏は、三十歲にして既に其の芳名は萬國に轟けるが、氏の母は英國人にして、子が幼くして已に理學的嗜好を有することを看取し、其れより我が家を理學研究所の如くに改築し、且つ自らも之を研究して其の子の趣味を助長し、その熱心は遂に彼れが如きの大發明を生み出したといふことである。右に反して日本人は誠に冷淡で、其の父兄或は保證人にして、學校の呼出に應ずる者すら殆んど無いと謂つてよい有樣、之れが若し英國ならば、學校の呼出を俟たず自ら進んで子供の成蹟を調査するが通例で、其他英國の敎育會員は通常人が多數を占め居るに、日本の敎育會員は學校敎師の持切りなりといふが如き、以て彼我父兄の意向をトするに足るであらう。

△兒童開發の好機

此の親切といふことに就て尙一言せんに、伊太利の某白痴敎育家は人に答へて斯く言つて居る、余は愚鈍なる兒童の敎育に於て多少の成蹟を收めつゝあるが、併かし之れには何も不思議は無い、余はたゞ兒童を我子の如くに愛し、彼等が問ひを發するときは、彼等を滿足せしむるやう、十分親切に之れが解答を與ふるのみで、敢て其れ以上の手段を持たぬ、彼等の發問は推理の始めにして、此際若し解答を與ふるに不親切ならむには、兒童の發達は得て期し難いと。まこと右敎育家のいへるが如く、兒童の質問は逸すべからざる最好機會であつて之は敢て白痴敎育に限らず何人の敎育に於ても亦然うであらう。然るに之れについても日本人は甚だ不親切な傾きがあるので、特に婦人に其弊が多いやうであるが、彼のいゝ加減な返事を以て子供をあしらう如きは大に

愼むべきであらうと思ふ。西洋人は汽車電車の中或は散歩の折などに、子供の質問に對し一々丁寧に說明の勞を惜まぬ所は流石に注意周到である。

拜金國の惡感と美感

ポートランドの美風

石川半山

△米人一般の氣風

平和會議の歸途北米東部の諸市を歷訪せるに、物質的進歩の著しきは遉がに驚くばかりであつたが、親しく市民と交り、その意向或は氣品といふ一段になると、兎角意に滿たざる所多く爲に一種言ふべからざる不快の感を懷いたのである。何處に到るも市街はいかにも繁華であつて、その往來する人はいかにも多忙さうなる面色にて東西南北に走りつゝあるが、併かし其の人物には氣高いといふ風が見えぬ。それも其筈彼等の思想は全く金錢の爲に支配されてゐるからである。試に彼等と語を交ゆれば、二言目には必ず金錢を言ふ。彼等はたゞ金錢を目的として走りつゝあるので、東洋より出掛けたる余輩は實に憮然たるを禁じ得なかつたのである。斯の如くなれば道德の度合も甚だ低く、市街の角々に在る酒舖は醉漢を以て滿たされ、銀座通とも云ふべき大通には怪しの者が徘徊し、强盜は白晝橫行するといふが一般の有樣である。

△ペルリの紀念銅像

多くの都會で面白からぬ感想を懷きながら、ニユーイングランドへ踏み入りてニユーポルトへ赴けるに、此地は日本開國の恩人ペルリの出生地であつて、海に瀕して風景絕佳、遊ぶのには好適地であるが、モルガンやバンダービルトなどいふ多數富豪の別墅が、其の海濱七哩の長きに連つて無上の贅澤を極めてゐる其傍に、襤褸を纏へる乞食の群を爲すを見たときは、米國人に鑑み、その個人主義を思ひ遣られて餘り好

い心地も爲なかつた。それに今一つ不快に思ふたのは此地に在るペルリの紀念銅像である。余は我が恩人を追懐して遙々當地を見舞ふたのであるが、海軍制服で立てる銅像の臺の四隅に、ペルリの功績を表彰する多くの繪が刻まれてある其の中に、兩刀を帶びたる二人の幕府の率行が平身低頭して居る圖のあるとを發見したときは甚だ不快に絶えなかつた、即ち條約の締結は彼れの功名にして我れの屈辱であるかのやうに思はれたのである。

△樂しきポートランド

斯の如く北米各地を歴遊して之れはと感じたとも無かつたが、こゝに唯一つ羨ましく思ふたのはメインのポートランド市である。此處は詩聖ロングフエローの出生地であつて、人口は五六萬位、左程大きな都市ではないが灣に沿ふて風景は好く、日曜などには多くの雅客が小舟を浮べて島巡りの清遊を試みるなど誠に氣持のよい處である。市街は巴里のサンゼリセーやデトロイトのやうに、兩側にずつと奇麗に樹木が植はつてゐるので「或は森の都府」とも呼ばれて居る。そして此處に「リンコルン公園」あり、公開圖書館あり、その市中を往來する人を見るに悠揚として迫らず、市民の氣風は自から他と異つて、金錢以外に「或るもの」を考へつゝあるが如く、甚だ懷かしい所があるので余は此の市に到れる時のみは恰も別天地に出でたるやうな感を持つたのである。

△酒を禁じたる都府

倚は余の感嘆に絶えざりしは、當市は法律を以て酒類の販賣を禁じてゐるとで、市中には一軒の酒舖だも見えない。然かも此のポートランド市は年々一億圓以上の輸出入ある繁盛なる貿易港であるので、横濱神戸も彼れの盛大には及ばぬのである。で貿易港とさへいへば、水夫共の不道德よりして亂雜で不愉快な處のやうに考へられるが、此の港に限つては酒の販賣を許さぬ爲に一人の泥醉者も無く、何人も眞面目に活潑に各々其業に從事してゐるので、我々の夢想だも及ばざりし愉快なる現象が此處に現實されてゐる。

△ロングフエローの遺跡

一千八百七年、詩聖ロングフエローは此地の法律家の家に生れたので、爲めに此の市を稱して或は「ロングフエローの都府」とも言つて居

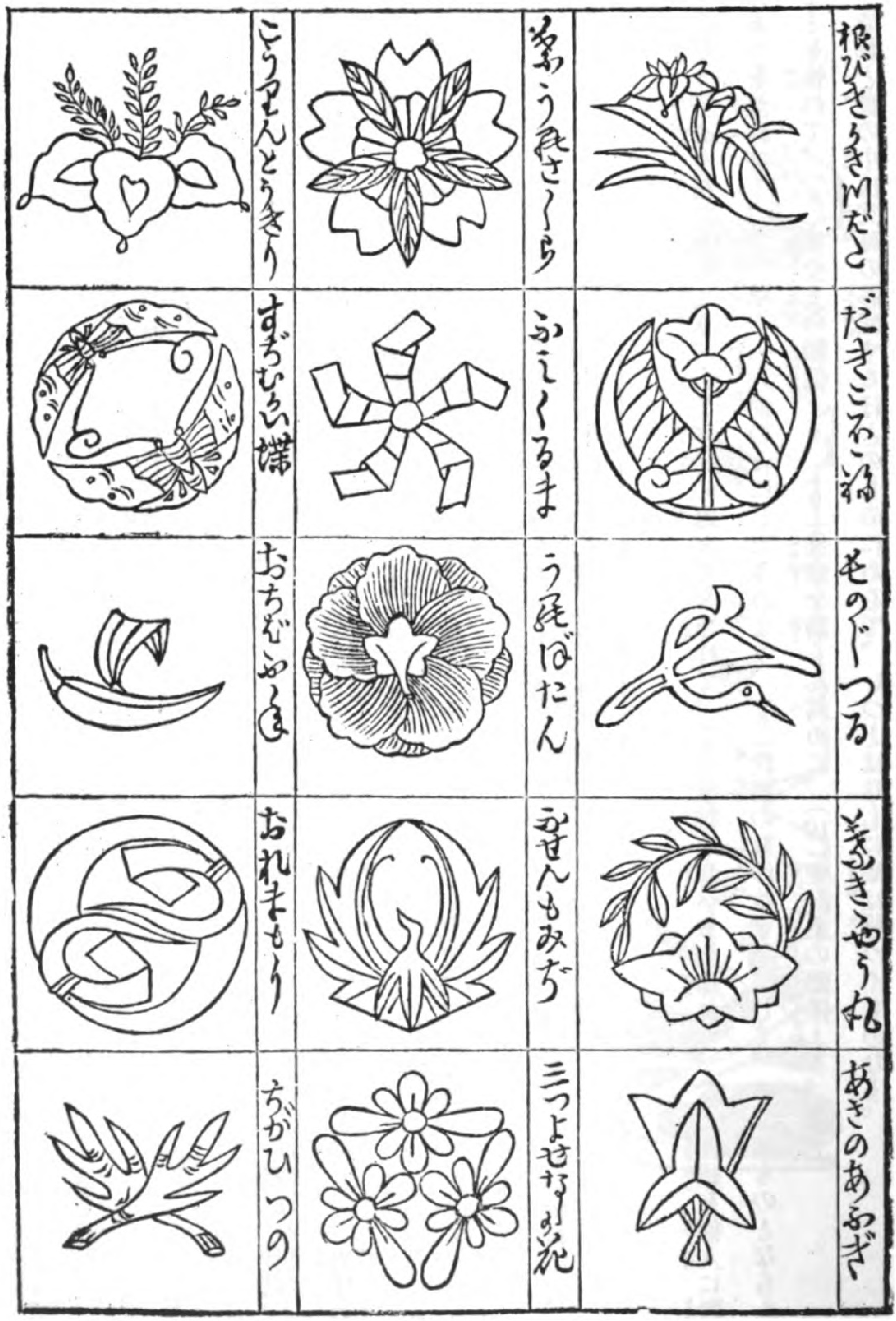
る。彼れの遺跡として、其の住宅は書齋より厨に至るまで今尚ほ舊時の儘に保存せられ、其家屋は今見る影もなく爲り居れど、海に瀕して建てられたる三層の赤き煉化造りの家は、青苔生して彼れの世に在りたる卅幾年の昔を忍ばせて居る。ロングフエローは實にポートランド市民の理想の人で、市の中央に彼れの銅像を建てゝ尊敬を捧げつゝあり、ロングフエローを王の如くに崇拜する市民の氣風は、自から他に拔んでゝ美はしい處のあるのも亦偶然では無いのである。

△母親の兒童敎育觀

市民の理想が右の如くなるが故に、その家庭も萬事規律正しく且つ高尚であるのは素より自然の結果であるが、併かし實際は思ふたよりも一層高尚な考を持つてゐる。或時余は友人を訪れて某の家に赴きたるに、其處に五六歲になる愛らしい男の子が居たので、何人でも能くやることであるが、御世辭半分に頭を撫でつゝ、「お前は善い子だ將來は英雄に成らんけりやならぬ」と言ふと、傍らにゐた母親が「此の子をネルソンやナポレオンや東郷のやうに爲たくはありません萬望良民に仕上げたいと思ふので」と決然と言つたので、余は赧然としたのである。又或る家へ行つて「お前は善い子だ」と譽めると「此の子は今が矯正の時期なれば譽めそやしてはいけません子供を譽めるのは人間を腐らすばかりです」といふやうな風。彼等には輕跳浮薄な名譽心が無い、たとへ在つても極めて少數人に止まるので、羨ましい程高尚な考を持つて居る。

△北米の健全なる分子

日本人は、近來何かにつけ浮ッ調子の名譽心に驅られつゝあるが、こは大に警戒すべきであらう。北米人の考は一般に甚だ敬服し難き狀態に在ることは既に述べたるが、然かも一方に於ては、酒を好まず、金錢に眩惑されず、輕跳浮薄なる名譽心に驅られず、且つ彼れが如き思慮深き母親を有する健全なるポートランド市民の如きが在つて、斯かる人々が文明の基礎となり、斯かる人々の輿論が發輝せられて、然して彼の米國が出來居ることを忘れてはならぬ。彼の五月の花時代の清敎徒の淸き精神は即ちポートランド市民の精神である。徒らに彼れの皮相を學んで以て文明の眞髓を得たりとするが如きことあらば大變な間違である。米國にポートランド市を有するは、即ち今日彼れの文明ある所以にして、而して我れの彼れに及ばざる所以であらう。余は我國に於ても盛大なる貿易港にして而かも酒に醉はざる此のポートランド市の如き健全なる市街の起らむことを祈るのである。


根びきうき川だと
ゑふうさくら
こうぞんとうきり
だきこゑこ袖
ふえくるま
すずむら蝶
ものじつる
うゑばたん
おちぶねくま
みふききやう丸
ふせんもみぢ
おれまもり
あきのあふぎ
三つよせなしの花
ちがひつの

▲結婚を厭がる少女の通有性

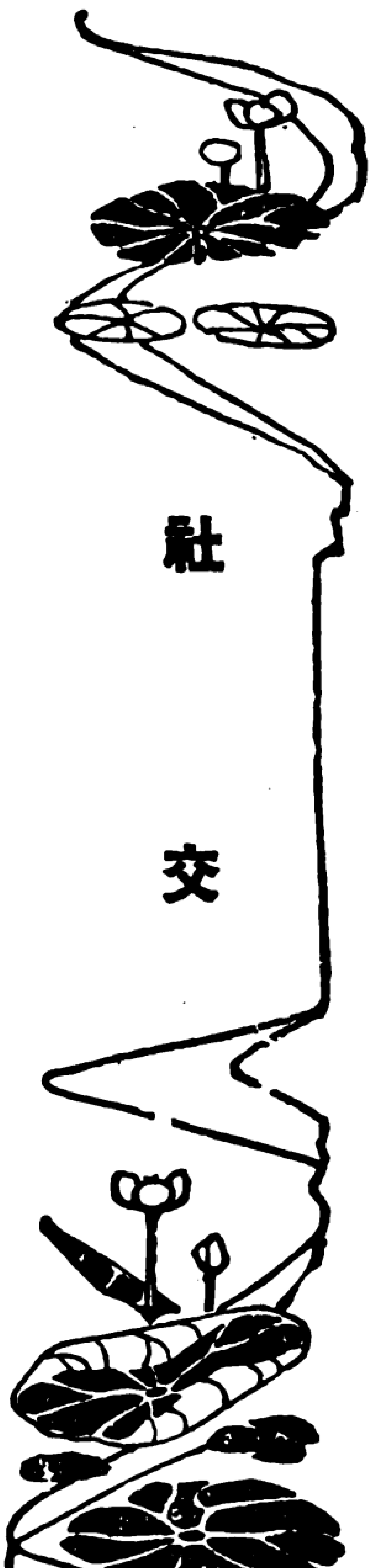
(1)熾烈なる名譽心の爲めに、(2)生活の困難なる爲めに、(3)父母の壓制婚を厭ふて、(4)世馴れぬ臆病より、(5)世帯窶れするを嫌ふ爲め、(6)取越し苦勞より、(7)妊娠を恐怖する心より、(8)羞恥、(9)責任のかゝるを厭ふて、(10)處女の氣樂なる境遇を脱するを嫌ふ心より。(以上)

右は十七八の少女に通有する性なれども處女期を經過すれば忽ちにして一變するものなり。

▲結婚を急ぐ父母の通有性

(1)早く安心を得たき心より、(2)年齢の過ぎるを恐れて、(3)容貌の衰へるを怖れて、(4)佳婿を他人に奪はるゝを憂ひて、(5)早く一人前の女にしたき心より、(6)世間の取沙汰を氣にして、(7)瑕ものとならんことを怖れて、(8)社交上の關係より、(9)佳婿を誇らん爲めに、(10)生計上の關係より。(以上)

されど世の中は父母の心配するほどのものにあらで、いつとはなしに娘は緣づくものなり。



交際社會の品定め

現はれし新顔の方々
季節の趣向とり〴〵

日本の交際季節は菊に始つて櫻に終る。例年赤阪離宮の菊の御宴が先づ大方の序開きで、御濱御殿の櫻の宴が、常に其の殿をして居る。處が去年から今年にかけては此の則を破つて、十月十一日ノーエル大將の來遊を切つかけに、春は大觀兵式後の大宴會まで打通しであつた。而して其の間には又東郷大山兩大將の凱旋コンノート殿下の來朝と云ふやうに、大きな事件が踵を接して到來した爲め、交際社會の人々は誰れ彼れとなく大概忙殺されて仕舞ゐそうな勢でした。

併し此の多忙であつたと云ふ事が、一面我が交際社會に少なからざる教訓を與へ、延て種々の新現象を呈するに至つた。其中でも殊に注意すべきは左の四です。

一、宴會園遊會の數一時に増加したる事
二、日本人と外國人と接觸の機會多くなりし事
三、交際社會の顔觸れに大分異動のありし事
四、宴會の装飾と餘興とが著るしく發達したる事

一體是れ迄の交際社會には、明に三つの區別があつて互に相融和する機會がなかつたのである。即ち一つは外國公使館を中心とした外人團體。一つは宮内省を

中心とした上流社會。今一つは愛國婦人會を中心とした中等社會で、時としては一緒になる事もあるですが多くは分れ〱になつて活動して居ました。然るに去年以來屢日本人が主人になつて外國人を招ひたり、外國人が主人となつて日本人を招ひたりした結果、此等の區別は何時の間にか無くなつて、小集、接見に至るまで相互に往來融和するやうになりました。是れは明治の社交史上に特筆大書すべき事です。

交際社會の新顔

内外人の接觸に次で、著るしい現象を見たのは交際社會の顔觸れがガラリと一變した事である。是れは各國公使館に異動があつたり、日本人間に軍人と云ふ初上りの御目見得があつたりしたからで、先づ第一に去つた方から勘定して見ると、

▲米國公使及同夫人　公使館が大使館になつたに就て逸早く歸國して仕舞つた。公使は米國富豪グリスカム氏の令息で、年は若い。金はある。夫人も日本へ來て居る中では先づ美人の方で。只金のある割合に金離れが善くなく、美人の割合に邸の飾りつけが進歩して居らなかつたがのが一つの難ではあるが、兎に角我交際社會の明星たるを失はなかつた。

▲英國公使館書記官　バークレー氏及び同夫人も交際社會の花形であつた。バークレー氏は顔は若いが頭は眞白だ。大勢の中に居ても直ぐ眼につく。横濱の競馬などでは毎年々々大立者になつて居た。夫人は又日本人が見ても惚れぼれする美人で、作つた處は二十二三にしか見えぬ。派手で活潑で二人とも金離れが善い。從つて其の持て方も一通りでなかつた。

▲三宮式部長同夫人　餘り歡迎されて居た方ではなかつたが、兎に角宮中を代表して居るので、去年までは中々勢力があつた。惜しい事に病んで薨去になつたので、夫人も亦交際社會から退かれた。

退いた人には此の外獨逸公使もある。靑木大使もある。公使館附武官などにも大部變動があつたが、然かし同時に新顔が増えて來たので、我交際社會は少しも

寂寞を感じなかつた、反て前よりも光彩を增した位であつた。

▲●●●●●●●有栖川宮姫君實枝子女王　宮殿下や同妃殿下は以前から交際社會の花であらせられた。殊に洋行から御歸りになつて以來、尙一層レファインされて御交際振りも一段の御進歩なされたやうに拜し奉つたが、兩殿下御指導の下に去年から實枝子女王が又交際塲裏へ御出かけ遊ばされた。女王は明治廿四年の御誕生で、未だ稚兒髷に結ふて居らせられる。御召物も大概振り袖で福草履を御穿きになつて舞踏の仲間へも御入りになるが、何樣して中々御達者なものです。殊に日本婦人に有り勝な、厭にはにかむと云ふ事がないから、到る處で歡迎される。英國大使など後世恐る可しだと云つて居られたが、二記者も他日我が交際社會の女王となるものは或は此の御方ではあるまゐかと思ふ。



▲●●●●梨本宮妃伊都子殿下　以前も顏だけは御出しになつて居たが、今年は又著るしく活動遊ばされた。米國大統領の御令孃が見えた時同公使館の園遊會でタフト氏に腕を與へられたのは殿下で、其後英國大使館の夜會で最も能く舞踏遊ばされたのも亦殿下である。御里は鍋島侯爵家で、兼て侯爵夫人の御仕

込みもあつた事故、萬事の御取りなしが水際立つて居る。只御背が餘り高くなく、全體小作りで居らつしやる處から、ノーエル大將などゝ組に御なり遊ばすと、何だか釣り合が取れぬ樣にも思はれる。けれども御性質が大膽に渡らせらるゝと見えて、一向御羞かみになる樣子もありません。

▲戸田式部長と同夫人●●●●●●●　久しく宮中に出仕して毎々御顏は拜見して居たが式部長となられての交際振りは又格別である。英語は少し怪しい方だが一通りの事だけは辯ずる。舞踏も上手の方ではないがまづ可なりである。全體ヂミの方である代り、出過ぎて人に惡感情を起させる事はない。式部長としては三宮さんより適任でせうと思ひます。のみならず夫人は例の絶世の美人！

▲寺島伯爵及び同夫人●●●●●●　伯は故寺島宗則伯の嗣子で、長崎式部官夫人の弟である。長崎夫人は容色こそ申分あれ、交際社會では中々の勢力家で、大統領の御孃樣の來られた時なぞ、伯爵夫妻と共に其の接伴役に擧げられ、萬事遺憾なくやつて退けられた。伯爵は其後外務大臣の秘書官となり、今日で二代に歷仕して居るが外人間の評判は餘程善い。萬事淡白で少しも衒氣の無い處がひどく人に可愛がられる。この方の夫人はおきヨウさんと云つて、三井から來られた方である。今年は未だ活動と云ふ活動もされなかつたが、容色はよし素養はあり。他日必らず大雄飛を試むる事だらふとの評判。

▲周布神奈川縣知事と令孃●●●●●●●●　外國から御客樣があると先づ一番に横濱へ上陸する。横濱では周布知事が御接待をする。ノーエル大將が來た時大將の爲めに一番先きに夜會を開いたのはこの知事で、東郷大將が艦隊を率ゐて凱旋した時逸早く招待してノーエル大將と握手をさせたのも亦この知事であつた。夫人も其の都度顏だけは出すが、評判は令孃の方が立勝つて居る。今度もコンノート殿下の御出でになつた時、埠頭で花束を獻上したのは令孃である。

▲尾崎市長と其新夫人●●●●●●●　東京市が主人となつて外賓を饗應したり凱旋將軍を歡迎したりするので、尾崎市長

は自然と交際場裏の人とならねばならぬ譯となりました。然かし市長は何時も眞面目で四角張ッて居て社交界の人としては極めて愛嬌に乏しい。寧ろ軍人ではあるが伊東元帥なぞの方が交際家としてはズッと卓絶して居るとの評判。幸ひ昨秋新夫人を迎へられたので是れからは夫人が十分切り廻はして呉れるだらうと思つて居た處、何故か夫人も餘り活動はされぬ。記者が御目にかゝつたのは、靑木子爵邸で催された活人畫の時ばかりである。尤も顏立も何方かと云へば寂しく、會話も活き〳〵とした方ではないが。

海軍には伊東元帥の外、片岡中將と云ふ交際家が居られる。陸軍は海軍に比しては一體に眞面目臭く且つ武骨者が多いが、こゝには幸ひに大山元帥、兒玉大將も交際家としては愛嬌のある方で全體を代表して、處々の宴會へ顏を出される。而して元帥が顏を出される處へは必らず令孃がついて來られる。名は何と云ふのか知らぬがチャーチャン〳〵で通つて居る。英語が非常にうまゐ。若い士官なぞは大騒ぎをして居るとの評判。チャーチャンに次では日本タイムス社のプリンクリーの令孃が評判がいゝ、御母さんが日本人で靑木さんの所謂半分半分だけれど、矢張り騒ぎ手が多いやうである。

宴會の裝飾

宴會と云へば食べる事が主になつて居ます。然かし人の胃の腑には制限があつて、食べるものばかりでは幾ら金をかけても知れたものです。其處で立派な御馳走になると、勢ひ食物以外部屋の飾り付け、食卓の盛花など云ふものに金をかける事になります。是れが又一通りならず六かしいです。

▲花

花も有り振れたものでは面白くないのみならず、一度菊の季節が過ぎて仕舞ふと、後には何にもない。然かし無いからと云つて打棄てゝ置く譯には行かぬから手を盡くして府下の各温室をあさり歩くのである。而してナーシッサスでもジエレニアムでも手當り次第買

つて來る。大槪は赤阪福吉町の西花園で請負つて、西花園から處々の植木屋へ人を出す事になつて居るが、今年は餘り宴會の數が多かつたので、植木屋と云ふ植木屋をあさり盡くし、終には酒井伯や大隈伯の處へ哀訴嘆願しなければならぬ事になる。形勢斯くの如くであるから、米國公使館なぞでは屢日本流の挿花で誤魔化して仕舞つた。日比谷公園で催されたコンノート殿下歡迎會の食堂も赤池の坊の活花であつた。食卓の上へ一面にアスペラガスを散布して、其の間へ紅白の菊の花を撒いた、三井集會所の東郷大將歡迎會なぞは寧ろ成功したものと云つても善い。況んや英國大使館でノーエル大將歡迎の夜會を開いた時、一輪一圓以上もする菊の花を惜し氣もなく食卓へ飾り、次でコンノート殿下歡迎の際には、廊下と云はず休憩室と云はず

悉く溫室仕立の白躑躅で飾り立てたといふは、餘程の贅澤且つ餘程の成功と謂はねばなりませぬ。

▲庭

庭の飾り付けは大槪園遊會の部に屬するのですが、東郷大將が築地の水交社で開かれた歡迎返禮園遊會の造り物の如きは、其の中の尤なるものであつたが、時としては部屋の眞中へ庭を造つてお客の膽玉を拔く事もあります。今まで滅多に此んな大仕掛の裝飾をした事はありませんでしたが、今年の交際季節には前後數回之を試みたのがありました。第一は十月十七日の夜首相官邸で催されたノーエル大將歡迎の夜會に、一寸其の模樣をいへば先づ休憩室の窓の處へ菊畑を造つて仕舞つた。後を靑竹の建仁寺垣にして其の前へ菊の鉢植を列べ、鉢を隱くすには杉の靑葉を以てしたのみならず。同じやうな菊畑は次の休憩室にも設けられたが御客樣の方では之を見て室內の裝飾とは思はず、窓の外の露路へ仕立てられたものだと思つて居たのです其れから今度は舞踏室へ入ると、正面張出し窓の處に松間溪流の坪庭が造つてある。松の枝が鬱乎として、蔦葛のからまつてる間を玉川砂利の細流が流れて居るといふ工合。石も木も草も土もすつかり本物で、お客樣はさながら其身深山幽谷の中にある心地がしたとい

ふ事である。これも矢張り西花園の意匠だつたそうですが、外國にも是れほど凝つたものはない。誠にこれは日本特有の技で、彼の豪者を衒ふ米國の富豪などは能く食卓の上へ池を造つて、之れに生きた白鳥を放つたりなどする事があるが、未だ是れ程までに巧みに趣向を凝らしたのは無いと云つて、ノーエル大將一行の人々も非常に感服して居たといふ事です。

其後三井集會所で東郷大將の歡迎會を開いた時にも、座敷から直ぐ掛け出して土間を造り、土間の向ふに舞臺を設けて、其の兩側に菊畑を作つた事がある。



今年になつては後樂園で開かれたコンノート殿下の歡迎會の節庭內へ半永久的の假食堂を設け食堂の中へ松竹梅に熊笹、丁子などをあしらつた庭園を作り之に剝製の鶴を配置して居ました。

此んな大仕掛の裝飾は、從來あまり例のない事で、確に我が交際社會の新現象と云つても差支ないのである。

宴會餘興

▲舞踏

外國人ばかりの宴會だと、普通洋琴の獨奏、二部合唱位の處で、大きくなつて舞踏、活人畫である。然るに此の舞踏と云ふものが、どうしたものか日本人には甚だ無趣味である。日本人ばかりでなく西洋人も亦內實餘り感服はして居らぬ樣子である。其れも設備完全な舞踏室でもあつて、集つた人が皆踊れる樣になつて居るならば兎に角、今日の夜會と云ふものは、人は無暗に集る、それにも拘らず舞踏室は甚だ狹ひ。米國公使館など、食堂即ち舞踏室で、鮨詰に詰められても二百人は入らぬ。英國大使館の舞踏室は稍完全して居るが、其れでも樂隊の奏樂す可き場所がない。不得止何時でも廊下に繼ぎ足しをして此處へ樂隊を收容し、序に其の隣りへ食堂を設けるやうにして居る。首相官邸の舞踏室と靑木子爵の舞踏室とは廊下が廣くて、此處に樂手を控へさせる事も出來、內部も餘程具合よく取つてあるが、矢張り百人以上收容する事は出來ない然るに何時も夜會と云ふと必らず二百人三百人の御客樣が來る。十一月一日米國大使館で開かれた東鄕大將歡迎會の如きは、三ケ所の休憩所へ人が一杯になつて仕舞つて、出入は愚か腰を下す事さへ出來なかつた次で二月廿一日の英國大使館の夜會も亦客が廊下へはみ出して始から終まで立往生す可く餘儀なくされ、舞踏は愚か御茶一椀にさへ有りつく事が出來なくて、途中から失禮したものが澤山あつた。

事情正に斯くの如くであるから、外國人の催しでさへ追々と舞踏以外の餘興を加へるやうになつた。二月廿三日英國大使館晩餐會の席上、武術試合を演じてコンノート殿下の御覽に供したなどは確に此の一例である。

▲手踊

其れから日本人の催しにかゝる宴會の方でも餘興の仕組に就ては非常に頭を惱ました、初めは園遊會ならば相撲、夜會ならば踊と云ふ工合にして仕組で見た。

處が相撲は甚だしく單調で興味がない、殊に大關同士の取組と來ては御客樣は只欠伸を催すばかりで、偶々感心した處が日本にも此んな大男があるか位の處でとんと相撲の妙味を解さない。ノーエル大將を紅葉館へ招待した時國見山が碁盤の上へ人を立たせて差上げて見せたが、此んな事の方が遙に喝采を博する。踊も亦其の通りで、「土蜘」や「紅葉狩」をして見せたのでは、誰も感服するものはない。大統領の令孃が見へた時に紅葉館の庭へ特別の舞臺を作つて、藝者やら役者やらが腕へ振をかけて踊つて見せたが、一同只迷惑そうな顏をして、時々義理一遍の拍手をしたまでゞあつた。差す手引く手などゝ云ふ事は一向分らないのだから仕方がない。のみならず日本の踊には顏面のエキスプレツションと云ふものが少なく、笑はないのを以て上乘として居るから外人の目にはトント淋しくて寂寥を感せずには居れぬ。其れ故紅葉館の女中の『仰げや仰げ』などが反へて御客樣の御氣に入るので。ノーエル大將も特に同館の太郎を呼びとめて、踊に用ゐた國旗を所望したりなどしたのである、日本人の眼から見ると可笑しくて堪らぬ。日本人の方でも後には此の呼吸が分つて來たから、以後は勤めて大勢手振りを揃へて鮮に踊る方を撰ぶ事にした。歌舞伎座で前後兩回催された歡迎演劇なども、專らこれを主として番組を作つたが、矢張り單調無趣味の弊を脱する事は出來なかつた。殊に『若宮ウエールカム』などゝ來ては、てんで御話にならなかつたので、コンノート殿下は折角招かれて居り乍ら途中で御歸館になつて仕舞つた。

日本人ばかりの宴會でも亦、踊を見やうと云ふのは餘程の通人ばかりで、其人よりは踊り手が一刻も早く自分等の席近くへ待つて呉れる事を望んで居る。其れだから十一月四日の夜、郵船會社の連中が東郷大將以下を帝國ホテルへ招待した時の如き、初めから藝者を室内に散らして仕舞つて、時に電氣を消したり點けたりして見せた。くだらない踊を見せるよりも、此方が餘程氣がきいて居る。

▲假　裝

舞踏も可けない。手踊も面白くない。其れなら何にした方が善からうかと云ふので、種々經驗の末、遂に假裝と云ふ處へ結着した。假裝行列、假裝舞踏は、前から隨分流行して居らぬではなかつたが、宴會には餘り勢力がなかつた。然るにノーエル大將が朝野の名士を「ダイアデム」號に招待して返禮の宴を開いた時、舷門を上ると直ぐ其處に潰れた絹帽を冠り、顏を種々に彩色した滑稽人物が居て、頗る眞面目に構へて居り乍ら箱の中へ飛び込んだり、柱の上へ飛び上つたり、妙な叫聲を出して來客を大笑ひに笑はせた。餘興の仕組に頭を痛めつくした連中が之を見たのだから堪らない成程斯樣行かなければならぬと云つて酷く感服して仕舞つた。

其後東鄕大將が水交社で園遊會を開かれた時にも、海軍々樂長吉本幸藏氏の意匠で、突拍子もない假裝行列が行はれた。寺内陸軍大臣が後樂園で開かれた滿洲軍總司令部以下の凱旋歡迎會にも亦、陸軍の永井健子氏が部下を率ゐて假裝舞踏を試みた。併し此れは餘り眞面目過ぎて面白くなかつた。次で此の春になつては柳澤伯爵の邸で、大仕掛な假裝宴會が開かれた。主人の伯爵はじめ令孃、令息、悉く大名になつたり乞食になつたり、牛若になつたり、辨慶になつたり、非常に面白い宴會であつた。只難をいふと如何にも假裝した人がジツトして居て活動する事が少なかつたから、終には一寸間が拔けたやうでもあつたが、兎に角趣向が奇拔であつたので大喝采を博した。毎年彼岸の中日に品川御殿山の益田邸で開かれる大師會に、主人の令弟英作氏が何か趣向を凝らしては客を驚かす。今年は塹壕茶屋と云ふのを造つて自ら印度僧に扮したのなど矢張り假裝の成功したものである。

其れから此も假裝の中へ加へて置きたいのは、活人畫である。女學校などでも能くやるやうであるが、三月十五日に青木子爵邸で催された外人ばかりの假裝會は近頃珍らしい成功であつた。パークレーの奥樣が日本を去る置土產にと、ウント氣張つて働いたのみならず。全體の意匠を立てたのが故人となつた英國公使

フレーザー氏の未亡人、未亡人の姉さんはマリー、クローフオードと云つて、現今世界有數の文學者である。従て同未亡人も文藝に關する造詣が甚だ深い。其れ故當夜の活人畵は徹頭徹尾故實史實に拵つて寸分の批難を容れる餘地がなく、倫敦あたりでも滅多に見られぬ活人畵であつたと云ふ事である。然かし畵其のものよりも記者などのひどく嬉しかつたのは、舞臺へ出た役者が假装其のまゝで座敷へ入つて來た事である。其中には獨逸の皇太后もあれば古羅馬の名將軍もあり、路易十六世の宮女もあれば、亞米利加印度人の夫妻もある。其れが一同に一緒になつて、盛んに談笑歎語するのだから、知らず〳〵興に乗つて來て、會が終ても皆歸るのが厭になる位であツた。日本人の活人畵も今後は斯様云ふ仕組にしたら善からうと思ひます。何も藝者のやうに御世辭や愛嬌を振り撒くには當らないが御孃様方や奥様方が假装のまゝ宴席へ出られるやうになつたら、嘸ぞ愉快な事だらうと思ひます。



▲百面相

意外の堀出しものは鶴枝とか云ふ藝人の百面相であつた。日比谷に於けるコンノート殿下歡迎の際、試みに之を使つて見たら、案外評判が善かつた。梅坊主の滑稽も去年以來大分喝采を博したが百面相の喝采は更に是れ以上であつた。殊に章魚の眞似だの獅子の眞似は、眞に迫ると云ふて大方の御賞讃

を辱ふした。其處で四月七日東伏見宮邸で催された婦人衛生會の懇親會でも亦、御招きを蒙つて妃殿下初め貴婦人方の御慰に供した。頗る無邪氣で面白い、今後は此んな方面の種類が、宴會の餘興として勝を制す る事だろうと思ひます。死んだ猫八などの動物の假聲も若し後を次ぐものがあつたなら必ず歡迎されるに違いない。

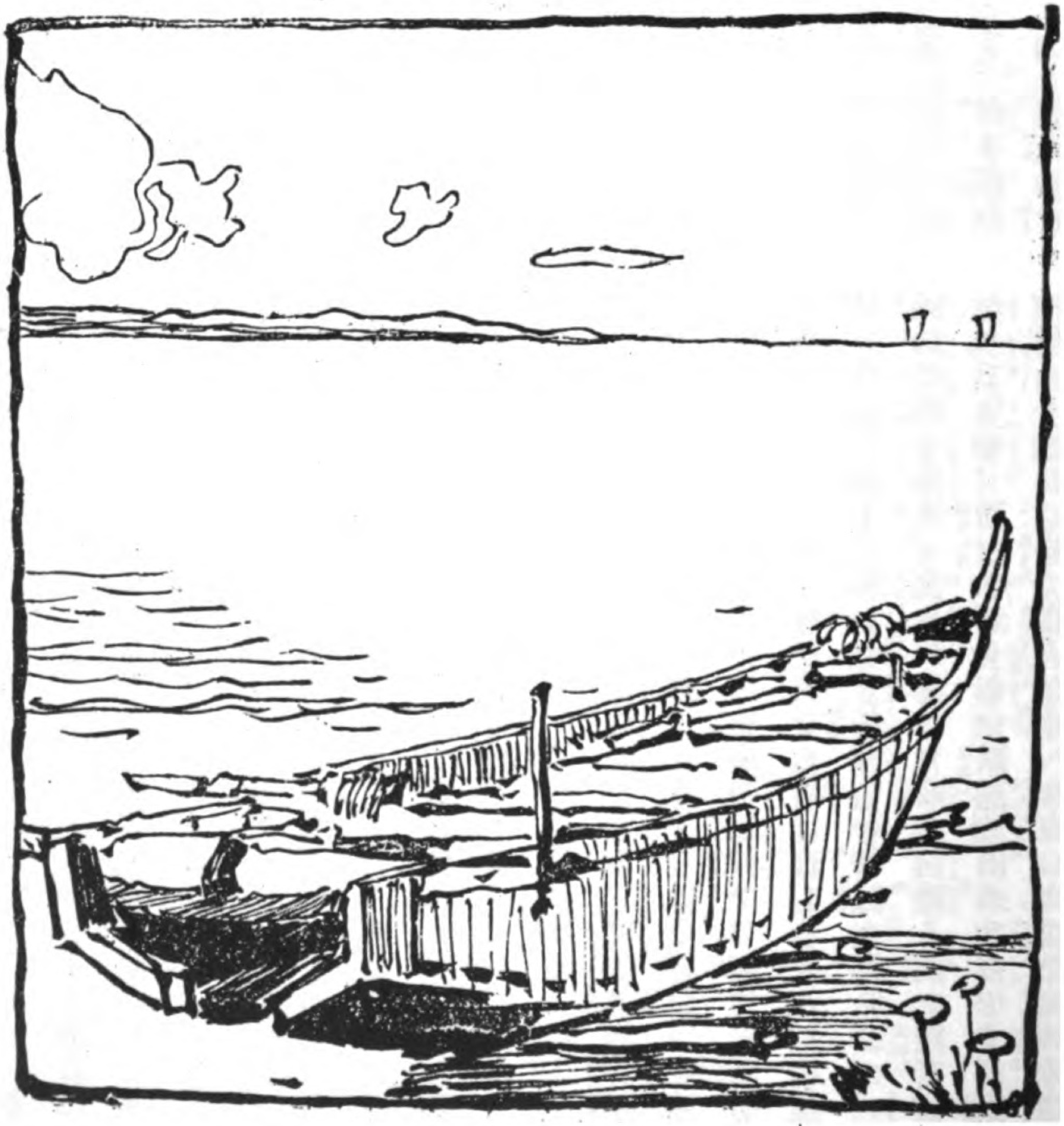
▲藝　妓

藝妓が公私宴會に對する位地も亦今年の交際季節によつて初めて決定した。勿論正式の夜會晩餐會などには未だ出入を許容た限りではないが、少し格を崩した宴會になると、何樣しても藝妓の必要がある。初め東京市が主人となつて英國東洋艦隊の下士卒を歡迎した時、市參事會では渡瀨寅次郎氏が極力反對した爲め一切藝妓を使用せぬ事にした。然るに其の觀迎會が不幸にして失敗に終つた處から、一部の論者は是れ全く藝妓を使用しなかつた爲めだと主張して、其夜紅葉館の宴席上、廊下の隅や戸袋の蔭で屢々臨時市參事會を開き、遂に第二回目の觀迎會には斷然藝妓を採用する事に決した。是れが例になつて以後凡ての園遊會、凡ての歡迎會には必らず藝妓が出席する事になつた。山縣侯の目白の椿山莊で開かれた園遊會などにも矢張り藝妓が出陣に及び、三井倶樂部の晩餐會にも藝者が席上斡旋の勞を取つて居た。然かし何方かと云へば是れは餘り好ましい仕方ではない。のみならず成績も亦餘り面白くない。園遊會で賣店の賣子にする位なら差支ないが、晩餐會夜會となると藝妓は全く手持無沙汰である。何をして善いのやら勝手が違ふので間誤々々ばかりして居る。其れ故一旦は藝者を以て凡ての宴會の必要品であるかの如くに解釋したが、後には有つても無くても猫の尻尾と云ふ具合になつてしまつた。是れは奏樂とか假裝とか、素人の手でする餘興が殖えて來た爲め、自然其の必要をも減じて來たのである。併し全く之を除外する事が出來るや否やは未だ不確である。來る可き交際季節に於ても一度試驗して見ねばなりませぬ。

之を要するに日本の交際社會は去年から今年へかけて大部面目を改めて來た、中には過渡の時代に有り勝な調子外れもありませうが、大體に於て餘程進歩して來ました。若し夫れ目下各種の音樂會を中心として居る社交團體が、も少し進歩して他の社交團體と接觸を保ち、女學生の力が交際社會に加るやうになつたなら更に括目して見る可きものがあるだらうと思ひます。

▲友情

我等は友情を培養せざるべからず、情慾は恰も湖水の平穏なる面を往來する雲の如きのみ、然れども戀愛は友情なくして決して永住するものにあらず。



家庭に於ける 尾崎愕堂夫人

中村鈴子

面を吹く風寒からず、柳櫻の織り成せる陽春四月の初旬、品川東海寺の遺趾に尾崎東京市長の清雅な御住居を訪れて、新夫人に面晤を願ひ入れました。夫人は取次の小間使をして記者の用向を確かめられ、其請を容れられたので、今古東西の書籍を飾られたる御玄關部屋を通り、書院式の應接間へ案内されました、正面の床の間には太刀、刀、銀製番の鶴を飾り、軸は寫生風の鷹狩の圖でありました。椅子、長椅子の装置、寫眞の飾り付け等は自から夫人の御趣味を現はし、盆栽の木瓜、海棠は今を盛りと艶麗を競ひ、硝子戸越しに見ゆる前庭には、老松枝を擴げて綠色濃き繁り葉の中に何やらん歌ふ鳥の音色は、後園より漏れ聞ゆる蛙の聲と相和して節面白う感ぜられたのです。御手飼の猫一二度此室を往來せる後、長裳さら〳〵と御椽に音して端麗優雅な夫人は出で迎へられました。長く日本の交際を味はれし夫人は、應對、言語等もよく國風に熟練せられ、彼の快活と我の謙抑とを折衷せられて居て、左の通り話されました。

▲良人を慰むる事に就て

私は未だ家事向に馴れませんから、別に御話し申し上る事もなく、耻しいので御座います。唯私は毎日二時間か三時間必らず外出して來ませんと、精神が不愉快で、行雄が折角役所から歸つて參つても、面白く慰める事が出來ませんから、是れだけは務めて行ふて居ります。それは御友達を訪問したり、菓物其他日用品や布帛類なぞを買ひに參つたりするので御座います主婦が買物に出掛けるのは彼地の風習で、何樣な家の奥樣でも商人を家へ呼び寄せる事は致しません。斯樣毎日外出致すと何かしら新らしい智識も得られて、談話の種も出來、良人が歸つた時、何時も同じ談話ばかりでなく、面白く新らしい談話も出來るのです。第一活々とした心持で良人を迎へ良人に快樂を與へる事

が出來ると思ひます。併し日本の家風では主婦が毎日出外すると家事が疎かになります所から、私も此家へ嫁りたては此點に就て非常に心配致しました。最初は女中の規則が定りませんで、毎日ごた〳〵と混雜ばかりして、二箇月ばかりは私は少しも家を明け得なかつたのです。それから女中にそれ〴〵受持を定めて規律を厳しく教へ込みました所、追々馴れて近頃はまごつかぬやうになり、私も漸く安心して出られるので御座います。而して私が毎日外出するのは、一の勤めだと云ふ理由は、取締の女中に悉しく申し聞かせてあります。

▲女中の受持

雇人は取締、小間使、御飯焚の三人の女中と、料理人、小間使の二人であります。毎朝六時から十時まで女中達の仕事は取締が三つの應接間の掃除、小間使が食堂の掃除と食卓の仕度、御飯焚が臺所、椽側、二階の掃除と云ふ規定に致して置きます。而して一週に一度づゝ各室の大掃除を各自に受け持たしてあるので小間使は土曜日に食堂の大掃除、月曜日に食器の磨洗、取締は火曜日に二階の大掃除、金曜日に客間の大掃除御飯焚は水曜日を寝衣、シーツ等の洗濯と云ふやうに定めて置きます。毎日晝食と晩食との献立は、朝の内に私が料理人に言ひ付け、又は書き付けにして渡して置きますから、外出しても毫も差支へはありませんハイ私は日本食もよく戴きますが、行雄が洋食の方が身體に適して居ると申しますから主に洋食に致して居ります。

▲義子に對する注意

娘は誠に柔順でありまして、私の定めた規則をよく守ります。子供を早く寝かすのは子供の身體に極大切の事として彼地では一番これを厳しく申しますが、娘も最初は是れまでの習慣と一つは親孝行の爲めに御父樣の御歸りの晩い折なぞ何時までも起きて待つて居りますから、私は之れを厳しく申して早く寝かしました處、近來大層顔色が宜しくなりました。ハイ當年數へ年の十六で華族女學校へ通學して居ります、イエ復習

と申して唯會話なぞ練習させる丈けであります。

▲日本婦人の社交

日本の交際社會に御夫人御同伴の割合少ないのは、大層遺憾に存じて居ります。西洋では御承知の通り、或る一部の集會を除くの外、如何なる會でも夫婦同伴で出席しまして、同伴せぬ夫人は素性の賤しいものであるかの如く思はれ、男子の恥辱となつて居る位でありますが、畢竟男子ばかりでは温かい團欒を得られぬ爲めで御座いませう。日本の奥様方は誠に御交際が御上手だと私は感心して居りますので、男子方がよく保護して導いて上げたなら、立派に社交の花とならるゝ事と存じます。西洋婦人とても以前は随分遠慮勝で思ふた事を隠して居る風でしたが、近頃あの様にさら〳〵として參つたので、日本の御婦人も以前に較べると大層快活に御成りのやうに思ひます。日本の奥様方は西洋婦人に較べると餘り遠慮深すぎると仰る方もありませうが、これが又日本婦人の美しい處であると存じます。

▲日本婦人の堅忍

日本の御婦人の辛抱強いのには、私が毎々感服する所で御座います。私はこれまで日本の家庭に就いて種々な事情を見聞して、我儘な良人によく仕へられる御婦人があると、實に同情の涙を濺ぎました。無論或る一部の話しではありますが、貞操な奥様を捨てゝ妾に愛を注ぐ人は、全く男子の我儘で婦人を侮辱して居られるのです。日本の奥様方は實に良人によく仕へて居られ、私情を制して獻身的に忍耐して居られると思ひます。私は長く日本に居つて種々な恐ろしい事を知つて居る所から、結婚の申込はいつも斷つて居りましたが、行雄の人と爲りを信じて此家に嫁したので御座います。

▲奥様に望む

家庭の亂れは良人の我儘とは申すものゝ、一つは奥様方の工夫に依つて豫防されると存じます。終日種々の刺激を受けて家に歸つても、奥様は何時も家の細事か會計の話しばかりするやうでは、良人が氣を腐らし

てツイ友人と倶樂部にでも出掛け慰籍を求めるやうになりませう。外國婦人の交際は會計の話を持出すのを恥辱として愼む風がありますが、會計上の事は話柄として快味が乏しい爲めでせう。尤も一家夫婦の間柄は會計上の話も無論必要ですが、これは時と場合を見計つて致すべきで、家に歸つた良人をば一先づ愉快な談話を以て迎へねばなりません。是れは前に申した通り、成る可く外の空氣を吸ふて心身を活々させて置くのが必要ですから、何卒家の規則を巧く定めて、事情の許す限り一時間でも外へ出て談話の材料を求めたいものです。是れは殊更の遊歩でなくても、買物等を致しながらで宜しいでせう餘



り出過ぎた申し樣ですが愛する奥樣方に對する一片の老婆心と思召して頂きたいのです。

▲新家庭の心づかひ

私は元來一つ事に凝つて勉強するのが好きで、此家へ參るまでは始終其樣ことばかり致して居つたので、家政を執るのが誠に下手で困ります。且つ日本の風に慣れませんから行雄の知己の方が御出での際も、自然失禮にでも成りはせぬかと心配で〱堪りません。行雄が風習の違ふのは仕方がないから敬意さへ失はねば宜しいと申しますけれども、何ですか單た心配ばかり致して居ります。

▲文章好き

御尋ねになりますから、自分の事を申し上げて可笑しう御座いますが、私は何か書くのが大好きで、歴史を讀んで古人の言行に就いて自分の所感を書いて見たり、風俗なぞを書いたり、緩々と旅して見聞を記したりするのが面白いのです。餘程以前に日本の祭禮と雛祭の狀態を書いて、寫眞を添へ倫敦の婦人雜誌へ寄贈した事がありました。それから拾年程前に日本の奥様の一日の生活を書いて、矢張り奇麗な寫眞を添へて贈りました所、如何云ふ間違ひか藝妓の寫眞を掲げたので、私は非常に殘念に存じました。纏まつた書き物はありませんが、雜錄を集めたものが少しばかり御座いますから、其内御覧を願ひませう。

▲子供の日記

嫁してから雜務多端で、ツイ日記も怠つて居りますが、これは極樂しいものですから、是れから始める積りであります。倫敦の婦人雜誌に八歳の少女が書いた日記が出て居ましたが、誠に可愛らしくよく出來て居りました。此少女は母の病氣の際、オルガンを彈いて慰めた事なぞから、母に死別した後の悲しい思ひを幼い筆で日記に書いたので、私は非常に感じました。風俗習慣等の外皮こそ違ひますけれども、情合に於ては日本も西洋も變りはありません。この子供の日記を飜譯したなら、日本の方も面白く御讀みの事と存じます

▲日本語と日本文字

私は十六歳の時日本へ參りまして、其時日本語と文字の稽古を致しましたが、丁度母に別れた哀しみの當時で身體も衰弱して居りましたから、深くも致さずに仕舞ひました。ですから言葉が誠に拙くて恥しいのであります。

▲展覧會と芝居

繪畫は出來ませんが大好きで、上野の展覧會へもよく參ります。イエ私は油畫より日本畫の方が好きであります。芝居ですか、是れは見る前に一應筋を聞いて置くと、尚更面白く思ひます、日本の芝居は、私大好きですけれども、芝居の言葉は一寸分り難くて困るのです。先達てコンノート殿下御遊覽の際に、徳川家の

芝居を陪覧致しましたが、大層面白う御座いました。日本の芝居は随分時間が長う御座いますから、忙しい者が見るのに少々不都合でせうと思ひます。西洋では晩食後一寸氣晴らしに參る位で格別暇が潰れぬやうに二三時間程の興行であります、追々日本でも時間が短くなる事と存じます。

趣味豐富な夫人は動植物を愛せらるゝ事深く、良人も亦其嗜好を同うせらるゝ由にて、良人が品川の緣日で草花の植木鉢を請求された事なぞ物語られ、如何にも滑らかに樂しげな御家庭だと想はれました。

チヨコレート

コヽアはメキシコや西印度諸島にかけて栽培しつゝあるコヽアの木の水瓜の果實の種子のやうなものを炒つた粉へ混合なして製へたものでコヽアの粉へ熱い湯若くは沸した牛乳を差し攪拌ぜた飲料は歐米には既に久く用ひられて居るが我國へ入つたのは遂ひ近頃で近來は大分流行つて居るコヽアの粉へ澱粉や砂糖などを混ぜて壓し固めたものがチヨコレートで碎いて粉にして同様に用ふるので其まゝ食べて甘い、チヨコレート菓子は銀座の龜屋などで盛んに賣つて居るコヽア、チヨコレートには一種特有の香氣があるから、馴れぬ口には一寸向かぬかも知れぬが、馴れると止められぬ此の香氣は種子を粉にする間に出て來るので。上品下品の區別になるのは茶や咖啡も同じである、香氣の外に少し苦味と澁味があり、重な成分としてはテオブロミンといふ一種の興奮劑と油と夫から多量の窒素化合物と澱粉を含んで居る、此油は消化のよいもので且つ窒素物と澱粉に富む所から上等の滋養食物と言へる此種の飲料中滋養の効があるのは外には殆んど無い、唯價が高いので茶や咖啡を壓倒する事が出來ぬのである。

百花爛熳



紫藤珊々



觀察

世界に名高きサムライ、ウーメン

鈴木青眼

是の記事は、米國人アリス、マーベル、ベーコン氏の著書『日本の少女及び婦人』の一篇です。著者は熟く日本の事情に通じた人で、又尤も日本贔負の人であると思はれます、既往の日本女子を賞讚し、現在の日本女子を辯護し、又望を將來の日本女子に屬した處抔は、餘程旨く出來て居て、少々顏を紅くせねばならぬやうにも考へます。成る丈け著者の眞意を過らぬやう、日本人に取つては、分り切つた事をも、其儘譯しました、徐々讀んで、御覧になると面白い趣味があつて、西洋人の觀察の周到なことを會得することが能ましやう。中にある見出は本書には無いのですが、目を牽く爲に故と挿んだのでムいます。

▲「サムライ」階級

「サムライ」とは、日本人間の武士的階級に與へられた名稱で、この階級は、貴族と、農工商を業とせる平民との中間に位して居るのである、內亂や外寇の衝に當つて、國家を防守する、學問文藝を保存する、又役人として各種の事務に服すること抔は其の任務とするところであるのだ、封建の政治が廢れて、王政復古の代となつた當時には、日本の總人口三千四百萬人の中に、殆んど二百萬人程の侍があつた、尤も廣い意味からいふと、兩刀を帶んだ者のみならで、大名といふ貴族の一種も、「サムライ」の階級に屬するのであるが、普通に侍といへば、將軍又は大名に仕へて、主君の手許から、年々一定の俸祿を貰つて生活をして居た武士の階級を指すのである、日本の歷史の大部分は、是等武士の仕事で滿されて居るので、其の行ふ擧動といふものが、平民の爲る仕事とは違うのであるから、從つて平民階級とは全然異つた一階級を形造つて居るの

である、貴族は世々權勢富貴を相續して、活計歡樂氣隨氣儘に、世を安らかに渡るのであるから、其の子孫は次第に體軀も精神も弱くなつたが、侍の方は之に反して、益々發達した、さうして遂に日本刀の切味鋭きのみならで、日本國の腦髓とまで爲るに至つた、現に今日日本の文明を進めて、暗憺たる中世時代から、光輝ある二十世紀の表面に立つを得るに及んだのは、主として武士的階級に屬する士人の功勞に依るのである。

▲「サムライ」の特質

然らば完全なる日本紳士の名譽ある模型として尊重され、又生るも死するも、其名を辱かしめざるを以て最大希望とせる「サムライ」の特質は如何と問ふて見ると、たゞ一言で盡すことが能る、則ち侍の勤は忠義の二字に在るので、君の爲め又國の爲に忠義を盡すといふことに外ならぬのだ、この忠義の爲とあらば、我が希望も、情愛も、妻も兒も家も、何時でも犧牲として差出すといふのが、本趣意であるから、其の忠義の心たる眞正にして又深奧のものたるや勿論である、「ミツドフォード」や、「ヂッケンス」や、「グレイ」の著書として、世上に持囃さるゝ四十七士の譚(The loyal Ronin)を讀んだ人は、大石といふ家老が、主君の讐を報せんが爲に、妻を離別し、子供を追出して、專心一圖に其企に身を任せた事と、生前一度も妻を見ずして、名高い敵打を仕遂げた後、たゞ自分の死といふことによりて、妻に對する是迄の仕打の慘酷なりし眞の原因を示し、且つ愛情の少も變らざるを知らしめた事とを記臆するであらう、而して此時妻は如何なる心で居たかといふと、夫の仕打を怨むどころか、夫が侍の本望を貫かん爲に、自分を不幸なる犧牲としたのを以て大に名譽として悅んだのであつた。

眞の侍は決して死を恐れぬ、又如何なる苦痛をも堪忍ぶ、若し其名を汚すが如きことあらば、縱ひ生永らへて居ても、其實死んだも同然と心得て居る。

▲日本古武士

之に就て思出さるゝのは、日本古武士の話で、此話

は誠に侍の一例を示したものである、或孤城が重圍の中に陷つて、秋風落日、命運旦夕に迫つた時、城中の評議は區々であつた、或は援兵の來る迄は、兎も角もして、守を支へやうと云ひ、或は敵の强弱如何を偵察して、已むことなくば、潔く城を明渡さうと論じたが、此時一人の侍は自ら進み出で、敵の陣屋に忍び入り、敵勢の偵察をして來るから、自分が偵察の結果を報告するまでは、最後の覺悟を待つが宜しいと建議して、旋て衣を換へ身を窶し、機を覗つて、首尾よく敵陣へと忍込むだ、斯くて仔細に敵情を探つて視ると、敵は思つたよりは、弱勢で、モー長くは城を圍んで居ることの能ない程困迫して居るのが分つた、其の侍は勇んで直に之を報告すべく、城中に返らんとしたが、哀れ不幸にも、敵の爲に發見されて、其場で捕虜となつた、既に捕虜となつた以上は、恐ろしい磔殺の刑に處せらるゝ筈であるが、若し或一つの條件を承諾して、旨く仕果せるに於ては、其刑を免してやるとのことであつた、其の條件といふは、城の下なる濠の側に行て、小高い處から、城中に向つて、敵の軍勢は頗る强いから、一時も早く降參するやうにと、聲を揚で勸むるのである、侍は陽に此の條件を承諾して、濠の側に行つた、向岸を見渡せば、妻と子が、如何にも嬉しさうな顔で、自分の返るのを待焦れて居る姿が目に映つた、侍は妻と子に向つて手を揮て見せたが、其時敵にも味方にも聞える程の太音聲で「敵勢は薄弱であるから、間もなく圍を解いて退くに違ゐない、今暫く辛抱して援兵の來るのを待つが好い」との趣意を城中の味方に向つて叫んだ、語の終るや終らざるに、猛り狂へる敵兵は躍り蒐つて、其侍を寸斷々々に斬殺したが、侍は其心の滿足を現はすが如くに、嬉しさうな微笑を顔に湛へつゝ死んだ、日本の歷史には、斯る不撓不屈の魂を現はした日本武士の談は、幾らもある、是等の歷史を讀む時は、自から昔時の斯巴達の勇士を偲ばざるを得ない、而して「サムライ」の女子は、何處かに斯巴達の母の面影を留めて、相ひ酷似して居る處がある。

▲忠義の道

忠義の途に二つは無いが、唯默從する許りが決して忠義では無いから、時としては、主君の命令でも、反對せねば爲らぬことがある、若し主君から命令された事が、殿の御家の爲でない場合には、其の命令を受た侍は、主君の命に背くか、或は心ならずも、其の命令通りに行ふかの二つの間に挾まれて、何れかを擇ばねばならぬのであるが、是時侍たる者は、斷然意を決して、主君の命令に背くとも、國の爲め、君の爲めに、正道であると確信する方を執るのである、併し君の命令に背いた申譯に、一伍一什を認めた書面を殘して、潔く自殺する、さうして命令に背いた罪を償ふのであるから、其の忠義の心は、更に一點の曇も無い。

▲「ハラキリ」

今は廢れて居るが、「ハラキリ」といふ習慣は、遠い古昔から傳はつて居ることとで、恥辱を脱れて、名譽を留めんが爲に、我と我身を殺すのである、古昔の勇者は、恰かも敵に刄を向くる時の如く、從容として、自ら刺通すのが常であつた、婦人も亦男子と同じく、侍の腰に差したる短劍の用ゐ方を知つて居つた、則ち此の短劍で以て、最後の手段を行ふのであつた。

武士たる者は、子供の中から、自殺の仕方を敎へられて居る、夫は取亂した見惡い死狀をしては、自殺の名譽を汚すからである、又腹を切たからとて、即時に死すべきで無い、其間に死にも苦痛にも無頓着である色を示して、泰然自若として次第に死に就くのが、勇者の本望とする覺悟といふものである。

「ハラキリ」は勿論最後の手段であるが、併し名譽の死であるのだ、普通の罪人は、他人の手で死刑に處せらるゝが、侍のみは、死すべき罪の有る場合に方つて、「ハラキリ」を命せらるゝのであるから、若し「ハラキリ」を許されずに、普通の死刑に處せられるときは、其侍は二重の恥辱を受ける譯となるのだ、今日でも、例へば國家の爲めと謂ふ誤想から、內閣の大臣を逆殺する者が有つたら、其者は必ず法廷に自訴して、逆殺の理由を陳疏し、然る後一日も速に死せんことを願

ふであらう。

▲昔時の「サムライ」

古昔の侍は、其の位置と職務と責任とを自慢にして、商賈の道を知らず、又世の中の事に頓着しないのを却つて其誇りとして、武士意外の職業をば痛く輕んじて居たから、農工の富も、彼等を誘ふて、下層の階級に導くことが能なかつた、蓋し彼等の大名から戴いて居る扶持米は、實の僅少のものではあるが、平民となつて千萬の富を有するよりは、遙かに尊敬さるべき價値を有つて居た、俸給の多少よりは、位置の高下を論ずる風は、今日迄も殘つて居るので、商賈人となつて、金儲に有付くよりは、寧ろ役人となるのが、一般の希望であるらしい、併し今日では、時勢の變化から、詮方なく、兩刀を脱して、商賈人の仲間入をして、平和の技術が、戰爭の技術に比して、何位大切である乎を學ぶべく餘儀なくされて居る。

又古昔の日本では、經驗や知識といふものは、金錢を以て賣買すべからざるものとしてあつた、醫士は藥代や診察料を請求しないのみならず、相當の謝禮を受るをすら嫌つたものだ、ソコで病人は醫士に向つて、精細な勘定をするのではなくて、御禮の印、則ち進物として、自分に應じて、何程かの金を贈るのであつた、博學の先生から、學問の教授を受くるのも之と同樣で、卑しい金錢で、學問の賣買をするなどは無禮至極と定てあつて、大名が教師を雇ふた場合でも、其の受くる俸祿は、恩賜であつて、代價ではなかつた、併し何れにしても、相當な報酬は必ず授受されたので、唯約束を必要としないのみであつた。

この思想は今日尚日本に殘つて居る、則ち契約を嫌つたり、細かな勘定を嫌がつたりするのは其爲である、日本の侍の氣風と、歐米人の商賈上の習慣とは、全で反對で、日本では正當の仕拂としてよりは、贈物として、金錢を受くるのを名譽として居るが、亞米利加では、贈物とするよりも、仕拂とするを以て、遙に優れた名譽とする。

▲新思想

然るに今日の侍は俄然新思想を以て吹込まれて、西洋的観察を以て、世界を視るに至つたが、尚其の思想も行爲も、昔の日本の舊思想を基礎として居るのである、思ふに侍の精神から、忠義といふ分子の全く消滅するのは、長い年月の後であらう、封建時代に藩主に向つて盡した忠義は、王政復古の今日では、主權者たる萬世一系の皇帝に對する忠義となつたので、大小兩刀を腰にした御家來風の羽織袴の下に包まれて居た武士の特質は、今や洋服の中に、依然として存在して居るのだ。

▲耶蘇教

耶蘇教傳道の日本に困難であるのは、日本人が忠義を以て根本主義として居るからだ、皇帝は日本の神々の代表者であらせらるゝから、外國の宗教を信奉するは、皇帝に背くものであると、謂へば謂はるゝやうなものだ、故に外國の神を尊奉するは、國家に對して相濟ぬといふ觀念からして、基督教の眞意を研究することすら拒絶するのであつた。

日本開國の當時に於ては、此の思想は苦々しい程盛んなもので、基督信者は皆謀反人扱ひをされたが、信者等は輕蔑され又惡まれながら、生命を賭してまでも基督の教を奉じて居たのである、一婦人は、其子が基督教信者となつたのを、家の恥辱として、此の恥辱を雪がんが爲に、遂に自殺したことがあつた、然るに幸にも今日では、是等のことは、昔の夢となつて、國家に對する忠義と、新宗教に對する信仰とは、互に調和し得べきもので、一方を信じても、決して一方に背くのでないといふ道理を十分に會得するに至つたらしい。

▲「サムライ」の女子

「サムライ」の家に生れた女子は、男子と同じく侍たる面目を維持するに於て、十分の責任を有つのである、士農工商何れの階級に在ても、女子の第一の務は、服從の義務であるて、若し父、夫又は子が、主君に盡す忠義の爲とならば、如何なる慘酷な仕方でもつて、自分の身は殺さるゝとも、悅び進んで潔く死するの

である、又夫も父も武士則ち軍人であるから、其妻たり女なる婦人も亦戰爭の起つた時には、城や寨を守る程の勤を盡さねばならぬので、平生から柔術や劍術を修業して置く、故に素破といふ時に、女ながらも、立派にお役に立つ、加之死に勝る程の耻辱に遇うて、夫や主君に對して、面目がないといふ場合には、何な困阨の境に在ても、平生修業した武術で以て、危難を免かるゝのであるが、若し適はぬときは、覺悟を極て死するのである。

▲若松城の婦人

數年前、予は若松城の包圍の中に在た一少女と知合となつた、當時官軍の若松に迫るや、一塞落ち、一塞陷りて、城中の男女老幼皆櫓の下に集りて、最後の防禦を盡して居た、然るに敵の打出す破裂彈は、地響きしつゝ城中に落て、男子の助けにとて、樣々働き居れる數人の婦人は之が爲に殺された、又雨霰と飛來る彈丸の間を、拔けくゞりて、彈藥を運べる乙女等も同じく殺されたのである、予が知合の少女は、其時齡僅かに八歲であつたが、尙一人前の働きを爲たとのことであるから、予は少女に向つて『貴女嘸ぞ恐いことであつたでしやう』と問ふと、少女は『否へ』と答へた、而して少女は其時腰に差したといふ小さい刀を予に見せたので、予は直に『何の爲に此刀を差して居たのです』と尋ねると『敵に捕はれた時の用心の爲です』と答へた、予は八歲の少女が、此の小さい刀を以て、敵に向つて戰ひ得べしとは信ぜざる故、復び『其刀で何うする積であつたのです』と問ふた、處が少女は『自殺をする爲であるのです』と覺悟を極めた作振で、斷然として答へた。

東京音樂院の擴張

○神田區今川小路二丁目十二番地同院にては新築校舍落成せしを以て今回規則を改正し規模を擴張し院長には文學博士三宅雄次郞氏之に當り講師は東京音樂學校教授天谷秀、岡野貞一外名手數氏にして唱歌、ヒアノ、オルガン、ヴアイオリン、受驗科、高等科の各科へ女子若干名を募集する由。

米國地震說

今度の桑港の地震は建築物が全然日本などゝは異つて居るので随て被害の程度もひどかつたのであらうと思はれるが今度の地震については我々地震學の關係者が出張する必要もあるが建築學者なども出張して石や鐵で造つた家が大地震の際如何に震動の影響を受くるかといふ事を研究するの必要があらう而して今回の地震の震源は陸上にあるか海中にあるかは分らないが海嘯のない所を以て見ると震源は陸上でロッキー山と西海岸との間に起つたものらしく而もその震動は上下動ではなく水平動で震動の時間は十秒内外であつたと思はれる又今度の地震は本年二月一日にあつたパナマやコロンビヤの地震と同じ系統を持つて居るものであらう夫から震動の區域は八十哩といふ事であるが八十哩といふのは直徑であらうか割合に範圍が狹い樣である寶永四年の地震は直徑二百哩以上で我邦の震災の如きも東京まで波動を及ぼしたのに八十哩といふは少い樣であるがこれは今日まで被害の分つて居る區域丈でその實際は廣いのであるかも知れない次に米國には從來地震について何ういふ歴史をもつて居るかといふに新しい國であるから古い事は分らないが今から四五十年前に稍大きな地震があつたその後も小さな地震は屢あつた樣である現に地震帶を同じくして居るアラスカには三十二年に三回の大地震があつて墨西哥にも屢地震があつた三十二年のアラスカの地震は海中に起つたので三十三年南米のアラカスに起つたのも海中の地震である元來大きな地震があると各所に大小の震動があるもので印度やパナマやエクワードルに起つた地震は同じ時代に起つたもので桑港の地震と同時代の地震である。

夏の美——五月の巻

▲五月幟——五月五日は男子を祝ふ日なりとかや。軒に菖蒲を葺きて、幟、鯉も風に靡き、粽、柏餅のとりぐ、昔より今にかはる事なし。徂徠に禁房の説と云ふものありて、この月に胚れる男の子は、災あるべしと傳へ、ときは今天が下知るさつき哉と詠せし光秀も、やがては小栗栖の露と消えにし、吾國に此例多し。されば床に鐘馗を飾りて、惡魔を追ふの具となしたるや、兎ても角ても勇ましきはこの節句にして、菖蒲打ちの魂は護國の鏡ともなり、朝日に匂ふ山櫻の、譽れを外國に示すべし。箙も太刀も五月に飾れ紙幟、一つには昔を偲ぶの料ともならん。

▲更衣——去年よりの布子脱ぎすてゝ、鬚も剃立の初袷、女に日傘のまだ早ければ、庇髪のリボンも目立ちて、素足に駒下駄も美し、若葉にはしつけ糸の袖に殘り、青葉には襟垢や目立たん、年問へば片手出す子や更衣、一茶もこれを可愛しとや見し、心も輕ければ孫の木登りも見赦さるゝとぞ。

▲沓手鳥——は文字多き鳥の一なるべし、杜鵑と書き、郭公と書き、時鳥ともしるして、深山には晝も啼けれど、都に其の俤を見する事稀なり。一聲は月が啼くやの疑ひも、其姿をとゞめねば、いづくの空に血をや吐くらん。不如歸とはそも誰を慕ふの名か、汝に一夜を待明しぬる千代女の恨み、永劫に盡きせぬ句とはなりたり。

▲水鷄——小雨に蓑を着るとも見えず、花に化粧するとも見えで、朧ろ月夜を葦の芽の杖に別けて、隱者の門を叩くにこそ。欺かれぬる待宵の卵子酒も、冷めては流し元の煩ひならん。かまへて繁くな叩きそ、稀に一つの訪れこそ汝の命と知れかし。

▲蚤——花も青葉となる頃には、壁の目よりのさり出でゝ、母衣蚊帳の中を靜かに、眠れる兒をせゝり起さるは新らしき妻に澁面の無作法、色は小豆に假り、身は芥子粒に擬ひながら、人に辨慶の強きも泣なせ、爪と爪との間に淺猿しき最後を遂げながら、鼠算の殖

ゆるに易ければ、夏を我物顔の擧動、憎みても餘りあり、天井裏の蠅、藪陰の蚊とともに、懊惱きもの丶一つなりけり。

▲蛙――其さまの歌詠むにも似たらんか、昔より風雅のもの丶一ッとなりて、文には古今集の序に名高く、句には翁に引かれぬ、初蛙の一つ二つ田の面に啼きかはして雨を呼ぶは、有繫にすて難き風情あるも、やがて其數の多くなりて、喧ましきまでに啼きしきるは、稍懊惱くも思はるれ、さるにても經讀鳥と列べ唄はるるは、蓮の葉に浮く過褒とや云はまし、蟇の面構へにも何處やらにやさし味あれば、枝蛙の獨り淋しく住むも、また興あるもの丶一つとすべし。

▲牡丹――は花の王と呼ばれて、方百里雨雲をよせぬとかや、まことに其花の姿艶たけて、紅に濃く、白に淡く、雨にも入日の影を見せて、月に芙蓉の俤を存す。灯して客ある庭の眺めとなりては、心なき風もこ丶には吹かで土にゆかしき香も染むべし。

▲青簾――鉢に植捨ての夏草下萠の色深く、濡椽の石蕾に新らしき芽を吹く頃や、涼しの色を表てに見せて中は小琴の主を覗かせ、浮世小路の窓低ければ、辻占賣の裾も透けて、縺れし糸に猫の狂ふもうとましけれど、清女は雪にこれを卷いて、末代に賢き名をぞ流しける。

▲金魚――三坪の土間に泉水をものして、放ちある金魚の、近所の惡太郎が叉手にか丶りては五厘一錢の慰みとなりて、やがて手水鉢に二日三日の眺めとなり、果ては尾を挘られ、鰭を取られて、小さき土饅頭に、べん〳〵草を手向けの主となる事、なんぼう憐れなる身の果ならずや。

▲杜若――水を拔く三尺ばかり、懸け渡す八ツ橋の桁を避けて、紫に、白に、絞りに、朝露の色いと深く、根に寄る水も染まれとぞ、優きもの丶一つなり。（[illegible]）

青柳　　前橋　童木せい

星影のありやなしやの宵やみにひともと柳すごくもある哉

春野　　埼玉　三上靜子

のへゆかはいつれをつみてかへらまし見わたすかきりもゆる若草

日本人の始めて見たるパノラマ

西洋にパノラマと稱する一種の展畫あり。まづ日本のノゾキ又はカラクリの如きものにて其の大體は廣き場中を圓く仕切り、其の圓きなりに何處を繼ぎ目と分らぬ樣に大なる續き畫を以て建て廻はしあり、見物人は其の中央にありて、これを巡覽することとなり、其の見物人の巡覽する場所と畫との間は勾欄を以て畫と平行線に仕切りあり、早く言はゞ蛇の目を描きたるがごとし、中央の廣きところは見物人の立つ場處にて黑斑の外邊は即ち畫の建て廻はしある所なり　而して其の黑斑の輪は見物人と繪を隔てたる空間なり、此のパノラマの畫は或は山水或は都、等樣々なれども大抵自國勝利の戰爭を描きたるが多きに居れり即ち伯林にて名高きはセダンの戰爭圖のパノラマなるの類なり、此のパノラマに就て眼を驚かすは其の描き方の如何にも眞に迫り、譬へば一つの叢を畫きあるに半分は畫にて其の半分は畫とつゞけて眞物の草を植てあるなれども何處までの眞物にして何處までが畫なるや見界つかぬ、又兵卒の打捨たる破れ帽子、空砲等畫中にもあれば其前に眞物も散亂させおれども、是又見擬ふばかりなり、畫の高さは其大小により、不同なれども通例まづ三四間內外はあるべし、而して中央の見物人の場所は凡そ一間ばかりも畫の端より高く築き上げあり其間はなだらになり居りて道なり、草叢なり其他土石化木、一切の景色すべて前面の畫とつゞけて眞物を以て拵へあり、即ちこれによりて見物人の眼を迷はせていづれが畫、いづれが眞物なるかを思ひ惑はさしむるの趣向なり、流石は何物にも理學の入込み居る世界だけに顏料の使ひ方さい、斯く進みて、咫尺の裡に居りながら。畫と眞物とを見まがふほどにあらしむるは感心なり、畫の具の次に人の眼を迷はす原案は其の遠近の釣合如何にも巧みなることなり、例令へば前面は一望の青海原にて山影模糊として大船巨船は寸にも滿たぬばかりに見ゆる遠景なる處ろへ、最近の濱邊に一竿の蒋木無遠慮に高く太く畫きありて其枝々の葉は歴々數ふべきほどに分明なり、此釣合に居りて前面の遠景は千里遙なきがごとくに思はるゝ類なり。又第三に人の眼を迷はす元は其の光線の取り方の甚だ巧みなる事なり見物人の頭の上は一面青幕の天井を以て覆ひあり　此の青幕は畫の際より幾尺か手前にて切れ居り、此間より光線を容るゝ趣向なり、而して其の天井の端は又畫の頂よりも幾か下ざげありて見物人の眼には畫は何處にて絕たるやを知らざらしむ。斯く前面を望めば望むほど明るき事はいよ／＼明るくして且つ涯しなきまでに見ゆるが故、見物人は自然眞景を見る心地する譯なり、何となれば若し此の天井にして何か別段の形ちあり、別段の色あるものならしめ、又是れと畫との界判然と分明になり居らしめば其比較にて忽ち其畫全體の畫たる事暴露すべければなり。



人世觀

結婚の三大準備

元祿女史

擬ひ八丈か何かの御被布召して、踵の狭いお靴で、袴の裙も器用に捌いて御歩行きなさる、女學生と仰つしやる方々、扨ては、彼れ買つてと御意遊ばして、一圓紙幣投り出して、南蠻酸漿賣りの老爺の度膽をお抜き遊ばされたと云ふ、云はゞ、浮世の憂いも辛いも、磨り硝子の中から御覽遊ばす様な姫様、拗ね出したら其日暮しの貧乏人の娘だつて、一月のお米の代程もする、大事の簪を滅茶〳〵に拵つて、涙は絹手帕で拭ふに極つて居るものと、思つて居らつしやる様な、嬢様でも、色の配合の形の釣り合ひのと苦勞遊ばしては人知れぬ間の眉のつくろひ、貴女の水に御化粧の旨く乘らぬを、苦に病み玉ふは、然も何の爲でありませうか梅が谷宜しくつて柄の、朝から晩まで眞つ黑けになつてお土竈の側に蹲踞んで居るお三どん迄、日がな一日流の隅の水溜りにも、自分の姿を寫して眺めるのは、少しでも美しう見られて、些つとは氣の利いた閉ぢ蓋を得やうと云ふ、婆らしい考へからではありますまいか、正眞正銘御若い婦人に、何故そう鏡にばかり向つて、御容子に御氣を使ひ遊ばすと伺つたら、顔赤らめずに濟まして御答への出來る方が幾人ありませうか何も私は夫を野暮らしう伺つて、怎うしやうと申すのではありませぬけれど、お互に女は一度は通らねばな

らぬ筈の道、誰しも、同じ御嫁に參りまする位ならば先づ人に敬はれる程の身分で御金が澤山あつて、良人の氣質が優しうて、自分を可愛がつて呉れて、其上に學問もあつて美しうて、舅姑の世話もなく鬼千疋の厄介もない樣な處をと、望むで御座いませう、けれど貰つて下さらふと云ふ殿方の方は什麼でせう、容色さへ宜かつたら、女でさへあれば、兒さへ產んで呉れゝば、仕事は出來なくとも、物は識らなくとも、馬鹿でも不謹愼でも何でも構はぬと仰つしやる樣な其麼方がありませうか、其れは女と云ふ者は氏なうして玉の輿等と申しまして、氣の弱い優しい謙遜深い大臣や知事樣に掛かりましては、隨分と秋波の致し樣一つで、奥樣にでも令夫人にでも何にでもなれると自惚れた一種の哲學觀を持つて居らつしやる、或る一部の社會もありませうけれど、自體男子方は女よりは自負心の強くて入らつしやるものですから、――其れも御無理のない事で、設令、今は下宿屋の四疊半に穢くるしい汚ない風をして、燻ぶつて居らしても、御器量次第に依つては、如何程にも、御豪い方にお成り遊ばす事が出來るので御座いますもの、其時になつて、なんぼ糟糠の妻だからとて、餘りお粗末では、相互に氣の引ける譯で御座いませう、私等に致した處、春は昔の未だお島田に、紅入り友禪の幅廣の帶を胸高に結んで居りました頃は、隨分大きい事も考へて、高慢ちきにも、良人に對して、不足がましう考へぬでもありませんでしたけれど、斯う定まる緣と定つて仕舞つて、次ぎ〳〵の兒供の始末に追はれる樣になりましては、今更に思ひ通りに行けなかつた不平も何も思ひ出せません、けれど、其れでも、良人等は、時折無けなしの鬚を撫でゝ將豈に御前の樣な御多福を貰はうとは思はなかつたよ等と、若い事を申しては翻して居るので御座います。

ですから、需用――供給、少し語弊があるかも知れませぬが、――と云ふ點から申しましても、貰つて戴かうと云ふ男子方――一生面倒を見て貰つて仲能くして行かうと云ふ良人――に對して、婦人は女相當の脩養が必要らふかと思ふので御座います、未だ、乳齒も

碌に揃はぬお河童の美いちやんが、人形に向つて母親の愛情の兒に對する有樣を眞似び、苟そめの飯事にも家事の複雜な經驗を豫修して居るのは、女は先天的にして、這の間の天理を、天然自然に會得して、無邪氣い小さい兒童の頭にも、母たるべき妻たるべき準備をして居るのではありますまいか、併し其の可愛らしかつた美いちやんの後身が、小學校から漸次と高等女學校迄進む樣になつてから、果然、男子の玩弄物となるのは婦人の恥辱、人權を明かにする爲には怎うしても獨身で等と、美代子女史眼鏡の下から、世を疾視遊ばす樣になつては迚も私共の考へ及ばぬ處で、其れが果して、心から本氣で仰つしやるのか、其れさへ了りません、獨身と云ふ事は善いか惡いか、其麽事今改めて此處で云ふ價値のない事で寢て起きて働いて喰うて、兒供を產んで育てゝ、而して老衰して死ぬと云ふ、至つて單調な人生にも、獨身等と其れで立てゝ行けさへすれば、一寸目先が替つて



却て趣味があらふと云ふ譯、唯此處では、手つ取り早く、極めて露骨に、女子結婚の準備と云つた樣な、つまらぬ自分の經驗談やら何やら、申上げて、之から御結婚遊ばさうと云ふ方には勿論、已に御結婚遊ばされた御若い方々にも、差し出がましう御相談に及ばうかと存じますので御座います。

　其れで先づ

準備　と申した處で、茶の湯、生け花も宜しう御座いませう、手蹟拙なからで、走り書き美しう、糸竹の道に暗からぬも可いでせう、繪心の無い方は兎角室内の裝飾から、身の周圍迄、俗に流れる者だとあるから、少しは繪畫をお習ひなさるもよからふ、一家の主婦としては裁縫も必要ですし料理法も心得ねばなりません何日ぞや女學世界所載の良人に嫌はれぬ十ケ條とやらを覺えてお置になつても惡くはありますまい、甚麽にしても、良人の留守に端書の用の足りる程な教育もなければなりません、斯う數へて參りますと、却々に澤山あります樣で御座いますけれど、私は皆樣に結婚の準備として切にお勸め致したいのは、其麽枝葉の末技……と申せば、些と穩當ではないかも知れませぬが、君子は多能あるを恥とするとか申しますから、何もかも御承知の筈の皆樣の、彼れも此れもと、色々御注文するのは、實際なし得ないので、此處で御相談致さうと云ふのは、今少し

一――常識を脩養

して戴きたいと申す事と、

二――老人を親切に勞はる度量と同情

とがありたいと申すのと、

三――女子相當な職業

を見付けて相當な收入を作る必要があると云ふ、此の三つなので御座います。

　女學校出の奧樣は、兎角氣が利かないと云ふ評を受けるのは、此の常識に缺けて居る事を意味するのではありますまいか。

常識　と申す事は、英米の言葉では、コンモンセンスとか申しまして、科學やなぞより割り出した、學理的

の高尚な知識ではなく、云はゞ普通の極めて卑近な場合に於ても必要な智識ださうで御座います、ですから時としては此の常識は哲學よりも他の科學よりも有力で之が勝を制する事が間々ある相で御座います。

世には天才？とか申す一種の人間が御座いまして、極く何でも中庸を嫌つて極端に走り、道德は、人を束縛する本能の敵だと云つて之を惡み、常識は趣味なき平凡の人を作る鑄形だと云つて之を輕んずる手合ひは無いでもありません、が、醫學上から見ますと、之等の人たちは總ての機能が、不權衡に發達した病的分子を含んだ處の一種の狂人だ相で、箇人から見ましたら別問題として、人類――小さく申して、健康なる一國民としては餘り尊重すべき價値の人では無い相で御座います、併し先にも申した通り至極單調な人生の舞臺には斯う云ふ華役者も大に必要なので、況んや世の中が這麼に進んで參りまして、文明と云ふ假面に恐ろしい闇黑界が包まれる樣になりましては、天才の力を待たねばならぬ事が多々あらふと存じます、話が縱橫道へ外れましたが普通の人たちが無暗と天才がつて、常識を無視するのは、許す可からざる事で、誠に厄介な仕末に終へぬ代物だと存じます、偏目の人を前に於て頻りと眼の話しを致したり、御飯時に人の家を訪問したり、冬のお寒い時に水菓子を出したり、御汁粉の後へ餅菓子を勸めたりするのは常識のある方の遊ばす事とは決して申されまいかと思ひます、先日私、外へ參りまして、奥樣は名にし負ふ女學校出の若い氣輕な美しい御方、終斯うお饒舌の處へ以つて來て、御話しが持てるものですから、尻が長くなりまして、御晝飯の御馳走になつた迄は宜しう御座いましたけれど、餘り令閨の御世事がよいので、次ぎ〳〵延つ引つ切りなくに御話し下さいまして、御飯中誠に御世事に困つたと云ふ樣な譯、熱つい御汁に吃驚してもぢ〳〵して居る途端、御小さいのが御幾つで？と御聞きなさるから、默つても居られず口の中のお汁の始末に持て扱つて、目を白黑さして、ハッハイと、からもう體裁の惡い御挨拶の仕方、自分ながら誠にお恥かしい事に思ひまし

た、其れは學校出の何でも心得て居らつしやるのですから、迚も〳〵私共の及びも着かない程、總てが何かと御見事な者で居らつじやいましたけれど、常識に餘り富んで居らつしやらない處から可惜大事な奥様をだいなしにして仕舞ひました、で此の常識と申す事は前にも申上げた通り、學理上の知識とか判斷とか申すものではありませんから、學校で一々敎はる譯のものでは御座いません、之は各自種々の人と交際もし、能く社會の情態も考へ、日常起るべき些細の出來事にも其の依つて來る動機と原因とを研究し、之に向つて適當な判斷を誤まらぬ様にするのが、一番の捷徑かと存じます。

次に申上げ度きは老人に對する、親切と度量とが今少しありたいと御若い皆様に願ふので御座います、

誠に只今は奥様全盛時代で、旦那様も三舍を避けて入らつしやると云ふ位で御座いますから、何の老いては子に從へだ、天保時代の老耄れが若い者が何を爲様としつ込んで默つて見てるが善い等と、其れは敎育のある方々でしたら却々以て口では甚麼事仰つしやりもしまいけれど、斯う見渡した處、舅様や姑様も餘りお優しいお嫁様の少ないのは、御身分ある奥様方として甚だ殘念に思ふので御座います、終には誰れが擔ぎ廻りましたか、襁褓の世話から暑い寒いの厄介まで心配させた、昔を忘れて、親子別居論等と、夫れでは餘まりお若い方々の御勝手に過ぎはしまいかと存じます

ハイカラとやら二十世紀式とやら歐米の事は能く存じませんけれど、三千年來誠に美しう圓滿に治まつて行つた家庭が、敎育のある倫理も心理も御存じの筈の皆様の主婦の時代に至つて、這麼論の設令一部の人にでも歡迎されるのは、お互に御老人な昔の御嫁様に對して恥かしい事では御座いますまいか、老人と申す者は老は先の短かいもので、生きて居た處で高が五年か十年、若い者と違つて先の希望あると云ふではなし、未の樂しみあるを申すではなし、云はゞふうつと煙の様に暮して居るのですから、隨分皆様の御手腕の如何に

よつては猜疑も出ませう、執抑も致しませう、けれど其處を能く考へて勞はつて御覧なさい、年を老つて心細がつて居ります丈に、僅の深切にも感じが早くて直に涙を翻して手前共の嫁が〳〵と嬉しがります、況んや前社會の經營者として、子孫の爲に大に働いて功を若い私共に讓つて呉れた大恩人ですもの、單に人間の情誼としても老人は大に尊敬して親切に勞はらなければならぬ義務は私共に充分有らふかと思ひます、而も況んや自分を育てゝ呉れた親、良人を可愛がつて呉れる舅姑ではありませんか、だから私は皆樣に斯う云ふ事を斷言致します、幾ら良人に對して優しい妻でも舅姑には善良お嫁樣と申す事の出來ない場合がありませうけれど、親に優しい深切な嫁は、必ず良人に對しては良妻であり必ず兒に對しては賢母であり得ると申します



私は何日でしたか用がありまして、數寄屋橋から外堀線の電車に乘る事がありました、常盤橋とか云ふ處で、六十ばかりの御老婆さんを先にどや〳〵と二三人の客がありました、一番後に這入りましたのは粹な町家の娘さん風で年頃は十七八未だ二十にはならぬでせう、赤糸入りのくすんだ銘仙か何かの羽織に、黑襦子の半襟の懸つた華美な二子の袷細面の淋しい顔形でしたけれど色白の何處となく品の善い温和しやかな、他人ながら其れは惚れ〳〵する位で御座いました、小雨のしと〳〵と降る黃昏で、御茶の水橋を過ぎましてからザラツト風に散る花吹雪、斜

雨に濡れて窓硝子にひつたり、華美な電燈に映えて、何とも云へぬ艶な四月の肌末だ薄ら寒い晩でした、神樂坂で急いで下車り樣としますと、貴女お危う御座んすよと細い冱えた聲、必定自分が注意されたのだと思つて後を振り向くと、然うではなくて、先の若い美しい娘さんが、婆阿さんを親切に勞つて居るので御座いました、下車りてから、老婆さんは其娘さんに改代町の道はと聞きますと、娘さんは一寸當惑したらしう御座いましたが、彼の貴女、御老人が夜夜中此の雨でまごく〳〵して居らしては、眞個に皆濡れてお仕舞なさるわ、何宜御座いますわ、私、貴女の分る處迄一處に行つて敎へて上げませう……坂を上つて行手一二丁、丁寧に道案内して、さつさと大急ぎで走る樣にして横町の暗に消えたのを見た事がありました。

　這麼女は人の妻としても人の母としても、必つと成功する人に相違ないと私は私で確く信じて、何かなく優しい女優しい奧樣の話でも出ると、春雨の夜を辭かに老婆さんを勞はりながら、勝色木綿の小袴掲げて素足にからむ淡紅色の腰卷美しう、蛇の目の傘を斜に指して坂を登つて行つた娘さんが未だに目に見える樣に思ひ出されるので御座います、而して私は此の娘さんを思ひ出す度に、這麼方が御嫁になつたなら、新舊思想の衝突等と勝手な事を申して、時鳥や想夫戀で、若い婦人の同情を得て泣かせるには當るまいかと存じます、私は此の種の小說を讀む度に、今の御若い方は餘り御我儘過ぎはしまいか、作者の社會觀が不公平で偏頗に失しては居まいか、而して私は世の中は優しい御嫁樣二人に親切な御姑樣三人ある割合になつては居まいかと思ふので御座います、斯う世の中が開けて參りまして、個人主義とか云ふ樣な事を申す樣になりましては實際お互に這麼事は云ふべくして行はれ悪うなつて仕舞ひましたけれど、前にも申した通り老人を勞はる丈の度量と親切とがなければ、迚も良妻賢母とはなり得ぬかと存じますので、皆樣の御反省迄に結婚の準備の一として色氣もなく此處に數へた譯なので御座います、併ながら單に老人のみと申しませぬ舅姑の

みと申しませぬ、女は何處迄も女らしく優しくて、親切で、同情深くて女らしい溫かみがあつて欲しいと申す事も序に御願ひして置きます。

夫から今一つは、

職業と云ふ事なので御座います、一口に職業と申しても種々御座いませうが、女は女相當な職業を選擇して、之を御嫁入りの第一の道具として戴きたいと申すのであります、何も相當な職業を見付けたら人の妻に等ならなくともと直に仰つしやる方もありませうけれど、女は喰ふ爲や榮耀をする爲に嫁すものだと定まつて居りましたら決して何も申上げる必要がないけれど、私は人の妻になればなる程、以後ならふと遊ばす人には猶の事必要だらふと考へるのです、世の中が進んで行きますに連れて生存競爭とかが烈しくなつて、武士は喰はねど高楊子等と申して居らした方々から始め、軍人は何時死ぬか分らぬからとあつて、第一に金の有難味を知る樣になりましては、世は滔々として金の前には誠に意氣地なくなつて參りましたので御座います、外交史一頁讀んだ事はありませんでも、金さへあれば貴族院議員にでも代議士にでもなれると云ふ有り難い御時世ですけれど、さあ、金がないとなると什麼でせう、高等官の試験に登第した方が巡査を志願したり、髭面抱へていゝ年遊ばした法學士樣が、何處やらの帳付能く申上げた處で高が書記、三十にして未だ家を成す事の出來ぬ私立大學校出の、所謂



未來の大政事家、大文學者が下宿屋の隅に燻る程呉羅〱遊ばして、可惜藝術の天才が大晦日の酷工面に風呂敷包み抱へて、七ッ屋銀行へ御走り遊ばさると云ふ爲體で御座いますもの、金の前には、王侯もなく正義もなく、宗教もなく愛もなく戀もなくよし、あつたにした處、金に伴はぬ事は總て成功は六つ箇敷いとなる剩之に地獄の沙汰も金次第とあるから、近頃火の手の大變に騷がしい鐵道國有案とか云ふ國家の公論迄、議員が金の爲に買收されたと云ふ噂のあるのも無理のない話、だから、筒井筒振り分け髮の昔からの許嫁を拾てゝ、持參金附きの奥樣を御貰ひになると云ふお利口な何々博士もあれば、金の犠牲となつて大切な女の情操を賣る從順な何々華族の姫樣もあらふと云ふ世の中口では甚麽立派な旨い事を仰つしやつても、金と一口に申したら四千萬、誠に正義も人道もそつち除けに、哀れな樣にならふかと存じます、金錢萬能！　二十世紀の文明は金で怎うにもなる、――と斯う申すので御座いますから、不幸にして持參金を澤山持つて行つて良人を顋の先で御する事の出來ない家に生れたら、適當な職業を以て收入を作る――之が御嫁入りの準備としての一番時世に適つた善い方法だらふと存じます、誰やらが斯う申しました、女子高等師範の卒業生に羽が附いて居ますつて、如何で御座いませうか、世の中が否只今の青年は這の樣に利益と云ふ事に眼が敏くなつたので御座いますよ、紙治の小春や繪葉書の美人に隨喜の涙を流して居た連中迄、いざとなると白粉の香氣よりも山吹色の物云はぬ花に、花も實もあり德用向きと恐悦がられる樣になりましたものですから取り殘されたら最後、痩せ我慢にも、口惜しい思ひで獨身主義を振り廻さなければなりません、輕薄な男子に一生は寄らぬと、憤發となつて仰つしやつても、貰ひ人が無いからだと一口に云はれて仕舞ふのは、強ち私の惡口ばかりではあるまいと存じます。

斯う世の中が、金と云ふ事を標準として結婚迄致す樣になつて參りますのが、果して喜ぶ可き現象であるか怎うだか、其麽事は私から申上げる限りではないの

で、這麼世の中に處して幸福を得る——單に私は此處では幸福と申します、汨羅の水の涸れぬ中は、餘程の人でなければ這麼時代に眞面目な事を考へて居つたら憤死して仕舞はなければなりません、而して人間最終の目的が現世の幸福にあるか、夫も此處で申し上げる必要はありませぬ、けれど、畢竟、人間の本能に隨つて、比較的人道にも外れず、可成的愉快な日を送ると云ふ事は各自の一割德かと存じますので、私は此の方面に向つて幸福な生涯を送る準備としても、所謂賣れ殘りにもならず好配偶を得る準備としても、良人を助けて大に社會に發展する準備としても、相當な職業を求むべき必要があらふかと存じます。

と、數へて申しました處、之丈滿足に出來たら、人の母として人の妻としての結婚の準備が充分に出來たかと申しますと、私は之で滿足で御座いますとは申し上げ得ないので、未だ未だ此の外にも澤山あらふかと思ひますけれど、黃金は誠に美しうて優れて居る金で御座いますが、鐵の益多きに如きませんと存じます。

女は陽性なり

靑柳有美

西洋の詩人のみならず、日本でも少しバタ臭ひ連中は、よく口癖のやうに、女は人生の花であるなぞと申しますが、一體、花といふものは、何時開くかといへば、大抵は陽春の候にて、百花爛熳なぞいふ言葉は、陽氣な春の時にでなければ、殆んど通用しかねるものですよ。

若し果して、女が人生の花でありとすれば、又その陽のものたることは、これによりても頗る明になるではありませんか。

兎角、女は陽のものです。即ち女は陽性で、男は却てこれと反對の陰のもの、即ち陰性です。

かく、女は生れながらにして、陽性のものでありとすれば、その居常も無論陽氣なものであるべき筈です然るに、日本では昔から女を陰のものと言ひ傳へて來た爲めか、兎角、日本の女といふ奴は、陰氣で困る。

これが、態々『女は陽性なり』といふ此の一文を草せんければならなくなつた所因で、日本の女といふものは衣服や髪飾だけにこそ陽氣なところもあれ、一體萬事陰氣この上無しですサ。ところで、男といふ奴は、元來生れつひて陰のものなのですのに、一日中業務に齷齪し、議爭もし喧嘩もして、家に歸る頃になると、殊に陰氣になり、皆な『菅原傳授手習鑑』寺小屋の段にある源藏のやうに沈み込んで、頭を七分三分に傾けながら敷居を跨ぐことですから、そこは女が陽を以て此の陰を迎へ、七分三分に口を輕く開ひてオホヽヽと景氣をつけてくれゝば、男の氣も眞に愉快になつて、終日の苦勞も忘れてしまふことになりますが、ドウも日本の女は、そう調子が能くゆかず、稍々ともすれば、飴細工のお多福のやうにフクレだし、陰に〳〵といふ傾になるので……これは男の不幸は申すまでもなく家庭の不幸又國家の不幸ですサ。男の陰を迎ふるに女の陰を以てせられては、茲に陰と陰との衝突が起り、反撥となり破裂となり離反となり、丁度、雪達磨に冷水をブッかけられたやうなもので、元來陰の性である男子は益々冷たくなり、益々固くなり、益々陰に流れることになりますよ。ですから、女は何時も、陽氣で快活であつて貰はなければ困る次第です。

一體全體、女といふものは、男を離れ獨立しては、全く存在の意味が無いもので、男あつての女なんですから、男が既に性來陰なものとすれば、女は是非陽になり、男が雪達磨のやうに冷いものならば、自らは湯のやうになつて之を温めてやらねばならぬ義理合になるわけぢやアありませんか。それに、日本の女のやうに、既に冷い雪達磨の如くになつてる男に、更に冷水をかけるとは、何事ですか。世には陰氣ブル女ほど、殘酷なやつはありません、全く男を殺します。女は陽氣であるべき筈です。又、陽氣になれる素質がありますサ。

就ては、女といふものに、滑稽趣味を發達さして貰ひたいのです。元來、滑稽趣味とは、矛盾葛藤（詳く言へば衝突）の間に、調和を發見する趣味をいふので

すから、女に滑稽趣味が豊であれば、自然に氣がノンビリし、如何なる事情に接しても、之に調和して快味を感じ、普通ならば二本は愚か黒髪の數だけの角を出して腹をたてる位のところを、また之も面白いサと、笑つて濟ませるやうになり、人品が頗る陽氣になつて來ます、然るに日本の今の女には、この滑稽趣味といふものが乏しいから、誠に困るので、爲にクダランことで、夫婦喧嘩なぞをおつ始め、自分も陰氣になり男をも又愈々陰氣にさせます。

之を要するに、女は天性陽のものですから、力めて生涯を陽氣に送り、地球上に其身の持つてる陽氣を分配し、世間を陽氣にし、家内を陽氣にするのが、實にその天職です。

（了）

五月料理

▲鰆のつけ燒　鰆の切身にちよつと鹽をふり、暫くして洗ひおとし、醤油に一時間位つけ、これに二本ほど金串をうち、あまり强からぬ火にて燒き、再び醤油をつけて燒きて皿に取るなり、附合には莢豌の青煮などよろし。

▲筍の白和え　筍の根をきり皮をむきて適宜の大さに切り水からゆでゝ、箸のとほるまで柔らかになりたる頃引あげ暫らく水に冷し置き、小口より五分ほどに切り、筍と一緒にだしに醤油少し、砂糖少し加へたるものにて下煮をなし、別に生獨活をそのまゝ鍋に入れ、火にかけ水を少し入れ一寸煮立せて布巾に取りて絞り、これに豆腐二ツに白味噌を茶呑茶碗に輕く一杯いれてよくすり、醤油と砂糖を少し加へて前の二品をあえるなり。

▲蠶豆の甘煮　まづそら豆の皮をむきて洗ひざるにひろげ、鹽を少しふりかけ、暫らくして水にて鹽を洗ひながし、沸騰にいれてザツとゆで笊にあげて水を切り、鍋に水と砂糖をいれ煮立たせ、其中そら豆をいれ鍋より一寸とまはり小さき蓋をして汁の半分につまるまで煮、醤油をさして又一寸煮るなり。

▲豆豌飯　豌豆をゆでゝだしと醤油と味淋にて下煮をなし、常の飯にこの煮汁をまぜて炊き出來上りし處にて前のゑんどうをまぜもみ海苔、赤生姜のみぢんなどをふりかけて出す。

▲鯛の味噌つけ　まづ味噌をすり、其分量はみそ五十目に醤油一合の味りん五勺の割合にいれ、どろどろにすりまぜ、器にうすく敷のばしその上に淸潔なる美濃紙をしき美濃紙の上に鯛の切身をならべ、切身の上に又紙を敷ひ紙の上に又前の味噌をしき五六時間置きてから强からぬ火にて燒くなり附合せるは蓀のあちやらなどよろし、これはゆでたる蓀を冷水にひやし引あげて後鹽と砂糖をまぜたる酢に浸したるもの也。

亞米利加婦人の半面

大下汀鷺

▽眼で見た亞米利加婦人は豫想外に立派なものでした耳に聽た亞米利加婦人は情ない程厭なものでした。

▽華美と突飛と生意氣とを集めて出來上つたやうに思はれて居ります亞米利加の婦人は、其實質素で沈着で謙遜な人が多いやうに見えました。

▽勿論製造場に通ふ工女、商家の賣子と申類のものは、平生でもめかし立てゝ朝夕の往復には良家の令嬢と見紛ふやうな樣子を致してゐるのもあり、又宿屋の女中などて金色まばゆき時計を麗々と胸へ懸けて濟ましてゐるのもあります。

▽併し、概して私の思つてゐたよりも質素で、假令ば學生の如きは、鼠か黑の服に濃い藍色の外套、飾りのないボンネットと申いでたちで、吾國の女學生のやうにお洒落のは一人も見かけません。

▽序でゝすから申ますが、一體近頃の女學生方の服裝は黃八丈若くはそれに類した色の羽織に海老茶袴といふのがお極りでありますが、是は色の配合の上から申ても稍淫靡的な調和で沈着の態がなく、決して高尚なとり合せではありません。

▽それに亞米利加の女學生には、ボア擬ひの仰山な襟卷をしたり、ピカ〳〵光る性の知れぬ硝子珠をつけた手袋など穿めてゐるものは殆どありません、但例の工場通ひは別です。

▽總じて人の目を惹くやうな衣服を用ゐる場合は、宴會とか觀劇とかの交際用で、普通の外出には決して飾り立は致しません、家に在る時は一層質素にしてゐます。

▽中等社會でも衣類は禮服一通り、外出着、平生着と大概二三組で、流行に從つて古いものは田舍廻りに賣て仕舞ふといふ風で、吾國の御婦人方のやうに、手も通さない着物を澤山仕舞つて置て喜んでゐると申やうな事はありません。

▽尤も上流社會は別問題です。一體上流社會は日本でも支那でも歐米でも何れも贅澤なものですから、物の比較は中流下流で見ねばなりますまい。

▽私共居りました頃の亞米利加婦人の髪の形は所謂庇髪でありましたが、少し潰れ氣味の前へ突出た形は多く小料理やの給仕女が結んで居りました。日本で申せばお茶屋の婦さんと申位ゐの間に流行したものです。併し只今はどんな風か存じません。

▽髪飾りの櫛やピンには高價なものがありますが、亞米利加婦人は公會の席でも食事中でもポンチットを冠つて居りますからあまり髪道具に金をかけぬ樣です。

▽その代りポンチットには烈しい流行があり、又隨分高金を惜まぬやうです。帽子止のピンにも贅澤な品があります。近頃は日本の烟草入の緒〆の玉を應用したのもありました。

▽婦人服には日本の衣服から變化して來ました袖口の廣いものが流行してゐまして、其名をキモノとよんで居ります。

▽可笑しいのは鬚の生えてゐる婦人のあることで、まさか男子のやうに黑々と濃いのはありませんが、稍遠くから目につく位ゐのは往々見かけます。顔へ剃刀をあてぬ習慣ですから、産毛がそのやうに濃くなるのでありませう。

▽買物にゆく時は立派な婦人でも革鞄や行李を携えて參ります。可なり大きな紙包を抱へて歩行く娘なとをよく見かけますが、日本の御婦人方の一寸嵩のある風呂敷包などを荷厄介にして直ぐ車の御世話になるのとは大ぶ元氣が違ふやうです。

▽婦人連の市中で物を食べながら歩行くのをよく見ますが、無論上等の人達ではありません。寺の階段や公園のベンチで、通行人の見るのも構はず晝食してゐる連中がありますが、それ等は田舍ものでも乞食でもないのです。

▽私がある時知り合の彫刻家の處へ參りましたら生憎主人公は不在で、美しい夫人が應接されました、さて彫刻室へ通つたら卓上に林檎があつて、夫人は私にそ

れを勧められましたが、小刀がないので躊躇してゐたら、夫人は其一つをとつて皮ごと丸嚙りをされたには一驚しました。

▽聞いた亞米利加婦人は中々恐ろしいもので、女性の結果女と爭つて訴訟すれば乾度男が負けると極まつてゐるため（女を負かすと裁判官が不人望になりますとか）隨分惡計を企てる妻君も多く、良人の僅かの過失を捕えて訴訟を起し別居の請求をします、それで良人が負ければ全收入の三分の一だけ手當を與えねばなりません、其手當を貰つて自分の仕度放題な贅澤をして、勝手に出來る丈けの不品行を働いてゐる婦人もありまして、此手にかゝつて苦しんでゐる富豪も尠少ではないとのとです。

▽財產目あてに結婚すると申ことは、日本でも近頃この風が盛んになつて來ましたが、亞米利加は殊に甚しく、金さへあれば日頃賤しんでゐます支那人の處へでも嫁にゆきます。

▽相手がなければ獨立してゆかねばなりません、夫故若い娘達は男と同樣に一生懸命に働いて財產を作つてゐます、甚しいのは地方へ遊學などゝ世間體をつくつて遠く醜業の出稼に登るのもあると申ます。

▽彼等のあるものは口に獨立を唱へて居りますが、其實配偶者を得んとするの情は切なるもので、私の友人（日本人）は某工場に通ふ若い娘から常に手紙を貰つてゐましたが、中には工場から歸るとき途を送つて下さいなどゝの文句もあつて、それとなしに結婚を望まれたそうです。

▽さて一度家の妻となるや、妻君を働かすは良人の耻辱とあつて、ホテル住居（夫婦二人ぎり位なら一家を持つより安上り）の終日終夜猫を相手に小說とピヤノで暮し、良人の財布はお取上げで我儘一杯に振舞ふのが常でした、これに就て面白いお話がありますから來月の誌上に記して見ませう。

▲風變の遺言

◎先頃伯林で一富豪の死亡せしものがある、親類中の强慾なものは氏の巨萬の財産を利用せんとて一日も早く死れかしと希望するものもあつたが、その死するに及び公證人は直に親戚を集めて其遺言狀を開封したるに「親戚中余を墓まで送らざる者は三百馬克づゝを得べく、自餘の財產は埋葬の後開封する遺言狀に照して分配せられよ」とあつた、然るにその墓まで送つたものは故人の遠親に當る一老婆のみであつた、而して埋葬の後にて開封した遺言狀には斯うである、「余の遺產全部は我が親戚中三百馬克を受るを辭して我を墓まで送りたるものゝ所有である」と

修養

乙女時代の學問

鳩山春子

私が小供の時には小學が何年中學が何年と今日の樣に定まつた順序は無く甚だ不規則なものでした。最初は四書五經の素讀を生國(信州松本)で漢學の先生から敎はりました、其頃は勿論その意味は分らないのですから、五經に這入るとむつかしい字が澤山あるので困りました。今日の小學生徒が敎はる讀本とは隨分な違ひです。でも私の父は男の子を早く亡くしたものですから、せめて此子と想ひましたのが、自身にも親切に敎へて吳れました。

間も無く上京(明治九年)したのですが、其頃は今の文部省の所卽ち竹橋に唯一の文部直轄學校が有つて、それへ試驗の上入學しました、其時私は十二歲の少女でしたが入學試驗の際は讀みなれぬ本を出されたもので不結果なりしが下の級に入れられ日本國盡など暗誦をせられましたが、其頃はたしか毎月試驗がありまして、試驗毎に級を飛び越し直きに最上級の國史覽要の輪講をする級に編入されました。其時分は毎日父が下讀の時一字一句の講釋迄敎へて吳れました。

そんな風でしたから日本學の方は左程に苦心しませんでしたが、一番骨の折れたのは初めて出會つた時の英語です、其頃英語の先生と云ふのは學校以外には容易に得られませんでした、私は竹橋女學校でミセスライスと云ふ先生に就きましたが、其時分ライスさんの受持の級が六ツ計ありました、私はエービーシーより初めましたから最下級でありましたが、ライスサンは敎授方が非常に上手で少し出來ればヅン／＼級を飛ばして下さいましたから、竹橋女學校廢校の時分には私より三年も先きより初めて居られた最上級の人々と、同じに稽古が出來るやうになりました、斯く英語に幸運でありましたのは遠き緣類に下條幸次郎と申す方

がありまして毎日曜日に此方が親切に譯讀を教へて下さつた爲めであつたと確信し今でも感謝して居ります私は幼少の時分は一度覺えた物は滅多に忘れませんで當今は記憶力極めて乏しきにも拘らず百人一首を最終の順德院から最初の天智天皇まで逆戻りに暗誦が間違はず言れましたので賞められた事も有りました。ですから竹橋女學校時分にも試驗は少しも苦に仕ませんでした。それで閒がな隙がな英語の暗誦を仕て居ましたから、學校が誠に樂しみで愉快に堪へられませんでした。然るに此學校は中途で廢止に成つたものでしたから、此時は實に殘念に思ひました。

で生徒は方向に迷ふ者が有つては氣の毒だと云ふので、皆お茶の水の師範學校へ收容さるゝ事になり、殊に私共の爲めに、師範科豫科の外に、英語の有る別科を新設して與ましたから、竹橋女學校生徒の過半數は別科に這入りました。私も其內の一人でしたが、此所へ移つてからは、西洋人の敎師はなし英語と申しても英書の譯讀と作文位ほかありませんでしたから眞に張合がなく、つまらなくて暫くの間學校を退き中村と申信州出の漢學先生（中村彌六氏の父君）に文章軌範及び資治通鑑の敎授を受け英語は駿河臺に居られたミセスウワキコップ氏の許に通ひましたが、其後ウワキコップさんも歸國し又々學校が戀しくなりまして、師範學校の別科に戻りました。此同級生は唯四人でありました。閒もなく私共四人は別科英語科卒業と云ふ事になり、他の別科生は皆豫科に繰り込められました。其後他に適當の學校無き爲め無據師範科本科に入りましたが、私が學校を最も多く樂しみ其愉快なりし有樣を今でも忘れられぬのは、竹橋女學校在學の時であります。

而して斯く學校を樂しく感じ其後とても學問が好きになりましたのは慈愛深き父の親切なる薫陶と下條先生の類ひ稀れなる（毫も報酬を受けられざりし）御親切なる敎授に依ると今でも常に其鴻恩を忘るゝ事は出來ません、實に私は父と下條先生の御陰にて今日でも暇さへあれば學問に興味を持ち有益の書物を見て常

に自ら向上進歩致したいと心懸るのを無上の樂しみと致して居ります。(文責在記者)

わが職業の經驗

某會社重役夫人　ゆみ子

令夫人は有數なる某女學校出身で英語は尤も得意とせらるゝ方です、姓名を公にするとを断はられましたから、遺憾ながら某夫人といふ氏名詞を用ひます。

女學校を卒業しますと、其人其家の都合上家に居つて家政の手傳をする者、嫁する者及び一の職業に就く者等種々ありますが、私は卒業と云ふてもはや十年前のことですが、卒業後直に一の職務に就き、出入五ケ年之に從事して居ました、依て此卒業生と職業といふとに就て申上ませう、自分の經驗を基礎として。

私は宇宮都の生れですが、宅では私を東京に出して教育する程の餘裕はなかつたのです。處が伯父が東京の或官衙に奉職して居ますので、此家に止宿し勉强するとゝなつたのです、どちらかと云へばまあ苦學の方なので、斯くて首尾よく學校を卒業しましたが、前申た通の家庭ですし、伯父の勸めもありましたから、さる會社に入りました。最初は雇と云ふ名義であつたので——さて愈々出て見ますと、中々學窓で思つて居つた樣に容易ではありません、事務員の大多數は無論男子で、夫に久しい習慣——會社閥とでも申ませうか——がありますので、私如きはたゞ上の人の命令を唯々諾々行ふのみで、高等女學校優等卒業生と云ふ名義に對し、誠に申譯のない樣な氣がしました。同窓生は如何と見ると學士の夫人となつたとか、何某と云ふエライ人に嫁したとか、更に女子大學に入學して居るとか、普通の情から云ふならばもう羨しいとばかりでした。併し伯父はいつも口くせの樣に伊藤侯爵は元お足輕であつたの、大浦さんは嘗ては巡査であつたのと云ひ、心掛さへあれば……と申て私の今の地位を一生懸命やれ、忍耐、勤勉、正直此三つを堅く守れと訓へられました、私もこゝが辛抱のし所と思ひましたから、

どんなことでも將來の爲めだと思つて熱心にやりました處が幸にも上役の人に知られ次で社長の耳に入り、段々重用せらるゝ様になりましたので、俸給も多くなる、體も樂になつて參り、友人に對しても多少面目を保つ様になりました。すると意外の故障が身にふり掛つて來ました。それは外でもない、他の男子方の事務員のそねみです、私が格外に昇進(?)したのを見て、そら〇〇さん(上役)は女にあまいの、社長の宅では牝鷄晨を告るのと、殿方の活潑に似合はない、女々しいことを聞へよがしに申すんです、まあ斯様な風ですから、鳥の目鷹の目で私のすることを監視する、或る卑劣根性の人になると何か落度あれかしと祈つて居ると云ふ風であつたのですから、私は體はらくになつたが、今度はそれと反對に心の苦痛——心配——非常に多くなりました。併し「小事に忠なるものは大事にも忠なり」と云ふ古人の格言を守り、自分の職務を切に勉め人一倍立働きました、よし何かの手落を見出され、自分の位置を去らねばならぬ様なことがあつても心に疚しい事なければ、「余は余に爲すべきことを爲しぬ」と心から信じて出る様にと祈つてやつて居りました……幸に何の不都合も仕出さず滿足に五ヶ年間義務をなし終へたのは自分ながら愉快と思ふて居ります。

斯く自分の經驗につけても、新に卒業して職業につかるゝ人々の爲に一二普通なことの御注意を申上たいと思ひます。

一、職業は最初からよい地位と云ふ様な考を起さず自分の力半分位で出來ることからして行く様にすると併しわざとこうするにも及びませんが、此方が將來の爲によいと思ひます、矢野龍溪さんが嘗て申されたことがあります「文章を作るには大きな袋に風を滿たし、そこに針目位の孔を明けそこから、中の空氣を出す様にせねばならぬ」と、これたゞ文章のみではありません、職業を爲すものも同様で、既習學問技藝を少しつゝ出して行く様にすると間違がない様に思はれます。

二、「私は高等女學校卒業生だ、」「高等教育を受けた者だ」など思ふて居る様では失敗します、職につくも

のは是非是等の考へで取去らねばなりません、實際職にありますと學習した事が直にそれと應用出來るものではありません、段々やつて行く中に自然々々と其仕事の上にあらはれて參るもので、かくてこそ其位置も堅固なるを得るのであります、私の國元の老人が先年作つた歌(?)に

學問は先づ棚の上にあげて置き人しれぬ樣折々に出せ

と、歌としてはおかしなものですが併し始めて就職する時の私には金科玉條であつたのです、……「學問を鼻に掛ける」これ攻撃される唯一の辭柄です……

三、辛抱強くなくてはなりません、何の事業たるを問はず此心が必要ですが、今の世に男子に交りて職業に就かんとする者は人一倍忍耐でなくてはなりません私の知人で現今横濱に女子實修學校に長となり、女子西洋裁縫界で有數な齋藤はる子さんなどは、實によくやられたです、以前なを柿田と云ふて娘さんであつた頃、未だ一般に婦人界に行はれて居ない西洋裁縫を思ひ立ちました、が當時御生れ國の仙臺ではまだ敎授所らしい敎授所がなかつたのです、依てまだ妙齡の婦人でありながら洋服屋に入込みました、すると十幾人と云ふ職工は皆な無敎育な男子の職人のみであつたのです、此間に齋藤さん(當時の柿田さん)は立交つて前後六年間他の職



人と同様にやり遂げたのです、教育は充分にあり、家柄もよい人の娘でありながら、よくもまあ出來たもので……かくて此方は米國にも參られ其技を習はれたのですが、良人御永眠後は專ら其教授の任に當り近い御著作もあると云ふことです。是等は忍耐のよき御手本ではありますまいか、……忍耐と一と口で申ますが、併し實際に當りますと中々容易なものでありません。

まあ御注意はこれ位にして置きませう……思ふに卒業生がとる職業の中學校教師が一番近道で一番やりよいと思ひますが、私の樣に飛びはなれた事は隨分容易ではなりません、併し當分は追々に女子の職業も擴張して來るし、一般に婦人をも重ずる樣になりましたから、何しろ結構なことです。

主婦の學問

塚本はま子

▲近來世間が家庭といふことに重きを置くやうに爲ッたのは新聞、雜誌を見ると能くわかります。何れを見ても、「家庭」といふ題目を何處かに見受けるが、世間がこれ程まで家庭に注目するやうになッたのは、誠に結構です、私共はこの好機運に乘じ家庭を、今より一層良くしたいとは常に思ふてゐるのでありますが、さて如何したらよいかこれは、隨分困難な話でせう、其れをするには女子に、家政學の智識を普及させるのが尤も必要だらうと考へます。家政學の智識が十分あれば家庭は自然と改良されます、斯くいへば誠に容易いやうですが、我國の有樣を見ると女ばかりではそれが出來ないのです。

家政學の智識を普及させるには學校教育も大切ですが、世事に通ずる爲めに新聞雜誌を讀むことも又必要です。然るに世間は今の家政學を學んだからとて。實際の家庭に何の役にも立たないと言つて非難される方が多い。併しこれは我國の女子の地位を御察し無い御言葉でせう、今日の女子は家庭の人と爲ると兎角舅姑の前を憚つて書物や新聞雜誌なども讀めず又新聞雜誌に

よつて智識を得やうと思つてもとても得ることの出來ない地位に在るからです。從つて嫁入すると學校で敎はつたことは何時の間にやら忘れて仕舞ツて、僅かにその遺つた粕で家政を處置して行くやうな有樣です。これでは完全に家政を遣つて行かれやう筈がありません。實に情け無いやうな話ですが、これが今日の實狀なんだから仕方がない。

次に又學校敎育の家政學は役に立たぬと仰有るけれども夫は家政學に限りません、何の學問でも學校を出て直ぐにおいそれと、役に立つものでは一ツもありません。若しあつたとすればそれの學校の御蔭ばかりではない。たとへば男子の修むる醫學法律にしても、それ〴〵十分の素養が必要である、けれども、學校を出て直ぐその日から、一人前とは爲れない、矢張り實際の修養を十分にする必要があるでせう、まづ醫者の方でいへば、醫學士が大學を出ばかりでは風邪の處方箋を書くのすらどぎまぎするといふではありませんか。女子の家政にしてもそれと同じく、家政學といふ一種の學識と實際とが相俟つて、初めて完全といひ得るやうになるので學校を出た丈では實際、何の役にも立つものでありません。

斯ういふ風ですから、殿方に於ても、家政學といふものゝ性質を考へそして女子の權力なき地位に同情下さいましてどうか、女子に家政學上の智識を普及させやうといふことに御助力あらん事を願ひたいのです。女子は、殿方と違つて多くは家庭に引つ籠つて居る、それ故、自然と世の中の事情に暗くなり、家政學の智識も無くなつて來るのです、故に目上の人にちよと美味しい物を上げたいと思ふても、智識が無いからそれが出來ないといふことになるので、其の間に不滿を生じてくるのも、已むを得ない結果だらうと考へます、されど平和なる家庭を作るには如何しても家政學についての十分なる素養が要るのであります。

今日の家庭には缺點は隨分澤山あるちよつと例を擧て見ると、何處か或る家庭を訪問するとして先づ玄關に向ひますと、いかにも奇麗に爲つて居る、それから

お座敷へ通ると此處も室の裝飾から光線の取り具合までが結構に出來て居ります、けれど一回は二回と度重なつて、だん／＼親しく爲つて來ると、臺所や子供の養育などに滿足することが出來ない點が追々目について參るのであります。

衛生上から言つても臺所は淸潔に仕て置かねばならぬ、臺所は幸福の本源で、軍隊ならば兵站部ともいふべき所、それが今日の我國では、塵に充ちた薄ッ暗い汚ない處に在るのです、これは言ふ迄もなく婦人に家政學上の智識が無いからで昔から暗いんだから、暗くつもてよい、お隣の臺所が汚ないから私のも汚なくてよい、などゝいふ風ではとても改良は覺束ない。斯んな所で美味しいものゝ出來やう筈がないから、料理屋で食事を取るやうな人も出來るだらうと考へます、そして其處には、樣々の誘惑が、充ち滿ちてゐるのであります。

又衣服に就て申せば、子供の著物なぞは、實に見るに絶えませぬ、普段着の木綿物ならば、まだよいが、晴着といふ段に爲ると小いさな小供に長い縮緬の三枚重を着せ裾をふまへて歩けない樣子を見て誇りとしてゐる婦人もあります。

斯ういふことは、如何しても改良せねばならぬことですが、今日の有樣では男子と女子とは智識の程度が違ひ勢力が違ふから女子ばかりに任せて置いては十年經つても二十年經つてもとても改良は覺束ないと思ふのです。家庭に良い規律を立てやうとしても、主人が同意をして與れなければ如何することも出來ません。ですから若し妻が家庭内に色々な良い規律を作つて殿方にお見せ申したならどうかお目を通して下さるやうにまた女子の家政學の智識の上進するやうに御援助下さるとを殿方に御願ひ申すのです。即ち是れ家庭の改良せらるゝ所以で社會の改善は、之を以て第一着手とすべきであらうと思ふのであります。

（右は家政學の進步と題する女史の談話を筆記したるもの文責記者にあり。）

音樂の研究

山田源一郎

○近頃は音樂を研究する者が多く成つた、中には隨分熱心家もある、殊に女子の音樂に志すものが多く、家庭に嚠喨の音を聞くやうに成つたのは、誠に喜ぶべき現象である、併し技術はまだ一向進まず、是といふ大家も顯はれないが、兎に角、音樂が一般に普及されて、趣味を解する者が多く成たと云ふことは事實である。

○斯樣に斯界の機運が稍々盛んに成て來たに連れ、音樂を學ぼうとするものが多く成つた證據には、近來東京音樂學校へ入學を志願する者が非常に殖えた、隨つて入學試驗の如きも、以前よりは大分六ケ敷成つた、元は小學唱歌集一ト通り歌へれば、入學が出來たものだが、近年は旋律と云ふやうな事を課する、曾て見たことも聞いたこともない樣な新曲を見せて、之を歌はせる、是は樂才を試驗する爲めであるから、受驗者に取ては是が一番六ケ敷い。

○故に音樂學校へ這入るには、私立の音樂學校なり、或は音樂の敎師なりに就て、十分受驗準備をなすの必要があります、因に音樂學校の豫科に這入るには、高等女學校二ケ年卒業の者なれば入學試驗として唱歌と體格、外に英語か國語の內一科を課することに成てゐます、又た師範科に這入るには、尋常中學（若くは尋常師範）全科卒業の者、女子なれば高等女學校卒業の資格が要る、又た乙種師範科といふのは小學校敎師を養成するのが目的で、高等小學卒業の者なれば入學を許されるのであるから、唱歌の試驗も、他の科よりズツと容易ではあるが、其でも希望者が多いから、相當に六ケ敷い問題を課せらるゝと心得ねばなりません。

○音樂を學ぶには、最初から目的を立てねばなりません、即ち音樂を以て身を立てる專門學者たるか、或は唯だ一通りを修めて音樂の趣味を解するに止めるか、何れなりと一方に決めて、研究の方法を異へなければなりません。併し自分には何方を選んで宜いものか分らぬ、故に音樂に志したならば、先づ斯道の人に就

て、自分の樂才の有無や程度を確めて貰はねばならぬ、又た人によつて歌ふ方で成功する者もあれば、彈く方に得意なのもある、兩者は共に音樂者たるの價値に於て軒輊ないのであるから、孰方で成功しても宜い、據つて己は孰の方に適して居るかを、先輩の學者に訊すがよい、歌ふ方で云へば、咽の試驗をして貰ふのが最も肝要である、又た彈く方の側から言つても、樂器にはオルガンあり、ピヤノあり、バイオリンあり、種々とあるのだから其內の何れが適するかといふことに就て選んで貰ふことが最も必要であります。

○併し專門の樂器を撰ぶにしても、先づ最初はピヤノから這入るのが順序であります、ピヤノは音樂の基礎とも云ふべきもので、殊に指を練習する上には、オルガンよりも遙かに優つて居りますから、第一にピヤノを習ふが可いのである、さてピヤノを覺えた所で、後にバイオリンを研究するとも、オルガンを研究するとも、或は其儘ピヤノを專門に研究するとも、其は其人の隨意であるが、兎に角ピヤノを第一の門戸とせねばなりません。

○然るに世には、いきなりバイオリンを修めやうとする者が多い、是は甚だ間違つた話で、到底覺えられるものではない、バイオリンは樂器の內でも一番六ケ敷、且つ最も入り難く到り難いもので、少とや些との修業で覺えられるものでない、殊に日本では女子が之を研究し、バイオリンと云へば、女子に適したもの、家庭にふさはしきものゝやうに思つてゐるけれど、是は甚だしい誤解である、音樂の本場と云はるゝ獨逸では、女子でバイオリンを彈く者は殆ど無く、女子は皆なピアノを習ふことに成つてゐます。

○ヴイオリンが日本人に好かれるのは、其の音色が日本人の耳に向くのと、樂器が輕便に出來てゐるからである。隨つて家庭の音樂としても是が一番適當のものゝ樣に思つてゐるけれど、ヴイオリンは元來家庭に適するものではなく、寧ろ公會席上の演奏等に適するのであります。

○オルガンは西洋では、宗教樂に使用するので、敎會

にのみ用ゐられ、學校や家庭では使ゐません、西洋の學校ではすべてピアノを用ひて居ります。

○音樂學校出身の比留間と云ふ人が、マンドリンと申す伊太利の樂器を彼の地に於て習ひ覺え、之を日本へ持つて來て、今は東京に傳習所を開いて居りますが、是は月琴の樣な形で、矢張四弦で、膝に載せて彈くもので練習も容易ですから、家庭の慰として覺えるといふ類の人達には、最も適當の樂器だと思ひます。

○音樂で一家を成すまでには、大抵先づ十年以上はかゝりませう、少くとも十年の日時を費して研究と練習を積まねば、音樂家として世に立つ譯には行きますまい、然し音樂は天才を要するものであるから、天才のない者は幾ら研究に歳月を假して、勉强した所が大家名手の位置へは到底上れません、尤も大抵の人は或る程度までは上ることが出來るが、其以上は天才の人で初めて到達することが出來るので、天才のないものは伺ふことが出來ない、獨り音樂に限らず、藝術は總て斯ういふ性質のものと見えます、故に音樂の專門大家に成らうと志したものも、天才の無い爲めに、タヾの音樂手で終るものもあるし、又た、娛樂的に習つたものも、研究の餘、天賦の樂才に導かれて、案外の成功をする樣な事もあります。

○音樂を學ぶものゝ心得べき事は、倦まぬといふ一事である、一つ物を倦まず飽かずに練習を續けるのである、彼方の物此方の物と歌ひ散らし彈き散らすのは宜しくありません、一曲を十分練習して、能く〳〵固まつた上で、他の曲に移るやうに心掛ねばなりません、―
而して研究の順序も易より難に進まねばなりません、―
然るに最初から六ケ敷ものや、高尙の曲をやりたがるものですが、斯うしては却て進歩を妨げます、何でも易しいものから入つて、その物を十分に熟練するまで、練習を續けるのが肝腎であります。

▲獨身者

女房持が獨身者に向つて云つた「可愛さうに女房のない人は襯衣にキツト鈕がないから直分る、けれど女房持は襯衣がないよ、僕なンざ枕の巾を斯うやつて着て居る譯さ。

思潮

日本の家族主義

文學博士　高楠順次郎

一、日本の團體勢力

最近一年の間、余は英國に滯在して種々珍らしき事物を見聞したるが、就中多くの趣味を以て觀たるは戰後我が日本に對する彼等西洋人の觀察である。彼等は以爲らく、日本人は個人に就て見るときは左まで驚くべき人物を見ざるも、其の團體的の勢力は實に恐るべく、吾々は體力に於ても將た智力に於ても正しく日本人に優れるにも拘らず、多數集合の活動力を比較し來れば、到底日本人の下風に立たざるべからず、と斯う言つて居る。於是乎彼等は其の原因を知らむと欲し、各種の方面に涉り熱心に研究をやつた結果、種々なる意見が現はれて來た。或者は之を日本の神道に歸し、或者は之を佛教に歸し、又或者は敵を愛するといふ所を見て是れ耶蘇教の感化なりと云ひ、又或者は團體的教育の結果なりと云ふなど、種々様々の説を立てゝ之に解釋を與へやうとしてゐるのである。併しながら余は別に意見を異にして、西洋と日本とは文明の出發點を異にし、従つてこゝに彼等の模倣すべからざる大原因が存在すると思ふので、以下少しく余の所見を述べて見やう。

過去四十年間に於ける陸海軍の軍事教育と一般國民教育とが原因の一であることは素より明かである、去れど此は極めて小なる原因で、其の最大原因は尙ほ他に存在しやうと思ふ。其れは何であるかといふに、即ち開國以來絶えず我が國民を支配し來れる純粹なる家族主義の思想である、即ち西洋の個人主義と日本の家族主義との思想の差異よりして、ついに右のやうな結果を見るのであらうと考へる。

二、西洋の個人主義

先づ個人主義とは如何なるものかといふに、他人の利益を全く度外に置き、何事につけ自己一人か本位となるので、自己を主とし自利を標準として萬事を決行するが此主義の本領である。從つて人々の生涯が孤立の生涯に陷るも亦止むを得ざるの結果であらう。西洋諸國に於ては專ら此主義の行はるゝ爲め、吾々とは非常に異る所が出て來る。今英國などの例を見るに親は子が滿廿一歲に達するまでは其の養育に任ずれ共其後は頓と顧みず最う養ふべき義務も無ければ、又絕えて養はうと思はず、子に於ても亦單に自分を養へば足り、親を扶養すべきものとは努め思はず。婚姻の事に就ても亦同一で、親はたとへ幾十萬圓の資産家であるにせよ、子の婚姻に助力しやうとの考が無いので、子は止むを得ず自分の出世を俟ち自分の力に依つて結婚するといふやうに爲つて居る。斯の如きは總べて是れ自己は止だ自己の爲めにのみ働らくといふ個人主義より來る必然の結果であるので、彼等が國の爲めには生命をも抛つ可しとの事を以て不可解なりとしてゐるのも矢張り此の考に依るからである。

三、日本の家族主義

之に反して家族主義に於ては、自己は之を第二に置きて先づ家を思ふ、自己よりも一家を重んじ一家の利益を標準として自が身の處置を爲すといふが此主義の本領である。此の考に基いて家には主人を置き、其の統轄の下に父子兄弟姉妹等家族一同の者が相倚り相助けて以て一家の繁榮を圖らうとするので、個人主義の孤立的なるに反し之れは全く團體的である。自分の爲めにのみ生活すてふ個人主義の自利的の考に依れば、死は萬事の終りにして死地に入るは愚の至りなれ共團體の爲めに生活すてふ家族主義よりすれば、團體の爲めには死も亦辭せずとの考の起るべきは當然である。で我國の歷史に依れば、斯かる考を有する家族が相集りて戶となり保となり鄕となりて、こゝに鄕黨相助くるといふ觀念を作り、更に之を推し擴めて日本國家に及ぼし、國民全體相助くるの觀念と爲つたので、言はゞ日本國家は一大家族である、君主は大家族の主人である。日本人が西洋人よりも其の團體的勢力の優勝なるを得る所以のものは、此の大主人此の大家族の爲めに自己一身の利害を顧みずとの考が最もなる原因であらうと思ふのである。

四、純粹の家族主義

我國の此の家族主義は、二千幾百年の歷史を有し、其の大主人に在ます　聖天子は、遠く神武の昔より　今上陛下に至るまで、連綿として百二十一世の永きに渡らせらる。是れ亦我國の萬國に冠絕する所以であるので、優勝劣敗を基礎とする個人主義の國にては到底之を見ることは出來ぬ。聖天子上に在まし、高祖高宗の御遺訓に基かせられて吾々大和民族を統御あらせらるゝに對し奉り、吾々臣民が互に相助け合ひて、君は千代ませ八千代ませと、我が皇室の天壤と共に窮り無く彌榮えんことを祈り奉る所以のものは、個人主義の如く強い弱いの關係より餘儀なくされて君に臣從するといふにあらずして、吾々の祖先が代々大なる恩澤を蒙りたるが故に、祖先に代つて君に忠義を盡すべきであるといふ、獻身的の考が先きに立つからであるので、此點は又支那の家族主義とも異つて居る、即ち支那の主義は君君たらずんば臣臣たらずといふ考なれ共、日本の主義は全く之と異り、君臣の分は遠く祖先以來の關係にして、如何なる事情の出來するとも決して變ふべからず又離るべからざるものと爲つてゐるのである。

五、日本婦人の地位

我國にては今日の軍隊教育は家族主義である、教育勅語は家族主義である、其他國家、君主、一身犧牲といふが如き精神教育に渉る思想は總べて全く家族主義である。然るに吾人平常の生活に於て此の家族主義と個人主義とは常に相奮鬪しつゝあるので、特に婦人は最も困難なる地位に在るやうに見受くる。彼の千代萩を見よ、千松が眼の前り殺害さるゝを見ては、親の情としては政岡は飛び附かんばかりの思ひをしたであらうが、惟だ夫れ御家の爲めといふ家族主義の考より萬斛の涙を抑へつ齒を喰締めて其の場を耐えたので、能く兩主義の暗鬪を示してゐる。又西洋の婦人は自分の良人に災難でもあると、忽ち氣絶して大騷ぎをやる、表情といふ點から言へば其れが本統であるかも知れぬが、日本の主義では、良人の戰死の報に接して泣き崩るといふのは貞婦の恥辱で、家の爲めに屹と氣を取り直さればならぬといふことに爲つて居る。日本婦人には斯かる場合が多いのである。

六、教育と個人主義

右の如く家族主義は汎く我國民の思想を支配し居れ共、こゝに止だ一つ家族主義の一天張にて困難なるは各個人の教育である。例へば文部省が學校に於て、或は吾々が家庭に於て、子女を教育し學術技能を研磨せしむるには、是非とも他を顧みずして各自を良くせしめんとする個人主義に依るべきであつて、文學工藝等も亦此主義に依つて發達せしむべきである。而して此の個人主義と前の家族主義とが適當に調和さるゝに非れば、到底完璧と稱するとは出來ぬ。で我國は二千年來の家族主義尙は未だ衰へず、之れに個人主義の教育を加味して適當の調和を得たる處へ、此度今度の戰爭が始つたので、若し之れが今より五十年後に起るとせば、或は我が家族主義も薄らぎて斯かる好果を見ざりしやも知れず。然るに今日我國の狀勢を見るに、西洋の個人主義は滔々として輸入されつゝありて、我が特有の家族主義は漸々に地を拂はんとする有樣であるが、家族主義は我が戰勝の原因であつて、又我國の生命である、去れば家族主義の消滅は即ち我國の滅亡であるを思ふて、此際此の主義の維持及び個人主義との調和に就て大に努力すべきであらうと信ずるが、子女養育の任に當らるゝ我が婦人に向つては特に之を望まざるを得ないのである。

菓子の由來

▲飴　神武天皇八十梟を伐ち玉ふ時丹生川上にては八十平瓮に飴を作るよし日本記に見うれば飴は神代よりありしものなるべし

▲饅頭　建仁寺の第二世龍山禪師元に入り暦應二年歸朝の時弟子林淨因を伴ひ歸る淨因姓を鹽瀨と改め奈良に住して饅頭を作るこれ日本饅頭の始なり

▲蓬餅　文德實錄に有レ草名ニ母子草ニ二月始生、莖葉白脆、毎レ屬ニ三月三日ニ一婦女採レ之、蒸擣以爲レ糕、傳爲ニ歲時ニ、とあれば其來ると久し

▲干菓子　菓子は今云ふ水菓子の事なりよつて菓子の字を用ふ往古は今砂糖を以て製する菓子なし桃、柿、梅類等を用ひたり爾へ云ふ干菓子は白雪糕に基きて製したるを始とし中古アルヘイ糖コンペイ糖の類渡來してよりこれに倣ひて數品の菓子を製すといへり

▲求肥餅　寛永の頃出雲の大守京都にて求肥餅を召され江戶に歸府の上京都にて求肥餅に丹煉したる中島淨雲と云ふ者を召して製せしむ之れ江戶にて求肥を追りしはじめなり

▲大佛餅　根元は京都誓願寺前にて製す江戶淺草にて製するは之に倣ふなり、近世數品の餅あり、いが餅、さつま餅、あん餅、くり餅、の類ひ多く提重、杉折に盛りて美を盡せり又ぼた餅はむかしは甚だ賞玩せし物なれども、今はいやしき餅にて晴なる客へは出しがたし

▲米饅頭　根元は淺草金龍山辨天宮の鶴屋なり慶安のころ此家の女におよねと云ふありすぐれて才智ありはじめてこれを製す故によねまんぢうといふ

▲缺餅　正月の餅を鏡と云ふは其狀の似たるを以て稱す、鏡餅を割て祝ふを鏡開きと云ひ、具足に備へたる鏡餅は斬殺の詞をいみて刃を入れず、引缺ゆへに是を缺餅といふ

▲水飴　南都春日の社家正月糕を煉り堂上方又は地下へ送るこれを滑糕といふ今の水飴なり

▲カステーラもと西班牙より傳はる本邦にて始めて之を製せしは天正の頃なり

日用重寶

▲鷄卵味噌漬の法　味噌を平らに延ばし重箱樣のものにて押し付け、窪みをなし、其中に美濃紙を敷き、數個の鷄卵を能く解きて入れ置けば、自然に固結するものなり、之を小口より切りて酒の添物、或は茶菓に供すれば美味あり、尤も夏季土用或は冬季嚴寒の時の漬時を好期とす。

▲柑橘類羊羹の製法　柚子、其他柑橘類を、奇き内に外皮を剝ぎ、湯に投じて和らかに煮熟し、二日計り水中に浸し、時々水を換へて苦味を去りたる後、擂鉢にて擂り、布にて漉し、又別に寒天を煮解し、之に砂糖及食鹽を加へて味を付け、右の柚子と能く混合して淸き塗物に流し、能く冷めたる後切りて食するなり。

▲木綿に光澤を帶ばしむる法　近年綿布にして絹の如き光澤帶び、而して其光澤は石鹼を以て煎るも、亦染色を施すも更に減却せざるものあり、其法は木綿の綛を强く張り、之を苛性曹達加里、或は鹽化亞鉛(トワドル百四十度)若くは硫酸(トワドル百八十度)に浸し、之を取出し、水洗するにあり、然る時木綿糸は著しき光澤を帶び、且つ染色力を增す。

▲齒痛の特効藥　博士ウオットヨッフ氏の實驗に依れば、齒髓炎に續發する所の齒痛に用ゐて最効ある方劑は、鹽酸古加乙涅〇、一、樟腦五、〇、抱水格魯拉爾五、〇、に水數滴を加へ、研和して透明液とするに在りと、而して之を綿塊に浸して齲齒の空洞内へ入れ、一日間挿置すれば疼痛全く消散すべく、若し尙少しく疼痛する時は之を入れ換ゆれば必ず消散するなり、此合劑は啻に鎭痛の効あるのみならず、又殺菌の効を奏するものにして、他の藥品に優れること數多の實驗に徵して明なりといふ。

▲植物の成長する時間　草木は總て日中、若くは夜間よりも、午前四時より六時迄の間に最も早く成長するものなりとぞ。

▲二階住ひは長壽を保つ　ブダペストの一學者が研究せる結果に依ば、下層に住する者の平均壽命は卅九年十一ヶ月、初階住の者は四十三年三ヶ月、二階住の者は四十四年二ヶ月、四階以上の者は四十二年なりと、之に依ば下層と上層に住するは衞生に不良にて、二三階位の所が最も衞生に適する者なるべしとぞ。



五千里外の日本料理

在里昂 T I 生

日本人が日本料理を好くのは別に不思議でない。然るに日本の土地を離れて遠く風俗の異なる歐洲に航して、さて日本食の不自由を感じた時と成たら此日本食の戀しさはどんなであらふ。隨分日本ではヤレ精養軒だ、ヤレ帝國ホテルだと西洋料理の通を振廻した人達も、太平洋の航海に十日餘りも西洋料理を立て續きに喰はされては桑港や「ワンクーバー」へ到着早々最寄の日本料理屋へ飛込むか、馴染の日本人の宅へ押し掛けて久々で澤庵漬や日本醬油の味に舌皷を打たぬものはないのである。

偕留學や用務で海外に滯留する連中でも米國や獨逸あたりの日本人の多く居る土地では、日本料理屋もあり、日本の食品を賣る店もありて、或る點までは日本料理を口にする事が出來るが、茲に記すのは佛國里昂での咄で、此處には日本人の常住者とては高々二十人、此頃などは僅に十二人を出でぬと云ふ譯けで、素より日本料理屋もなければ、日本食料品を賣る家も無い、殊に其在留人の多くは獨身者で、下宿屋住居をして居る、且は夫々相當の仕事を有して居るから、迚も自由に日本食を口にする便利は有たぬ、幸ひ此地の正金銀

行支店長の小野君は夫人も居られるし、日本食料品も取寄せてあり、旁々小野君夫婦は交際上手で客好きとあるから毎土曜とか毎日曜には獨身の在留者を招きて、日本料理を饗せられたこれが吾々第一の樂であつたのである、尤も日本でと違つて材料も不充分だし、割烹の道具も揃つて居ないと云ふ譯だから、日本のそれとは比較が出來ないが、其旨さと謂つたら堪らない、着席するや直に猪口が廻されて、熱燗で引掛けたる心持は實に譬へ方がなかつたのである、偖不遠慮なお客連はしたゝか飲んで、喰ふて、終には香の物一片さへも殘さぬのである、それも其筈、此香の物で茶漬が最も旨き物の一として狙はれて居るのである、もし香の物の準備がちと少なかつた時などには、貴樣は澤庵を一切餘計に取つたなどゝ、歪み合ふ事もある位、可笑しいのは日本へ子供の四人も置いて來たと云ふ先生達が此日本飯では丸で腕白盛りの小供同樣で誠に他愛もない有樣であつた。

偖て吾々獨身連は何時も小野君の御馳走になつて許りも居られないから銘々の下宿や、假宅で日曜などには同好の士打寄りて手製の掴み料理といふのを作るのである、素より道具もなければ食器もないので、總て佛國に有合せの品で代用して間に合はさなければならぬ、大の髭男達が「ホワイトシャーツ」一枚で庖丁を持つたり、鍋を洗つたりして、臺所をうろつく樣はよい見物で、もし國に在る妻君に見せたら、嘸愛想をつかされるであらうとは何時も出る惡る口であつた、其食器や食料の代用、考案は頗る經營慘憺たるもので、如何に其口腹の爲に我が苦心せしかを知る料となるのである。

まづそれを左に數列べて見ませう。

〔茶碗〕彼國では下流社會が肉汁を吸ふ爲めに用ゆる「Bol」と云ふものがある矢張陶器で形狀殆んど日本の茶碗に均しい、これが吾々の飯の茶碗だ、但し小皿はないのである。

〔椀〕塗物のは無論ない、彼地にて髭剃の時石鹼を溶くに用ふる白燒の椀形のものを以て代用する、しか

し糸底がないから熱い汁などを入れて持つ時は大變だ、これにも蓋がない。
〔皿〕無論洋食皿を以て代用する。
〔小皿〕咖啡茶碗の下の皿を臨時代用とは名案ではあるまいか。
〔猪口〕小硝子盃にて足れり。
〔德利〕「バザー」にて花生用として日本の靑磁の德利を賣りて居たのを買つて來た。
〔鉢〕第一項の「ボル」の大なるもの。
〔箸〕何か木を削りて置けば直に出來る若し急用にはペン軸二本を逆樣にして用ふべし。
〔杓子〕木製の「サラド」用匙を用ふべし。
〔土瓶〕日本製の者輸出せられあり但しよく注意せぬ



と漏るものが多い。
〔飯櫃〕普通は釜よりちかづけであるが、或人は新しい便器を買つて來て其大きさの至極恰好であるを誇つて居たのは大笑であつた。
器具はこんなものであるが其料理と材料が面白い尤も日本から來た品は鰹節と醬油だけである。
〔飯〕これは雜料品商で菓子用の伊太利米を買ふのである、日本風に炊て適當なのは少いので彼處此處の店で少しづつ買つて見て其適當なのを見付けた時は其店にある丈を悉く買溲へて仕舞はんければならぬ買溲へと云ふと大形だか菓子用として貯へて居る位であるから高々一斗とか二斗とかに過ぎぬ是丈あ

ると時々の日本料理だから三月分も四月分もある、これを煮るのは勿論西洋竈で、米一杯に水二杯の割で水から煮上げて吹いてから、竈の下部へ差し入れてむれさすのである。

〔牛鍋〕これが尤も簡單で割合に喰べるので尤も多くの場合に用ひられた種は牛肉の外に玉葱又は普通の葱に菠薐草位である。赤茄子や「ヌイ」を入れるが此「ヌイ」は西洋製の乾饂飩である。

〔汁〕普通は落し卵位だが、一寸洒落て鯛の潮煮が出來るこれは刺身のあらにて作るのだ殊に醬油が入らぬから中々重寶である。豆腐の代りに卵豆腐を入れるがこれは中々手間である。

〔肉饅頭〕これも多く作られた料理である、牛肉六分に豚肉四分に濕たる麵麭を加へて叩きこれに鷄卵と胡椒とを加へて小なる饅頭に握り、これを葱、蕪、胡蘿蔔など〻共に煮るのである、肉も此方法だと至極柔かいから老人にも適するので日本の家庭にも至極宜敷と思ふ。

〔刺身〕里昂は海岸より數百哩あるから肴は皆氷詰となりて來るので價は高い方である、種類は鮪、鯛、鰈、鯖、等である鯉もあるが泥臭くて刺身には出來ぬ、庖丁が立たぬから多くはグチャ〱に切りて蕪のおろしと海苔(日本より來る人が折々持て來る)とにまぶして喰ふのだ、骨のある刺身は此地の名物であつた。

〔鰻蒲燒〕素敵な鰻はあるが割き手がない折々通行の人の内に割ける人があると此料理をするが、比較的手間がか〻るから餘り歡迎せられない實際吾々はソー長時間を料理に費す暇がないので。

〔茄子の丸煮〕何でもないが中々甘い、又普通の蕪を西洋の乾鯡と煮るのも甘かつた此種の料理は大分種類がある。

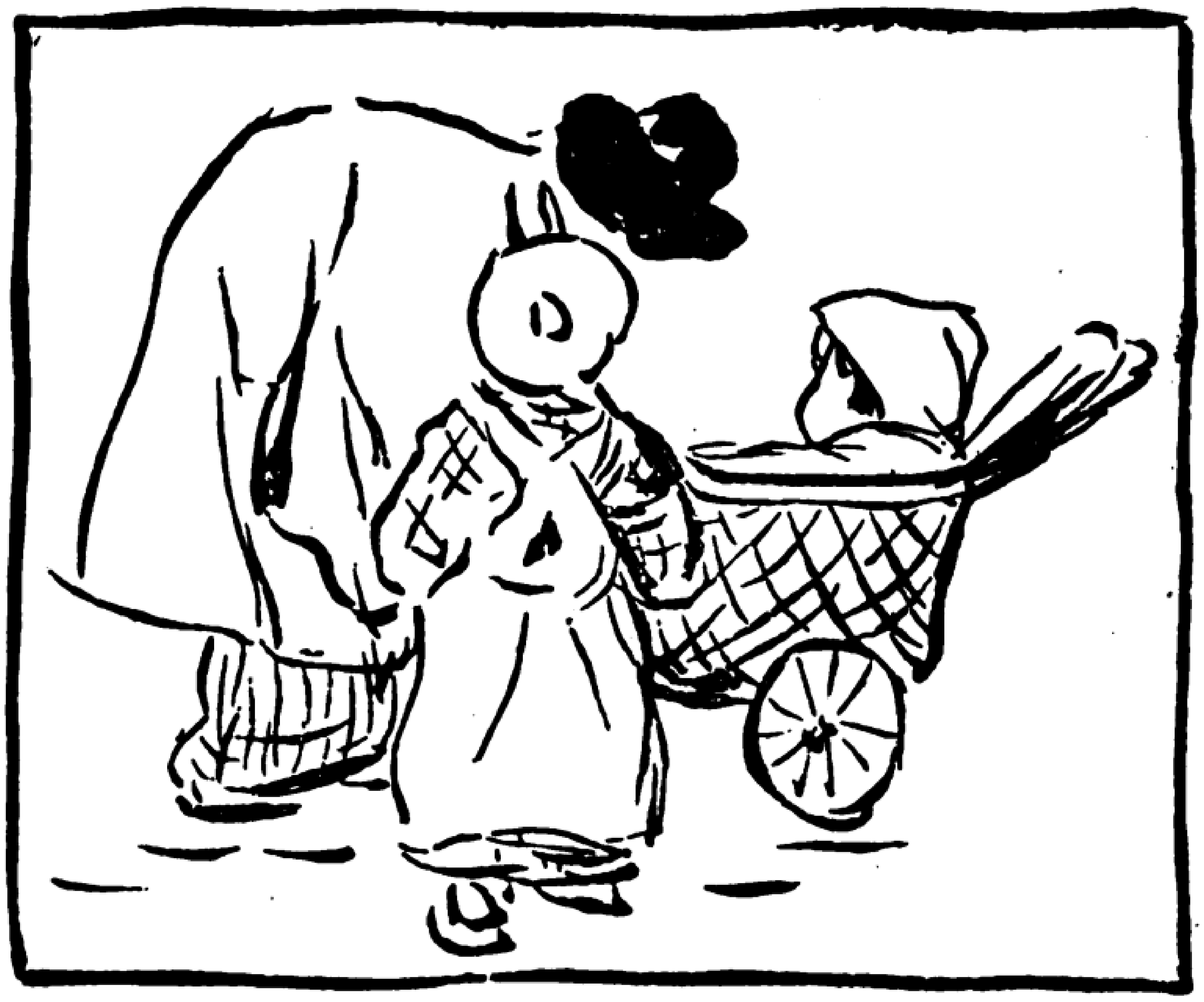
〔浸し物〕普通は菠薐草位だ、しかし水芹は中々高い脊物だがこれの浸し物は恰かも日本の京菜の味がする。

〔饂飩〕乾饂飩の「ヌイ」をうでれば直に出來る、出し

の拵へ方は日本の通り。

〔冷し索麪〕「ヴーミセル」をうでるのであるこれは肉汁の中に二すじ四すじ浮いて居るものである、日本でも此品を日本製索麪の代りに用ひたが精製してある丈け日本のより遥に甘い東京では明治屋龜屋等で賣つて居る筈だ。

〔漬物〕これが尤も吾々の苦心する處で陶器の「ポット」に漬けるのだ糠がないから何でも鹽漬だ、おまけに山鹽の結晶して居る奴である。蕪が普通だが彼地で大根の味を出すのは「ラヂ」と稱する西洋料理に出す小サキ赤大根であるこれをウント買集めて鹽漬にする、又彼の甘藍の花も一寸妙でこれは大きな花の固りを幾つかに割りて、葉と昆布と代る〲に置きて漬けると



一寸甘い、日本でもやつて見たが矢張甘い、胡瓜や茄子も、やつて見たがこれは糠味噌でないから駄目であつた。

　吾々が丹精して拵へて喰つて居たのは先こんなものだ、しかし材料丈は中々上等を撰むので中々甘かつたので隨分盛に喰つたものだ殊に彼地に居ると胃が小さくなりて居る處え種の多い日本食をウンと詰込むのであるからたまらない中には動けなくなる樣になる人もあるが妙な事にて暫くするとモー消化してゲツソリする其翌日は朝飯の茶が待兼ねると云ふ程であつた。

日本酒は日本料理に附屬して尤も必要であるから絶へず日本へ註文して取寄せて置かねばならぬ、何れも壜詰にて來るのであるが、運賃や税金やで一壜の正宗

は實に里昂では二圓以上になるのである、だから中々大切で、お互に猥りには飲まない。

日本料理に關して日本人の失策は決して少くない、彼赤毛布とか云ふ書物にある鰻の蒲燒で下宿屋を追はれたと云ふ樣な咄はいくらもある、彼國では魚を燒くと屍を燒く臭氣がするとて大に嫌ふ、ソレカラ吾々の素人料理だから、臺所を汚すとも夥しい殊に米を煮て汁をふかすから竈の磨き上げたのを錆させるし又日本醬油を溢したのは中々一寸その汚れが落ないそうだ、又匙や肉叉を此醬油で煮たものに用ふると變色するとて、日本料理は下宿屋の主婦には大禁物となつて居る。

面白いのは吾々の住んで居た近處合壁での噂で後にて聴けば彼等は毎日、井戸端會議で吾々の擧動に關して種々の問題を提出した、曰く隣の日本人達は何たる大食であろう、横町の食料品店で「ヌイ」と「ヴーミセル」を五瓩宛も買つた、共和街のフエリクスポータン(有名の大食料店)から米を大な袋に一杯持込んだ、今朝靑物屋の「クレツソン」と赤大根を不殘買浚へたなどいふわけで如何にも此疑問は尤もな次第である此國では米は菓子に使ふ計り、「ヴーミセル」は肉汁の中へ四五本浮かすのが關の山、「クレッソン」とて「ビフテキ」の傍に一枝二枝添へるのが普通で、赤大根を幾百個も一日に喰て仕舞ふ家もない理屈である、然るに吾々の買物は其品のみに就て云へば相當の料理店か大勢の寄宿舍位の買物であるから、近所で兎や角云ふたのは有理な次第である、其後吾々が如何にして喰ふかを吾々の家の下女が近邊の山の神に說明したが終に信用せなかつたとの事である。

今でも咄の種になつて居るのは漬物の重し石で吾々は漬物を漬けるは何でも石に限る樣に思つて居たので、里昂の街で搜しても更に見當らない、何しろ石で敷き詰るか、アスフアルトで固めてある街計りなので、轉がつてる石は見度てもない、公園に行きても同樣である、終に止むなく郊外へ夕方から電車に乘つて搜しに行た事がある、しかしこれは程なく石でなくとも他の重いものであれば、よいと云ふ事を悟つたので直に

大きい秤の分銅を買つて其代用とした。

又或日公園の花壇に植物標本の爲植附たる花紫蘇の花盛なるを見て明晩遠來の友の爲に催ほす手摑料理の刺身の皿を賑はさばやとて其夜暗に乘じて窃に公園に忍び入り花盗人を極め込み花守に捕へられたが、事情を咄して首尾克く目的の花幾枝を貰ふて歸つたはよいが摑ました幾弗の銀貨から割出すと一枝の紫蘇が何十錢と云ふ價になつたと大こぼしの話もあつた。

斯る笑話は澤山あつて數へ切れぬ程であるが、吾々はこんな工合に日本料理にな多忙は時間を割いて浮身をやつしたものであつた。



トルストイ伯の家庭

葉末露子

荒鷲のすさぶ露國に歐洲屈指の小說家にして、十九世紀にかけて珍らしき意思の人、其の身分は伯爵なりしも身分を棄てゝ、專ら人類を救ふ事に熱中し、愛と平和と潔白とを以て、無形の大帝國を建設せる一個の老翁あり。トルストイ伯といふ、今この有名なる翁の一家庭生活に就て少しく記さん。

翁は露國貴族社會の人達と正反對の嗜好を持ち、都會を嫌ひ、田舍を愛し、交際社會を忌み、家庭を好めり。

翁の願望は健全なる家庭を築きたしといふにある

を以て、その家庭を田舍に築きしなれ。

翁の夫人は莫斯古の醫者の娘にして、結婚の當時十八歳、伯は卅四歳なりしと、夫妻愛情の濃かなるは實に理想的ともいふべかりしなり。されば夫人の母は屢々繰返して、

『彼女の爲には、これ以上の幸福な運命を望む事は出來ない』と云ふが常なりき。

翁は實に夫人を尊敬し、何事も一應夫人に打合をせざれば實行せざりき。一寸散步に出掛くるにも『一つ彼女に相談して見ねばならぬ』と翁又曰く

『吾は妻の傍に無限の幸福を見出した。彼女はたゞ良妻賢母であるばかりでない、わが文學上の著述の爲めにも明敏熱心な助手たるを失はない』と。

かゝる情愛なりし翁の家庭に於て、また夫人が如何に翁を敬愛し、また翁の爲めに盡しつゝあるかは次の話もて知るべし。

夫人はたゞ一日たりとも、翁と翁の著述とに注意を怠らざりき。殊に物事に無頓着なる翁の事なれば、夫人の用務は一層多端なりき、翁は結婚後幾何もなく、「戰爭と平和」との著述に着手し、八年を經て稿も成りしかば、その間夫人は四人の小兒に對しては、母たるの責を盡し、家に對しては主婦たるの務を了へ、傍ら六卷の著述を寫し直すこと數回なりき。然も讀み難き翁の文字を解し、章句段落を改作する等容易な事ならざりき。

翁の敎育は彼のルウソーのエミールに基きたり、小兒等は成べく自由に放任し、決して威力を加ふる事なき樣にとは、小兒を相手にする第一の務、また小兒取扱の第一の法則として、特に傭聘したる女敎師等に向つて要求されたる條件なりき。而して翁は英國に於て最も廣くルウソーの敎育主義の實行せらるゝを認め英國より女敎師を傭聘し、これに兒等が三歳より八九歳に至る迄の敎育を依賴せり。

また翁はその兒等をして自然に融合せしめんと努めり。これは家畜昆虫その他あらゆる自然界の現象を怖れず、寧ろ之を愛するの習慣を養はしめむ爲めなりき。

且つ翁は人間の自然の力に較べ、その力渺きこと、又年長の人に従順ならざる可らざる事等を教へたり。然し翁の意は自然の力、年長の人を畏れしめんとにはあらずして、宇宙の眞理を會得せしめん爲なりき。而して教訓を與ふるにも之多くは娯樂の間に於てし、兒等をして奴婢に事を托さしむる時には、決して何を爲すべしと命令的に言はずして何を爲してよ懇望的に言はしめたり。また兒等をして人類を愛する思想をその腦裡に鼓吹することを勗め、若し兒等に僞の言行あらば嚴格なる罰を行はしめぬ、やゝ殘酷と思はるゝ位なりし。されどこの罰も幼者のみに限られ、若し悔悟の色見えざれば、如何に云ふも恕されず、されど少しにてもその様子顯はれし時には言なくとも直ちにその罪は



宥さる。而してこの罰を加ふる者はたゞ翁夫妻のみに限られてゐたり。

翁はまた兒等は何事に係らず、目に觸るゝものを眞似、且つ耳に入るものを繰返へすものなれば、とて、一家一言一行を謹み、漸く夜八時に至りて、兒等の臥床に入りし時、

『あゝ、漸とこれで樂になつた』といはるゝこと屢々なりき。而してやゝ年長けし兒等の教育は、夫人が魯西亞語と音樂の初歩とを授け又、翁は數學を授け、外國語及び其の他の學課は傭聘せる數人の教師によつて授けられたり。殊に音樂は眞面目にして且つ古風のものゝみを知らしめむ事を主張し、オペラの如きは全然之を斥けたりき。また繪畫は志ある兒等にのみ教へられき、されば繪畫に對する嗜好は總ての

兒等をして幼少のころより養成せしむる事に盡力せられき。

翁はまた兒等の學事の成功遲々たるの故を以て、これを責めず、反つて其進歩の方面に於て稱揚するを常とせり。

翁の家庭に於ては、朝珈琲を飲む時を一日中の最も愉快なる時として、一家の者誰彼の別なく悉く一室に會して、翁の諧謔を聞き。其一日の仕事の相談をなす等、その賑はしさ言はん方なく、翁はやがて『さあ時刻が來た仕事を始めやう』と曰ひつゝ、片手に珈琲茶碗を持ち、その書齋に入るまで愉快に談笑するなりき。

また翁の一生は勤勉の歷史なりき。絶えず非常に勉強に耽るを以て、その周邊に多くの人を集むるのを厭へり、されど一族を集むる事は翁の喜びし所にして、毎年夏期に至れば一族一同翁の家に會し來る、翁は即ち或は談笑に、或は遊戲に、或は散歩に、常に主人公となりて滑稽巧に人の頤を解く。

吾人等はこの威大なトルストイ翁の家庭より、多くの教訓を學び得、最後に翁が如何に家庭を樂み愛したるが、その語を引用してこの稿を結ばん。

翁は旅行或は狩等總べて他行より歸り來り、家路に近くや胸にひそみし想は溢れて、

『一同が機嫌よくして居れば可いが』

と口走るが常なりき。

小兒に對する注意

江崎牧子

世の常の言葉にては、嚴父慈母とこそ、言ひならはしたれど、われはこれ慈父嚴母と言換へたく思ふになん、其故は通常の家庭にありて父なる人は業務の務めに、一日の中の重なる時を我家の外にて活動せるが常なるに、母はこれと異り、常に家にありて兒等に接し、襁褓のうちより離れ難き關係あるものなれば、兩親の愛には何れ輕重あるべくもあられど、兒らに於ては親疎の度に幾分の差あるは、蓋し免るべからざる自然の情ともいふべからん、是に於てか、母親の大ひに注意せではならぬ事あり、そを何ぞといふに、およそ人情の常として

誰しも人に慕はるゝを快く感ぜぬ者はなかるべし、況してわが愛する兒が、われを慕ふを誰かうれしとおもはざるべき、かくて此嬉しと思ふ滿足の情は、延いて自負の心をよび起し、わが子が誰よりも多くわれを愛するを誇るの餘り、往々にして他にわれと平等に我兒に對して親たるの權利を有する人のあるを打ち忘れ、恰かも我兒を己が一人の寶の如く思ふより、何事も贔負の引倒しとなり、昂じては我子の爲を思ふてせしことの、却りてあだとなりて、可愛き子を惡し樣に導き、終に回復しがたき狀態に陷らしむる事まゝあり、中にはさる私情をこそ挿まざれと、兒等の成長するに從ひ何かにつけて捨置き難き過失も出來ぬるが常なれば、如何に寬大なる母親も、賞めそやしてのみすまし難くなりゆくを、姑息の愛情に溺れたる身は兒等をして父の譴責を受けさするに忍びず、此度限りは內濟に致し置くべしとて、己れ限りこれを赦免し置くなり、尤も過失には輕重のあることなれば、場合によつては、方便として以後を愼まば、父には隱し置かんといふ如き約束をなし、其廉耻心を養成せんとも大に必要なるべけれど、己れ迄も正直に父に對して之を隱蔽せんとするが如きは、決して思慮あるわざとはいひがたかるべし、何となればさる約束も双方此度限りといふ點に重きを置き、彼れ若し過ちを再びするに於ては斷然たる處置に出づるを躊躇はぬ母なれば、敢て憂ふるにも及ばざれども、姑息の人は「この度限り」を幾遍も繰返して更に意とせず、兒も亦これに慣れて母の常套語と見做し、延ひては父に秘して母より特別なる恩惠に預らんと希ふに至ること必定也、かの放蕩子が名を書籍の購求、交際の必要等に藉りて、世間見ずなる母親を欺き、遊興の資を引出さんとするが如き、畢竟幼少よりこの常套語を用ゐて母親の弱點を見透したる結果に外ならず、又たとへ右にいふ如き惡結果を來たさゞる迄も、到底子供に過失は免かれぬことなれば、平素巨細に注目して、其都度處置を誤らざらんと極めて必要なり、子等の擧動に注目すると云ふても、一人の眼を以てするよりは、二人の眼を以て監視する方遙かに行屆くものなれば、表面兒には父に隱し置くと約束しても裏面に於ては父に委しく有りやうを語りおきて、敎育上大切の機會を逸するが如きことなからんを期すべし、これ聊か兒等を欺くに似たるも、結局の効果をおもはゞ釋尊といへども此方便を難じたまふべきにあらず、而して上にいへる如く、外に活動して內に在ること少き父は、兒等に對してとかく疎遠になり易き傾きあれば、つとめて兒等に接近せんこと必要なるべし、是等は父其人の態度如何による事なれども、母たる者深く此點に留意するにあらで、到底完全に目的を達し難かるべし、かの幼時より父を「こわき者」になすと稱して、さる惡しきわざさせば父に叱られん、わがいふ事きかざれば父に告げんといふ如く、過度に脅かし置くは策の得たるものとは思はれず、さるは其極つひに甚しく父を憚る樣になり、成長するに從て起る處の修業の方針、其他の重要なる問題に對し、互に腹藏なく意見を吐露するの必要ある時も、充分に意志の疏

徹を見るに至らず、往々にして双方の誤解を招き、甚しきは父子の不和を醸すに至ることさへあり、思はざる可からず、而してこれを女子の側よりいへば男子は平素力を外部に致すものなれば、育兒の事は擧げて内に勤める自己の責任とし、夫をして内顧の憂なからしめむこと妻としての本分なるべし、又た翻つてこれを男子の側より見るに、大切なる兒の養育を妻に托すに當り、其妻が己れに代りてよく此の重大なる義務を果すの資格ありや否やをも考へず、漫然之れを其手に委ねて顧みず、しかも其結果の良好ならざる時悉く是を其の妻の責に歸せんとするが如き弊なしとせず、是れ決して其本分を知れるものとはいひ難かるべし、要するに育兒の事たる、到底兩親の一致協力によるに非ざれば、好結果を見る事むづかし、これ實に慈父嚴母を必要とする所以なり。

されば疎遠になり勝ちなる父にして、たま〳〵家に在る時は勉めて寛大にかまへ、彼等をして其温容に接するの快を感ぜしめざるべからず、又母は彼等が己れに親密なるの餘り、恩に狎れて禮を缺き、從つて己れの命を輕んずるやうの事なからしむる樣に注意せざるべからず、天男子が如何なる度まで是等の點に意を用ひ得べきやはわれしらず、天性優柔にして慈愛深かるべき女性の身が、其最愛の兒に對して、時に嚴格なる態度をとらればならぬ事の如きは、たやすきに似て實は頗る難し、母たるの者心すべきことにこそ。

女代診（其二）

糸左近

▲月經の閉止

月經閉止とは讀んで字の如く月經即ち子宮粘膜の出血全く歇んで了ふものを云ふ。これに持久性と一時性との二種ある。持久性月經閉止は、多くは子宮及び卵巣の發育が不完全である所から來るので特に子宮が缺けてゐたり、或は其の發育極めて不完全の者に在る、是れを除くの外は、一生涯月經閉止などいふは甚だ少ない、併しながら稀には生殖の官能全く普通の婦人に異ならぬもので、毫しも月經を見ぬのがある、けれど斯の如き人は早晩月華を開くことあるに相違ない、某婦人は年既に十八になれども月經更に無い、結婚を求むる者あるも應ずる能はず、斯くして二十を過れども依然として開かず、されば當人は云ふに及ばず、父

母も大いに心配して、何か不完全なる處があるならんと、恥かしくも專門醫の診察を受けたが何等の異常も無いとの事、是に於て早晚其の時有らんと、心に懸る所無きにしも非ざれども、兎に角良縁あるを幸ひに嫁した、併しながら矢張無いものは無い、超えて、其の翌年世の所謂豆波利の徴候があッた、偖も不審と又々醫者の診察を受くれば全たく妊娠に相違無い云々、斯樣にして月滿玉の如き男兒を設けたるを始めとし、其の後尙五回の分娩をしたれども、例に依て例の如くで有たが、年三十一歳になると、俄然經通を發し、これより毎月正規に有つたといふ例もある、されば生殖の官能にして、完全なれば、假令一時無くとも左程憂ふるに足らぬものである。一時性月經閉止は前者に比すれば、屢々有ることで、これにも亦生理的と病的との二種ある、生理的に於ては妊娠及び乳汁の分泌中は閉止するものである、併し時には哺乳最中と雖も、經通の有る者も尠く無い。病的に於ては萎黄病結核窒扶私症後其の他重病者は勿論無いが、榮養の不良者にも往々閉止を來す事がある、彼の憐れむ可き東北饑饉者中には必ず經閉者の多く有ることとならんと想像せらるゝのである。又精神の感動に依て一時の月經閉止を來すことがある、例へば劇甚の驚き、或は圖らず悲哀なる事に出逢ひ、爲に月經時中なるにも拘はらず、突然その閉止を見ることがある、某女は普通人よりも多血性で有つて、其の月經時は、いつも蓐中に臥すが例であつた、然るに或時我最愛の嬰兒が這ひ出でゝ、アッと思ふ一刹那、爐中に落ち、殆ど全身火傷になり、間もなく、無常の風に散つて了つたされば、其の當時の月經は直ちに止みしのみならず、三年の間、更に無つたといふ。又ラチポルスキー氏の說に據れば、非常に妊娠を忌み畏るゝときは、それが爲に、經閉を見ることがあると、實に然り、余の經驗に依ても一例あるのである、世の戒めにもなれば玆に揭げておきませう、某寡婦四十歳位が我が娘に養子を迎へたりしに、娘間もなく病死す、依て次女を以て妻はせんと親族一同相談は纏まつたものゝ、次女昨に年齡漸く八九歳、止むを得ず唯約

束だけに止めて後日を待つことにしておいた、所がこの寡婦この養子は義理ある親子の中をも辨へず、禽獸の猥行を敢て犯した、けれど如何に禽獸とても、人間の皮を被つている以上は耻といふ事を知つてゐると見え、非常に妊娠を怖れ、何時もビク／＼してゐた、するとビク／＼怖るれば怖るゝ程時々月經の閉止がある、さア此度こそ妊娠ではあるまいかと眉を顰めてをれば、又經通がある、この樣に怖るゝ位ならば斷然行ひを改むれば宜いのに意馬心猿迫へども又來る、斯く繰り返してゐる揚句、五六ヶ月も無い、そこで愈々それに相違無からうと、或は悔い、或は怨み、或は泣いてゐたが、月日は駸々と進み、腹は益々膨れ、隱さんと欲するも豈得可けんやで、已むを得ず自暴自棄になつてゐた、然るに十一ヶ月になつても十二ヶ月になつても、乃至は十三十四の月を重ねても矢張同樣、偖々變だわい、これア若しも脹滿ではあるまいかと、醫師の診察を乞へば、妊娠忌怖病であるとの宣告、斯んな事なら隱し徹すのであつたと悔いた所で、既に十日の菊、されど兎に角一安心、これからと云ふものは腹は段々小さくなり從つて又經通もあるやうになつた奴がある、男女交際論が盛んに實行さるゝ曉は、この病に罹る人が續々有るまいかと余は今から杞憂するのである。又これと反對に、正々たる夫、堂々たる妻の睦まじき中なれど、何うも子が無い、或は温泉に、或は醫藥を求むれども得ず、遂に神佛にまで祈願をかけて、寢ても覺めても、思つてゐる結果、擬妊娠とて、これも殆んど妊娠同樣なる經過を取り、月經の閉止を來し、胎動をさへ感ずる事がある、これにも面白き話しは有れども煩はしければ省く、實に心身關係の理は妙なものである。

又換替性月經といふものがある、これは通常の月經が閉止してゐるか、或は月經の量の少い時に、身體の他部分例へば鼻粘膜・肺・胃・痔疾或は創面などから、出血して月經を代償し、それが習慣となり、遂に定時的に出血することで有る。

全體月經閉止は妊娠等の外は、大抵身體の榮養不足

か、或は病氣なれば、之を等閑に打捨ておくことの出來ぬもので、必ずこれが恢復を圖らねばならぬ、恢復を圖るには、他病が原因となりおらば、其の他病を第一に退治するが肝要である、源を糺さずして末を追ふは何の益も無いのみならず、却つて害がある。

榮養不良の方は肉食をなし、麥酒或は良好の葡萄酒を飲み、適度の運動・海水浴・冷水摩擦・新鮮なる空氣の呼吸、及び日光に觸るゝことなどを怠つてはならぬ。又身體一般には左程の榮養不足で無いけれど、唯生殖



器だけの榮養不足もある、斯る人は温座浴或は温湯注射などを施して生殖器に血液の輻湊を導くも亦頗る良好あるものである。彼の月經不順等の故障あつて、多年妊娠しなかつた人が、湯治に行き、始めて目的を遂たる事實の往々有るは畢竟するに血液が生殖器内に來り、生殖器の榮養を宜しくするからでもあるし、又温泉場は山腹とか或は海岸とか大抵風景が明媚で、空氣新鮮の地に在れば、此處にゐて齷齪たる平生の生活を打忘れ甘い物でも食べて暢氣に樂しむなども原因とな

るのであらう、これを以ても、月經の無き時は、殊に精神感動を避けて愉快に日を送るやうにせねばならぬ。貧血性の人にあつては右に述たる攝生法の外に左の如き鐵劑を服むも宜い。

還元鐵　〇、二、　鹽規　〇、一　甘草末　適宜

右六丸となし一日三回食後二丸宛

又一般に左の如き通經藥を試むるも可い。

日本藥局法の蘆薈莉刺巴丸

右朝夕二丸宛、或は

余が創製にかゝるクキーン

右月經時間前一週間程連服

世には新聞紙上に何々通經藥と廣告して其の文中に「姙娠を疑ふ者は服む可からず」とある、そこで「あらいやですわ病」の結果、否姙娠忌怖病に罹つてゐる先生が之を見て、御參なれ一つ服で遣らうと、幾週幾月試せども更に何の効も無い、心中大いに怨み大いに煩悶すれども豈夫に藥舖へ怒鳴こむ譯にもゆかず、それきり泣寢入になる、これは廣告主其人は大いに人情の弱點を捕へたもので、姙娠中何程服んだ所が墮胎するなどの劇藥では勿論無いのを故々其の樣に見せかけたものである、其處に行くと西洋人は惡い智識も發達してゐて、我等が日々目に觸るゝ物の中から取つて以て其の惡い目的を達し、何喰はぬ顏してゐる、嗚呼恐ろしとも恐ろし。

▲月經過多

月經過多とは言ふまでも無く、經血が普通よりも其の量多きを言ふのである、されど普通の量とても各人甚だ異なつてゐるが故に、何程が過多であると定むることは勿論出來ぬ、故に出血過量なるために、身體に障害を惹起すもので無くば、この名を附けられぬのみならず憂ふるにも足らぬことである。

本症は前症と異なり、結核や熱病後などの爲に發することは無いが、出血素因の有るもの即ち血友病及び榮養不足の婦人例へば授乳すること久しきに亘るものに往々ある。又脂肪過多の者は時として月經閉止を來し、又反對に月經過多を來す事がある。或は月經閉止

の揚句に著しい過多を來すこともある。その他精神感動、子宮病、心臟病等からも爲り、又は入浴過度、房事過度、或は手淫も大なる原因となるものである、併し我が國の婦人は西洋婦人の如くに自爲的遂情の結果、色々の病氣に罹る者の尠きは東西の醫書に依て證據立てらるゝことである。療法は子宮の疾患を除くことを第一に務めねばならぬ、又其他の病氣も勿論治さねばならぬ。又精神感動の種となる可き事ならば氣を鎭め心を平かにして徐ろに之を除く工夫するが肝要である。兎に角一般療法の大要を言へば膣內に冷水を注入するが宜いけれど、之を久しく續けて行はぬと、反對に却つて過多を來すものである、さうして之を行ふには「イルリガートル」といふ器械（誰にでも容易に使用するを得）を用ゐ、一日に少くとも二回以上冷水を灌注すべし、すべて身體を安靜に平臥し、陰部に氷嚢を當て、腰に溫嚢をつけておくが宜い。內服藥としては、

麥角　二、〇

を溫湯一〇〇、〇（約半合）にて五分間以上煎じ、その煎じ詰つた丈水を加へ、白砂糖でも入れて、一日三回に服むべし、但し麥角は劇藥なれば勿論醫師の診察を受けて服まねばならぬ。

▲月經困難

月經困難とは敢て月經無きにはあらねども、其の有るに臨んで非常に困難するものを云ふ。これは子宮の頸管が狹く或は屈曲してゐるために十分經血を出すことの出來ぬのもあるし、或は神經病の爲もあるし、或は其の他の生殖器に障害あつて來るのもある。

其の神經性に來るは月經前數日より精神鬱々として頭痛あり、腰や下腹も痛み、小便も頻に催し、其他諸所に痛みを發すれども、月經の來ると共に諸症緩解するが、子宮等に故障有るものに至つては月經の發すると共に局部から腰、內股までに劇烈なる疼痛を發し、甚だしきは嘔吐し、氣絕するなどの事がある。

療法は溫浴を取り、溫巴布をあて、或は微溫湯の灌腸を施すが可い、然れども其の原因が生殖器の異常にあるものは固より其の原因を治療せねば到底治らぬか

ら、專門醫に就て之を謀らねばならぬ。神經性より來るものは月經の數日前より安靜に臥し、心身の勞を避け、便秘のある時は左の如き下劑に依て便通を促がさねばならぬ。

リチ子油　一五、〇
右濃い茶の上に浮べて一度に服むべし。

某醫の說に「大抵の月經困難は憂ふるに足らぬ、何となれば既に嫁して一人の子を生めば、以後困難を感せぬものであるからである」と。又或醫士の曰く「月經困難者が嫁して愈々分娩する曉になれば甚だ難產するものである」と。余は說の可否は姑く措いて、兎に角該患者は正當なる醫士の診察を受くるが何より得策であると思ふ、何となれば、縱し恐る可き病の爲で無いにしても、專門醫は或は子宮頸管を濶くしたり、或は切開して大きくすることの術を行ひ、其の翌月よりは困難を感せしめぬ方法を知つて居るからである、然るに世には每月〳〵大なる困難を感じつゝゐながら、何等の療法を施さぬ人が隨分有つて其の揚句に診て貰へば打捨ておかれぬ卵巢發腫、最早手後になつたなどの事が往々ある。「天は自ら助くる人を助く」とは斯る場合にも適用せらるゝ金言ではあるまいか。

＊　＊　＊　＊

季節衞生

五月衞生――一年中で五月程快い月は有りますまい、暑くは無し、寒くは無し、筍は有る、蕨、狗背は盛ん、藤は咲く菖蒲は笑ふ、けれども此の月には彼の小兒を侵す所の百日咳が流行し易いものである。本病は傳染病なれば。該病兒に接せしめざるやう、且つ朝晚外出せしめぬやう常に同溫度の空氣中に住はしむることとあらまほし。

筍は比較的滋養物なれども蕨、狗背は不消化なり、其の軟かなる部分を少しく取り、決して貪り食ふ可らす。

神經衰弱の治療法――近頃非常に多く該病者を見受けるやうだが、これは藥より何よりも草鞋穿で每日知らぬ所を旅行し、異なつたる山川風俗を眺むれば、精神

は爽快になり、身體は運動する、旅宿に就けば必ず入湯はする、一日中の疲れで、能く眠られる、汽車や人力を斷物にして一ヶ月も實行すれば、屹と治ること受合なり。

（季節衛生は毎月必らず掲載す）

▼衛生顧問▲

（問）長らく月經閉止してゐて、別に身體に異常無し、白帶下にても姙娠するものに候や（在米國桑港心配生）

（答）白帶下にても姙娠すること有れども、これは甚だ稀である、されば貴女のは姙娠に非ずして白帶下の爲に閉止するのであるまいか。

（問）肺病患者と夜間密閉せる同室に三時間餘も談話したり或は共に濱邊に散歩しても傳染せざるか（能登の女學生）

（答）傳染すると傳染せざるとは、恰も彈丸雨注の間に戰ふ兵士の如くと心得られたら説明せずとも宜しいでせう。

（問）妾の父七十二歳に慢性胃加太兒にて、近頃は神經過敏になり、夜は一睡だにせず何卒療法を御敎へ被下度候（九州肥前みなつくし）

（答）流動性の滋養食物のみを進じ參らせ、御地の醫士と御相談の上左の如き藥を御上げにならば如何。

人加兒　五、〇　水　三〇、〇
右早朝空腹時に頓服

抱水コロヲル　〇、五　單舍　五、〇
水　三〇、〇
右臨臥に頓服

（問）五歳の男兒、四歳の女子の副食物は如何なる物が適當なるや（女學世界愛讀急母女）

（答）魚の刺身、豆腐、麩、卵黄、少量の芋類、百合、などの類なり。

（問）今は廿歳でありますが幼少の折、顔に腫物出來、今に半錢銅貨程の禿があります、東京の大學病院にてこれを奇麗に御取下さいませうか（紀州の山村女）

（答）長い年月を經てゐることであるから、恐らく治りますまい。

(問)私は身體一般及び子宮等にも別に故障無くして月經は一年に二度位しかありませぬ、蘆薈莉刺巴丸を服みましても害ありませぬか(何生)

(答)害無し、寧ろ服藥を勸めます。

(問)親族に妙齡の女子にて、夜な〳〵泣き候ふて、本人は之を知らぬと申しますが、この療法を敎へ下され度願ひます(見開女)

(答)夜啼は虚弱の者、或は胃病、下痢、鼻腔の病、心臟病、癲癇等のある者或は妖怪談を信じたり、又は何か恐怖の心を抱いて居る者、然らざれば本人の睡てゐる間に、家人の中で談話又は仕事をして其の睡眠を妨ぐるなどが原因となるのであるから、これが原因となる可き事を避け、左の如き藥を用ゐて御覽なさい。

臭素加里　一、〇　白糖　適宜

右臨臥に頓服、或は

規尼涅　〇、三

右丸藥として臨臥に頓服

(問)近頃流行のペルベットなる白粉は無鉛毒に候や(羽前美女)

(答)無鉛毒なり。

(問)雀斑を治す方法として二%の昇汞水を求めに參りました所、藥劑師は斯る強いのを塗れば皮膚が縮むと申しますが如何(山腰の女)

(答)强ひて皮膚が火傷したかの如く灼けるから雀斑も除れるので、弱かつたら取れませぬ、併しこの灼けた跡の治方は、嘗て本誌に申したから御了りでせう。

(問)顏色常に赤くて、冬になれば紫色になります何卒これが療法を敎へて下さい(高岡市の無名女)

(答)此間は屢々有るが、若き女の方には、左程心配するには及ばぬ、何となれば一度分娩すれば大抵治るからである、兎に角温浴をして血液を下部に導き、又便通の無き人や、月經不順なる方は之を治療せねばならぬ。

(問)身體精神共に普通なれども時々便秘が有つて、それだけが困ります、斯る時の妙藥を問ふ(讃岐の琴平女)

(答)リチネ油、十五瓦を頓服するか、或は局方大黄末

一瓦を白糖に混せて服むなどが宜い。

(問)肺尖加太兒は結核の初期であつて、到底治らぬものでせうか、恐入候へども是非〳〵敎へ下さい(京都の37女)

(答)肺尖加太兒は結核の初期にあらず、而して結核とても、不治症では無い、況んや肺尖加太兒に於てをや、されば御心配無く治療を盡されよ。

(問)私の子は顏面に赤痣があります、之を除く方法を敎へ下され度候(近江の竹子)

(答)前答の雀斑と同じ。

(問)明治三十八年五月の女學世界にレゾルケン五瓦、ヒマシ油一瓦、ベルガモット油三瓦、芫菁丁幾十瓦、アルコール二百瓦を混じ塗布すれば、毛生藥になると有りましたが毛の有る處に塗けても害ありませぬか、四月か五月の誌上に御敎へ下さい(在河内年十九さみられ女)

(答)差支ありませぬ、但し眉毛だけには芫菁丁幾を半分程に減した方が宜いです、併し時日は半年位續けねばなりませぬ、さうして縦ひ効有つても其の色赤いですが、併し年を經て、他の毛と同じ色に變るやうです。

(問)本年五歳の男子今以て物言ふ事能はず唯(姉)(旨)とか云ふ位に過ぎず、而して己れの指先を見ては泣き、或は笑ひ出すことあり、諸醫の診療は云ふに及ばす世人の宜しいと申す事は何でも致して見ましたが効ありませぬ、これが後日普通の言語を發するや否や、實に唯一人の兒、何卒其の療法を御示し下され度願ひます(信州松本の心配の母)

(答)診察せねば了らぬが必ず腦及び身體の發育不完全なるに相違無し、果して然らば仲々庸醫の治療出來るものに非ず、可成は上京せられて、小兒科博士の診療を受けられたし、今たゞ一般の注意を申せば易化滋養の食物を與へ、可成熟眠せしむるやうにし、心身痛苦を與へぬこと甚だ肝要である。

(問)滿十九年九ヶ月の處女、身體、誠に壯健でありますが、常に非常に大なる鼾を致し實に聞き醜くあるのみならす、結婚の後は大いに厭はれることならんと存じますが衛生顧問外かは知ねど何卒その療法を敎へて

賜はりたし（畿内の不美女）

（答）身體强壯にして而も何の思ふ事無く「風吹かば吹け雨降らば降れ」といふ氣で睡れば、眞に熟眠しますから、咽頭にある懸雍垂（俗にノドボトケ又はノドチンコと云ふ）が大いに下つて、これに呼吸氣の觸れ、雜音を發するのであるから、何れとならば、鼾を發する位に眠る方が衛生上宜しいのであります、併し鼻中に病氣があると鼻呼吸の故障あるために鼾を發することもあるし、心肺に病氣のあるときも呼吸困難上これを來すものである、是等は診察せざれば答へ難し。

（問）顔に「ニキビ」有之候ひしが女學世界の御蔭で治りましたれど、跡が赤黑くなりました、之を又除く方法敎へ下され（宇都宮女）

（答）酢にて洗はれよ、若しそれでも治らずば藥用石鹼を塗布して洗ふべし。

（問）毎夜〳〵恐ろしき夢ばかり見ますが、治る方法はありませぬか（埼玉の春山女）

（答）臨臥に運動して、それより臥蓐に入り、洋燈を明るく點して、何處か一方のみを見ながら、一二三四……
……と數を數へて睡る可し。決して洋燈を消し或は薄暗くし、何かクヨ〳〵思つて眠る可からず。

（問）三十一歳の女昨年六月子宮後屈位置變症にて子無きため腹部切開術を受けましたもので御座ますが、妊娠の望みありませうか、又二三年間は妊娠出來ぬものでありますか御答を乞ふ（芝區の順女）

（答）その位置正當に復したる以上は何時にても妊娠する事有りと心得られたし、但し必ずしも二三年の中に有りとも保證し難し。

（問）私は眉毛へ「イヒチオール」を塗ける前に、石鹼で洗ひますと眉毛がズン〳〵拔けます、これではイヒチオールの効あるまでに皆拔て了ふだらうと思ひます、何か毛と毛との間に出來てゐるのではありますまいか、其の處置法を問ふ（東京子）

（答）何か寄生蟲の樣な者が居るのでせう、果して然らば一刻も早く眉毛を剃りて其の方法を試みられたら如何です。

(問)數年前より時々耳は聴えたり聴えなくなつたりする爲、醫師も面白い耳だと笑つて居られます、如何致しから何いでせうか(千葉縣一患者)

(答)面白いと言つて笑ふは不埒です、其の聞ゆる時は故障の無いので、聞えぬ時は耳其物で無くとも耳と關係をする場所に故障の有るに相違ありませぬ、然れど之を診察せずして判斷することは出來ませぬから、今一度耳專門の名醫に就いて診療を受けられたし。

(問)私の父五十歳は胆石とか申す病に罹り治療を受けて治りましたれど、聞く所に依れば、前小村外務大臣は米國ポーツマスにて該病に罹られ今は肺病との事、父も亦肺病に轉じませうか(神奈川縣の菜娘子)

(答)然らず、胆石と肺病とは關係無し、發するは唯偶然なりと心得られたし。

(問)小兒のインフルエンザ後は肺尖になるものでせうか、及び其の豫防法を問ふ(森川町一番地宮裏女)

(答)小兒のインフルエンザは肺尖に罹り易いと申すまでゝ、必ずといふことは勿論ありませぬ、豫防法は早く發熱を除くやうにし、其の上寒冒にならぬやう、又榮養を齊ふるが肝要であります。

(問)白血長血は不治の病に候や心配に堪へず候間何卒御敎示を乞ふ(奈良縣YK女)

(答)白血長血といふは俗名で、之を細別すれば色々の病となる、故に或は治るあり、治らざるあり、詳しくは六月以後の女代診を續いて見られよ。

(問)血族結婚は果して何程の害ありますか、又不幸にして之を行へば、其の善後策如何、嗚呼一方には父母の遺言あり、一方には大害ありとせんか、實に進退谷まれる身、何卒御敎示を願ひます(長崎の佐保子)

(答)異性質の者程宜しいので、第一夫婦の和合を保ちます、第二强健に、且つ怜悧なる兒を生みます、然るに血族結婚ならんか、遂に夫婦の不和を來し易く、生まるゝ子は精神或は身體の薄弱甚だしきは不具者になり易いものである、然れば縱し父母の遺言たりとも、これに從はぬ方が却つて親先祖に對しても孝道でありませう、其の善後策なるものは小生知り申さず候。序

に申しますに異性質相愛するは啻に夫婦のみならず朋友間も亦然りです、甲は鬼とでも戰はんといふやうな人ならば、乙は春風徐ろに吹くといふ如き氣質相逢へば仲よく暮さるゝのであります、滿天下の貴女紳士以て如何となす。

(問)夫婦相和する名藥ありとか、果してあらば何卒沒書せずに御答を乞ふ(越後の大野夫婦)

(答)左の二句は名藥であります。

むつとして歸れば門に柳かな(妻の藥)

正々トシテ何ゾ折ンヤ路傍ノ柳、愛スルニ堪ヘタリ中庭一樹ノ梅(夫の藥)

(問)先生が女學世界に御掲載になつたる御話しを書物にして下さいませぬか(在濟南の日本女)

(答)　通俗治療法附養生秘訣と題し、博文館にて本月發刊致します、野生が五ヶ年間本誌に物したる中より順序をつけて編みしもの、鼇頭には今までの衛生顧問を殘らず載せてあります、自惚を隱さず申せば通俗衛生書中、嶄然頭角を現したものだらうとおもひます。

▲女子體操敎員の需用

先年今の女子高等師範學校敎授井口あぐり女史が米國より歸來して女子體操の必要、歐米に於ける體育の狀況等を演述せしが動機となりて遂に三十五年中女子高等師範の高橋忠治郎氏により東京女子體操音樂學校等設立され、次で體育會亦女子體操敎員養成所を設け之等の卒業生は孰れも各地の高等女學校に敎鞭を執り居れるが、尙ほ需用は非常に多くして、到底今日の供給にてはこれを滿たす能はざるより、昨今は中學程度の女學校を卒業し夫に少しく體操の心得あるものはよし文部省の檢定を經ずとも、廿圓乃至三十圓の給料にてドシ〳〵賣口あり、若又文部省の檢定試驗に合格し居るものならんには、三十五圓は苦も無きことにて之が研究に要する科目は體操原理、生理、普通體操、瑞典式體操、薙刀體操、兒童遊戲、高等遊戲、室內遊戲、舞踏等なりといふ但し今日の好況が永久に持續するや否やは疑問なれど兎に角供給の不足を告げ居る限りはこの盛況を失はざるべし

活断

人事判断　運命占ひ所

▲人事判断は婦人に新福音を齎す
▲人事判断は婦人に新生命を授く
▲人事判断は婦人に新光明を與ふ

（問）廿一才の女、夫を迎へましたが結婚せぬ以前から嫌で〳〵たまらぬのを無理押付けにさせられたのです、私何と考へても敬愛する心は出ませんそして其人は他の者にもあまり氣に入らず祖父も滿足しては居ません夫婦とは名ばかりで夫の方でも私を愛して居るやらわかりませんどうしたらよいでせう。（煩悶女）

（判）破鏡は人生の一大恨事、結婚以前こそ好きも嫌ひも云ふがよし、縱令馬鹿でも鈍物でも一旦夫となり妻となりたる以上は輙く離婚などすべからず、古は夫の意志も堅固で小糠三合あらば養子に行かぬと威張つたものであつたが、今日は世が悪く進歩して養家を漁り歩く男も少なからずとのこと、彼等は娘の婿となるでなく財産や權勢や地位やの婿となるが目的で結婚するのだから、それは如才なく女房の機嫌も取つて呉れば男姑の氣もそらさない、而しそれは束の間で首尾よく家督を相續した曉には打て代つて妻子を虐待し男姑を邪見にするのである、此に至つては泣ても笑つても追つ付がないのである、さて貴女の婿殿は案外その邊は下手と見える併し嫌はれて居る女房の機嫌を取るやうな不見識なとをなさらない所を見ると、今日養子にでも行くやうな男に珍らしく男らしい所があるではありませんか、是れは貴女の仕合で或は三國一の好い婿殿であるかも知れない、嫁入して姑や、小姑に困じめ付けられ針の筵に坐する思ひをしても唯一人良人の温き情の爲に辛抱するは花嫁氣質なるが、養子とて同じと縱令他の家内のもの〻氣に入らずとも一人の妻が影になり日向となつて世話して呉れてこそ居心地もよいなれ、然るに肝心の貴女が妻として亭主らしい扱ひもなさらないのだから婿殿が苦い顏をさる〻も無理ならぬ所です、故に今日離婚を持出されるは倘ほ早い、先づ眞面目に心の底から夫として仕へ滿腔の愛を捧げて御覽なさい、世界幾十億の男子中天上天下一人しかない夫ですからそれ位なとしても罰は當らないじやありませんか、世に賢婦と云はれ良妻と稱へらる〻婦人の行ひを見るに如何なる夫に嫁しても運命とあきらめて決して思ひを色にも見せない、平凡な夫を如何にも勝れたる人のやうに世の中に思はせてこそ良妻の良妻たる處ろ、一家の幸運を迎へ、果ては世に勝れたる好き見を育て芳しき名を止めるのである、隱れたる處に女の花は

何時も變るのであります。

(問) 妾は本年十六歳今年師範學校の入學試驗に落第しました未來は合格するでしようか、師範を止して他校に入學しようかとも思ひますけれども先生へも友たちへも後來師範學校が目的だと云つたものですからなんだか良心が許しませんどうしませう妾は教員に適當して居ませうか。(さくら子)

(答) 普通の婦人ならば教師となつて人の子を育てるより先づ母として己が子を育てる準備をするが肝要です。誰が奇好で女教師になるものがありませう、皆それ〴〵女ながらも自ら職業に就かればならぬ地位にある處ろから、偶々撰んで從事するのです、又貴女が教員に適するかとのヿであるが自ら不安心と思ふて業に就くなどは決して成功した例しはありませんからよく熟考なさい、又た高等小學校を卒業されたとすれば田舍では先づ不足ない方ならん、その上に餘裕あつてのヿならば今二三年位は結婚期が後れると云ふわけでもないから、何れなりとも便利な學校へ入學せられてよし、要は女子としての修養にあるのですから教師や友達に對して何の遠慮が入りませう。

(問) 私は今年十九歳やつと學校を卒へたばかり社會のヿに暗いので一二年或る女史の手許に世話にならうかと思つてますが祖母が孫の身のさだまりを見て死にたいと申して結婚をせまりますのみならず方々から申込もありますが皆私の好ない方ばかり今結婚するのヿチト恥かしう御座いますがどうしませう。(京都一女生)

(答) 婚姻は人生の大禮この上の神聖やはある、結婚するが何恥かしからふ、十九歳と云へば嫁入盛り、方々から結婚の申込あるこそ幸ひ何んでも良い婿取つて祖母樣を安心させらるべし、然れども先づ祖母樣や兩親の思召に從ひ自分の好き嫌ひは云はぬがよし、社會のヿに暗いとて女が彼れ是れと撰り好みせば、終には飛だ貧乏鬮を引いて世の物笑となり不幸を歎つに至るものなり、又一二年他人の元で無責任に暮すよりその心懸一つにては夫を持ちて妻の道を學び、兒を設けて母の務を覺え、世帶を爲して主婦の業を習ふヿが出來ますから御安心なさい。

(問) 只今私に二ツの求婚申込みがありました一ツは商業家で兩親もあり兄弟は八人ですが財産も相應にあります、父は大に此方に望を屬して居らるゝやうです、今一つは學校教員で父親が一人、祖母が一人で三人暮しです財産も多少は御座います然るに私は他に一日も忘れ難き人ありて私に向ひ求婚されたが父が許して呉れません、随て私は一度兩親の好ませらるゝ先きへ縁付

こゝ後日附りて理想の人と再婚致さうかと考へて居ります如何なものでせう。(周防女)

(二)　イヤこれは飛でもない御話こんな思想はどうかすると二十世紀の婦人の胸中にぶらつく思想ですが、誠に早歎かわしい次第である、抑も結婚は女子の死活問題で輕々しく擧ぐべきものでない、何處の世界に離婚再嫁を期して嫁入するものがあらう、不心得千萬、沙汰の限といふべし、メトヱ自由結婚を許して居る歐米でも父母の許諾を得なければ結婚は出來ませんのに、あなたはまアどういふ心得違でせう、戀は人を盲目にするものですから戀情一片で結婚するものは大抵終を全ふするとは出來ないですが、兩親を欺いて假りに結婚するなどはいよ／＼不埓です、ですから、こゝは老成で經驗に富める親、而も娘の將來を徐に思案して下さる兩親の意見は何處までも謹重せねばなりません、若し是れが無慈悲な親達で不正なる結婚を强ひらるゝ場合なれば格別、貴女の親御は全く貴女の行末を案じられての有難い親心であるから誠意もてその心に從ひなさる外に道はない、若し夢にも仇し男に想を懸け道ならぬ道に迷ふて、神聖なる婚儀を遊戯半分に取結ばゝ貴女が一生は決して幸福ではありません。

(四)　私は現今の家に、三歳の時養女としてもらはれました故勿論兩親などはとんと存じませんでしたが私生れてすぐ母が死去した爲とはきいて居ました、貧しき事はいふ迄もないのです、今の家は世間普通に交際も出來、何不自由もなき中故、一人子として寵愛されて小學校も卒業しました、それからすぐ希望の學校へと想ふうちに、十六の八月育てゝもらつた母にまた死なれて希望は遂げられず十七の時今の母がきまして家庭は平和に暮しては居ますが希望は一ツもかなはず、殘念です、裁縫は十五の時からやつて居ます昨年三月今の母に男子が生れましてから猶更私は不用の者になつてしまひました、そこで一つやつてみたいものがあります一ツはこの春から着手しましたが成功はどうでせう、私は今年廿歳です成功しましたら兩親の望んでゐるいやな所へ嫁かずともよいでしようかいやな事ないはれても忍んで手をつけ始めた事などどこまでもやり通しましようか、どうしたものでせう。(松風女)

(三)　貴女は不幸の生れなるにも拘はらず珍らしい幸運の方である、生の父母の顏さへ知らぬとは大なる不幸なるに貧しき處から有福の方へ引取られ何不自由なく育てられ、普通の教育まで受けさせて貰ふとは此上なき仕合、その上偶々繼母に掛られんならぬ事が湧いて來ても平和な家庭に起臥して居らるゝとはさても／＼幸運なとである、然るにまだ其上の希望とは何事です、それは希望に非ずして我儘なり我儘は千萬年過ても成功の期はありません、古語にも滿は損を招くと誡めてあり、餘り身の程を省みないで增長すると天の惡みを受ければならぬ、孔子も罪を天に得れば訴ふる所がないと仰せられて

ある。全體貴女がお尋ねなさる事が間違つて居るのである妾は生みの親にも勝る鴻恩ある養父母の望ませ給ふ方へ嫁入るは義理にも辭むとの出來ない譯なるに、どうしたものか心進ます悲んで居ります、ドウしたら嬉しく嫁入られる心になるでせうと言つて來るのが本統です。

(問)　生かぢりの學問をしたのが仇となつて十七八の無分別ざかり諸方からの縁談は彼もいや是もいや終には定見のないフラ〳〵とした獨身主義など稱へたのも四年五年の夢今はソロ〳〵孤獨の淋しさを感じて參りました所へ昨年の十月東南の方から相應の良縁がありました喜んでゆくべき筈なれどどうしたものか氣がすゝまず(良人とたのむ人が頑固一點張り當世にむかないやうな氣がして)さればとて全然斷はるのも未練今は兩方のまん中に迷つて煩悶して居ます年は廿四、人世の春もくれがたいつそ思ひきつて結婚したものでせうか或は氣をながく時節をまつがよいでせうか。(村雨女)

(答)　貴女は獨身生活をする人でない、貴女の決心位では到底獨棲して終りを全ふするとは出來ない、廿四歳と云へばまだ晩婚と云ふ程でないに早や既に孤獨の淋しさを感ずるなどゝ自白されて居るではないか、所天の候補者が頑固で氣が進まぬと言はれるが、頑固の中には賴母しい堅實な所があるもの若し新教育ある貴女が内助者になつて行つたら屹度幸福な生涯が送れます一體氣永く時節を待つとは甚だよろしくない女に取つて容色は慥に婚資の一つである、鬼も十八といふ諺もある二十歳前後が女の花である、只何と云ふとなしに今少し良縁が、最少し佳い婿かと、一日延しに延ばせば反對に大切な花嫁の看板、櫻の顏色はそれ丈け褪色するとゝなり、貴女の希望はいよ〳〵遠ざかり行きて、果ては思ひも寄らない所夫を持ち世間の物笑ひとなると、世に自惚れ強き婦人の末路に往々ある例しである、で危險極る獨棲思想などは宜しく放擲して折角結ばれつゝある縁を取逃がさぬやうになさるがよろしい。

(問)　私は明治九年の五月生昨年來主人は腦症に罹り未だ服藥加養中小供は三十年一月生の男子一人ですが保養の義務有る兩親(母は繼母)と少し不具の弟がある混雜の家庭で有升が此後の運性は如何でせう(なごやもの)

(答)　成程複雜な家庭です、從て主婦たる貴女の責任が重いですが、運性は良好であるから御安心あれ、第一男子を授つたが何よりの天慶です、良人は輕症であるから全快は勿論ですが腦病と云ふやつは一旦全快してもドウかすると再發し易い、再發三發となると病勢は次第に重惡になり行くものであるから今後は妻たる貴女の注意が大切です、又不具者は一方に缺けてる丈け他にすぐれた長處のあるものですから、其長處をよく發揮して有用の材となすは、これ亦貴女の指導に依るものです、世の繼母は何にかと意地惡く繼子に當

り散らす習ひなれど、貴女さへしつかりとして居ればまづ衝突はなく家庭は平穏である、序に注意して置きたいのは貴女將來の運、不運は一に一人息子の成育にあると考へます。

（問）　私は當年二十六歳に成升少々病身の上何事にても誠に苦勞を致升其れに良人とは八年もつれそい升が誠にいろ〳〵心配ばかり致升子供も女子の子二人御座升るゆゑ何ほど苦勞致ても子供が成人致までは無事で居度く御座升ゆゑ其までは命が御座升か何卒御判だん被下度願升。（赤坂苦勞女）

（判）　貴女の天壽は六十歳以上です娘子の成人所でなく慥に孫の顔も見られますとは予保證して置きます、貴女の不健康は結婚時期に何か多少異狀があつたに違ひない、月經閉塞後、先づ四十歳より先きになると病ぬけのしたやうに健康體に復します、先づそれまでは柳の枝に雪折れなしと云ふやうなものでブラ〳〵して居ても心配するに足りない。併し不攝生で激性な流行病に冒されたら危險ですから隨分御用心あれ、九星の法から云ふと貴女の本命は二黑土であるから天禀の病性は心經病、肺病、胃病の類で內氣であるから心配が絶へず氣苦勞が多い、此性を受けた人は誰に限らず男子でも多少はその氣味で中には自分で苦勞性と知り苦勞は身に毒と知りながら心配せずに居られないと云ふのがある、斯うなると物が無ければなくて心配有ればあつて又心配すると云ふやうな次第で、年が年中心配しつゞけ

て終に我ながら天壽を縮めるとゝなるのです、役にも立たない取越し苦勞をせぬが何よりの身保養です。

（問）　私は廿四歳ですが不幸にして十九歳の時母に逝かれ父は勤めの身弟等のある事ゆゑ萬事に不都合多き爲めに伯父なる人の家に勸めらるゝがまゝに同居して厄介になつて居ます一昨々年良緣ありまして既に定まる處でしたが生憎露國との平和破れ豫備士官として召集されましてそれゆゑ軍籍に在る身の生還は期せざれば出征なすにも氣がゝりで困るからと固く申入れられ父も尤の事と承知し其話は全く中絶となりまして其年の七月遠征の途に上り十月松樹山の戰に終に不歸の客となりました、素より覺悟の上とは申ながら不甲斐なき身の坐ろに運命の敢果なきをかこち、、、、、、、、、、、、、、、、、自活の道もつけたくと思ひますが長上の者が肯きまんから據處なく當分は何事も運命のなすまゝに打任せむと考へて居ながらもそれのみ氣遣はれまして日々苦心致して居ます如何で御座いましよう。（千葉縣いと子）

（判）　婚約の殆んど出來て居た意中の良人が戰死されたので失望落膽世の中を悲觀して居られるのは予も一應同情を表するが、斯う云ふことはよくある話で逃がした魚の大きかつたと思ふやうなもの、併し出雲の神はそんな惡戯をされるものではない。結ばれて居たと思ふは人間の淺墓な考へ我が田に水を引の理で、その實最初から結ばれてゐない緣である然るに我が掌中の珠をなくしたやうに何時までもくよ

〱物案じて不景氣な顏して居るは誰にも附かぬ話である、斯くては此の次に眞正の良縁が來ても不景氣な顏を見て逃去るか知れぬ、殊に貴女は母親を失ひ伯父の處へ同居されるなど是れまでは幸福な境遇とは云へないが、その不幸が却て幸ひとなつて普通の女子の及ばない修養も出來てるから、よき良縁があつて將來は好運であるとは卦象で歷然と見えて居る計りでない、第一その事實を何人も認めて居る所である。

貴女が母親に訣れた時分十九歲、今年廿四と云へば足かけ五年の間は亡き母に代つて主婦のとをされて居る之が一つ、又その間少弟がおありなさるので母の務めをなされたであらふ、之が今時の學校育ちでありますみれの星のと云つてる仲間では夢にも望むとの出來ない經驗でありま す、次は伯父上とは云へ他人の方へ同居されたので、世間の甘いも酸いも能く解つたでせう、之が貴むべき經驗の二つ、今一つは戰死された意中の良人へ心中立、果ては自活の道もつけたく思ふと云ひなさる貞女氣質、甲と握手しつゝ乙へ秋波を送り此方で首尾惡しくば彼方へと二道かけるが當世女學生流、そして煩悶で候のと私へ御忙の申込み、貴女の如きは今時の女子に珍らしい處女氣質、この三つの特殊の善事がある、貴女の如き配偶を得た男子は此上なき果報者なり、良縁のあるを疑ひありませんから取越苦勞せずに運命のなすまゝに打任せなさるが肝要です。

（問）妾の夫は四十歲にして有望の官職にある人に候へども性質篤實ならざるのみならず酒色におぼれ放蕩十年如何なる人の諫言致し候ても用ひず妾はあらゆる苦艱をなめつくし婦道を全ふせんと覺悟いたし候へ共如何にもたへがたく今は神經病にて實家へ歸り靜養致し居候つく〲行末を案じ候へば一子なき身の一しほ心細くむしろ此際離別申込まんかと考へ居候がそれとも又苦しみつゝも辛棒いたし候方幸運なるや。（苦勞女）

（答）二十歲前後の放蕩亂心は改悛の期はあれど、三十歲經へての放蕩は先づ百人が九十九人まで改心の期がありません、その常識を缺き道德の制裁を無にせる所を見れば一種の精神病者に相違ないのである、所で巣鴨病院の厄介にならずと濟む丈けがせめてもの仕合とあきらめなさるがよろしい、此種の病氣は父母の慈み君主の威も何等の甲斐がない位であるから況して微々たる婦人の力の及ぶ所でない、たゞに勞して功のない計りでなく却てその身を傷ふやうになるのです、故に向後亂心の所夫に對しては精神病者の看護婦として、成るべく患者の氣を向へて病勢を募らさないやうに看病するより外に道はないのである、さて所夫が不治の病氣に罹つたからとて己が將來の幸、不幸を打算して進退を決するなどは我邦婦道のゆるさゞる所であるから、予はその可否の一言に付て天機を漏らすを御免蒙る、併し思へば患者は尋常一樣の病氣にあらず、又盲目とか聾とか啞とか跛とかのやうな肉體上の不具者を世話看護する

と異り、四六時中精神上何等の慰藉のない貴女の境遇には予測殿の同情を表す、篤と御思案あつてその道を踏違へぬやう祈ります。

(問) 私は女學校を卒業してから高等師範の試験を受ける事が今年で三度、其れで今度も亦不合格に終つてしまひました。實に面目なく恥かしくて先生や友達にも、顔向けもなりません。どうしたら少しは此の恥を雪ぐ事が出来るでしやう。親達はもう此の上勉強する事を許しません、それ故今、家に居つて家事の手つだひをして居ますが、何だか、つまらなくて、しやうがない、で、苦學をしてみ様かと思つた事もありましたが、私は誠に、決断に、乏しい、人間で決心がつかず迷つて居ります。(恥雪女)

(答) 戀愛は人生の目的にあらず、或事情の為に獨身で暮したいとは例の失戀的一時の出来心でせう、さて女子が獨身生活をなすと云ふとは、身不具にして配者を得るに由なく為に特殊の技を研きて渡世するとか、又非常の場合に遭遇し非常の大決心ある婦人が餘儀なく採るべき危道であつて、普通人の踏むべき道ではない、高等女學校を卒業されたとあれば教育は先づ十分、又高等師範を志願したが試験に不合格で恥しいと、それは天の警示であるから、不名誉でも何でもない、つまり女相當の年配に及んで結婚し女子の天職を完ふして両親を安心させよとの天の警めである、女子の二十歳は男子の三十歳最早や分別盛りで迷ふてる時ではない。天の指導に従つて両親に孝行なさるが一番である、本年中に良縁あらば華燭の典を擧げらるゝことを勧告する。

(問) 私の嫁ぎましたは此一月、夫は當年廿五歳今時の青年ですから多少の理想や希望を持ては居ますが、何分父親が永の病ひに財産もなくなり、今は小會社に雇はれて僅かの給料で一家四人の糊口を致して居ります、私の意志のよわいせいでせう學校の友達が學士に嫁き金持に嫁きしを聞く度にうらやましくて自分ながら不運の様な氣がして皆様に御目にかゝるが面目ない様です、どうでせうか良人は出世をするものでせうか。(想夫女)

(答) 財産と婚せず、地位と婚せず、人物を撰んで有為の青年と婚せられた貴女が、その精神をこめて氣永く内助せられたなら、良人は確實に成功致されるは疑ひなし。

(問) 私事誠に不運の身にて六十路をこゑながらいま以て他家へ奉公致し居候處幸に身體は健全これより一ツ奮發して一家をもち商ひを初めたらばと存じ候處故郷に歸るがよろしきや當地にて暮すがよろしきや迷ひ居候に付何卒御判じを(六十六歳女)

(答) 老後の思ひ出に一奮發とは實に我が女性の強み双手を擧げて祝福します、併し六十路を越えて他所へ勤め奉公して入らつしやるを其儘に見て居る親類縁者では故郷とても頼み甲斐なきことである是れに反して實體に勤めなさるからでもあらふが、高齢の老婆を心よく雇ひ與るゝ主人の情も思ひやらるゝである、遠き縁者より近い隣

りと云ふ諺もあるから、開業は他郷より情ある現在の所が比較的有望です。

（問）妾は別けて親しき二人の友があります友はたとひ東西にわかれて居ても一生親友で居る事ができますが又父母兄弟にもあかしがたい秘密を話してもさしつかへありませんか。（氣持女）

（答）親友と云へば假令千里萬里離れて居やうとも、十年二十年訣れて居やうとも互に心に許したとは變るべき筈でないから、昔から刎頸の友と呼び其交り金を斷つとも謂つてある、故に其間一點の疑ひを挿しはさむ餘地はありません、貴女と友達との間には氣掛のある丈けそれ丈け交が淡いのであるから眞の親友と云へないであらふ、一旦口外すれば駟馬も及ばずですから、大事の秘密は先づ話さらない方が安全でせう。

（問）私は當年二十三年これまで求婚があつても相當の處なく只今或る商人より望まれましたがいかゞでせう私の朋友は一人も殘らず緣付てしまい只私一人のみで實に恥かしく顔向も出來ず何とぞ御判斷を。（長野心配女）

（答）緣の早きが仕合せでもなければ緣の遠きが穴勝不幸と限るべきでなし、早婚の爲に夫に訣れ遺兒を抱きて泣くものもあれば、又離婚となりて再嫁に苦勞するものも少なからず、東京などへ出て御覧なさい三十歳前後の處女は澤山あります、所謂オールドミスが横行濶歩して居る、何もくよ〳〵案ずるには及ばず、心靜に結ぶの神の御手をお待ちなされ、只今話の掛つて居る方面は天啓堂は先づ眞好と斷ずるから、能く聞合して氣が進めば取結ばれてよし。

（問）妾は今年十八歳ですが何にも心のまゝになりません格別音樂を好きますがそれとて十分學ぶ事が出來ませんから何を學んだら生涯無事に世を送る事が出來ますか御判じ下され。（困女）

（答）生涯無事に渡世出來るものが習ひたいとのこと、發問狀の筆跡や墨色を見ても女子普通の教育は先づあるやうですから、此上は御飯の炊き樣、破衣の繕り樣を稽古なさるべし、「藝が身を扶くる程の不仕合」とて藝術を頼みて安樂に暮さんとの考は宜しからず、婦人の天職は家庭の主宰たるに在るとなれば、結婚前に一ケ年位、確實なる家庭に見習奉公して實地に世帶の持樣を研究さるゝがよし。

水邊藤　　山形　登坂周子

杖とめてひとりゑみ居る翁あり藤なみうつる池水のべに

猫　　仙臺　小山田みどり

そられする小猫のくびにふさわしき玉子の名札紅筆のあと

折にふれて　　越後　松永松葉子

若草の廣野に駒をかけ入れて月のおぼろ夜笛吹きてみぬ

播磨　富原愛子

春風の靜かに吹きて打ち招れく柳の陰にいざやすらはん

周防　西村恒彥

あい流す紺屋か背戸のせゝらぎに散りてながるゝ桃の花かな



史傳

婦人立志の礎

白鷺生

志を立つるは成功の首途にして堅忍不拔の精神は前程の指針なり、斯くてその進路さへ履み違へざれば女性なりとも敢て男子に讓らんや、古來技藝、文學、其他百般の事業に女子が成功の名譽を博せし事例乏しからず、されど女性天來の職分はと云はゞその母として將た妻としての成功にあるべし、是れ古今、東西を問はずその軌を一にす、彼の女博士ローラ、マツヤ、キヤサリンが天下の名望を一身に牽引したりしは、その有髯博士を後ろにして天晴れ橄欖の冠を戴きたる學識の力のみにあらずして、その一半は彼女がドクトル、ヴエラチー夫人として淑德の高かりしに由らずんばあらず、抑も女子教育と云はゞ即ち賢母良妻を意味す、吉田松陰曰く『有二節母烈婦一。然後有二孝子忠臣一。於二楠、菊地、結城、瓜生諸氏一吾見レ之矣。』と、されば幾多の女性が發揮せし馨ばしき成功の事蹟を尋ねて、茲に花の如き學生諸孃が將來の成果をトするの資となさん。

▲圓滿なる婦德の發揮

ヴヰクトリヤ女皇

オスポルンの一僧が廢兵を慰問せばやと思ひ立ちてその家に至れば、我より先に荒廢せる家の病床にありて慰藉せる老婦人あり、僧は最早我れ行かずともよからんとてそのまゝ引歸さんとしたるを、件の老婦人は僧を顧みて『やよ、我身祈禱は尙殘れり妾は御僧に

乞ふ處ろあるべし」とて、やがて席を讓りて去りぬ、跡には褥上一卷の聖書ありて病者を慰むべき文句すら選び定めてありたれば、世には又斯くまで親切なる人のあるものかなと、僧も限りなく感歎したりしと云ふ、この老婦人を誰とかなす、これぞ大英國前女皇ヴヰクトリヤ陛下なりき、斯くてこそ民を赤子と見そなはす國母の仁慈を仰ぎ奉るべけれ、女皇は十八歳にて即位あらせられ、越て一年鳳齢十九歳にて皇婿アルベルト親王と結婚し玉へり、女皇が人の妻家庭の主婦としての平生の信仰如何なりしやを聞くに、家庭生活の樂は如何なる境遇如何なる階級に在るものと雖も之を享有すべきものなりと、云ふにありしと、その皇婿に對せらるゝや最も柔順にして九重の雲深き處、和氣常に靄々として幾多の皇子皇女を擧げられ、現皇帝エドワード陛下は實にその第一の皇子におはしぬ、又女皇が家庭教育の主義とせられしは、教育は先づ卑近なる日常の家務より導くを可とす、兒童は勉めて兩親に模倣せしめ何事もその命令に服從せしむるを要すと、エドワード陛下が明君の譽れ高く能く下情に通せさせ給ひて聖德の目出度は遠くこの女皇の教訓にありと知るべし。

▲誇り得る寶玉は二男兒

ガラスの母コルチリヤ

コルチリヤは羅馬の名士グラカス兄弟の母なり、曾てハンニーバルの鋭鋒を挫きて羅馬の社稷を累卵の危より救ひたる名將スシピオに嫁せり、スシピオ薨じて十二人の遺兒を擁して寡婦となれり、時に埃及王ドレミー遙にその賢を聞き迎へて皇后となさんと云ふ、而もコルチリヤは吳竹のすぐなる貞節を守りて貧苦に安んじ、只管子女の教育に任じ、敢て富貴顯榮の爲に動かざりき、然るに天この賢婦を試煉せんとにや、昨日は一男を奪ひ、又今日は一女を取り終に生存せるものの僅に二男一女となる、流石氣丈のコルチリヤも涙の乾くひまもなかりしとなん、斯くてその悲歎の中にもその子の教育は苟且にせざりき、一日カムパニヤより

一貴女來りてその携ふ所の寶玉を示し、コルチリヤにもその秘藏の品を示さんことを求めたることあり、コルチリヤ直に立て次の間より其二男を連れ來て、是れ妾が誇り得る我家の寶玉なりと云へりとぞ、後年史家プルタークは特筆して曰り「コルチリヤが彼等を教育せしや懇篤熱誠至れり盡せりと云ふべく、彼等は名家の血統を受け天稟の才能、他そ羅馬靑年を凌ぐものありしとはいへ、その完全なる人物となりしは主として母の教育の力にありし」と云へるもの以あるなり、二子長じて令名あり母に先ちて共に國難に殉ず、コルチリヤが誇りとせし家寶は果して玉碎して長へに輝きぬ、此賢婦人の墓碑はその生前に立てられしが題して「グラカスの母コルネリヤ」と刻まれき。



▲眞個の家庭女王

ワシントンの母メリー

北米合衆國の建設者ジョージ、ワシントンの生母をメリーと云ふ、ジョージを頭として四男二女を抱きて寡婦となれり、ジョージ時に年僅に十歲、人生十歲迄の教育は母の責任、十歲より丁年までは父の責任とせるを、メリーは母たる任を盡くしたる上に又父たる任務をも盡さゞる可らざることなれり、ワシントン常に曰く「父のことは殆んど我が記憶に存せず唯その容貌と愛情とが朧ろ氣に眼底に殘れるのみ、我が運命、我が名譽は總て是れ慈母の恩賜に外ならず」と、果した然らんにはメリーは重ね〲の責任を遺憾なく全ふせ

し世に珍らしき賢母なりしとこそ云ふべけれ。

ワシントンが總督に推されて英軍と對抗するに當りてや、米軍屢々利を失ひ、國民安き心もあらざりしが千八百七十六年の末、米軍デレウエア河を渡るとの捷報來るに及びて、さしも絶望の谷底より一躍して希望の絶項に飛び上れるが如き心地して、孰れも手の舞ひ足の踏む所を知らず、メリーの隱家を叩きて祝詞を述ぶるもの踵を接す、メリーも流石に欣然の情禁ず能はざりしが、衆くの人が諸方より到來せる感謝狀を朗讀して頻に行軍の功績を激賞するを聞くに至りてや、メリーはこれを遮りて『各位そは餘りに過賞ならずや、ジョージは妾が曾て敎へ置きしことを忘れざるべし、如何に稱揚せらるればとて自己を忘るゝことなけん』と、旨ひ諚言や、又七年の戰雲漸く歛りて千七百一年目出度く凱旋の途につくや總督は徒歩して母が茅屋を尋ねたれば、メリーも喜び出て迎へけるが、總督の面上幾筋の皺を增せるを見て、多年心勞の程を察し先づ其健康を問ひ、それより舊時を話し古き知友の消息を語りしが、一言半句も此回の勳功には及ばざりしと、又ワシントンの股肱として獨立戰爭を助けたる佛國の將軍ラファエットが本國へ歸るに際して、その告別の辭を述べん爲めにメリーをその村莊に訪ねて將軍の偉大を物語りしければ、メリーは『妾はジョージが爲したることを驚かず、彼は常に極て善良なる男兒なりしかば』とて、ワシントンの幼時を語り少時を語りその孝順を語りたるも、國家救濟の功績に對しては全く沈默なりしと云ふ、此二三の逸話にても如何にメリーが賢母の面影ありしを伺ひ得べし、要するにメリーは何處までも家庭の外に出でざりし、斯くてこそ婦人は家庭の女王と仰がるべけれ、その墓標には單に『ワシントンの母メリー』とのみ刻せしめたり、實にワシントンこそ恰好の紀念にして大米國の長久ならん限りは長へに其偉大を仰がるべし。

▲歳寒ふして松伯の後に凋むを知る

榊幸子刀自

醫學博士榊俶、同博士順次郎、同博士緒方正規氏夫人小梅子、同博士岡田和一郎氏夫人とし子、醫學士榊保三郎氏等刀圭社會に名望ある紳士とその淑女たる人々の母堂はその名を幸子と云ふ、父は山田一郎とて劍術の達人にして兼て醫を業とせり幸子少ふして德川御三卿の一なる淸水家の奥に仕へお末より上りて御使番の頭まで進みけるが、こは實に當時異例の出世と稱へられ、その素行はいつしか邸内奥女中の模範となれり、二十七歳にして舊幕臣榊綽に嫁す、當時に在ては稀有の晩婚なりしを以て幸子は心密に結婚を斷念し居たるを再三の懇望默し兼ねて遂に華燭の典を擧げたるなりと云ふ。



當時榊家は家計豊かならざるさへあるに良人綽は未だ杉田梅里の門に蘭學を學べる學生時代にて家事を顧みるに暇あらざれば、只さへ幸子が心勞の多きに剩へ腹黑き義弟は姑と心を合せて家宅を横領せんと巧み、果して良人綽を亡きものと爲し兼ねまじき勢ひなれば、如何なる椿事を引起さんも圖られざりし程に間に立てる幸子の苦心や想像の及ぶ處にあらざりける。されど尋常の場合にあらざれば幸子は良人に勸めて一先づ家を遁がれしめ、留守は五歳の俶と、三歳の順二郎とを相手に自ら守り、殊に其當時今の緒方夫人小梅子を始め

る頃なりしかど、常に一口の懐劍は肌身を離さず、又萬一のヿもやと書置まで拵へて、如何なる嚴談も事とせず孤城を守れる心にて在りたりき、或時の如きは義弟が容赦なく頑是なき順二郎を取て押へ白刄を胸先に突き付けて刺殺さんづ擬勢を見せ、斯くても尙此家を立退かざるかと嚴談に及びし事もありしが、幸子は罪なき子供を殺してまで此家を乘取らんとせらるゝは何たる心ぞや、されど良人の留守を預るその間は縱令此身を害さるとも此處一寸も動き難し、もし無法にもこの兒の命を取らるならば取つて見られよ、妾も武士の妻なり我子の敵いかでそのまゝ見逃すべきやと、用意の懐劍拔き放ちて隙やあらんと身構へたり、一念凝つたる覺悟の前、敵も容易に刀を下し兼ね手持無沙汰にありけるが、そのまゝ其處を出たれば稍々事なきを得たりと、以て如何に迫害の甚しかりしかを知るべし、かくて孤城を守れるヿ半年に及びしが、其間は三度の食事も人並に取るヿ能はずして、大抵は握飯にて飢を凌ぎたりとなん、その間に人ありて中に立ち、穩なる談判の下に母なる人にその家を渡したり、その後胎内の小梅子が八ヶ月となりぬる頃、良人綽氏は幕府開成所の教員加藤弘之、神田孝平、田中芳男などいふ人々に取立てられ、其の所員となり旗本に進み始めて祿百俵を賜はるヿとなりて、生計もやゝ裕になり別に一戸を構へ、久々にて食事に箸を取るヿとなりしと。

斯くて幕府は瓦解となり開成所は明治政府に引繼がれて大學南校となりしが良人はその後明治五年海軍學校に教鞭を採れる頃となりても猶『握飯の榊』てふ名を得たる程の儉約家にして粗衣粗食に甘んじ、只管子女の教育に充てたる程なれば、幸子も同じ心に數多の幼兒を抱きながら針仕事をも他へ出さず、髮も自ら結びてその費を汰き、小兒を相手に下女も雇はず甲斐〳〵しく立働き、幾十年一日の如く毫も良人をして内顧の憂なからしめ、世に羨まるゝ計りの學才、賢智の良子女を育てたりき、實に良妻賢母の鑑とは蓋し幸子の如きを云ふならめ。

▲肉體死すとも精神は活く

ナンシー、リンコルン

米國歴代の大統領の中にてワシントンと並びて二大人傑と稱へらるゝアブラハム、リンコルンは、六歳の時其父を亡ひ、貧しき中に母の手一つにて育てられ、山に木を樵り川に魚を漁りつゝ、見る影もなき中より大成したりし人なり、賢母その名をナンシーと云ふ、これ尋常一樣の婦人ならで、その體格は堅固にその品性は飽まで高く、常識に富み、注意心深く、且つ最も宗敎心に厚かりき、又特に讀書の癖ありて、書は見るとして讀まざるはなく、讀で心に銘せざるはなかりしと、後にリンコルンも『己が最も古き記臆は姉と共に母の膝下に坐して物語を讀み聞かせられたるとなり』と云ひたりき、良人なく、家產なく日々の糊口に迫はれしかば、女ながらも獵銃の使用を覺えて深林に熊猪を狩りしとすらありけるとなん。

賢こきナンシー、リンコルンは天命極めて短かく僅かに三十五歳を一期とし幾多の愛兒を遺してこの世を逝りぬ、アブラハム時に僅に九歳、されど肉體は死すともその精神は活きたり、彼女が『天を指して輕々しく誓ふ勿れ、杯を唇に觸るゝ勿れ、決して言を食む勿れ』てふ三ケ條の敎訓は十歳未滿の小童の膽に銘せられて後日の成功を指導せり、以て如何に賢婦人が感化の偉大なるかを知るに足るべし。

▲死後二百餘年再び花を咲かす

コンジォ公爵夫人

死後二百餘年を經て詩文集世に出で再び死後の芳しき芳を咲せたるはコンジォ公爵夫人ヴエロニカとす、ヴエロニカは以太利の伯爵家に生る、若うして二人の嬰兒を抱きつゝ寡婦となりしが常に黑帽を戴き黑服を纏ひ再び仇し色を附けず、專ら遺兒の敎育につとめ、育兒の餘暇に文學を修めぬ、されば死後の芳名いや優りて稱へらるゝも理ぞかし、その一男は智勇無雙の將軍となり、次は學德兼備の善知識となり、共に世に仰

がるゝの成功を見てやすらかに晩年を終りけるぞ目出度し。

▲成功せる交際家は姑の母

マヂソン夫人

ドーリ、ペーンはセームス、後のマヂソンの夫人なり、マヂソンがその內務卿としてワシントン府に入るや、首都交際場裏の立物は實に此夫人なりき、されば大統領ゼッフェルソンの娘の不在なりし間は白館の內に住ひしこともありき、後年良人マヂソンが第四番目の大統領に擧げられ次で再選せられたる時の如き、夫人の內助、交際裏の働き與て大に力ありき、マヂソンの老母は九十五歳の高齢にして猶手に卷を放さゞりし讀書家なりしが、或人の問に答へて『有難き事には妾が目はいまだ不自由を感せず晝間は大抵讀書に耽りつゝあり、されども四體は弱くなりて力なければ、萬事嫁の世話にて活くるなり、今では彼女が妾の母なり優しくも萬事に氣を配りて不自由を感せしめず』と。

▲文學の成功は貞節の賜

マンフローン夫人

以太利國に生れ女性ながら文學界の一明星と仰がれ其書翰集は出版せられ、斷簡尺牘までも珍重せらるゝまでの成功者を誰とかなす、ゴンザカ、マンフローンなり、ゴンザカは年尙二七に滿たざりし頃、頑固なるその親は嫌がる少女を壓制してジョン、ポール、マンフローンに嫁せしめたり、而もその良人は不身持なりしかば新婦に對して冷酷を極め、目出度かるべき結婚式にも泣き、甘かるべき蜜月にも嘆き、樂しかるべき新家庭の裡にも涙に暮れして憐れむべき境遇なりき、されどゴンザカは心に染まずとも一旦良人と定りたれば徒に身の薄倖を嘆き暮らさず、さては己を殺して我が運命に安じ良人大事とかしづきたり、然るに所夫マンフローン一朝フェララ公を斃さんとの隱謀露見して入牢の身となり、剩へ死刑の宣告を受けたりければ、夫人の悲歎極りなく、有らん限りの力を盡くして救濟

の道を講じつゝあるうち、所天は遂に獄死をぞなしにける、西俗再嫁を許して咎めざる習ひなれば、未亡人が未だ年若うして而かも才媛の身なりければ再縁を勸むるもの尠なからざりしも夫人は「良人に別れて歎きの去りやらず涙ださへ乾かざるに新夫に見えよとは如何なる心なき方々ぞや、再婚は不貞節とは聞きつるを、妾は再び夫は持たじ、耶蘇基督の外には夫を持つまじ、唯基督へ妾が今後の生涯を捧げん』とて道心頗る堅固に一生を終へたり、その文學は未亡人が一部の嗜好の成果なりき。



▲春に魁くる梅花は氷雪の迫害に甘んず

鈴木マサ子女史

今日一葉の免狀を握らば往くとして衣食に事缺かざるまでに盛況を呈せる看護婦も、是れ初期就職の女性が有ゆる苦心の賜なるべし去る明治十六年の頃慈惠病院長高木男の主唱にて同病院内に始めて看護婦養成所を設け米國セントトーマス病院の看護長ウエッチ孃を聘してその教授を託したりしが、その時通辯たりしは故鈴木陸軍歩兵大佐の未亡人マサ子女史なりき、其後明治二十年大學第一病院内に

看護婦養成所を設くるに及び、マサ子女史は再び生徒取締として雇はれ暫し勤續したりしが、廿四年の頃退職して私立看護婦會の創立に盡力し遂に日本看護婦會を組織して廣く社會の需用に應ずるに至りたり、今日衛生事業も發達し病院の整理等行渡りたるに從て、專門の看護婦を要すると益々多く、又普通の病家にても病人の介抱は看護婦に限るとを知るやうになり來りたれど、鈴木女史が大學病院を退きて看護婦會を組織せし頃は未だ世間に看護婦の必要を知らざるのみならず醫師仲間にありてすら看護婦には學問を修めしむるに及ばず在來のものにて澤山なりとの考へを懷き居たることゝて、女史に向て種々惡聲を放ちて聞くに耐へざる噂をなしたる程なりしが、女史の決心は彌堅く四方より蝟集し來れる罵詈非難の間に立ちて毅然として動かず專心看護婦會に盡力せし結果、玆に女史が先見誤らず盛況を呈するに至れり、さて女史をして斯くまで決心を堅からしめたる動機とも云ふべきは、女史が故良人鈴木大佐が病に罹りたる時付添人として仙臺の衛戍病院に入りたるに、病める大佐を取扱ふものは孰れも荒くれ男のみにてその松の木の如き頑丈なる手にて大佐の起臥を助けたる程に、傍に見てありし女史は膽潰るゝ心地して幾度か手に汗を握りしとありしが、斯くて大佐は遂に不歸の客となりたれば、女史は深く此事に感じ女性の優しき手をもて病人の取扱をなしたらんには、如何に嬉しく感じたりしならんなど思ひたるよし、是れ女史をして大成せしめたる素因なりしと。

伊太利三傑の夫人

百島冷泉

婦人の戰場は家庭にあり平和の社會にあれど、時としては英國を打攘け、佛國を救ひし彼の女丈夫ジャンダークを學ばざる可らざることもあるべし。身を一漁夫の家より起して、伊太利建國の大業に與かり、カプルー、マーヂニーと並び稱せられて、雷名世界に隱れなきガリバルヂーの夫人、アニタ、リヴエロは良人に

愧ぢざる稀世の女丈夫なりき。

アニタは一八二八年を以て南亞米利加サンタカザリナに生れぬ。此地熱帶に屬して文化進まず太古の風を存せしかば、住民淳樸の風を失なはず、旅人此地に來れば設けある室にツト通り、呼ざるに家僕來りて靴をぬがせ足を洗ひやり、斯て幾日なりとも隨意に滯在し、去る時は一片挨拶の言もなくて直ちに出で去るの習あり。其民の古朴なること推て知るべし。アニタは此間に生れて特に教育を受けず、遠く濁世の塵を離れて天女の如く生ひたちぬ。時にガリバルヂー恰かも二十六歳已にサボイ遠征の擧に與みして死刑を宣告せられ、密かに本國伊太利を脫して南亞米利加に逃れ來り、當時ブラジルに對して革命の旗を飜へせるリオグランド共和軍を扶けてイタバリカと名くる一隻の軍艦に乘組みてサンタカザリナの海岸に碇泊し居れり。一日ガリバルヂーは望遠鏡を取りて遙かに濱邊を望み居りしに丈高く手足しなやかなる痩形の少女の黑髮長くさげたるが、井戸に水汲む姿彷彿として目にとまりぬ。此れより日々望遠鏡を以て、其の少女を見るを例とせしが、此の優しき小影は如何にガリバルヂーの心魂を動かしけん、終に意を決つし小舸に乘じ、直ちに彼少女に逼ひて、「御身は吾妻となり玉ふべし」と言ひ出たり。此ぞ南米の女丈夫伊太利の英雄と緣を結ぶの始にして、之より殆ど十餘年アニタは劍火飛び砲彈轟くの時に於てすら、曾て夫の傍を離れず、其良人をして「余は眞に隱れたる寶を見出せり」と云はしめし程、婦人としては眞心深く、妻としては貞實に、母としては愛情いとも深かりき。

アニタ、ガリバルヂーと婚して後幾何もなく海戰に遭る時、ガリバルヂーは危難のアニタの身に及ばんことを恐れ、再三之に勸むるに上陸を以てせしも妻は頭を掉りて從はず、飽で其良人の傍にありて死生を共にせんことを望みたりき。已にして戰はじまり、落る銃丸霰の如く、忽ち轟然たる一發の砲彈は甲板の上にありし水夫二人とアニタを斃しぬ。ガリバルヂーは之を見て大に驚き、直ちに馳せて甲板の上に至れば、

アニタは幸に微傷をも負ずして靜に起き上りぬ。ガリバルヂー今は堪へ兼ね、無理に勸めて甲板を下らしむ。其時アニタは靜に答へて曰く「さらば下り候はん、されど隱れ居る卑怯者等を驅り出す爲にこそ下り候はむ」と、暫くしてアニタは果して右手に白刃提げつゝ、逃げ隱れたる髭のみいかめしき水夫等を驅りたてゝまた甲板に上り來れり。ガリバルヂー之より深くアニタの勇氣を信じ、爾後屢々托するに軍隊の指揮を以てするに至りたりき。

されどリオグランドの共和軍の軍勢日に振はず、ガリバルヂーの勇を以てしてすら、尙防戰すべからざるに至り、ガリバルヂーはアニタを免かれしめんがため、之を陸上なる共和軍の將官の許に遣して援兵を乞はしめしが、共和軍の將官はガリバルヂーの許に援兵を送ること能はず、且陸上に止りて使を以てガリバルヂーに復命すべき約あるのアニタは危難を顧みずして歸り來り、須臾もガリバルヂーの傍を離れんとせざりき。此時敵の砲撃益々激しく、兵士の大半は戰死し、如何とも爲る能はざるを以つて、ガリバルヂーは終に意を決し、自ら船舶を焚いて退くに至れり、此間勇敢なるアニタは、小舸に乘じて軍器を陸上に運び、彈丸雨飛の間を往復すること殆ど二十回に及りと云ふ。

かくて共和軍は防戰すべき勇氣を失ひ、漸次リオグランドを指して退却しレヂスは新に戰鬪線の中心となれり、アニタは陸戰に於ても、常にガリバルヂーに隨ひて馬に跨り、須臾も其傍を離れず、部下を見ること殆ど姉妹の如く、負傷者には自ら繃帶を施して懇に之を看護したりき。此時ガリバルヂーの部下は四十餘人に過ぎざりしが、此間に於てアニタは一子メッチをロスパストスジロンの牧舍に生り、然ども嬰兒を包むべき被服すらなきを以て、ガリバルヂーは之を得んが爲めに洪水を冒し、馬を馳せて遠くセッチリブリナに向へり、敵はその留守の間に此の隱家を知りて、一隊の兵彼等を捕んとて不意に襲ひ到りぬ、されど氣丈のアニタは此を知りて未だ二週にも滿ぬ嬰兒をかき抱き身を躍らして馬に飛び乘り、驀地に馳けて林中に逃れ、

ガルバルヂーの援を得て歸り來るまで饑へ凍へ雨にさらされて林中に潛み居れり、イオドランドの戰爭の後は、雨降りしきりて全地沼の如く人馬往々土中に沒する程にて其苦難非常なりしが、ガルバルヂーは馬上に三月の嬰兒を手巾に包みて吾首より懷につり、軟かなるその手足を己が呼吸にて温め、アニタも亦只その兒を氣遣ふの外一語の吾苦を訴ふることなかりし。

後アニタとガルバルヂーとは共和軍の本營たるサンガブリエルに向へり、されど此後幾何もなく、ガルバルヂは本國の形勢を窺はんがため歸休の許可を得、長途の旅行をなして漸くウルグワイなるモントヴイデオに達し、此處に仲買人として僅に生計を營むに至りたりき。

當時幾多の伊太利人は難を避けてモントヴイデにあり、ガルバルヂーは由て之を集めて有名なる「伊太利軍隊」を作り、モントヴイデオ市民の厚意に酬ひんが爲め、屢々敵と戰ひて之を破れり。

時に密雲は恰も伊太利の天地を蔽へり、法皇政治の壓制は今や其極に達し國中の諸都府は四分五裂して各々憐むべき境遇に沈淪し、革命を叫びて起るの幾多の志士は或は遁れ或は捕はれ、人心恟々更に安んずる所を知らず、ローマよりコロンビヤに至る各都府の多くは武を以て雌雄を決するの準備をなすに忙がはしかりき。

而してモントヴイデオにありて伊太利軍隊を統率せるガルバルヂーは此時、彼のマーチニーより切なる歸國を促せる書翰を受取りぬ。即ちガルバルヂーは意を決し「伊太利軍隊」中歸國を欲するものゝみを採びて之を率ひゼノアの一商人より若干額の旅費を借りて紀元千八百四十八年、其勇敢なる妻アニタと共にモンドヴイデオを去れり。

時に伊太利の平和は終に破れぬ、全都府は忽ち劍光砲火の巷となれり。法皇政治は倒れて共和政治布れぬされどこれ瞬時の間にして佛、墺、の兵は已に國境に侵入し來り、一難更に一難を加へつゝあり。

此間アニタはガルバルヂーに隨ひて所々に戰しが、

終に伊太利の兵敗れて佛兵ローマに入るや復良人に伴なはれてローマを逃れ、辛くもアペンニー山を越へて九死に一生を全うし、ベニスに趣かんとして船をアドリヤチックに驅り、意を果さず船を復してラベンナの傍に上陸せり、後ガルバルヂー當時を追想して曰く、

「此不幸なる時に於る予の境遇は如何なりしか、予は之を人の推察に任すべし、予の憐むべき妻は將に死んとし、敵は勢ち誇りたる勇氣を以て、予の一行を逐ふて、益々濱邊近く押寄たりき。」

と、ガルバルヂーは身を以て僅かに免がれしも、憐むべし病に罹りて歩行意のまゝならざりしアニタは終に夫の腕に倚りつゝ二十六歳を一期として逝きぬ。折しも敵の追撃急にして葬儀を營む遑もあらざりしかば、其まゝ近傍の松林に假埋せり。後伊太利の亂平ぐに及び、ガルバルヂーは其子女と共に寺院に來りて正式の葬儀を營なみ、幾行の涙と共に柩をニースに移しぬ。

かくてガルバルヂーの半身たりし稀世の女丈夫アニタは其悲痛なる生涯を終れり。されど朽ざる名は其良人の大名と共に相並びて歷史に殘れり。

世態

人の非を數ふる癖

○お吉さん御めん△チナお徳さんか○今渦から歸つて來んだはナ△しよにんなもんだのう。最うちつとまつて。おいらといつしよに行つたがいゝはさのう○それだつてもこつちにもさんだんがあらアな△コウ—白酒をのまれ○何白ざゝ○おいらアしろざゝといふものをかぢつたことはれへ△そんならげびて白ざけよ○いやな事かな辛酒なら一升ばかりもひつかけよう△いやよ○いやよもすさまじいコウお雛さまをかざつたか△ムウ。これ見な　トてふあしのぜんの上へけし物細工の雛をかざりおく　△チナ〳〵かはいらしいのう。目の中へ這入りさうだ。チナ〳〵かはいらしい行灯だのう何だかむだがきがしてあるよ。ナンダ。うますなんなの。ヱヽト。何かし突もあはれなり。こりやアなんの事だ△ナニサ。うます女の雛かしづくもあはれなりといふ事だよ。御亭主さまが醉居てお夜あそばした○フウ。なんの事だのう。うますめとやらは馬の爪かのう△なんだかしれれへでもつたものよ。おいらアのもつとりつばにれだりていけれどのう。女の子はなしか。ソレ種なしといふもんだからしかたがれへはな○そりやおたけへだ。しかしむかし雛のふるびたやつをかざつてお

くよりも。此方が増よ〇そりやアさうだけれど雛店へ行て見るとほしくなるよのう〇おいらアうざ〳〵したはだか小僧や小人形はいられへから。舟月か玉山の五人ばやしがほしいよ△さう〳〵。そして外にも道具がほしいはな。舟月の五人ばやしと道具がそろはう物なら。なんにもれがひはれへ。うざ〳〵した人形はけつく邪魔だはな〇コウ〳〵お松さん所の雛さまを見たか△見た〳〵〇あのざまアみな。がうさらしな事な。ヘンかざられへ内はたいさうなほらをふいたから。おいらアよつぽどりつぱかとおもつたら。なんのざまだらう。夫からおれがの。何も知られへ顔をしての。お松さんおめへのおはなしの大きな内裏さまといふのはこれかヱと云たら。さすがのから云ひも。ヘツトしたさうで。顔を眞赤にして。イヽヱ是ではないのさ。その雛さまはよそへゆづりましたと拵へたはな△全體ほらふきだから。あの子のいふ事はあてにならねへはな。コウ〳〵そりやアそうと。だぼはぜはどうした。納つたか〇だぼはぜとは△それよ。鉢さん所のお釜さんよ〇ムヽまだ納られへさうな△ナニ納るものか〇コウ。なぜあの子の事をだぼはぜといふだらう△おめへだからいふがのう。京傳が作のあふむせきの中にあるだぼはぜに似てゐるからよ〇ムヽ〳〵。さうさのう。その晩の鉢さんのあくてへを聞たか△ウンニヤしらなんだ。ひさしい夫婦げんくわだからめづらしくもなし。おいらア未だにしらぬ顔の反兵衛さ〇それがいゝのさ。をかしくもれへ。あの時はの誰も行なんだから。よんどころなくおれが行つてとりまえたが。なるほどどつちをどうともいはれれへよ。鉢さんも氣が早いが。お釜さんも口が過るはな。鉢さんのいふことにはの。コレヱ。あんまり金々と大びらな事をぬかしやアがんな。五兩や十兩の端垂金を持てうせたつて。なけなしの鼻にかけやアがんな。おらアおはぐろ壷の出し鐵どもおもはれへ。飴で製た面形が南風をくらつたといふ面で。年中うかれへかはりには。持藥の錢で追倒されるは。引ずりな女もあるが。たつた二人の身じんまくを洗濯やへやるいくぢなしめ。勘定するぢやアねへけれど。單物を一寸とやつても三十二文か五十はとられる。板の間といへば煤掃の外雜巾をあてた事もなし。猫の額ほどなゝがしもとなくされ次第に箒もあてずさ。朝喰つた飯の椀も晝飯まで積でおくやら。きのふ焚た釜の中も洗はずにまた焚から。年中釜底へこびり付て。ちよつと湯を涌せば去々年あたりの湯のこをすゝるはい。行燈の皿の中には先去々年の節分の豆がそら豆ほどにふやけてゐるが。これまで二度の煤掃にそれを掃除せうでもなし。炬燵へあたつてけつかりながら戸棚の戸へたかつた煤を。はたかうといふ氣もつかずに。指の先でら〳〵と。むだ書はどういふ氣だらう。兎ても左衞門のつくかゝアだから。色氣も惡氣もれへけれど。眉毛は生次第。鐵漿ははげ方題。横撫をするかしられへが。油壷からひきだしたやうな着物のざまで。仙泥おばあからツリを取うといふざまだは。たま〳〵おはぐろを付るとおもへば炬燵の炭團へ藥子をかけて。火鉢の中へ唾を吐くとは。あきれけへつた無性あまめ。お德さんきいてくんれへ。そのくせに甘味もの好で。白魚を十ちよほばかり玉子いりにからりと煮付て。喜撰の煎の苦いやつでお

茶漬をたべようの。海鼠の酢漬をどんぶりに一盃あきるほど喰つて見てへのと。一年中食好みで。大福餅から海苔酢で。竈の下は竹の皮の死骸の山だ。あまざけ三盃汁粉が五膳。そのあとで鴨南蠻の二つも喰つて。そばやの箸をひつぺしよつて。楊枝をつかひのしやあ〳〵でゐやあがる。貧乏神の巫女が風の神の釜拔に來たといふざまアして。ふと寢の捨礫も見倦たはいゝ日本國中廣しといへど。鐵の草鞋でたづねても。最う一人とあるもんか。いかな氣の能い亭主でも。われには愛想が盡るはい。トおそろしいあくてへもくてへよ△チヤ〳〵おめへよくおぼえてゐるのう。がうせいとながい事だに○そのはずさ。あのあくてへは鉢さんの押物だはな。隣でふだん聞居るものを。そらにおぼえれへでさ。そりやアいゝがの。大屋さん所のおかみさんも今度きたのはむれき者だぜ△そして面の大きいはなどうで前のおかみさんのやうにはいかれへのさ○大屋を何だと思つて居るだらう。いけふさ〳〵しい女だ△ろじの出這りに人の内を覗込であるくが。どういふ氣だらう○どういふ氣があるもんか。高が知れ居らアな。ソシテノ。あのかみさんはあゝ見えても最う大婆だぜ。他で聞けば子が三人あるとよ。それを伯父御の所へ預けてないて。子の無つらで來たさうだが。大きな喰せものだのう。大屋さんの店子の事はいふけれど。ひよんなものを脊負込だぜ。しどうは泣の種だ△さうさのう。こつちにも里にやつた小兒ともに四人あるからはじまられへ○あのまた惣領のお鍋といふがきも口がわりいよ△ゆだんしなさんな。をいれへ女だによ○チヤほんに。表の萬屋のお蛸さんが宿下りにきたさうだの。なぜ長屋を廻はされへのう。タシカ表はあるいたさうだ△おいらア裏店だからつき合ては見つともれへといふ氣さ。よしてもくりやだ。うら店〳〵と下直にとり扱やアがつても。店並はひとつだア。缺た錢一文表店からもらはうぢやアなし。アノお蛸さんは内にゐる時分から世事のれへ大面な子だつけが。お屋敷奉公をしたらさぞかしおもひやられるの△ウンニヤをつなものよ。きのふ長屋番を送る序にてふと裏口で逢たがの。思ひの外愛想がよくなつた。ヤ其かはりに肥つた〳〵△もとつからふとつてうよ。栗虫ともなんとも譬へやうがれへ。立て歩行のも横にころげるやうだ△ひさしく聞れへが三絃はあがつたかの。不器用な子だつけ。アノツレ。胴滿聲の琴は耳に付たつけのう△ひゞの入た聲よのう。あれでも親馬鹿と云て御秘藏さ○御秘藏といへば。おめへの好な祭文をよむ坊主はひさしくこれへの△さうさ。おいらア祭文も能が新内ぶしがどうも能よ。今に來るだらう○又百おごろうか△おたがひに百文とられ候ッ○道成寺の坊主ぢやアあんめいし△内でこゞとをいはれるも尤だよ○どこの内でも小づかひがいるといつてこゞとよ。なんにもむだはれへけれど△しかしむだのれへともいへれへはな○それだつて。どこのていしゆもてん〳〵にだりむくるから。ちつとづゝの留守事はゆるすがいゝはな。コウ〳〵横町へ新店のあなごやが出たが。きのふお魚さんが行て見て。いつそよくするといつたよ。行うぢやあるめへか△行う〳〵。針箱のひきだしに四百ほどはほまちがあるだらう○小づかひが入ると云ても。二朱くづして見な。いかつぱちもつかひ出はれへのう△ほんにさ。ドリヤお晝の支度でもせうか○まだ早いはな。最うちつとずらすさ。そんなに手まはしをすると。お夜食に杖をつくはな△さういひなさんな。あすこへお日さまが來るとお晝だよ○何まだおしやべりの八百屋が來れへと右の袖で口をふきながら長きせるをパタリ。（式亭三馬）

科學

貝殼と美術工藝

貴族院議員
學士會院會員　田中芳男

○貨幣と貝殼

上古草昧の世に於て、通用貨幣として、貝殼を用ひたものである。支那古代の事を書いた書物に「寶ν貝爲二之通用貨幣一云々」とあり、又周の代に初めて金錢を鑄造して貝の通用を禁じた事も書いてある、此等の記錄に徵すれば支那も往古は貝殼を貨幣に用ゐたのである。他の諸國でも古代に遡れば矢張り貝殼を貨幣に用ゐた例は多い、今日でも未開の離島に住む野蠻人の間にはまゝ其の風が遺つてゐる。たゞ我か日本は遠く古代に遡るとも斯かる形跡はとんと見當らない四面海を繞らす國柄としては聊か案外な現象であるが、或は捕貝術の發達しなかつた爲め貨幣に用ふる程に澤山の貝が無かつたものかも知れぬ。



○貝合はせの遊戯

併し婦人や子供の遊び道具として貝が廣く愛玩せられた事は事實である、就中需用の多かつたのは「貝合はせ」といふ婦人の遊戯に用ゐられたのである。此は近く維新前までも上方の家庭に行はれてゐたもので、其の仕方は、先づ三百六十個の蛤殼を二つに分け、其の一方の殼を「地貝」といつて悉く塲に竝べて中央に空所を存し、他方の殼を「出貝」と稱して一個づゝ取り出して右の空所に置き、出貝と地貝と合つたものを見つけて之を合はせる、そこで多く合はせ得た者を勝としたもので一寸奇麗な遊戯であつた。で之に用ゐ

ふる蛤殼は成るべく純白なものを貴び、而して内部に奇麗な繪が書いてある、けれ共純白いのは極めて鮮い爲めに、止むを得ず多少色變りのも用ゐられたが、然かも耳黒のものとなると目印と爲つて興が無ので、全く用ゐられなかつた。

○貝殼の利用

▲螺鈿　此の貝は大隅國屋久島に產する故一名屋久貝といひ、煌々と光るが故に或は夜光貝ともいつて、彼の夜光杯は即ち此の貝を以つて作るのである。その小さいものは青色を帶ぶるに依り又青貝の名がある。この青貝細工は餘程古くからあるものと見え、博物館には奈良朝時代のもので立派なのが保存つて居る。其他磨きて杯洗、菓子器、水呑等を作り、その切屑は緒締、根掛、紐釦等に作られる。

▲鰒　これは鎗、薙刀、挾箱などの如き漆器に塗り込んで青貝細工に用ゐたが、上等物には矢張り前の螺鈿を用ふるので、奈良朝時代の製作品は多くは其れである。又磨きて諸種の器物に作り、切り拔きて紐釦などにも作る。

▲安古屋貝　此の貝から出る眞珠を安古屋玉と稱して眞珠中で最も貴きものとしてある、或は此の貝を眞珠貝と呼ぶ、この貝は其の形蝶に似た處から蝶貝ともいふ。琉球の銀貝、印度の厚貝といふのは皆此の貝である、古は一個の價大枚七兩　即ち今日の四五十圓に相當する、その青貝細工や紐釦などは非常に珍重せられたものであるけれど、今日は南洋諸島及び濠洲邊からも輸入せられるので昔日ほどには珍重せられない。

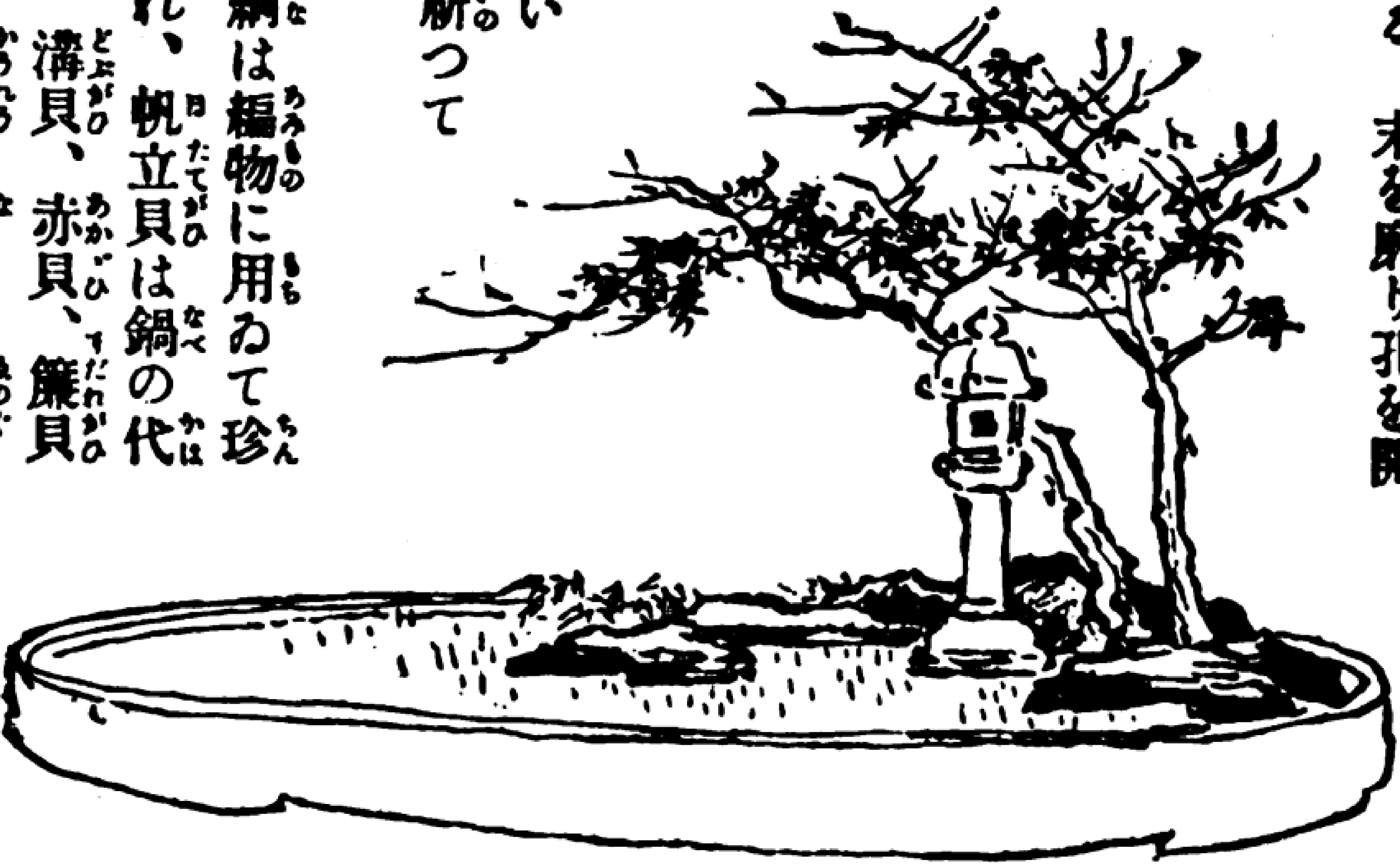
▲硨磲　沖繩邊に多く產し、すわり貝、あだ貝等の種類がある。大なるは四尺以上に及び、其の色白く光澤ありて恰も碁石のやうであるから甚だ珍重せられる、支那の七寶と謂はるゝ瑠璃、玻璃、硨磲、珊瑚、玳瑁、眞珠、瑪瑙、の中の硨磲は即ち之れである。珠數、簪玉、根掛、文鎭等中々立派なものが出來る。

▲蛤　多く膏藥入等に使用される、又貝身の厚きものは擦り磨きて碁石に用ゐ、或は白と黑との手頃なるものを撰みて其儘用ゆる例もある。

▲法螺　舶來物は二尺に餘るのもあつて虎の斑がある吹き鳴らすのが此の貝の主用である、末を磨り孔を開けて吹けば朗々として遠近に響く昔軍陣に用ゐたから一名陣貝ともいふ、彼の山伏の用ゐたのも之れである。現に南洋人などは、法螺を吹いて合圖をする歐洲諸國に於ても大農が耕作人に合圖を爲し、牧者が羊を呼び集むる時などにも之を用ゐて居る。

▲寶貝　美しい斑紋がある、小さいものを子安貝と謂つて、昔安產を祈つて產婦に握らせたものである。

右の外、蟙蠪（えぼうし貝）の綱は編物に用ゐて珍重せられ、板屋貝は杓子に用ゐられ、帆立貝は鍋の代りを爲し、榮螺は昔油皿と爲り、溝貝、赤貝、簾貝等中々に用途の廣き其上に、貝殼を香料と爲し、繪具と爲し、灰と爲す法もあれば、又其の中より貴重なる



眞珠を產出して、婦人の身邊を飾り其の卵は海酸漿となりて可憐の少女を樂しましむる等、一々數へ盡されぬが、まづ此位にして尙ほ貝殼の應用に就て一言しやう。

○貝殼の應用

即ち貝殼の形態を陶器に移しとり、或は貝殼の模樣を模寫して意匠に用ゐるといふとは、從來餘り行はれなかつたので其例も極めて少く、たゞ僅かに蛤形と謂つて蒔繪なんどに蛤が間々應用せられた位のもの、美術の爲めには誠に惜むべし、若し貝殼を研究して博く之を應用するならば、實に好個の資料が得られやうと思ふ。例へば建築に關するならば、貝殼の形態を屋根、瓦、玄關、庇、亭の屋根等に工風の餘地は充分あらう、或は其の輪廓を取つて雪輪、三ッ星の類ゐのものに用ゐても宜からう、若し夫れ貝類の模樣に至つて

は實に千狀萬態で、想像の及ばざる美しい不思議なるものがあるから、之を美術工藝に應用すると、屹度面白いものが出來やうと思ふ。

手紙の書き方

翠香

文體を學ぶ事

書狀は活物也、同じ用事をかくとても其人に依り其時に依りて一も同じからず、然れば昔より女文章は數知らず多けれど、一度書たる切、二度とは用ひられぬ死則の作例は若干有り、今日時々刻々變化する活用の書狀に其儘ソツクリ適當物ならむや、殊に昔と今とは大沿革あり、昔ありて今なき事昔は夢にも見られぬ事の今現にある事多きを、前世界の舊本を持出して明治の日用に間に合ふ筈なきを何をがなと手本を求むるより、利に走るエセ作者が古書の切拔粘細工にて仕立上たるを麗々敷新著と披露し廣告すれば、表紙と口畫の美なるに釣られて中の記事を見分るの眼識なき女子輩悦びて購求し、之を手本として文かく故に誤つ事多き也、たとへ現今在世の博士達が著述せられし善本なりとも作例なる物は畢竟雛形見本に比しく、此事はかやうの振合にかくべき物といふ其體裁をみる迄也、然れば文通の稽古を爲むと思はゞ作例の本は顧問官として控へ置て其かく文句も事柄も題など設る事なく、今日の實地にある事を何まれ角まれ文にかき試み扨斯樣の事は奈何かゝばよかるべき歟と思ひつかれぬ時顧問の書に依て考へ見るべき物なり、仲よき友だち申合せて何事に拘はらず口にて話する事を互ひに文にかきて贈答するを修行の捷道とす、扨夫を一々敎師か又は先輩に見せて可否の批評を乞ひ、あしき處を改めゆくべし、譬へ笑はるゝ事有とも恥怯する事なく决して中止すべからず題を設ての作文もあしきには非れどとかく紋切形の文章になりて作例にいくらもあればかきよき替に實地要談の稽古にならず前にいへる如くすれば少女にても少女相應の日用は必ずありて父母に物をねだるとか、或は友と何かの約束をするとか、何に拘はらず實地の事を用に立つべき也、斯して怠らず只顧勉强すれば終には入組たる要談にても筆に任せて自在に書得らるゝに至るべし、吾昔私塾を開きて在し頃此法にて生徒を敎へ試みしに、二三年にして何事にても達者にかける者多く出來たりき、諸孃も試み賜へ實地經驗の談なればキツト夫だけの功能ある事請合なり。

敎師に附て學ぶとも其なほしに心を止て記憶せざれば上達する物に非ず、只直して貰ひさへすれば夫にてよしとして師の加筆をあてにする人はいつ迄學ぶも同じ事にて、誤つ事はいつも誤ち直す字もいつも同字にて更に進歩する事なし、斯ては何の甲斐かあらむ、師も

愛相なつかさどるを得ず、文にても歌にても斯の如きが一番筋のわろき者にて卒業の見込なき者也。

添削をみて何故かく直されたるか此事が何故にあしきにやと俯におちずば少しも憚るに及ばず一々質問して其義理を明らめ一度なほされたる事は二度と誤たぬ程に件々服膺する人は衆を逐越して進歩する俊才なり。

今の文通は十の八九迄鄙俚なればなるべく簡短にして其主意の明瞭なるをよしとす、熟練すれば大抵の事はハガキにてもかゝるゝ物也よしや鄙俚ならずともくだくだしき長文は一見其人物の価直を知らるべし、但し贅言は省く可と雖も簡短にせんとて必用の言迄も省略しては文言不足の為に思はぬ間違の起る事克ある例なり只折ふしの見舞位ならば少しく間違たりとて敢て事にも障られど要談の状は大事也僅に一字の事にて取返しのつかぬ騒動となる事もなきに非れば再三読返しみて落字書損等を吟味し、文言も先方の心に成て解り兼る個処はなきかと考へ念に念を入れて猶見せてもくるしからぬ人あらば相談すべし、自己一人にては幾度見ても気のつかぬ誤をも眼を替て読めば見出さるゝ事ある物なり我独り合点にて他人に解らされば先方の読取り様にて大に立腹する事あり、相逢て面談するには聞間違へても然に非ず、云々也と即座にいひとくべけれど、文通は片言なれば先方の誤解をいひ開き出来ざる上に詞にていふは和らかにて人の心に障らぬ事もかきたる物は強く當る物なればかやうの事書やりては悪からむ歟と少しにても心付たる事は決して書べからず、既にかきて出したる以上は跡にて夫は間違也といひ直すとも何の詮なく、其書は先方に押へられて後日の證拠とさへも成なれば少しにてもいかゞと案じらるゝ事はかゝぬにしかず、跡にて克も書やらさりけりと思ふ事必ず有もの也。

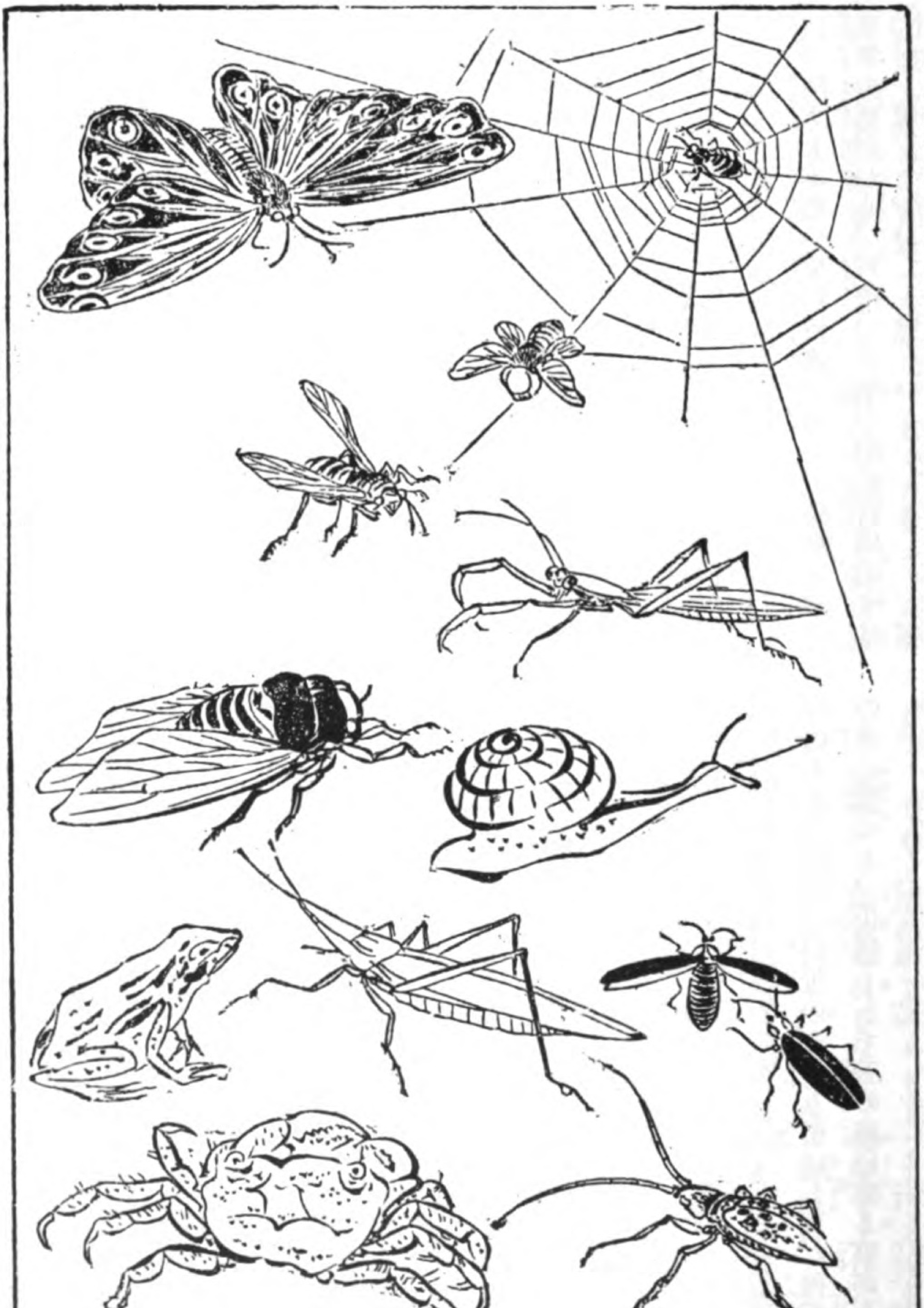
一惣じて克も知らぬ慭なる事は慎てかくまじき也、少し学力の附かゝりたる人はとかく味やり度なりて通俗の文にも漢語洋語又は和文めかしき詞を挟みかゝんと為て、それ〲の書とも引散らし一章の文に多くの時間を消費してやうやく撚り出たる文も未だ学力足らぬ無理仕事なる故に其引用の語の意味を取違へ誤字かな違だらけにて嗤ふに堪たる物となる女生徒の少し進歩したる者十中七八迄大概然り、祝文、論説又は序跋等ならば和文漢文ともにそれ〲古事古語を引用するもよけれど、常の用文中にはいらざるムダ骨折といふべきのみ、夫も真の博学なる人は胸中常に多くの古事を暗記せる故に筆を採れば偶然に浮びて思はず知らずかゝるゝは格別なり脳中は無一物なるにしひて博識めかして書ども取散け大苦みにくるしみてかくがあしき也、無益の事に脳漿をしぼり精神を労らして他の嗤を買はむよりは俗文を誤りなく詞流暢にかきて敏捷に事を便ずるにしかず。

一凡文章には種々の体有り漢文は漢文の法則あり和文も又文法あり其外紀行、消息、小説、論説、直訳、翻訳、新聞体、

倣聽筆記、言文一致に至る迄皆それ〳〵に其法則ある也夫等の法則を知らずして猥りにかくべからず又何體に拘はらず始より終迄一貫て徹るをよしとす、種々の體の入交り何體とも定まらず混交するは鵺文章とて嗤はるゝ事也、近頃の女學校の作文は男子風の中へ處々女文を交へたるを授る故に其生徒の作文男ならず女にも非ず一種異樣の體をなし酷評する人は是を双生文といへり彼鵺文の今一等拙劣なる物となる也女なりとて今の世は事柄により男文にかく方便利よき事多ければ、男文を學ぶも決してあしからざるのみか、有益なれど男文にもあれ女文にもあれ立派に區別をたてゝ徹頭徹尾、其體を失はぬ樣にかくべき也。

一通俗文は始にもいへる如く、活物にて其人其時に應じてかく可き物なれば、斯と極てはいはれれども其大旨は其贈る先方の人を見分る事が肝要なり、いつも同體同文にては間尺に適はず其事柄により慇懃にかくべきあり精細に書くべき有、又は神速を尊みて略文走書を要する有譬へば遠方へ邂逅に贈る書狀は時候の挨拶より先方の安否を訪ひ我方の近況及び方今世上の風說目擊したる事等もよき程に面白く書つゝり扨需用の件をかき終に臨て筆をとめぬ先に讀返して解し難からむと思はるゝ處は傍書して注を入れ濁音には悉く點を打叮嚀に注意して後筆を止め猶追啓に一二の事を加へて出すべし、之を得たる先方にては逢て相語る心地して悅ぶべし、又親戚朋友などにて常に相往來する人には前後の文を省きて要用のみをさら〳〵とかくべし、他見を憚らぬ事は端がきにて澤山也、又上中下の區別あり上とは主君師父母伯叔母姉すべて我より上たる人に奉る也いかにも恭敬假にも失禮の詞をかくべからず、位高き貴人へは直に書狀奉るは憚るべき事なれば必ず局老女或は侍女等に宛て御前御披露と脇付すべし、中は同輩友など也少し敬通たる方は苦しからねど奈何心易き逢にても無禮失敬なる言は堅く愼むべき也下はわが兒弟妹召使ひ出入の者等也敬辭を省きてかくべし敬辭とは御遊ばし奉り仕等の字を除く也事に依略字の[illegible]など手輕くかくはよし、以前は我家に召使ひたりとも今現在立身して其位置我より上にあらば、同輩又は夫以上の敬言にかくべし又今は奈何零落せりとも前に由ある人と知りたらば努々侮りがましき詞を書く事勿れ、人逆境に立ては心僻み氣の迫る物なり何心なくかきたる事も偶然氣に障りて恨み憤らるゝ事あるなれば尤注意を拂ふべし。

蟲のいろいろ



(1)蜘蛛 (2)あげ羽蝶 (3)くま蜂 (4)かまきり (5)せみ (6)かたつぶり (7)かへる (8)精靈ばつた

(9)ほたる (10)かに (11)かみきり

道聽途說

女學生の半面を讀みて

泊子

何だか阿方は眞箇に分らん方ね、私又田舍の田舍の山奥で、何にも世間の事は御存じなしで、夫で、若い御嫁樣を御虐待なさる旋毛の曲つた御意地の惡い御姑樣かと思へば、蛇の道は蛇で無ければ知らぬと仰つしやる、東京の女學生の有樣を能く知つて入らつしやるんだもの、何だか天外子か風葉子の小說にでもありさうな、廂髮の美しい女學生さんの樣にも思へるのよ、然うかと云へば、嫌に道學先生めいた、鹿爪らしい事を仰つしやる處を見るに、羊羹色の紋付羽織か何か召した三太夫的な、世話燒老翁さんの樣にも思へるし、若しくは、阿方も本郷か早稻田邊の方で、這般の十、一の電氣力應用から、可惜、三年の戀に臂鐵砲喰はされた上句、醉後の微吟に、管を卷いてらつしやる樣にも聞えますわ。

だつてね、私の高等女學校卒業に對して、御喜び下すつたのは、誠に嬉しう御座いますが、私にはあなたのやうな御友達は御座いませんですもの、尤も鈴本とかつて、三年前に或る醫學生と情死を圖つて、大評判となつた同級生がありましたけれど、

兎に角、阿方は實に親切の方として私は心から感謝致して居るのです、實は、私も今度の方針には大に迷つて居るので、不束ながらも人の後に立たなかつた丈に之で學を廢すると云ふのも實際、辛いのです、女は什麼しても、人の妻とならねばならぬとすれば、成程仰つしやる迄もなく摽梅の期を失つては、餘んまり賞めた話しでもないので御座います。

けれど、阿方の仰せ通り、幾何眞面目に勉强して、眞面目に修養を積みましても、桂夫人や、山本夫人や、坪内夫人の樣に、目尻のお下り遊ばした、俊秀の才子の選に當つて、氏無くして玉の輿に乘る事が今の處六ケ敷いので、一寸困る譯なんです、殊に私の樣な御多

福では、名古屋は町端の一文店で、姉さん被ぶりの粋な襷がけ、味な目附等致しても、惚れて賜はる伯爵樣もありますまいし、ちよいと、郎君やと、吉原は角海老の格子戸あたりから、長い烟管の雁首を突つ突き出しても、當世書生氣質等と云ふ御目出度小說を書いて文壇の喝采を博する樣な博士樣は迚も迚もありは致しません、だからもつと、惚れらるゝ樣な工夫の修養からせなきやなりませんよ、呵々

夫に阿方は大隈伯の愛孃くま子夫人に隨分と可愛相な注文を遊ばしましたのね、其れは田尻樣にもせよ、末松樣にもせよ、秀麿樣よりは或は力量に於て、御豪らかつたかも知れませんさ、いや實際、社會では偉いとして、許してありますから、けれど當時深窓の中に育つた、花の樣な蝶の樣な、髪結が、御氣に召さない、御髪を上げた時より外苦勢と云ふ事を御知り遊ばさぬ、姫樣に、美しい綺麗な纖身軀な貴公子を捨てて、蜒蚰の樣な、彼の汚ならしい素寒貧の書生つぽに怎うして思ひ替へる事が出來ませう、其れは全く無理ですわ、無理ですとも、然も伯自身だつて、系圖に御惚れなさらなかつたとは申されないじやありませんか、御覧なさい、今度の第二の愛孃ちか子姫の御婿樣だつて矢つ張り、大名華族の貴公子で入らつしやるじやありませんか。

末松男にした處で、大隈伯の樣に可愛い娘の婿を大臣にもし得ないで、離緣迄遊ばす樣な、無慈悲な人の



養子におなりなさらふより、甲斐性のある伊藤侯の姫樣を頂戴遊ばした方が、どれ位御幸福でしたか、這麼事は阿方の樣に一々理屈で云つたつて、仕樣がないんですよ、夫れや僕等にしましても、中學生や、御百姓や、朝から晩まで算盤を彈くつて居る輕卒ましい商人より、ね、ほゝ、チックや香水の香氣のする、御鬚の美しい方に、妻にと云はれたら、惡い心持ちはしないじやありませんか、ほゝ、眞箇の處を白狀したのですよ、ですから、くま子姫が御氣の毒でありませんの、其後御離緣になつた當座は、五十日も御飯を召し上らないで夜も晝も泣き續けに泣いて入らつしやいましたつて、他人の私でさへ、泣かされるのに、夫れでは、餘まり立つ瀨が御座いませんよ。

で、ね、先も申上げた通り、高等女學校の其上を勉强して、何も好き好んで婚期を取り逃し度くはありませんけれど、かうね、阿方の仰つしやる樣な別嬪じやないんでせう、惡くすれば一生貰ひ人も見附かるまいと云ふ、廂髮うつて附けのお突頭と來てるんですから可哀相じやありませんか、ですから、仕方がない、大に勉强して、獨身でも遣つて退ける樣に自活の道の準備を講じて置かなくつちやと存じますので御座います之でも何ですよ、今の男方は割合に開けて入らつしやつて、妻を娶らば宜しく花の如かるべし等と仰つしやる方もあります代り、中には金錢本位から割出して容貌なんかを餘りお構ひなさらぬ至極、眞面目な主義をお持ちの方も入らつしやいますから、勉强さへ致して措けば、一生獨身で經てる事も滅多にありますまいよ夫でまあ、差當り、高等師範と女子大學と、どつちにしたらばと云ふ、之が疑問なのです。

仰つしやる通り、兩方の主義目的が大變に違つてるんですから、隨つて、生徒さんの氣風から學校の規則の樣なものも全然同じいとは申されますまい、けれど、高等師範だつて、阿方の仰しやる程、箱詰主義ではありますまいと存じます、よしむば、規則がどれ位、嚴重にしてありましても、其處には裏あり、表あり、割合に善く出來てるものですよ、いつぞや、怎うも　皇

太子様に於かせられては御夫婦仲が至極御宜しい様に承り及びまするが、喜ばしい事で御座いますと、生徒さんの一人に申上げたら、皇太子様つて、どの皇太子様なの？つて、眞面目に御聞きになつた位、其麼、中には無邪氣な方も入らつしやいますから、偶には御卄諧の出し合ひも遊ばしませうし、だから案じる程じやありますまい、其れに校長高嶺氏は御令閨の召し上がる林檎の皮まで脱いて差し上げなさると云ふ、極く開化した方なんだもの、豈夫、方程式や、歷史の年代や、地理の地名や等ばがりを、無闇に暗記させられたり、衣通姫と楊貴妃とどつちが美しかつたなんて其麼常識に離れた研究に頭を脳まして入らつしやる事もありますまいよ、其の代り、女子大學の方は、阿方の御



說の様にそうは放任主義ではありませんかも知れませぬ、或る意味に於ては高等師範よりも、もつと／＼束縛されてるかも知れません、家庭主義だ、家族主義だ、等と大層聞こえが可い様ですが、若い男の方でもあの寮舍を訪問して御覽なさいまし、寮監の方がぎろ／＼眼で面會してる間はちやんと、立ち合つて聞いて入らつしやる相ですから、而して書面や等も一々御檢閲になる寮監様もおありなさるつて事ですだから、此處一つ考へ物だと存じます。

高等師範は敎員が目的だから、地方の師範出の人が多く好んで入學するとお云ひ遊ばしますが、這入る事丈は事實で御座いませうが、好んで――如何でせうね私の口から、這麼事を申上げるのは眞箇に御恥しい譯ですが、實際高等女學校出身

の人は學力が足らないのです、隨分毎年〳〵私共の同窓でも、受驗する人があるんですけれど、皆はねられて仕舞ふんです、ですから、這入りたいにも仕様がないので御座います、から兩方つき比べて考へました處で、私、一奮發して高等師範の方に致さうかと存じます。

成程、都は危險でせう、誘惑が多う御座いませう、墮落する場合も澤山にありませう、しますから或は勉强するには田舍が宜しいかも知れません、けれど、墮落――男女の何と申ませうか、一種のエネルギー――はですね、此れは決して、都も鄙も變りはないと思ひます、戀に上下なしとか、遠くて近きは男女の中とか申しまして、東京が恐いと云つて、引き込み思案をする様な其麽意志の弱い人だつたら、田舍に居たつて、迚も滿足のパーヂンで居る事は出來ますまい、東京は廣う御座いますけれど、人目が多う御座います、門の外へ一歩蹈み出せばと仰つしやるけれど、何處に誰れが見て居るか知れやしません、けれど田舍は、谷川の淸う、せゝらく處、千古の松、綠深き山陰のあたり、怎うでせう、決して都より機會が少ないとは、申されません、況して田舍は東京より神聖の處女が多いとも決して申されません、而もかげらふ燃ゆる春日を浴びて草摘む少女が牛逐ふ靑年と平氣で戀歌を歌ひかはすと、明星一派の新體詩に泣かされる女學生と、どつちが潔白だとも猶更申されません、だから自分の意志さへ强かつたら、東京はそう阿方の御心配になる程恐ろしくは無いと私は信じるので御座います。

高等師範ならば衣服や化粧料にも費りませんし、學資も官費で御座いますから、何れにしても損の行かない筈です、よしや、一年に二三百圓の學資を使つて、女子大學校の方へ這入ると致しても、男學生の方の様に、月々何十圓と云ふお金を費消つて、いざ卒業となつても差し當り口が見付からず、電車の車掌を志願する様な大學卒業生や、月給十圓で活版屋に雇はれる様な文學士と比べたら、田舍の田吾さんの妻さんにでもなれたらなれる丈そう損はないじやありませんか、昔

の人も一字千金と申た位ですから、學問は自身に附着いた自身の德、設令多く積つても、三年間の勉強が千圓で買へたら、お安いものじやありませんか、だから私は何れにしても東京へ出て、大に勉強致したい考へで居るので御座います。

田舍の勉強は東京の晝寢とか申す位ですから、其邊は勿論御同感です、而して東京の學校の敎授法は切り詰り的だ、其れも大に御同感ですが、けれど、田舍の學校の先生がいくら忠實に敎授して下さるにもせよ、毎時も〳〵同じ敎科書を繰返し、千遍一律の陳腐な講義を伺つて居ては、餘まり有り難かありませんよ、何日だつたか、文學博士の南條樣とか仰つしやる方が地方へ巡回遊ばした時、或る人が、博士に阿方はまあ、博士樣でも居らつしやるゝ、加之永年歐米國で勉強して居らしつたので御座いますが、何ぞ一番世の中に不思議な物を發見なさいませんでしたかと云つたら、先生言下に、何あに、凡夫が佛になる、是れ位、不思議な事は無いじやないかと仰つしやつた相です、成程、腐つても鯛――あら、厭だ、勿體ない、そうじや無いけれど、何と云つても、田舍の先生と先生が違ひますからね。



ですから、私だつて、御忠告の程は大に考へ置きまするが、其邊も多少參酌して御親切の萬分の一にも副ひたいと存じます。

尙は種々御意得たい事は澤山にありますけれど、一面識のない方に然う饒舌して居ては、今つから、其麽ハイカラがつては末が案じられる等と、又々御心遣ひの程も御恥しう御座いますから、之で擱筆する事に致します、兎に角．阿方の覆面の取れない中は誰方樣だか存じませぬが、再び御緣があつたら、隨分御先眞暗な世の中だから、御手々も引いて差し上げませう、人は秋風の冷めたい今日此頃、御老體、殊に御勞はり遊ばして、唇に風をお引かせ遊ばさぬ樣祈つて居ります。

洋食一品料理

▲アップルスノー

林檎三個の皮をむきて心をとり去り、軟らかになるまで煮るか蒸すかなして、裏漉にかけ冷まし、さめたるとき砂糖一合とレモン又は蜜柑の汁をまぜ、三個の鷄卵の白身を硬くなるまでよくかきたて、前の砂糖をまぜたる林檎を一度に一匙宛始終白身をかきたてながら混ずべし、直ちにコップに入れて食すべし

▲ライスカレー

半斤の牛肉を小さく切りて鹽の中にころがし入れ次に麥粉の中にてころがし、玉葱を半分細かく刻み、揚鍋に脂肪を大匙二杯入れて其煙立つ時肉と葱とを入れ、五分間絶えずかへしながら揚げ、次に熱湯を三合入れて三十分間煮る可し、今度は鉢の中に麥粉を大匙二杯とカーレー粉を中匙一杯とを入れて五勺の水を注ぎて滑らかになるまでかきまはし、之を沸騰ち居る内に入れて絶えずかきまはしながらよく煮、鹽加減甘ければすこしの鹽と胡椒、一杯とを入れ、三分間沸騰せて熱き御飯の上にかけて食す可し、

▲ポーク、ソーセージ

豚の肉を二斤と脂肪を半斤とを肉斷細器にてこなし又はナイフにて極細かに刻み、之に鹽を大匙一杯とを入れ、胡椒を小匙に半分と、粉末にしたるセージを小匙に一杯とを加へてよくまぜ合はせ、平たき饅頭の樣になしてフライ、ポークの如く揚鍋にて揚ぐ可し

▲グレーベー

何の肉にても揚げたる後鍋に殘りたる脂肪のにえたち居る内に麥粉を大匙に一杯入れて色のつくまで絶えずかきまはし、今度は一合半の水をそろ〳〵塊の出來ぬやうにかきまはしながら入れ、又鹽を小匙に一杯と胡椒二杯とを入れて三分間にえたゝせ、熱き鉢に入れて肉と馬鈴薯と共に食す可し

▲ハムブルグ、ステーキ

牛肉を一斤極細かに刻み（肉細斷器にて刻めば猶ほよし）鹽を小匙に一杯と胡椒を二振と、極細かに刻みたる葱とを小匙に一杯（もし好まば）とを肉に混ぜ、冷水にて手をぬらし、其肉を八個の平たき饅頭の樣な形になし、麥粉をふりかけて揚鍋に脂肪を大匙に一杯入れて脂肪が煙の立つ程熱したる時肉の饅頭を並べ入れ、片やけにならぬ樣四五編ひつくり返し、兩方共狐色になりたる時温めたる皿に盛るべし

人情哲學

市の人

▲モデル

批評家「是は立派だ、是は成功だ、お祝します、併何故此樣いやなモデルを使つたんですか、畫家「夫は私の妹ですよ、批評家「左樣ですか、如何も失禮、私は好く顔が見えませんでしたよ。

▲毒藥

A「皆は僕が毒藥を飲むだと思つて、醫者を呼で、胃を喞筒で掃除したそうだ、B「フム、して何か出たかひ、A「懐中から三圓手術料が出ちまつた。

▲新發明

色々の工風をする人、馬に掛けさせる青い眼鏡を拵へた、何にするのかときいたら、是をかけさせて枯草の刈つてある處へ連れて行くのだといつた。

▲自然の妙

穴ばつかりでも水のこぼれないものがある、自然の妙は窮極なし。即ちスポンヂ(海綿のやうな物)と云ふものがそれである。

▲假裝會

灰殻氣障雄君は招待されたのを大の名譽と心得て假裝舞踏會(面を被つてやる)出席した、夜十二時も過ぎ解散となつて思ひ〳〵に歸つて行く入口で番人が一人一人面を脱がして改める事になつてるのだ、氣障雄が出て行く處を門番押とめ如何か面を御脱り下さい、氣障雄狼狽てゝ面を被つてやしませんよ。

▲演説會

女房「昨夕は石田博士の正直と云ふ題の演説がありましてれ、妾ほんとに是から立派な貴婦人になれると思ひますよ、夫「ほんとに左樣だ、女「そして歸りに車へ乘つたら、車屋が代を呉れつて云ふのを忘れましたから、十錢儉約して仕舞つたのです、ほんとに昨夕は好い晩だつた事。

▲獅子鼻

あぐらをかいた鼻だの、獅子鼻の人を笑ふもんではありません、若し其人が怒りでもしたら、其鼻が如何樣に變るか知れませんから。

▲戀と云ふもの

ちよつとは悲んでも見、ちよつとは泣いても見、ちよつとは死うとしても見、さて大部分は嘘でかためたもの、是が戀である。

▲内端

女と云ふものは何でも大仰にするが、唯一つ内端な事がある、自分の年齢を云ふ時。

▲福引

料理屋の客「おい、給仕、是は如何だ、ツツプの中からボタンが一つ出たぢやないか、給仕「貴君は御運の好いお方でいらつしやいます、手前どもで月曜と水曜だけ、お客樣へ御禮の心としまして、二十皿へ一皿づゝ景物が入れて御座います、今日は貴君へ當りました、お目出度う御座います。

▲長の旅

長家中一番の喧し屋の婆さん、伊勢參宮に行き、大分過ぎて歸る。「やれ〳〵只今戻りました、皆さんのお蔭で大分保養をして參りましたよ、長家の人々「おや〳〵お歸りですか、お蔭樣で私どもゝ保養を致しましたよ。

▲辛い目悲しい目

「貴孃、佐々木さんからの申込をお斷りなすつたつて、「えゝ、妾れ辛い目め悲い目に散々逢つて來た人でなくつちや、否なの、「そんなら斷らずとも宜かつたのに、貴孃結婚すれば澤山に經驗が出來るは。

▲資本と勞働

A「資本とは何ぞ、勞働とは何ぞB「僕が君に十圓貸したと假定し給へ、A「よし、B「夫が資本さ、若し僕が返へして貰はふと思へば勞働だよ。

▲樂天主義

生徒「先生、厭世主義と云ふのは何です、哲學者「臆病者の言譯です、生徒「では樂天主義は、哲學者「無神經の事です。

▲夢

權助或る晩夢で友達から一圓借りて費つて仕舞つた、夫からは毎晩寢るのがいやで仕方がない、何故かと云ふと、今度の夢では是非返へさなくてはなるまいからと。



滿洲人の家庭

山崎春嶺

▲處變れば品變る

奥州の片田舍と鹿兒島の山奥ですら、尙ほ且つ多少の變化あり、況はんや海山隔つる支那と日本の間、假令同文同種たりとて、風習の差違決して尠少なるものにあらず、今滿洲に遊んで彼等住民の家庭の内幕を探るは、甚だ面白からんことなるも、如何せん彼等は、家庭の秘密てふことを處世上唯一の要件として、嚴守し尊重するを以て、彼等が家族團欒の形況を巨細に觀察することは、甚だ六かしき事なり、去りながら由來何れの國何れの俗を問はず、一國には必らず主權者ある如く、一家にはまた必らず一家の家長即ち戶主なるものあるを普通とす。滿洲家庭の原動力は、實に此家長即ち

▲當家的を中心

とし形成せられたるものにして、內は家族を提げ、外は家聲を張り、業を勵み富を計るは、概ね我國の戶主と敢て異なる處を見ざれども、只日本のそれと異り家族は戶主に對し、絕對的に服從否な盲從し、燐寸の空箱一つの處分とても、戶主の命を受くるにあらざれば、爲し得られざる程八かましきものにして、專制國

君主の臣民を統率する以上の絶對無限の權力を有す。從て我國の如く家族なるものに何等の特權を認めず、唯々諾々、只戸主の命ずるが儘に盲動すれば、夫れで善良なる家族と評判せらるゝものにして、甚だ無責任に又た雜作なき如く見らるゝも、若し假りに日本人にして滿洲人の家族とならんか、一日も勤まり得べきものにあらず、立ち處に不善良なる家族との評判は起る事ならん、是れ故に戸主の命令一たび下らんか

▲兄は山に走り弟は河に

往き、絶命絶對、其命令を爲し遂ぐるに忠實にして違ふ所なき變りに、若し戸主の不在に當て、其家の家族に就て用を辨ずるが如きは、到底夢にだも思へざる所なり、我滿洲軍が遠征に當ての困難は、或は天候の關係に依り、或は疾病等の衛生上の關係に依り、其種類は多々あるべしと雖も、物品宿舍等の徵發に當て、戸主不在の故を以て用務を辨じ得られざりし如きは、慥かに困難中の一原因として數ふる價値あるものなり斯やうなる家長の下に生活する家族は、定めし喧嘩口論もあるべく思はるゝも、其實際を見れば、多くは和氣靄々として堂に滿ち、親睦融合頗る美風を有するに驚く。而かも彼等の家族は、多きは二三十人より少なきも尙ほ七八人を有し、親族關係も亦家長以下に位する者のみに限らず、家長以上の地位を占むる伯父もあり、伯母もあり、兄もあり嫂もあり、濟々として一家に同棲し、眞に上下錯雜

▲六親九族混居の狀

態にあり。斯の如く家長崇拜の盛んに行はれ、家族の和合感心するに足る家庭にありながら、兒女の教養のみは聊か意外に思はるゝ節なきにあらず。即ち兒女の教養に就ては、極めて無慈悲粗略にして、或る半面は慥かに他人視し、只衣食是を與へて生長せしむるのみ。故に乳兒空腹を訴へて哭泣するも、敢て之を撫育することなく、弟妹疾病に苦んで呻吟するも、敢て之を看護するにあらず、平然其成行に一任し、冷然意に介せざること恰かも對岸の火災を視るが如し、而して其學齡に達したる兒女にも、讀書習字などを習はしむ

る如きことは、一村落中僅かに指を屈する程に過ぎず。玆に至て▲野蠻なる滿洲人の誹りは起らざるを得ず

兒女の成長して頭髮の稍や見るに足るものあるに至れば、例に由て例の如く、辮髮を蓄へせしむ、其蓄ふるや初めは男女の區別を爲さず、皆一樣にす。處女は十三四歲に至れば、我國の女子が前髮を上ると同じく從來よりの趣を變せしめ、或は總頭髮を辮み、或は髮を結ばしめ、其結婚婦人に至りては、總て髮を結ばしむ、髮結の樣式は一定せざるも、束髮及び稚兒髷の如きものを普通とし、稀に幅一尺に達する長方形の櫛卷の如きものを見る。





女子職業全盛時代の想像圖

男子は僧侶を除く外、皆辮髮を蓄へ、五日乃至一週間を隔てゝ、剃頭及び辮髮の改梳を爲す。男女の▲未婚既婚の別を知るに就ては、女子にありては結びたる髮の前額に毛根を顯はし、半圓形に緊縮したるものは既婚にして、前額附近の頭髮を弛め、少しく垂れて前面富士形

を爲せるもの是れ處女の證なり。又靑年男子にして大辮髪の前頭を、小形の髪を蓄ふるもの即ち未婚男子なるを示すものなれど、今は此風習甚だしく頽廢し居るを以て、只外形のみにては容易に既婚未婚の區別を立て難し。彼等の生活狀態は、職業によりて多少異にする處ありと雖も、貧乏人に至ては夫婦共稼ぎたると我國と異ならず男子は繁忙時を除く外は、悠々逸樂に耽り、睡眠すると、阿片を喫すると、賭博をするより、他に一日の仕事なく、婦女子は炕上に座居し、衣を縫ひ靴を製し、又半風子の征伐に從ふ。日本人ありて半風子を養殖するものは、よく〳〵の下等人に限ると雖も、滿洲人にありては、中流以上の者にても、之を附着せしめ居ること少しも珍らしからず、彼等の炕上にあるや、蓆子と稱する葭子、又は高粱の皮を以て製せる席上に、

▲穿靴の儘にて起臥

し、土芥積んで堆きに至るも敢て頓着せず、彼等は毎朝早起必らず顏を洗ふも、沐浴の如きは絶無にして只僅かに、男子の夏期河中に浴すると、隔月一回位ひ市街附近居住者の湯槽に温浴を爲すの外、女子は生涯身體を洗はざるの風俗なり。彼等が不潔を甘んずるは、單に其身體に就てのみならず、家屋の周圍にも尙ほ不潔物を散亂せしめ置き、永久末代之が掃除を爲さゞるなり。日本軍が滿洲に入るや、淸潔法に充分注意する點よりして、是れまで臭蟲多く剩へ異臭鼻を衝くの不潔家屋も、軍隊移住後旬日ならずして、見違へる程淸潔となるを普通とするを以て、彼等は我軍隊の最良置き土產として喜んで可なる筈なるに、難有がらぬのみならず、却て迷惑に感ずるの有樣にて、實に

▲濟度し難き民

なり。軍隊が他に引移りたる跡の支那家屋を窺はんか、土民先生匆々己の家に歸り來りて、御苦勞にも折角衛生上の顧慮よりして開きたる窓を、また原の如く閉ぢ、溝は埋められ、庭内室内は汚物を以て充され、一週間過ぎぬ間に元の杢阿彌と爲すに至りては、沙汰の限りと云ふべし、次ぎに奇しきは左利きの多きこと

にて、我國にては車夫其他下等勞働者比較的家庭の注意薄き族に、間々左きゝあるを見、中流以上の家庭に育ちたるものには、絶へて見ざる所なるが、驚くべきは滿洲土民の吃飯しある群れを見るに、其殆んど全數の三分一は、箸を左手に持ちて盛んに食物を搔き込むにあり。又た鍛冶屋が鎌其他小刀等を造るにも二三割位ひは必らず左利の爲めに用ゐせしむる樣、刄を附け置くなり。

▲生活費の低廉なるは、意想外にして、中流以下のものにありては大人一日の食費、三錢位にて足り、七八錢も支出せば所謂贅澤屋の資格に入ることを得るなり主食物としては、普通に粟及び高粱を用ひ、陸米は來客を饗應するか、正月か、節句か、または冠婚葬祭等の重立ちたる儀式の時に用ゆるのみなり。副食物としては、脂肪質に富めるものを愛用し、豚、羊、牛、鷄に白菜、蘿蔔、葱、蒜等を混和し、味噌を以て調理したるものを喰ふも、其貧民



女子職業全盛時代の想像圖

に至りては、粟若くは高粱の粥に、白菜の鹽漬を添ふる位ひのものに過ぎず、故に體格の充分ならずして、血色の不良なる止むを得ざるなり、滿洲人は七八歳の兒童より、半死の老人に至るまで、吸煙せざるものは、殆んど絶無にして、屋内は更なり屋外と雖も、常に煙草と煙具を携帶す、尙ほ之よりも痛嘆すべきは、

▲阿片の飮めざるは

彼等にありては、人生の最大恨事にして、金錢を得れば阿片を買ひ、阿片を買はんが爲め働き、食物を得んが爲め働けるものにはあらざるかの感あらしむ。阿片は其價格一兩に付我一圓二三十錢にして、一日一人の吸煙量、多きは一兩少なきも二三十分を下らず、一日の食費僅に數錢を以て事足り得べき土地にありて、一日一圓二三十錢の阿片を吸はんと欲す、隨分理窟に合はぬ話ならずや。

▲婦人が外出

する時に、白粉をつけるとか髮を結ふとか云ふことは、日本と少しも異ならず。其外裙子と云ふものを穿つ、之れは日本の行燈袴によく似たるものにして、人を訪問するときは、必らず之を穿つを以て禮とす。而して之を穿つて馬車に乘るときは大胡座をかく、見馴れぬ日本人には誠に異樣の感ありて、如何なる美人にても少々興の醒めざるを得ず、又下女は馬車の屋根の外に、馭者と相並んで之も矢張り胡座をかきながら供を爲す。夫婦同乘のときは妻を後に座らせ、亭主は前に座るなり。次ぎに日本と滿洲と反對せる事實にして、一寸面白きことは

▲舌打は恐悅の印

なること是れなり、我國にありては、何か癪に障つたり、ぢれつたかつたりする場合に、チエーと舌打ち爲するものなるが彼の地にては全く之れと反對にして何か好きな物を見て、非常に自分の氣に入る如き場合に、此舌打を爲し、次いで這個很好と拇指を一本つき出すなり、故に支那人に對し、腹立ち紛れに舌打を爲さんか、彼等は自分の行爲が日本人の氣に入つて居ると思ふべく、又彼等の舌打するを見て、怒れるものと

思ふては、大なる間違ひ生ずるなり。終りに臨んで結婚のことを一言せんか、彼等は結婚丈けは人生の至重至大の事件として、如何樣なる障害あるも、年頃には必らず決行せざればやまず。彼等の

▲結婚に關する觀念

は、實に日本人の想到し得ざる處にして、自國の國家は危急存亡に瀕し、吾日本軍は鮮血を流して露軍の擊攘に力め、彼等亦母屋は悉く日本兵の宿舍に徵發せられ、自分等は豚小屋然たる假小屋に、五組も六組も夫婦小供ごつたまぜに暮し居る際なるを以て、少しは遠慮して然るべきに、隣保親近を集めて馬鹿騷ぎを爲して結婚を擧げたるの例珍しからず、先づ結婚順序としては、第一議婚、第二納采、第三納幣、第四請期、第五親迎、第六婿見舅姑、第七婿盥饋、第八舅姑饗婦、第九廟見、第十婿見婦父母の十とす。即ち氷人の斡旋に依りて婚を定むるは議婚にして、男家より女家に物を贈るは納采、之れに對し女家より男家に返禮するは納幣なり。次で、

▲黃道吉日を撰ぶ

を請期と云ひ、輿入れを親迎と稱し、第六の婿が舅姑を見ると、第八の舅姑が婦を饗應するは、讀んで字の如くなるが、婦盥饋とは輿入當日新嫁は戶外に一步も出づるを許されず、兩便すらも爲す能はざる習慣なるを以て、新嫁は輿入の數日前より湯水を嚴禁し、輿入の前日は一切斷食を爲すを云ふ、廟見とは夫家の祖先を拜するものにして、輿入の翌日行はれ、婿見婦父母とは親迎の第九日目には新夫新婦相携へて、婦の家に行き、其父母を見るものなり、而して是等の婚儀は何れも父母の無理押附けに依て定まるや勿論なり。

流行の蝙蝠傘

觀風子

花と愛し隅田の長堤も新緑滴る今日此頃、袷着の裾重きを厭じ縞セルの單衣と云ふ季節となりましたから、こゝに本年流行の洋傘を竝べて見ませう。

△張方は相變らず淺張　一時流行した深張の洋傘は其の跡を絶ち、昨年あたりから男持のやうな淺張を、一班の婦人が嗜好するやうになり、今年は殆んど婦人持洋傘は縁附き淺張と云ふ趨勢、殊に昨年に比しては一と際淺く張つた方が流行と云ふ傾き、それにハイカラの細卷洋傘の需用者が頓に殖て來たと云ふ話し。

△日和傘と照降傘　洋傘にも日和傘と照降傘の二樣あつて、其の吋に由つて區別されて居る、先づ普通女持の日和傘に二十二吋、之が照降傘となると一吋廣くなり、二十三吋が定寸であるが、細卷は破格で二十六吋、それから傘骨は孰れも八間物に限られて居る、此傘骨も近年は舶來品に拂底を來して居るから、過半は本邦製の傘骨で間合せ、一本四圓以上の洋傘でなくては舶來の傘骨が用ひられない。

△染色と縁模樣　流行の染色と云つたら令孃向が玉子色＝桃色＝海老茶と云ふ華美向きな色合、令閨向はオリブ＝茶色＝紺＝青味黒と云ふ嗜好ですが、年齢に由り無論淡濃はあるものゝ、一般の色合は先づ恁んな物である、それに青味黒とは最近の新意匠で、外部が黒色…内部が青色に織分てあるから、光線の作用で白熱瓦斯に接したやうに、色が白く見える所から流行の位置を占たのだ相な、それから地質の模樣であるが、地紋を織出したのは廢れ氣味で、縁模樣と云ふのが大流行、ハイカラは縞の織出し、高尚向きは元祿模樣と云ふ呼び名である。

△握りとリボン　洋傘の握りとは柄の装飾した所で、此握りにも時々の流行があり、護謨張が隆盛を極めた時代もあつたが、今日の所では普通品が棕梠

竹、上等品が鐵刀木……黒柿の類、之が誂ひ向となつたら脊貝剮や、象牙と云ふ好みもあるのだが、從前のやうに彫刻は好まないで、總て淡白として物が流行、殊に細卷の握は香木と稱へ、槲の自然木で香氣のある握に限られて居る、所で握の寸法も長いのが流行で、先づ一尺より七寸位迄、又洋傘の裝飾に之迄は組紐の總を用ひたが、當年は同じ地質の裂で、蝶形や圓形も造り柄の所へ裝飾するのが大流行となつた、其の裝飾を同業間では單にリボン結びと云ふて居る。

△地質と直段　洋傘の地質はメートル絹、護謨綾、綾甲斐絹、艶毛繻子、毛繻子等で、上等品の價格は四五圓より廿圓迄、細卷は四圓より七圓迄、普通品で三圓より二圓位迄、併し毛繻子の相場は等外となつて居る、概しての相場は昨年に比して二割强と云ふ話しです。



菖蒲の節句

皐月庵

軒に菖蒲葺くてふ端午の節句も例年と異なりて、本年は殊に戰捷國の紀念として父兄が奮發なさるゝとやらにて、際物商等は財嚢を相應に膨ましたとの話しなり。

◉五月幟

△貴族的と平民的▽五月幟は元來屋外へ装置せしものなるが、何時しか室内へ裝飾する事となりたり、此室内の幟を座敷幟と稱し幟枠の寸法は六尺より二尺迄に限られ、其の木材も黒柿=欅と云ふ堅木類で製作するを例とす、併し需用者の嗜好に由り幟枠へ、獅子龍虎と云ふ動物を彫刻せし結構もあれど、普通品は象鼻と稱して幟を建る所が、象の鼻の如く構造したる物なり、

此幟枠も木材を吟味して、附屬品の幟や毛鎗類を特製とすれば、一基二百圓内外を要すと云ふ事なれど、然う云ふ貴族的の贅澤を離れ、平民的で行かば纔二圓にて新調が出來得るなり、されば幟枠が下駄を造るヰンと云ふ木材に下落すれば、初節句で幟を需要する向にては斯る粗製は好まぬと云ふ傾向なり。

△附屬品は總て道具▽幟枠へ附屬する幟や毛鎗、偖は箔置の馬印＝絹鯉類を、總て道具と稱し其の道具にも七本道具と五本道具の差ありて、七本道具とは幟三本、毛鎗二本、馬印一本手鎗一本、五本道具とは馬印と手鎗が除け、則ち五本道具となる併し上等と下等品に限り孰れも五本道具にて中等品は七本道具と云ふ習慣なりと。

△難しいのは華族の鎗▽幟枠や幟、毛鎗の等級は、其の構造の巧拙と材料の善悪に由つて差を生ず、幟地の如きも濱縮緬とは同じからず、總て上等品には善良の材料を選み、下等品は粗悪の材料を用ゆるより隨つて價格も廉價なり、勿論今は昔しと職人がちがひ、理想に適ひし模造品を製作する者が少なく、華族方の註文には幟屋も閉口の姿なりと。

△幟枠の附屬品▽五本道具の幟枠へ附屬するのは、馬印と絹鯉の二種に過ぎざるが、馬印は出世を希ふ千成瓢、又は打出の小槌と云ふ延壽を祝ひしもの、其の價格は枠附にて三圓より五十錢迄絹鯉は同じく二圓より五十錢迄と云ふ、格安物なれば初節句の進物用に、賣行き克きは此馬印と絹鯉なりと。

◉紙鯉

△紙鯉の購買秘傳▽江戸ッ子の代表者たる紙鯉は貴賤の別なく初節句に購求せざるはなし、如何な家庭にても必ず紙鯉を、屋上へ揭げるの習慣なれど、此紙鯉の購求に就ては大いに注意を要す、元來紙鯉は仙花紙にて製造する物なるが、近來紙類の騰貴に伴ひて粗悪の紙質を用ふる事となり居れば、紙鯉の購買に際しては鰓下の所より胴へ掛て殊に注意せねばならず、先づ粗製の鯉は胴の所が芥紙若くは、地漉の紙にて製造せし物なれば、其の心得で吟味せざれば大風の時は鯉が胴切りとなる憂へがあれば紙質の選擇は肝要なり、

◉兜人形

△兜人形は孰れも舊式▽戰捷國の小國民が初節句なれば、明治式の軍裝人形が多からめとは、世人の豫想なりしが事實は之に反し、孰れも舊式の兜人形が流行なり、之も新式の軍裝人形は價格が高い割に見た眼が却て淋しいから、矢張り相變らぬ兜人形をお求めになるのですとは十軒店店員の話。

△神功皇后と寶引金太▽幟店にて一番賣行きの克き人形は、神功皇后と寶引の金太郎にて、之に次のが鍾馗に神武天皇なりと

云へり、去る日淸戰役以前までは、鍾馗に次で關羽の實口よかりしも今日の所では需用者が皆無となりし加之、座敷幟の附屬品たる青龍刀迄、殆ど幟店に跡斷ちしと云ふ。

△寸法は雛と反對▽雛人形の上品を芥子雛と稱し、三寸四寸と云ふ雛が流行なれど、兜人形は之と正反對にて、寸法の延た丈が高價となるよし、普通の出來合物が八寸より九寸、上等誂ひ物は孰れも一尺以上にて一尺二三寸の人形を好みたらんには、一個二十餘圓と云ふ事なり、雛は芥子物に多額を要し、兜人形はすん物に上等品あるも、自ら其の嗜好の異なるに由るべし。

●古式の飾り兜

△甲人形と檜甲▽雛に古代雛の流行すると同じく、古代の飾り兜が復興せし向にて、神田末廣町の可名女屋では此種の飾り兜を鬻き居れり、此甲人形は骨董集の挿畫に基づき、玩具博士清水清風翁の考案になり、又檜甲は大内式に則りし古式の製作品にて、孰れも幟屋の崇拜する飾り兜なり。



△菖蒲棚と菖蒲太刀▽單に菖蒲棚と稱するもの、之は菖蒲輿を縮寫せし模造品にて、總ての構造に古式を則りしもの、又菖蒲太刀は例の小唄に謠はれる、菖蒲刀の古裝にて元祿寫しの古雅な物、先づ其の體裁は箔置の角鍔に、刀の鞘は極彩色と云ふ調度、普通の座敷幟とは趣きが異なつて妙なるべし。

〜〜〜〜〜〜

○淸國派遣女教員養成所　東洋婦人會の設立に係る淸國派遣女教員養成所は愈々（麴町區中六番町十四番地）五月七日入學試驗を擧行し同十一日開校の運となれり講師には理學士草野俊助、文學士波岡茂輝、中島半次郎、關口精一等の早稻田大學教授諸氏、井口あぐり、矢津昌永の高等師範教授諸氏、下田歌子、武村千佐子、藤生貞子等何れも知名の人々なり此の外音樂教師三名、手藝教師等總て十九名なりと。

泰西奇聞

機轉と頓智

S生

△牧師の機智――米國の或る牧師が庭園に花卉を栽培し樂で居た處が、鄰家の農家で多數の鷄を飼ふて居るので、屢々墻を破つて牧師の庭園に侵入して來て、折角丹精して栽培した花卉を傷くるのだからたまらない、牧師は再三鄰農に墻を修復して吳るゝやうにと掛合つたけれども、鄰農は一向牧師の申込に耳を藉さなかつたのである、そこで牧師は一計を案じ一日數個の鷄卵を鄰農へ持たせ遣りて、これは貴下の鷄群が私の庭園で放産した者であると云はせたら、案の定、農夫はその夜直に墻を修繕したので、翌日から復び鷄群の爲に花卉を暴される心配が無なつたと云ふ事である。

△商人の機敏――米國の商人の射利に機敏で競爭の激しい事は人のよく知る所であるが、市俄古の一商人は先頃商店の前に一つの小さな園を造り、園內に小兒の遊戲室を設け小兒を攜て來る母親が店頭で買物する間、小兒を此室に入れて室內に備付けある珍奇しい玩具を弄ばせることにした、處で母親が買物を濟ませて歸らふとすると、小兒はその弄つてゐる人形や、玩具を棄るをいやがつて泣く、母親は小兒の泣くのを制する爲に已むを得ずその玩具をも買つて行くやうになると云ふことである。

△醫師の機轉――或精神病院で數人の發狂者が、診察に來た醫師を圍んで此三階の窓から飛ひ下りて足下の巧妙な手腕をお見せなさいと云つた、醫師も一時は當惑したが忽ち思付いて手を拍て曰ふには、此窓から飛ひ下るとは猫でもする容易な事であるから、何の興味もない、貴方方が强てお望みとならば私は街上から此窓に飛上りて見せやう、是れは飛ひ下るよりは餘程興味からふ諸君此に待てお出なさいよと、云はれて發狂人共面白いとだらうと承諾したから、ドクトル先生は九死に一生を得た心地して室外に出て、匆々樓を下つ

たと云ふ。

△印度人の奇智――米國大統領が盛宴を張つて朝野知名の士を招いて饗應したとき、印度人の紳士も數名其中にあつたが、年少の一印度人は、白晳人が食事中皿に曾て見たヿのない食物を入るのを見た、此食物は芥子であつたか、該印度人は白晳人が少許づゝ取るのを見て非常に高價の食物だらうとおもひ、多量取つて一口に呑み込んだが辛さに堪へず涙が兩眼から溢れ出で制するヿが出來なく、遂に兩頰に流るゝのを、其側に居た老年の印度人は何故に泣くぞと尋ねたから、年少の印度人が答へて云ふには、私の泣くのは偶々我が父のグーロン湖に溺死したヿを追懷したからであると、斯くて老年の印度人も亦多量の芥子を一口に呑み込んで同じやうに涙を流したから、少年の印度人は意地惡く翁の泣くのは何故だと問ふたら、老印度人は答へて卿が父と共に溺死せなかつたを遺憾として泣くのだと答へたそうな。

△下婢の頓智――下婢がるあ日料理中に不注意をして犢肉五斤を焼き損じたので、主婦に叱られるのを免れやうと思つて猫に生肉を食はれたと訴へた、そこで主婦はよろしい、それでは直に實驗せんとて、庖厨に往き猫の體量を秤つたのに恰ど五斤あつたから、主婦は下婢を呼んで、マリヤ御覽妾は此體量が犢肉の五斤だらうと思ふが食つた其猫は何處へ往つたのだらうと皮肉に云へば、下婢は深く考へるまでもなく返辭は至つて輕快で、猫は恐れて逃げました。とはおもしろい。

△奇なる遺言――巴里大學教授化學博士ユリシュ氏は一人の子もなかつたから其死きわに臨んでその財産全部七萬五千法を公立博物館に寄附し、他の家財、寢臺、襯衣、紙類、化學器械から櫛、楊子に至るまで、鐵の箱に入れ密閉して二百年間保存するヿを遺言したのである、是れは二千百一年に至つて之を開き現に其室内に配列してあるやうに再び配列せしめ、二十二世紀の子孫をして現世紀に於て化學者が如何にして生活したかと云ふヿを知らしめんとの主旨に出たのであるとのことである。

●女學校卒業式參觀記

▲成女學校　四月三日神武天皇祭日を以て、同校內に擧行せられぬ、同日午後一時第一鈴と共に、生徒及來賓一同着席、校長の式辭ありて、次ぎに各科の卒業生に一々卒業證書を授與し、生徒總代の答辭あり、最後に來賓江原素六氏は、利休の茶の湯の話しを敷衍して、今日の女子は往々浮薄輕卒に流るゝ弊あるを戒め、廿世紀の新夫人としては、殊に尤も注意を要すべきものなりとて懇々一時間餘の演說あり、之れにて式を終り、生徒一同の製作にかゝる手工品の慈善市を開き、尙ほ餘興として卒業生及在學生徒の演藝あり頗る喝采を博したりき。

▲日本女學校　四月六日午後一時同校三階の大講堂に於て擧行されたり、當日來賓の主なるものは、大隈伯、東久世伯其他有志數名にして、式初まるや校長は卒業生一同に、一々證書と優等者に賞品を授與し、終つて卒業生に對する訓辭として、當今の女子は、兎角社會に出たがる風習ありて、稍もすれば男子のなすべき事業をも横取りせんとする有樣なるが、之れは大なる誤にて、女子には女子のなすべき、より大なる任務がある、夫れは何であるかと云へば、即ち家庭を守ると云ふ事だ、如何なる大政治家でも、如何なる大學者でも、大聖人でも、皆此の家庭の內に育てられないものはあるまい、去れば家庭は實に將來の聖人賢人を作るべき、源泉であつて、其の出すと出さゞるとは、一にかゝつて諸姉の任務であると云ふて、大に卒業生が前途の多事なるべき事を述べ、次ぎに大隈伯の演說、東久世伯の祝辭、土方伯の祝辭代讀あり、別室にて茶菓を饗し、夕陽西に舂づく頃無事式を終へたり。

▲女子大學　其月十一日例により創立紀念日を卜して、新築校堂內に擧行したり、時將に櫻花爛熳月白臺の春色駘蕩たる折柄、殊に我が國唯一の學校なれば、從て來賓生徒ともに一際目立ち、流石に廣き新築校堂も、狹溢を告げんばかりなりき、席定まるや、麻生學監の報告、澁澤男爵、大隈伯爵の演說ありて、校長は各科の卒業生總代を呼び、兼て美麗なるリボンを以て一括し置きたる大學部各科百三十四名、高等女學校七十九名の卒業生に證書を授與し終りて、卒業生が今日までの働きを擧げて、第一回、第二回の卒業生と比して、本校の生命が年を逐ひて、益々圓滿の境に進み行く事と、尙ほ將來の女子は意思の强固なるべき事を述べ、生徒一同の謝辭唱歌ありて、牧野新文部大臣は、女子の任務は修身齊家に在る事を述べて祝辭に代え、式終つて豐明館寮上にて父兄來賓一同に生徒手製の茶菓を饗し、生徒の案內にて校內各所を觀覽せしめたり、尙ほ當日大學部卒業生を代表したる大橋廣子の答辭は左のごとし。

答辭

大學部

年每に榮えゆく我が學びやが、こゝに迎ふる六年の春、花紅柳綠、さらに更に豐かなる今日しも數ならぬ我れ等が爲めに、かくも盛んなる卒業の式は擧げさせられつ。校長の君をはじめ、師の君達、さては我が校のゆかりも深き方々の御前にして、不束なる身には、おほけなき卒業證書のかしこきを賜はり、且つは、尊く美はしき御敎訓の數々、ありがたきを添へて賜はる。誠に、我れ等が身にあまる榮え、うれしとも、かしこしとも、告げまつる言葉をおぼえ侍らずなむ。

つく〴〵と、三年の昔を思ひかへせば、實に、我れ等は、妖雲晴く蔽へる野邊に立ちて、行く手の道も分けがたかりしを、あしたあした、醒めよ、立てよと、富士の白雪よりも高潔なる御敎へを聞き夕べ〳〵、卑しき我れを棄てよ、高き我れと生れよと、叱責の鞭よりも深き御さとしを受けたるまゝに、今はやう〳〵まことの人のふむべき道の片はしを辨ふる身となり、希望の光りに照らされつゝ、勇みて人世に門出するを得るに至りぬる、たゞ、やさしき師の君達の御惠みにこそと、身にしみ、肝に銘じて有りがたく、そゞろ、感謝の涙の湧きかへるを留めかね侍るにこそ。

あはれ、明日よりは、此の情け厚き師の君達の御傍をはなれて、茫々たる世の大海に舟出せんとす。思へば、險惡なる人生の海路なり。いかなる妖雲のみなぎり來りて、いかなる闇に我れ等を迷はすならむ。いかなる荒波の狂ひ來たりて、いかなる奈落に、我れ等を陷れんとすらむ。思へば〳〵知らぬ洋中に漕ぎいづる一葉舟、いとゞ心細くおぼえ侍るなり。さはれ、師の君よ、我れ等には、いづこまでも、師の君の示めし給へる女子の道は、踏みとげではやまぬ勇氣の友あり。我れ等が志さす彼岸には、必ず我れ等を待ち迎へてある光明の導きあり。我れ等は此の勇氣の友、此の光明の導きに待ちて、何處までも進まむとこそ思ふなれ。師の君には、いとしの子等が前途を思ひ給うてさこそは、千々に御心を碎き給ひてならめ。されど、幸ひにみ心を安め給ひてよ。此年、此月、朝な夕なの身に餘る御敎へは、何時いづこ忘れは侍らじ、示めし給へる女子の道、遠き彼岸に達するまでは、奮闘、努力、屈せず、たゆまず、進まむとする心は小さけれど、岩ほの如くに侍るを。

願くは、師の君達よ、師の君たちよ、朝夕に御身をいたはり給ひて、千とせのよはひを千歳重ねられ、續れて示めし給へる我れ等が彼岸に達するの行末を見そなはし、且つは、我れ等が至らぬ心の限ある毎の、道のしをりを、末長く賜はらむ事を、祈り奉るになむ。

▲一種の病氣▼

一筋絞み肉脫ちて瘠せる
一心臟の働き不順となる
一皮膚の色死人の如くなる
一風引き易し
一眼凹みて穴のごとくなる
一髮の毛脫ける
一身體懶惰となりて働を失ふ
一少しく働きても忽ち疲る
一食事前に心持惡しく或は氣違くなりて食するに懶し
一食事後に眠氣を催ふす
一夜眠り難く溜息を吐く
一音聲濁りて冴えず
一動もすれば眩暈を催す
一一般に體力疲れ眼と耳の力衰ふ
一勉强力薄弱となる
一萬事臆病となり些少の事にも驚ろく
一記臆力衰へて物事忘れ易し
一人と談話するを厭ひ常に幽靜なる所へ引籠りたがる
一手實へて筆などを執りがたし
一不意に失神し呼吸苦しくなる

右は明言し難き原因より起れる病症にて青年男女の尤も謹むべき處ろなり

新式 結婚道しるべ

本誌は愛讀者諸君の便宜を圖り、今回結婚道しるべの一欄を設け、普く公衆に對して結婚の手びきをなさんとす、求婚希望の方は、大要左の書式に倣ひて、郵送せらるべし。

書式

▲年齡十八、某女學校卒業(或は普通教育の有無)、容貌普通、血統純正、兩親共健在(又は死亡)家計は中等の淑女あり、相當の向(官吏又は商人)へ嫁りたし、(麹町、某)

▲年齡三十歲、血統正(初婚或は再婚)、何々學校出身、現今某會社員(或は官吏又は實業に從事す)、月收何圓(外に財產の有無)係累は現今父母と同居なれど別居するも差支なし云々、普通教育ありて體格健全なる處女を求む、但し容貌は美醜を問はず其他希望の點、(本鄕森川町某)

求婚者須知

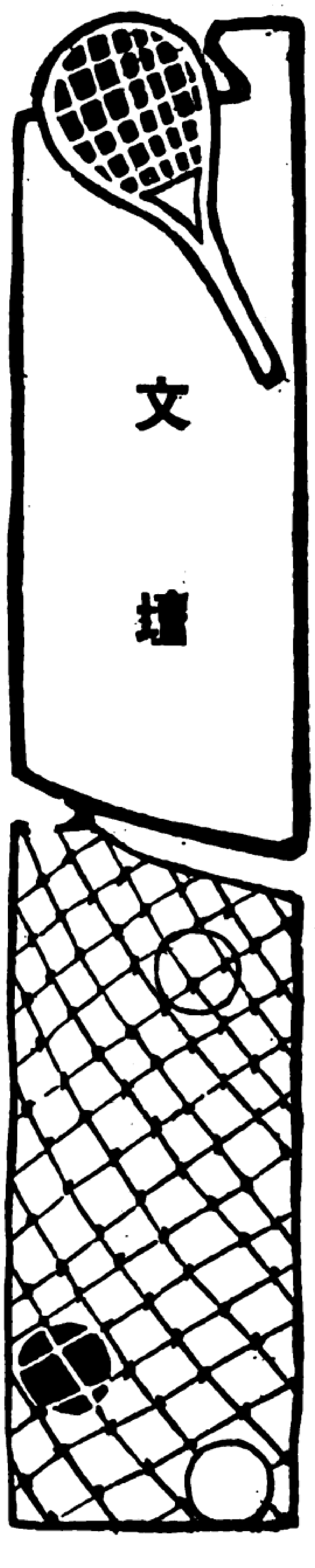
一求婚申込書は博文館女學世界交信部へ宛送らるべし、求婚申込は總て封書の事

一申込者は住所姓名番地を詳記する事勿論これは便宜の爲交信部に保存し置く

一書面の外に當人の寫眞を添へて送らるれば最も妙

一申込書は簡明を要すれども、尙參考の爲め身元希望の點を詳記さるゝも妨げなし

一申込は郵書の到着順により掲載の事、手數料は當分の內無料



美文

(天) 川邊の一夕

岩代國伊達郡小手川村字川原　岸野常子

花やかなりし夕榮の雲もいつしか其影を收めて、夕靄寂う川面をわたれば、黄昏の色何方よりともなく平和なる黒図なば罩めつ、そよ風おもむろに水面をなでゝ汀の小波綢う灯の影をくだきぬ。

いつ昇りけん朧の月は夢の如く淡く松が杖にかゝれり、妾は何とはなしに暫らくうち仰ぎぬ、かくて妾は美しき神のみ懷に抱かれけん心地して、やがて四邊の靜寂は、そゞろに妾をしてよしなき過去の空想に耽らしめぬ。

思ひ起す四とせのあと我がいとしき祖母君は逝き給ひぬ、昨日の淵は今日の瀨となるおすか川の流れて常なき世にしあれど、人の運命のなどはかくはかなき。

あはれ幼きなりは祖母君に伴はれ、日影麗かなる春のあした匂ひゆかしき薫の床に横はり暖き春の光を樂しみて花に休らう胡蝶の夢をおどろかし雲井遙に春を讃ずる雲雀なきゝて樂みにき、あるは風寒き冬の宵埋火暖き所に昔語きゝて膝を枕に平和の夢路を辿りしこともありしが、ォ、其の昔あゝこの今、其間僅に四とせにして、早くも幽明、界を異にせること、いと悲し。

一とせ人の心も霞と共に浮き立つ彌生の始め、ふと病の床にうち臥し給ひけるが、名だゝる醫師の見立ても其甲斐なく病は日每に重りゆき給ひて、あはれ骨立ちたる其顏には通ふ血潮のあとさへ見えで、痩せ細りたる手はさながら水に晒したるが如く、いといたはしく見え給ひぬ。

此の後、妾は故ありて他鄕の空にさすらひの身となりしが、水にも似たる空を掠めて雁が音寒う鳴き渡る夕べ、ひとり寐のすさびに餘念なき折から、祖母君危篤との報に接し取るものも取りあへず心もとなく汽車にうち乘りぬ、日頃早きも物急ぐ身にはいとおそく、停車場なんど無くもよけむと氣もいらだちぬ、程なく汽笛高くひゞきて我里へ入りたる時の妾が心の中そもいかばかりぞ。

急ぎ車を下り道の程も遠からればひた走りに走りて家に着くや、まづ寢室を訪ひまつりぬ、其時祖母君は兩眼ひたと閉ぢ口塞ぎて何事もいひ

出で給はず、只枕邊なる線香の煙細う横になびきて法の燈の明滅する時の姿が心よ、今少し早かりせば此世の面影を見まゐらしけむものをと、亡骸にすがりて泣きに泣きぬ。

あはれ、なつかしの祖母上は永劫の眠に就き玉ひぬ、ありし夕別れを惜み玉ひし樣は未だ眼底にあれど、はや四とせを經ぬなど思ふもかひなし、折しも鎮守の杜のあたり、青うながく尾をひきて流るゝ星の二つ三つ。

（評）筆致錬達、悲哀の情、痛恨の涙を叙して、而かも餘韻長し。

（地）渡船の春

京都府乙訓郡上久世村　井上らい

光のどけき彌生の空、鬢の毛を吹く春風の川岸に立ちて、美はしき春の光に醉ひつゝ、我は暫し渡場のほとりに佇みぬ。

彩霞一抹川づらをしめ菜の花黄く野中を縫ふて、悠々として遙に西に流るゝ大淀の河水青うして宛ら油を湛えたるが如く、動くとして見えぬ眞帆片帆のやがて霞のなかに消え行きて、微かに糸にも似たる欸乃の聲水を滑りて聞え、煙管をふくむ舟士の小笠の上に三つ二つ深山の花を載せて行くも、げに面白の春の眺めや。

川向ひ麥畑を耕し終えて　鍬擔げて此方に歸り來る若き夫婦の一つ舟に、夫は妻か身を庇ひ妻は夫がうへを氣遣ひて、互にしかと手を採り合つていと睦まじげに打語りゆく後姿、温かき情のほどもほの見えていと床しく、我は默してそが後影を見守り二人が戀のいや榮えゆかんことを神に禱りぬ。

（評）寫生文の上乘、のどかなる景色見ゆるが如し。

（人）墓詣で

岐阜縣羽島郡笠松四季之里　西川とふ

年毎に花の盛りはあるなめど、相見んことは會なりけり、げに賴みがたきは浮世なりけり。

小枝吹く風にさそはれて、ほろ〳〵と散る庭の八重櫻あゝ思ひ出多き櫻かな、去年に劣らぬ美しき花は咲きぬれど、相共に愛でませし母君は、枯草の葉末に白露宿る頃、はかなくなり給ひたるこそ悲しけれ。

思ひ出づれば忘れもやらじ今日の如く暖き日なりけるよ、母君は我が髪とり上げ玉ひ、清子は振り分け髮肩までたらし、櫻の下にて洋犬と無邪氣に遊びたはむれ居る見そなはしつゝ、いとうれしげに打ちほゝえみ玉ひながら、汝の學の業終へなんは又此の花の咲く頃なり、清子よ、其方も學の業にいそしみてよ、汝らの身の落着を見てこそ身まからまほしけれとのたまひしかば、妾聞きもあえず心細き事云ひ給ふものかな、猶あまたゝび共にこの花を見んとおもひ定めつるものをと申し上げにき。

春は來たり花は咲きぬ、されど共にと願ひし母君はあはれ何處よりか見そなはすらむと思へば覺えず胸せまりきて、涙のみ袖にしげし、今日は母君の忌日なれば、おくつきに詣でんと花、線香などたづさへ清子と共に我が家を出づ。

遠方の山々霞にとぢこめられ、見渡す限り青々として、處々菜の花の咲き出で、蝴蝶二つ三つ舞ひ上り、雲雀もまた虚空はるかに春の歌を謠へど、あゝ、されど、〳〵、かゝる長閑かなる春の景色も、妾には面白しとも見えずをかしとも覺えず。

清子ふとたちどまりて、道のかたへに咲けるれんげ草を見ながら、こ

を母君に參らせん、此處なりけるよ川に落ちて母君に助けあげられしは彼處なりきもろ共に摘栞せしはなど、無邪氣に云ふにつれても悲しさはいやましぬ。

やがて奥津城所につきぬ、誰がなきたまの標そ、入口にまだ新らしき卒塔婆あり、其傍の細道、右に折れて少し行けば、釋孝信尼と字もあざやかに、彫りつけられたる碑あり、これなん母君の御墓なりける。

水參らせ花筒取りかへ、せめてもと持ち來りし八重櫻の一枝を手向けつゝ伏し拜みぬ。

許してよ母君、五百重山距つる東の都にありける悲しさに、急ぎ歸りし甲斐もなく、末期の水をも捧げ得ざりき。

それよ、夏休み過ぎて學校に歸らむとせし折、身をつゝしみ學びの窓にいそしめ、汝が歸きて歸るを待たんとのたまひて御姿の鎭守の森にへだてらるゝ迄門に立ちて、見送り給ひけるが、つひに永き別れとなりなんとは思はざりき。

遺し給ひし御言の葉をあだにせむよしなければ、心ゆくまでみ墓守らんことも叶はず、又も愛宕の月を眺め、上野の鐘の音を聞く身とはなりぬ、御なつかしさのたえがたき折々は、御うつし繪を文机の上にかゝげて昔を偲び、かくして、朝な夕なにいそしみし甲斐あらはれ、過る廿八日恙なく業卒へて榮ある賞狀さへ賜はりて歸りぬ。嗚呼こを母上の見そなはさんには、如何に喜び給ふらんを、如何にうれしかる可きを、つれなき風にさそはれ給ひしこそかへすがへすもかなしけれ。

折しも吹わたる風のまにまに手向けし花の一ひら三ひら吾等の頭上に散りかゝり、智勝院の晩鐘は諸行無常を告ぐるに似たり、あはれ淋しき夕なるかな。

(評)かなしき事を綴り玉ひしものかな、断腸の思ひを叙したる筆致仲々にあはれなり。

(秀) 里の夕

津市
西新町三九　松尾花子

ほかほかと暖かな休日を幸に、久し振りに神代の里の乳母を訪はむと年老ひた爺に稜川を渡して貰つて、小山に立つた村端れの見返り松の麓に憩ふたのは丁度夕暮であつた。

眼前に展べられた村里の平和な景色は宛然パノラマを見る樣で、私は只恍惚と眺め入つたのである。

今しも落ちた春の日の餘光は丁度一刷毛なすつた樣に、西の空を茫乎と末廣がりにぼかして其果が水色に溶け合つた境には早や十日餘りの宵月が淡う描いた樣。足許にうねうねと流るゝ宮川の水面にはゆるやかな欸乃を乘せた筏が動くともなく下つて行く。其川上には薄墨で描いた樣な神代山が眠つて居て、其麓の村家からは細々と夕餉の烟が漂ふて居る。今迄殘光を惜むで鳴いて居た雲雀が一羽乳母が家の傍の鎭守の森の邊りに落ちたかと思ふと何處かから長閑な牛の啼聲が洩れて來る。折しも畑歸りの農夫であらう鍬を肩にした一人の老爺が眼前の野道を辿つて行くと其跡を追ふ樣に山寺の鐘が悠々と鳴り響いたので、やをら立上つて歩を移そうとすると何處から許つて來たのであらう、一羽の蝴蝶が私の手にした花束に接吻し乍ら導く樣に飛ぶのであつた。

(評)これと云ふ奇はなけれど、スラスラと流麗したる筆致に、無量の妙味あり。

(秀) 遺族

北海道松前郡福山
字神明中島祓衣方　中島すみれ

久し振にて、乳母がり訪づれての歸途、町はづれのとみる家の門邊をすぐるに、その家より幼なき人の泣く聲もれ聞えければ、あしき事とは知りながら、黑塀の節穴に片目をあてゝそと覗ひぬ、障子のあけ放たれてありければ、室内は能く覗はれぬ、年の頃六つ七つ許りの幼兒の涙に咽びつゝ、頻りに父が凱旋の日を問ふなりき、やさしげなる二九許りの彼の姉は幼兒を抱きて、父上はおッつけ凱旋し給ふべしとなだめつ賺かしつさり氣なき體を粧ふといへども、其の顏には春の雨の如くに、綿々たる憂愁の色の見ゆるなりき。

吁々この家は是れ法庫門にて討死せし鬼大尉の宅にてあるよ、彼等が母は三四年前にみまかりしに、又しても力と頼む兄を失ひし悲しさよ。姉は幼なき弟に、孤獨の淋しみを知らすことの餘りにつらきが故、かく僞りしなるべし、幼兒はいと嬉しげに。父上は金鵄勳章をさげて歸り玉ふとか、坊のお土產は露助の首なるらんかなど云ひつゝ、室内を飛び廻るさまのいぢらしや、彼女はそと椽に立ち出でゝ、せきくる涙を袂にぬぐひぬ、われは限りなき同情の涙に咽びぬ。

春の日足の短かくてはや黃昏に近づきぬ、われは二人のはらからが行末、幸あれかしと祈りつゝ、家路にと足はこばせぬ。

（評）文は未だしけれど、人の不幸に同情を表する心情の奥床しさは側として人を動かすに足る。

春の一日

周防國都濃郡
戶田村　小澤ちゑ子

美はしき花野の夕暮。花ちやんを連れて、摘草からの歸り路。長閑な春の日の光を浴びて、運ぶ足も自然とゆるやかに。

と見ると、路邊の菫に黃ろな小蝶が一羽、靜かに、菫の花片に包まれて、美はしい夢路を辿つて居るのか、羽根を休めて居る。

少し後れて、蓮華の花を摘んで居た、花ちやんは之を見付けたのか、急いで飛んで來て、蝶を取らうとした。蝶はふいと花を去る。花ちやんは何處までも取る氣で、追つて行く。

あまりの面白さに、私も足を休めて、「花ちやん蝶には羽根があるの」と、いふと。「宜いわ、私羽根があつても取つて見せるから」と威張。

何時しか春の陽も入りて、西の空に彩雲の漂ひ、舞ひ上がる雲雀の歌家路に戾る馬子の聲、胸のいななき、やがて、遠近に霞の棚引きて、春の日は暮れた。

花ちやんは失敗に終つて、手を空しく懷に入れて遂に家にと歸つた。今宵如何な話があるやら、定めし家内を笑はせることだらう。

（評）可憐掬すべし。

懷舊の涙

美濃國武儀
郡東武藝村　山田愛子

山嵐の羽風に散る櫻花は、霏と散りて、三百年の御靈思ひ出多く、たゝずむ池のほとり、一畝の小天地に、絲と針との苦を知らぬ鯉と緋鯉の遊ぶも、長閑なりや。亡き母の七回忌の墓參、かへるさは雨となりて、はらはら二人ぬれぬ袖もなかるべく、あはれ、情に甘き御膝のあたりにまつはりて、からき世の味を知らざりし身の今は絹に包む針に泣き、飾る僞の綱に責められ、二人の涙は母を慕ふ懷舊の思よりしたゝりて、おなじかなしみの小河に流れあふらむ。あはれ。

（評）文短くして、情長し、

消息文

（天）友の許へ

美濃國　山田愛子

きのふは思はぬ御邪氣にまかりいで、あまりの御なつかしさに、心の外なる長居、ゆるし給ひてよ、三年ぶり、あひてかたりし思ひのなほいひ漏したることども、今朝となりて數ふればいとさはに、おなじ心の君もおなじ思におはすらむ。あはれ、蒲公英に罪なき春をたはむれたる昔は夢となりて、わづかに文の上にのみつなぐ思の逢ふてかたる樂しさは友情更に新しきもの丶加はるがごとし。いつも健なる叔母上のきさくなる御話ども承りて、母なき身の母とたのむに、子よりもまさりたる御いつくしみたとへがたなくうれしうなん。賜りたる御寫眞、亡き母のものと並べて、机の上に挿み置きたるに、耻しき我身を見給ひてなにごとか二人さゝやき合ひ給ふがごとし。御禮まで、かしこ。

（評）文も至れり、情も至れり、消息文としては最も趣味ある書き方と申すべし。

（地）旅より友の許へ

名古屋　杉谷稜子

山田より（第一信）

今朝出發道すがら津、香良州をめぐり、山田に着き申候、外宮に詣でそれより俥を驅りて務暮五十鈴川のほとりなる宿に旅枕を定め申候、朧夜の月は今神路の山をはなれ候。

二見より（第二信）

五十鈴川に漱ひして内宮を拜し、朝熊におもしろき木樵り歌をきゝつ二見へ出て候、朝暾の壯觀を樂しみに夜に就き申候、今宵空よく霽れをり候。

奈良より（第三信）

寧樂はよき所に候、宿は猿澤の池畔、南圓堂は花盛りに候。大和は花多く候。

故さとゝなりにし奈良の都にも
色はかはらず花は咲きけり（奈良御門）

大阪より（第四信）

午前當地につき名所も大方は一覽いたし候、道頓堀、千日前の夜況賑はしく候、明日は須磨明石に遊びて即夜京都に入る都合、宿はお約束の通り姉の宅に候へば、早速御支度の上御來京のほど待ちたてまつり候。

花さける京の西山東山
君とし二人遊びくらさん

（評）文樣麗、筆に匂ひあり。

（人）姉の許へ

三河國　房枝

お亡りなされたお母樣のお植ゑ置き遊ばした築山の根の菫が、澤山きれいに咲きましたから、勿體ないけれど少し摘んで、糸で結んで門の小川に流します、此の川の末は姉樣の御住居の前の池、其の水に白と紫の花が浮びましたらば、お母樣の御紀念とお思ひ遊ばせ、そして是非近い

うちにおいでなすつて、菫の花を御覧遊ばして下さいまし、お母様も此度待つていらつしやるから、其日にはお墓參を致しませう。お父様はお留守ですし、姉様にもお別れして、道さんと二人でさびしくて仕方がありませんのですから、どうぞいらつしやつて下さいまし、待つて居ります。

手紙を松やに持たせて差上げました、菫と、これと、どちらが早く姉様のお住居に着くのでせうか。

（評）　貴方凡ならず、文に稜あり、筆に趣あり。

（秀）　花見にさそふ

大阪　江口千夏子

この花を御覧あそばせ

三年前母と嵐山にまゐりました時、後の思出にもと歌集にはさんで置きましたのが色も變らずこのやうに

花を見るにつけてもその里の昨日今日が偲ばれますよ

今年は必ずお思ひ立ちあそばせ

爛熳と咲匂ふた櫻は山一面を淡紅に包みつくして　そよ吹く春風にちら〳〵散つては下ゆく保津川の清い〳〵流れに漂ふ趣

こたびはこの川に舟を浮べて一日身を花にまかせませうれ　萬はこの花にお尋れ遊ばしてさよなら。

（評）　文巧にして筆また軽し。

（秀）　離れ小島より

三河　澤田つま子

現なの思ひ湧くともしなき欄寒く十日餘りの月影さして、遣戸開きて眺むれば、おほ生み出す浪路の末の霧に煙りて朧なるも、春のしるしにや候はむ、あはれ情ある君がみ手振拂ひ、強き言言ひて別れ參らせてより早一年を寂寥しき境に過し侍りては、流石に人の戀しう、今宵を如何に過ぐさせ給ふかと、何とはなしに涙ぐまれ候ひぬ、さあれ神聖なる教職の爲なるを、など泣きますと強き事言ひて別れまつりし身の、今更故郷の空戀しうてとは言はじ、さりとも人なき欄の柱に稍まきて、遙々眺めやる雲の流れも、そよ我思の影ならじかと、ありしに似たる月影の今宵を如何に眺め給ふ君よ、浪の音近ふ、離れ小島の夜は更けて候。

（評）　あはれ深きおとづれよ、

（秀）　親しき友を誘ふ

能登　すみれ子

なんて良いお天氣でせう、本當に氣が浮き立つて仕方がないわ。あらツ鶯が……まアいゝ聲だこと。

あの小夜子様！　あなた何うして此頃の樂しい季節を過していなさるの？　私なんか逆もじつとして居る事が出來ないので、お晝過から袖ケ野に詩趣狩をしやうと思ふのよ。貴女も是非行つて探さうじやありませぬか。そら私と同じい元禄リボンれ！、あれを掛けて私の家迄被入いなあ。私も掛けて行きますから。こちらの違はたんだ内の芳子と、それから試驗休に歸つて被在る叔母さん所の靜枝さんそれきりよ。おゝそうそういつか見せましたつけ？　ベンチに腰掛けて書物を見ている女學生の寫眞を。あの方よ、あんな面白い人つたらない、だから少しも氣が張らないの。おや今が丁度九時、するとお晝迄にはまだ四時間。何だか待ち遠い様だわ。さよなら御免遊ばせ。あら又鶯が……

（評）快活の筆致掬す可し、かゝる方と一日を山野に連立ちて、詩趣拾とやらを致さば、さぞ面白き事と存じ候。

（秀）鄙の里より

京都府　井上らい

あはれ懐かしきは都にいます心隔てぬ友垣の御俤にて候かな、文のたよりも怠りがちにいかに過させ給ふにか、

こゝ山里の栞、の巷白き手拭の姉様冠りあした冷たき草履つきかけ厨に寒き星の光を背に浴びて、風寒き山の井に米を磨ぎ薄暗き北の窓に里唄の節をかしく、木綿の機織りいそぐ妾が身傍目には楽しき平和なる家庭とも見ゆれ、都の空青春の希望を載せて高の露に溢れたき校舎に通ひ給ふ友垣のうへ思ひ出でゝは、さすがに我運命のはかなきを悼み、織る機の杼の運ひもと絶えがちにてそゞろ涙ぐまるゝこども候ひしが、あはれ都の空美はしき友垣さはになはし候へども　深山の奥に住み侘びぬる一本菫のうへを思ひ出で給ひ、折々には雁の羽の御玉章給はりなば、山里のさびしさも打忘られていかに嬉しふ候はんを

（評）達者、軽妙と評し申さん。

都の姉上へ

久美濱　猪子しづ子

鄙鄙との一聲に、取る手遅しと見上ぐれば、いともなつかしき姉様よりの御玉章、思はざりし折柄とて、いとゞ嬉しく繰返しく拝見致し候ふ。

仰の如く、咲く花も、囀る鳥の聲も、吹く風も、朧にかすむ月の光も、皆暖く、若草に色そふ様になり申候さるにても御姉様には、何のかはりもあらせられず、日々学びの山路を進ませ給ふとかや、嬉れしうも羨ましう思はれ候ふ。

兄様の御病氣の程、御心配なされ候ふ由、樁くれないに梅の花ちらちら咲きそめ候ふてより漸くかろく、今は朝夕あちらこちらに杖を曳かれ折々は妹つれ菜つみなどにでかけられ候。

姉様よ知り給ふや庭の梅を、ことしより花をつけそめたゞならぬ薫りを放ち、谷の戸いでし鶯のやどゝなり候ふ。

姉様も此の梅の様に、文の林に香へる花の枝を早くも手折りてかへられんこと今よりまち居り候、筆末ながら御大切の御身の上、御自愛なさる様、呉々も祈り上げ候かしこ。

（評）こまやかなる情の籠りたる、よきおとづれなり。

若菜に添へて都の友に

下野　鈴木久枝子

御喜深き佐保姫は詫しき片山里も見捨て給はで、見渡す限り白露のやう、袖吹く風もたゞならぬに、いかで一日を胡蝶とならではと同じ心の友どち、三人四人そゝのかしてうかれ出で候、青やかにもえ出でたる若菜こゝかしこにあざり候ひしに、うれしさは秩ならぬ籠にあまるまでつみため候まゝ、いさゝか捧げまゐらすべく候、わが宿は蓮蒲公英の籬にて心を慰むるによければ一夜を栞のいほりの假宿にとの御心がまへにて、渡らせおぼしましてよ。あなかしこ。

（評）他の奇なけれど、消息文の體を得たり。

短文

(天) 何の緣

大阪　後間八重子

學校までの道、稻荷樣の鳥居の前にて會ふ色黑き人、さる邸の生垣の横手にて會ふ、半股衣の愛らしき稚子、眺望廣き丘の上一本松のあたりにて會ふ品よき高髷の若人、さては菜賣肥料車、この三年が間朝な〳〵見て時の遲速を知る標準ともなる程に、表面は眞面目胸に笑顔して會釋もしたき其人々の何處へ何處の何んと云ふ方々とも知らず、あはれ學校を出で家も移りなば一生の離別、思へば何のえにしなるらむ。

(評) 因緣はうれしく運命は悲しきもの也、人生を一面より見れば四海皆な同胞なれど又一面より觀ずれば四海皆他人なり。夫婦も他人、親子も他人、兄弟も他人、他人と思へば悉く他人なれど肉身と思へば悉く肉身なり、五十年短かしと雖も忘れ難き人尠なからず、袖振り合ふも他生の緣とやら、此文人生の眞味を解したる人ならでは作り難し。敬服々々

(地) 流水

本鄉　石原かほる

眞綿も沈むやうな此靜かな小流れと岩を嚙がす谷川の流れとは、同じ人の中でも優しい人と恐い人のあるやうに、生れつき、ちがうのかと思つて居た、私は或日君ちやんと何の氣なしに板の片でせき止めましたら急にごう〳〵と音をさして、此温和しい水が板を飛び越へて岸のパンジーも、あやめも桃の芽生もどれもこれも……私はそれ以來全く水のおいたをやめました。

(評) 比喩奇警、敍景敍事共に群を拔ける名文なり、才能羨むべし。

(人) 村長の孃さん

河內　田中美壽榮

或る村の共有地に數十本の櫻樹あり、麗陽三月花開くの頃は觀客跡を絕たず爲に樹邊に「此花猥りに折取るべからず」と記したる建札あり。一日四五人の女生徒學校の歸りがけ、花下に來り此處彼處と逍遙せしが其內の一人の女生が忽ち數朶を折り取るを見て、他の女生驚きて之れを制せしに、平然として答へて曰く、內のお父さんは村長だ。

(評) 村長の孃のみならず社會には往々恁る事實ありて富者を壓す嘆ず可きとどもなり

古きうつしゑを見て

大阪　杉田敏子

死んだ妹の机のひき出しから出た、一枚の古寫眞。裏には明治三十三年四月、姉さまと一緒にうつすと、おぼつかなく書かれてある。あゝ、こんな時代が妹にも妾にも、あつたのかなあと思はず、淚ぐまれた。

(評) 中宵醒め來つて落花を見る、人生の春は實に夢よりも淡く顧みれば吾人亦過ぎこし方に淚あり、文想共に誦するに足る。

みどりの夜

長野　小岩井なみ子

燈火かゝげてそと窺へばいしくも瘦せしわゝこの寢顔よ、心地よげにすやく〳〵と眠れども肉落ち骨あらはに、何を夢むにかあらん折々色なき頰に浮び來る笑くぼ又いぢらし。互に灯かげにそむきて言葉なく、みどりする夜の心細さ。外は雨ふりいでしけはひにて、夜更けの庭の山吹に愁をさそう蕭々の聲。

（評）死は人生の悲慘事なり、されど之を極端に悲慘らしく云はずして、美しく描けるところに凡手の及び難きを見る。

鷄

伊豆　長谷川　ゆみ子

飼馴した夫婦の鷄の中へ此頃美しい一羽の新婦を迎へさせた。夫はよい妻を得たと嬉しさうニコッ〳〵と呼んで餌を食はせるので、老妻の機嫌は以の外よくない、夫の目を偸んでは嘴でチョイ〳〵つゝくと新婦は痛さに堪へかれて悲鳴を揚る。噫家庭の波瀾と苦痛とは鷄の世界でも免かれぬさうな。

（評）比喩頗るよし、一家の平和は一夫一妻にあり、作者彼の世に誇る人を諷刺し得る妙を極めたり。

可愛いゝこと

大阪　あ　い　子

「ゆくは極順か奉天かいづこの空か　知らないが御天子様のためぢやもの村死するはあたりまへ」と美いちやん！私のたつたひとりの妊、學校へ上つて五日目、今日は日曜で遊びにきてるの！が走つてきたの、私膝へだきとつて聞いたの「お天子様て何！」笑つてれ「まんまんちやんよ」「ぢや何處にいらつして？」すぐ右手（お佛壇が置いてあるので）を指して「あすこに」と……何とはなしに涙が出ましたよ。

（評）着想新しからざれどこれ一篇の哀詩なり、文章亦無難

四月九日

赤坂　服部　須惠子

十六夜の月櫻の梢に懸り、空たゞ淡うして、碧の霞、白の雲、月に近きはしろがれの如くに光り遠きは綿などのやうに和らかなり、ぶら〳〵と足迷ひ出でしこゝ幻の仙境に立てば、彌生の昼影いと微かに花の梢に浮かべるやう、蜜枝は日の光を餡して仄くらく、疎枝は月に揃きいでゝ仄しろし、刹那！薄き光を縫ふて櫻の花片姿が項をかすめつ、春霞月を籠めて夜白きが中より俚歌朧に洩れ來つ、今宵、蛙の聲いとかすかなりき。

（評）平凡の中に一導の神氣籠れり、されど朦朧の字句は力めて避くべし。

床しきもの

越前　島　芮　蕗　子

花の枝に歌かしき短册を結びたる。秋の夜の琴の進音の月下の朗吟。青葉がくれの白百合の花。功をほこらぬ人。かくれし弁普來。梅の香。蓋の花。松の木の間より櫻のひらり〳〵と散りくる。山吹の花の下ゆく水にうつれる。起居しとやかなる女。手跡美しき手紙。振袖に矢の字結びのうしろ姿。

（評）更に床しきは此文を作れる人の姿ゝ心なり、若し人に矜る心しなくば。

落花

出雲　世良ふみ子

書齋の障子をあけ放つて裏庭に美しく咲いた櫻を眺めながら机に凭りかゝつて詩集を繙いて居ると、そよ〳〵と媚びるやうな春風に二三片の落花が吹き送られて詩集の上へ散りかゝつた。妾はそれを捨てやうかと思つたが、何とも言はれぬ其風情につい心を動かされて、散つた花片を其儘詩集にはさんで置いた。

（評）當世ハイカラ式都常套の趣味はあれど取材の美しきところを以て採れり。

妾の不運

鹿兒島　市來そも子

「姉さん」

續いて聞ゆる泣聲、

今迄縫物をして居た妾は針を捨てゝ直ぐと妹の所に行つた、所が左手に洗臂塗の塊を握りながら「この氷砂糖には毒が……」と聲が細くなつたので妾は驚いて隣の醫者を迎へたが　其甲斐もなく昨年阿母さんに別れし四歳なる妹は翌日遂に私の膝の上で永眠した。

（評）事實とすればお氣毒のとなり、されど洗臂塗は炭酸那篤僧母にて藥物學上少しも有毒の分子を含まず、これ恐くは作者の巧みしものならんが道理に合はぬとは厭ふべし。

此の雛樣

大和　西尾敏子

今日も奥の一間に、妹の芳子は、何の倦む所なく、お雛樣の御守をしながら、お風邪召さない樣と、火鉢を雛壇の上に置た、其の戸瑞穂がふれたのか下壇の女雛が、ばッたり俯伏してしまつた。驚いた芳子は、直ぐ立てゝ、傍の緋桃の二瓣を、手早にむしりとり、どうするのかと思つて居ると、兩ほゝにはりつけて、此のお雛樣は、白酒に酔つてたんなに赤くなつて、おたほれなすつたのよ、と大得意で、部屋中を歩いて笑つて居る。

（評）想は聊か陳腐なれど一寸文意に捨て難きところあり。

リボン

陸奥　角田芳子

「姉ちやん！」今帯をたゝんで漸く片付けほつと一息吐いた所へ、駈け込んで來たのは、幸ちやんと言つて、今年四つの弟である、「幸ちやん？」と、言つて顔を覗き込むと、にこ〳〵笑つて、何やら、後へ手をまはして隱して居るので、「幸ちやん何ですお見せ」と、言ふと、彌々笑つて後じさりをするから、無理に捕へて其手を見ると、何時の間にか、大切に机の上に置いたリボンを、持つて居た。

（評）和氣靄々たる姉弟の情掬すべし
されど投書者に望ましきは材を家庭にのみ執らずして今少し廣き範圍に於て着想せられたし

夏

三重　奥瀬かすみ

葉櫻が茂つて居る窓で、お婆さんがブン〳〵糸つむいで居ますと、一疋

の小雛がむくりと起き上つて、優しい聲で泣きながら、糸車にざれて居ります。垣の梅干が今眞盛りで、眞白な鶏頭の赤い三羽が、隣りの犬に追はれて、けたゝましく騒ぎました。ちようど今は眞晝でしよう。村六戸の窓からは、青い煙が登つて、モーと平和な牛の聲がします。

（評）初夏の小天地眼に見ゐが如し、希くは恁る仙境に我世を經なん哉。

春の日

愛知　ますみ

詩集手にして今し、葉櫻ちりしく裏庭に行き給ひし兄上、チックにかためしおひげのあたりをおさへつゝ歸り來給ふに、「兄さんどうなすつて？」と、問へば「今彼處で毛虫にさゝれたのさ、芳さん一寸見て……」縫物の手止めし姉上の障子よりのぞきて、クスリと笑ひ給ひぬ。

（評）實際ありさうな滑稽なり。

平和

岩代　岸野常子

いつも遊びに來る里の子供はまだ見えぬ、桃の木が一ぱいに影を投げて居る庭には鶏がコッ〱と餌を探して居る。日當りの好い艶々した南檐には黒斑のやさしい小猫がさも心地よげに眠つて居る。遠方の大空には鳶がゆたかに輪を畫いて綿のやうな雲が靜に流れて行く。サツと金魚が小波を立つて浮んで來た、アレ何か物ほしげに小さい口をあいて居る。

（評）これ一幅の繪畫なり、これぞと云ふ奇はなけれど文章に些の嫌味を見ず、殊に結尾の一句にて一篇を躍動せしめたり。

鐘の音

岩代　岸野常子

靜けき夕暮の大氣をふるはして、遠く、遠く、我が世の外に消えゆく鐘の音！

あゝ妾は、懐しき姉君の、死出の山路を辿られてより、その眞の味を知りぬ。

（評）悲愁を抱く人ならではコノ味は知るまじ。

美代ちやん

米澤　藤倉富士子

丸窓の隙間から覗いて見ると、しめやかな雨は、靜に寄合つた若葉青葉をたゝいて居る。美代ちやん……はと見ると何時の間にか京人形を抱へてすや〱と寢て居る樣子。本箱の上の金魚瓶には、淡紅の桃が不作法に押してあつて、金魚が鼻頭でチヨイと折口をつゝくと、ホロ〱と花瓣が微笑むで居る美代ちやんの頬のあたりへこぼれる、美ちやんはどんな夢を見て居るのやら……

（評）穩健の想穩健の筆、スケツチとして成功したるものなり。

新體詩

(天) 靈の光

名古屋市長島町二十番戸横井方　杉谷稜子

瑞雲きよく　日に映ゆる
五十鈴の宮の　朝ぼらけ
天の扉ひらく　御光りは
大和島根に　照りわたる。

としふる杉の　木立には
神代ながらの　色こめて
み山をめぐる　御裳裾の
川常滑めに　清からん。

白妙の衣　かろやかに
樹の間を行くは　宮つこか
神樂の音の　奥深かく
杉の葉わたる　朝の風。

あやに尊き　日の御座
千木高知らす　玉垣に
靈の光りの　凝ろがごと
うす紫の　靄たゞよふ。

(地) 平和の春

札幌南一、西一、二十加藤方　杉山清子

河ゆるう海に流れて　やはらぎの曲かなで
山高う空にそびへて　太平の舞をしまふ
樹々緑枝を交へて　かぎりなき平和をしめし
鳥きよき囀をいでゝ　むつまじく自由を謳ふ
遣り羽子の天に上りて　鞠唄の地に賑へば
人は皆稚子にかへり　あらたまる年をことぶく
見渡せば大和田ひろく　民草は風にやはらげり

(人) 逝く春

岩代若松市大町二　武藤新子

月朧ろなる春の夜の、光靜けき庭の面に、
只音もなくしめやかに、散るは櫻の花びらか。
逝くもの知らず青春の、清き光に照らされて、
希望に滿ちし若人の、戀になけるも多かるに。
あゝ短しや春のゆめ、朝の野邊に露を吸ひ、
夕菫の香に迷ふ、胡蝶の夢も惜しかるに。
さもあらばあれ詩人よ、散り行く花の下陰に、
春のゆくへを思ひ見よ、淋しき運命を君や見ん。
現世樂しく酒に醉ひ、乙女の膝に眠るとも、
やがて血は冷え骨枯れて、空しき骸に返るなり。
散り行く花よ心あらば、わが衣手をうつなかれ、
床しき香ひ嗅ぐ毎に、淋しき思ひ絶えざれば。

(秀) 岩清水

越前國敦賀町晴　島萬壽子

荒る木立は年ふりて、もれくる日影ほのぐらき、
深谷の森のそのかげに、玉かと湧くよ岩清水。

樵夫はこゝにやすらひて、
朽葉かさなる石の上に、
苔むす岩根めぐりつゝ、
よし波たてゝむせぶとも、

咽喉のかわきやいやすらん、
茶碗のカゲも見ゆるなり。
絶えずさゝやく眞清水よ、
流れずあれな塵の世に。

(秀) 學べ乙女

海野濱子

文机に寄ておもへは
久かたの月日うつりて
花のかほてりにほひつゝ
いつしかに露おきそめて
初しぐれ木の葉をさそひ
かうしとて露もいとはず
心となうますたゆます
まなびやに通ひ〳〵て

ときばりのまはると共に
春風の吹きそめしより
けふはまた田面もあをみ
草むらの虫もうらふれ
一年もはやく暮けれ
やすしとておこたりもせず
時のまをなしみ〳〵て
勉め勵めよ

(秀) 野に得し歌

玉野とし子

さくらに桃にはた蝶に、
雲に冷えたる詩の巻を、
はや老ひ初めし春の色。
野邊にさまよひ逝く春の、
あせしすみれに首問へば、
噎き低ふ首垂れぬ。

自然の興な喚びによび、
暫し温めし甲斐もなく、
名殘惜みて痿れむる、
榮なき筆は火にせよと、

處女文壇懸賞募集

▲美文　廿四字詰廿行以内
▲消息文　半紙一枚十行限リ
▲新體詩　半紙一枚十句マデ
▲和歌　一人一首端書ニ限ル
▲小説　半紙十枚以内

以上題ハ隨意ノ事

賞金規定

和歌新體詩、短文、の優等者へは左の賞金(圖書切符)を呈す

▲天壹圓　▲地五拾錢　▲人參拾錢

又美文、消息文の優等者へは

▲天貳圓　▲地壹圓　▲人五拾錢

▲秀逸三拾錢

小説の當選者へは

▲甲拾圓
▲乙五圓　現金にて呈す

投稿はすべて女學世界處女文壇係宛にて字體明瞭に記すべし
(〆切五月十五日限り)

短歌

(天) 逸題　姫路　なみ子

若草に眠れる稚兒の夢の輪をめぐりて舞ひて蝶去りあへず

評。技巧の至れる歌也。何等可憐の光景ぞ。夢の輪をめぐりて去りあへずとは殊に面白し。(塚越停春)

(地) 折にふれて　敦賀　島萬壽子

いかならむ蝶のあや羽につゝまれて咲匂ふ花に埋れはてなば

評。着想の嶄新を取る。(同上)

(人) 暮春　備中　有田たまき

行く春のあはれもいとゞ身にぞしむ野守がいほの春の夕暮

評。枯調の高きを以て勝る。技巧を弄せずして妙自ら在り。

秀逸

〇〇逸題　小石川　串本孝子

春の神置のたもとしぼりませし迷が裾野細き雨降る

亦技巧至れるもの。

〇〇折にふれて　三重　佐々木らく子

君戀ふる歌かきのせて笹舟を流しても見つ春の夕暮

春怨の纏綿掬るが如し。

〇〇若鮎　熊本　安田文子

櫻の花の浮きて流るゝ川の瀬をさはしりのぼる春の若鮎

嬌態を見る。

〇〇折にふれて　備中　有田たまき

旅人の捨てしわらじの朽目より土筆も出ぬ蝶も舞ふなり

實景。餘味言外に在り。

〇〇春の歌　濟國　山下あさ子

おぼろ〳〵かすみにあけて遠近も花になりゆく春の曙

其氣象よりして已に春の歌也。

、〇〇名所春曙　筑前　吉澤しつ子

むつ田川けぶる柳の絲の如き月ぞ殘れる春のあけぼの

烟る柳の絲の如き月の語、殊に面白く候。

、〇〇春霞　大阪　杉田敏子

さつま潟沖の小島のかすみ〳〵を一つになして立つ霞かな

此も面白く拜見致候。

〇〇春夜　牛込　平塚白百合

春の夜は笛ふくによし舞によし京の五條は花の香流れて

京の五條にして、此詩ふさはし

〇〇隣の花　牛込　さくら子

咲きいでし花に隔てになかりけり垣の隣りの櫻なれとも

評者の家また年々隣家の花を見て、常に此感あり。

〇〇夢　三重　服部歌子

おそろしき夢よりさめてふと見れば床の白百合花ひとつ散る

百合花の散りたるを心かゝりとする所、よく情を得たり。

〇〇木蓮　　　岡山　林　榮子

姫君の琴の音やみてひろ庭の芝生しづかに木蓮のちる

何等閑雅の景致ぞ。

〇〇山家待花　　　石見　宮内はる子

山住の我柴の戸のあけくれに待るゝものは櫻なりけり

用詞巧妙。

〇●〇今年の花　　　牛込　藤野ゆかり

この春は月の夜頃を盛りにて花の心もうれしかるらん

〇〇櫻　　　德島　茂子

家づとにたをらんもうし櫻花手折るは人の心ならねば

〇〇寄柳述懐　　　羽前　みやま

姿こそ風にもなびけ青柳の心の絲の亂れやはする

〇〇落花　　　千葉縣　加藤いし

あかぬまに散ればこそよし櫻花散らずば人の惜むべしやは

〇〇衣　　　河内　前田毅子

ぬふたびに思ひ出でけり針の目のこまやかなりし母の敎を

以上四首、共に好個の敎訓歌。

〇〇春雨靜　　　愛知　荒川とし子

かすむとも降るともわかぬ春雨をしだり柳の露に見るかな

歌意確か也。

〇〇春雨　　　神戸　富士見みゆき

この花にねむる小蝶の夢にだもさはらぬ程の雨降り出でぬ

眠る小蝶の夢にだもさはらぬ程の雨とは、形容し得て妙と謂ふべし。

敬服々々。

〇〇柳　　　大阪　森川春子

春風のわたる小川の橋のへにけむると見しは柳なりけり

嫩柳を歌ひて、殆と遺憾なし。

〇〇春雨　　　山城　北尾きぬ子

淀川や水は流れず船行かず堤十里を春雨けぶる

宛として畫圖の景。

〇〇遠村花　　　名古屋　淸水みさを

しづが住む里とも見へず遠山の霞につゞく花の一村

凡ならず。

〇〇春のうた　　　越後　荻野てる子

笛の音も琴のしらべもしづまりて霞に暮るゝ花の七村

好什。

〇〇海邊春月　　　大阪　江口千夏子

うつ波の音も高師の濱松におぼろにかゝる春の夜の月

かゝるの語、波と松とを兼ていふ。用語の措もせざるを見る

〇月下花　　　淺草　春江

花の下にくむ杯にかげさして露に匂ふ春の夜の月

〇歸雁　　　胤子

聲ばかり空に殘してうち霞む月に消行く雁の一列

〇〇春夕　　　阿波　富子

うちよする浪もどたへて海原は夕べの霞たちこめにけり

〇〇逃雁　　　本田よし江

花にあけ霞にくれて渡守歲とせこゝに水棹とりけん

〇〇櫻　　　愛知　森井ますみ

あて人の胸のいなゝき遠くなりて夕風寒う櫻みだるゝ

○○青柳　京橋　高宮安子

青柳のなびく姿をつくぐ\とながめ暮せり春の日ながを

○○夕雨　上野　佐藤露子

羊よぶ草笛はたとたえにし野守が宿の夕暮の雨

佳調

名所花　美濃　山田愛子

嵐山松のみどりも埋れてきえぬ雪こそ櫻なりけれ

春曙

百千鳥さへつる聲にねさむれば山きはあかし花のあけぼの

櫻花　仙臺　岩淵あやぢ

牛追ふて村人かへる川添への土堤一里中櫻花さく

春曙　大和　森枝子

鐘抵う鐘の扉を渡り來て花の香ゆるゝ春のあけぼの

兵庫　柳田白百合子

鐘樓に白衣の僧の影見えて櫻みだれてかれなりひゞく

[illegible]　埼玉　東角井高子

願はくばひさごとなりて兄君のけふの花見の伴してましな

村春雨　水戸　榊春子

雲雀鳴く麥生三里はたそがれて夕ぐれくらき村の春さめ

桃　名古屋　杉谷稜子

水ぐるま伏屋にめぐる音もして桃の花さく川沿ひの里

月前花　阿波　遠坂壽代

忍はずも花の木蔭に來つるかなおぼろ月夜にうかれぐ\て

田舍の春日　越後　梅村秀子

幼子をむしろの上に遊ばせて子守二人は蝶追ひまわる

春月朧　伊豫　渡邊梅子

大空は花のにほひや滿ぬらむ月の光もおぼろなりけり

夜櫻　赤坂　服部須惠子

朧夜に月の影蹈ふ追分や櫻亂れて馬子諸霞む

折にふれて　岩代　菅野和子

ゆきくれて宿かる家もなかりけり花の廣野は蝶のものにて

○　上毛　大澤峰子

みし夢はまことならねど何となく心にかゝる春雨の窓

春の跡の中に　名古屋　世幾子

ちる花にありし昔ぞしのばるゝ西山嵯峨の雨の夕ぐれ

うぐひす　播州　ちどり

古鄕の軒ばに咲ける梅枝に今やなくらむうぐいすの聲

古鄕　神奈川　常子

花すみれつみてたむけし地藏そんかたむきましぬ古里のみち

尋梅　野口きのゑ

あしびきの山路ゆきかふ山かつの袖もゆかしき梅が香ぞする

初幟　備後　渡邊せい

高き名を世にはあけよと祈りつゝ軒ばに立つる初幟かな

○　山口　靜子

此まゝにたへて忍の森の露消は果つるとも色に出でぬや

向上心　大阪　伊達新保子

ひたすらに慕ひすゝまん險き道我魂の緒のあらん限りは

逸題　京城　久米しげ子

美しき妹ありひと日あれ君と呼ばれてみたし春の曙

春月　青森市　智嘉子

花言はす月も語らす雨の夜の小窓に君を只思ふかな

春の山　常陸國　板敷文子

白たへの衣ぬぎすてあさな夕なうすぎぬまどう春のつくばね

柳　廣島市　稲田鈴香

青柳のいともやさしく見ゆるかないけの鏡に姿うつして

妾香港にまかるなり父に　石見國　宮内登美子

百とせもながらへましてさち多きわがゆく末を見ませ父きみ

○　本郷　川島千枝子

我かたへ散る花びらをそと受けて糸にとうして土産にしにけり

春風　千葉　加藤なつ

春風も心してふけ香に匂ふ櫻の花に蝶ぞれぶれる

○　豊多摩　森さと

ふるとしも知らでれし夜の春の雨あけて見るこそ長閑なりけれ

春の月　下關　春野花子

春の日を花にくらしつ更に又つきぬ眺めの今日の月かな

○　久美濱　猪子しづ子

人目忍びうきをかされしそでながらときて嬉れしく語る今日かな

凱旋　在筑後

凱旋や氣車の窓より眺むれば門邊に遊ぶ妹の見ゆ

○　下野　齋藤松子

春姫の使か白き蝶二つ文讀む窓を訪づれにけり

櫻狩　徳島　今野めい

櫻がりあかぬながめにれはくれて月をふみつゝ家路につきぬ

○　播摩　富原愛子

かいなしと思へどまたも思ひいづる花の盛りに散にし人を

折にふれて　山口　竹内琴

明日こそは花見せんとて嘗しに空しく花も雨に散にき

月　本郷區　角谷眞子

不忍の池の汀に水ゆれて十六夜の月金波銀波を

○　三河國　しげ子

霰雨の靜にそゝ〳〵春の宵窓の椿のまたしてもちる

卯の花　下野　松本千鶴子

魚はれて水の輪ゑがく谷川のよどみに夕卯の花ちるも

大戰ありし折　下野國　松本蕭子

號外の鈴の音ひゞく夕まぐれ風もあらぬに櫻花ちる

春の歌の中に　岩代國　志賀和佐子

秋のみか友も訪ひ來ずわびしきは花ちる頃の春雨のやど

折にふれ　伊勢　佐野みよし子

慾をすて我のみ思へば世の中はいつも靜けき春にやあるらん

月前柳　神戸市　鍋島とら子

打なびく糸にひかれて春の夜の月もやとれり岸の青柳

曉雞　伊豫　熊谷友枝

曉のきよきれざめを何とてか亂れ鳴なる雞の聲

蝶　稲荷岡　關菊枝

谷川にちりし櫻の花ひとつ流るゝあとをしたふ蝶かな

桃花　越前　下里暉子

美しく咲きにし桃の花見つゝ老いぬる身をも忘れけるかな

雨中躑躅

我ものと思へばかろき傘の上に積るは雪か白椿の花　河内　田中八須子

菫

ひとよれてすみれやつまむむらさきのにほへる妹もましろ春野に　大坂　山中金子

近江の里

比叡おろし琵琶は鐘の音よき處夕月うつら三井おぼろなり　東京　堀田たけ子

春

菜の花を手折て歸る道すがらしばし胡蝶に追はれてしかな　伊勢　藤堂しげ子

牡丹

あれはてし庭にさけともはつか草とめる色香はかくれざりけり　三河國　山中その子

春雨

玉椿おつる音して夕occupied暮のさびしき庭にはる雨のふる　備中　すみれ

花

山賤か薪木にさせる家つとのひと枝の花は誰かながめなる　淺草　多田春漪

新樹

昨日まで花の雲なす長等山今日はみどりの色ぞゆかしき　滋賀　森しな子

蛙

さみだれに物思居るこの夕へ聲うちそへて蛙なくなり　北海道　藤本すみれ

雨

賤の男かわら打つ音もたそがれてのきの白桃雨しづかなり　三重　佐々木すみ子

春夕月

ながめやる霞かはなの山の端をにほひ出てたる夕月の影　丹波　佐藤けい子

水邊垂柳

水かゞみ糸より細きあさみどり清きながれにくしけづりつゝ　名古屋　柴山まつ子

蝶

菜の花を頭に挿して菜摘む賤の少女に蝶のたはむる　熊本　大谷ひで子

春人事

春ごとに花みる人の心こそ都もひなもかはらざりけり　尾張　うれひの子

折にふれて

なけばとてくゆめばとても消ゆべしやあまりに多きこし方のつみ　大阪　梅香

柳

さほ姫の春の手染の玉柳糸のみどりぞ色まさりける　宮城　八島なか子

鶯

耳なれしうぐひすなれと聞く度にいつも初音の心地こそすれ

○

花染めの京の舞妓が褄とりて脚ひやしおる春の小川かな　能登　夕暮子

半霞

おしな山峰の松風音たへて霞わたれる春の夕暮　伯耆　入澤采蘋女

○

夕闇に辿り出でにし妻の身の君が墓前になき明すかも　四谷　横田久子

夕歸雁

ふせやもる三日の月のかげほそふくれゆく空に雁なきわたる　備中　小山梅香

○

我妹子の手ならす琴の糸よりも細うけふりぬ今朝の春雨　小石川　みさほ

折にふれて

明日ありと思ふ人の心こそ我身をやぶるかたきなりけれ　河内　田中八須子

母の墓

汲めど〳〵猶つきせぬは垂乳根の母の惠みの泉なりけり　呉市　木村高子

歸來

ふるさとに立かへりてもつはくろめ又おとづるゝ軒は忘れし　大阪　且合婦美子

笛　　愛知　梶田愛子

我が琴の調べのまゝに通ひ來る笛の音ゆかし朧夜の宵

亡き祖母の御まへになてし子の花を供へて　　伊賀　服部かつ子

あはれとも見そなわすらん愛でましゝ昔こひしきなてし子の花

○　　美濃　田中文子

唯獨り病むとは無しに枕しておもふこと多し春雨の空

○　　丹後　野崎てる子

すれた樣なすがた見すれど姫百合のもゆる思ぞ色にあらわる

待花　　安藝　堂面幸子

つくばれも霞みそめたり隅田川つゝみのさくらいつかさくらん

○　　長野　前澤まさを

菜の花のめさむるはかりいろめきてあけはなれゆく川沿ひの村

春の旅　　長野　上石小夜子

散る花の都をいでゝ信濃路に櫻緋桃を又もかざしぬ

夕暉　　能登　島山峰子

もたえては夕を軒にたてる鳥の見るにえたへぬ雲の行方や

○　　上毛　夕泉子

雨やみて寒き野寺の經たえぬ椿花散る春の夕暮

春雨　　麹町　武田满子

櫻花散りもやせんとたゞひとり心いたむる春の雨かな

兒の病をみとりて　　大阪　櫻井貞子

苦しけに咳きいる乳兒をみとる夜は共に血をはく思こそすれ

暮春　　神戸　脇屋とみ子

青の葉に花の名殘をとゞめてもなしきは春の別れなりけり

卯の花　　姫路　船戸ゆき子

岸近く卯の花白う咲き初めてうつれる池の水温むらし

○　　三河　きく子

讀經の聲うら淋し夕まぐれ鐘のひゝきに花散りみたる

歸雁　　三河　さゝはら

さなきだにおぼろに匂ふ月影をなをかすめつゝかへる雁かな

月と菫　　下野　河和浮舟

敷しまの大和男子も春野邊の月と菫に淚潸々

春雪　　丹羽　衣子

ふりながら積るともなくきえにけりわかなつむ野の春のあわ雪

春の歌　　京都　井上らい

牛賣りて厚樓葺き替えし家のかと風雲に豆の花咲く

春宵所感　　淺草　堤いく子

月白ふさかりの花を照す宵暫し忘れぬつきぬ闇へを

彌生の響　　四條畷　上野泉

山寺のつく鐘の音にさそはれて二ひら三ひら山櫻散る

落花　　丹後　すみれ

訪ふ人もなきわかやとのあれ庭に花さへも散る昨日今日哉

讀書　　備前　近藤紫子

睦まじく學の窓にくらべにし振分髮をいつか忘れん

○　　大阪　櫻山光子

緋桃匂ふ流れのほとり日は落て山家三軒霞に消ぬ

○　　和歌山　木本花子

春媛のびんの小櫛か青柳の糸に懸かれる三日月の影

人事詩（劍花坊撰）

題『美しい事』

天

伊勢國鈴鹿郡井田川村西富田　佐野みよし

日本は朝日に匂ふ御國柄

評、この度は人事詩として募集致しました「美しい事〳〵」の前句附をするツモリにて御作り下さるやうにと御注文致しました、そして美しいといふ字を入れないやうにと願つて置きました、随分六ツかしい難題で御座います、これまでの柳體詩租に御投吟が無いのも道理と存じます、乍併流石に我誹友諸嬢だけありて、何のものかは作りて出來ぬことやはあるとの意氣込で、この難題を詠みこなして御投吟下さつたのも少なく無い、非常に感謝に堪えない次第です、どうかこれからは選度御目に懸けます大略の標準によりて御投吟下さるやうに願つて置きます、さて此句の價値に就いて一寸申上げます、所謂高番句といふのでありました、古い前句附萬句合せには此類が非常に澤山あります、後世天保ぶりの狂句作者などから見たら、何の味も無い、面白味の無いものと思ふかもはかられません、がどう致して非常に高尚な上品な句でありまして、前號柳體詩の「櫻狩」の句の如きも、此句に比較すれば大に見劣りするやうに存じます「日本は」と詠み出したところに云ふに云はれぬ壯嚴なところがありまして、「朝日に匂ふ」の字で、櫻を暗にほのめかして「御國柄」といふ座句へシックリはまつて餘韻嫋々とも申しませうか、引き締まつたところの力と云つたらありません、この句を讀み去つて瞑目して御覧遊ばせ、緲渺として櫻花千萬樹、旭日國光を薫ずる景色がありありと眼前に浮ぶ心地がするに相違ありません、そこが詩の妙味です、單に敍景詩ではございません、立派な敍景詩でございます「美しい事〳〵」の題には一分の隙もなく叶つて居ります。

地

本所石原町五十九　松井ひろ子

鳳輦を送る千代田の緋の袴

評、莊嚴端麗、神聖に犯すべからざる誠に難有い、自然に頭の下がる句で御座います「鳳輦を送る」と詠み出して、神々しき儀式及び四邊の光景を寫し出し「千代田」の字にて始めて其場所を見はし「緋の袴」にて人物を描く、萬乘至尊の御鸞輿を昔の世界にして見ると一層難有くなるです、宮女三千の緋の袴、何と「美しい事」では御座いませんか、

人

伯耆國日野宮内　入澤ぬい

吉野山櫻が下の御所車

評、人事詩となると景色を寫すと同時に、必ずこれに古今の人事を配合せねばなりません、景によりて人が活き、人によりて景が活きるのでございます、それに古い歴史などを配合するとになると何となく奥床しく感じさせるものでございます、この句は吉野山へ御所車を引き出した丈けで立派な詩になつて居ます、しかるになほ一層裝飾を加へて「櫻が下」といふ言葉にしても實際にしても、上品で、即ち題の「美しい事」の權化といふべきものを添へて全篇を活動させるは感服です「落花深處說南朝」「滿身花影夢南朝」「延元陵上落花風」「南朝天子御魂香」などの名吟も思ひ出されるでは御座いませんか。

五客

花盛り娘十六名はお染　芝　多敬子
漆塗りの馬車にかゞやく殿御振り　尾道　中尾武子
花の宴杵屋の撥で暮が明き　深川　安間もと子
湯上りを合せ鏡で前うしろ　神戸　青楓女史
お化粧の間を御留守番のぞくなり　出雲　紅洋子

秀逸之部

梅若が袖にちら／＼花吹雪　下谷　大谷冨子
貞女めき赤い襷で桑を摘み　米澤　藤倉富士子
圓滿にホゲロも出來ず子は育ち　京都　藤田靜枝
貝づくし乙姫様の御振袖　新潟　きよ子
舞ふ蝶に野は一面の金砂子　宇都宮　大谷常子
番の蝶どこまでもついて行き　下谷　安西しげ
仲のよいはらから戀を讓り合ひ　神戸　河本杉子
檜笠脱げば吉野の花ひとつ　京都　井上らい
櫻狩ものいふ花のみだれ咲き　備後　神迫たか子
三つ衣裳着せて親馬鹿笑顔也　京都　高橋賀那子
金屏風まばゆく見せる嫁御寮　山城　古川よれ子
淺黄空くもりなき世の日本晴れ　周防　太田靜子
散つてあと又も九段にさくら花　千葉　田村源子

佳句之部

背な一ツたゝかれ下女は得意なり　上野　佐藤露子
花の下三人揃ふ千代田ぶり　攝津　中馬しづ
乙女子が揃の襷汐干狩　芝　新野蕊枝
七五三眞赤な海老の飾られて　伊豆　佐藤美佐夫
評判の姑の氣嫌とる嫁御　廣島　赤松しのぶ
ひぐらしの御門拜觀腰が拔け　秋田　なにがし
程遠き宿まで騷ぐ櫻狩　播磨　鹽田さと
摘草はすみれ蒲公英つく／＼し　石見　岩本芳枝子
夜櫻は月が雲間へよけて居り　下野　澤幡ゆたか
錦にもまさる白衣で凱旋し　美濃　田中久代
姫君様の姿たとへば絲櫻　紀伊　前田よし子
赤いもの花見戻りのさゝ機嫌　同　川俣ひろえ
子捕の鬼に櫻をふりかける　神戸　間名部こま
ラケットを右手に式部の頬の色　紀伊　なでし子
才媛の詩想の花の咲く世界　足利　それがし
極彩色縱から見又横から見　大阪　れん子
日本の吉野は花の世界一　福島　遠藤きみ
孃ちやんのまアいゝことは赤いべゞ　北海道　一毛久子
菫野に御辨當ひらく御姫ィ様　東京　ゆき子
武士の國を忘れず親に孝　伯耆　入澤ぬい
下されば下女かける氣で襷を締め　神田　田中浜子
振袖に光琳風の裾模様　同　菱刈なほ子

佐保姫が花の舞臺で蝶の舞　栃木　相良くらめ
母親の自慢娘の寫眞なり　伊勢　安岡小政
見ちがへるやうに友達めかして來　尾道　中尾ひさ子
春の美は世界の人か桃櫻　新居濱　山崎くま子
櫻狩散るひとひらを袖に受け　備後　中村保子
花吹雪拂ひもあへず配達夫　淺草　堤いく子
紛な箱を今出ましたと山出しの　仙臺　齋藤きみ子
休むとも無しに休むが花の下　秋田　須原そのえ
罵られて尻尾で孔雀股を立て　深川　安間もと子
佐保姫が寢そべつて居る花の床　神戸　背狐女史
奥樣のかはりになれば言葉まで　出雲　紅洋子
眞白の腕へちよんぼり蚤の痕　米澤　富士子
着飾りて十三詣りする娘　京都　藤田靜枝
美容術濟めば海老茶の緣に成り　下谷　安西しげ
温室の中にごたつく四季の花　山城　古川よれ子
櫻花廣瀨中佐は死したるか　周防　太田靜子
病親を負ンぶして出る花の山　千葉　田村源子
白河の花うり乙女打つれて　尼崎　しづ子
海の花滿艦飾の各國旗　紀州　前田よし子

加

青そらへ胡粉をちらす千羽鶴　劍花坊
お刺身の紅白を盛る九谷燒　同
水彩畫銀杏一ッで景に成り　同

次號　人事詩　課題

『雨(あめ)』　『姉妹(けうだい)』

『雨』は春雨、五月雨其他涙の雨、礫の雨等を趣向して詠むもよし、是非共人事に配合せざる可からず、『姉妹』は姉妹の情をうたふか或は第三者より姉妹を見て之を題目にするも佳なり、右に擧げたる美しい事の撰句中『仲のよいはらから云々』の句の如きはこの姉妹の題目にもはまる者と知る可し。

新案　ものはづくし

▲怖いもの
▲馬鹿らしいもの
▲途方もないもの
▲汚(きた)ならしいもの

右投書募集

謎々新題

▲貧乏人の財布
▲三井呉服店
▲下女

〆切五月十五日

本月より諸嬢の出題を募る奇抜な題を續々出して下さい

謎 々

『人』『郭公』『柏餅』とかけて

一 等

▲郭 芝區明船町一番地 新野壽枝子

敦盛の母」と解く、心は「青葉に鳴(泣)く

評、郭公に配するに青葉の笛、餘計な事は云ふまじ、只妙手々々と申さまくのみ、

二 等

▲郭 神戸元町四ノ八一太田方 青瓢女史

浮氣な亭主の妻に對する仕打ち」と解く。心は「泣いて居るに姿も見せぬ。

評、美人空閨に泣くですかれ、謎もかういふ具合に行きけば仲々うれしい。

三 等

▲郭 牛込矢來町 きよ子

掏摸と」解く。心は「鷹(金時計)の在處を尋づねる

評、コントラストの妙とは蓋し之を云ふものなるべし、

▲郭…四人で圍むチャブ臺」と解く。心は「四角(詩歌句)に親しむ 下野 大谷富子

▲柏…小兒の母」と解く。心は「木の葉(兒の齒)に包む 芝 新野壽枝子

▲郭…劍術の試合」と解く。心は「突(月)の前に一撃 美濃 田中千代

周防 梅子

▲柏…夏の山」と解く。心は「木の葉で包む 徳島 古田梅子

▲郭…產前」と解く。心は「初聲を待つ 彦根 葉末露子

▲郭…蓄音器」と解く。心は「聲斗りで姿が見えぬ 青山 勝田秀子

▲柏…シガー」と解く。心は「葉を巻いてふかす 松江 きみ子

▲郭…赤ン坊」と解く。心は「血(乳)に鳴(泣)く 尾張 早野すみれ

▲郭…大江千里」と解く。心は「月に啼く 同 同人

▲柏…金澤市」と解く。心は「加賀(香が)第一 越前 下里露子

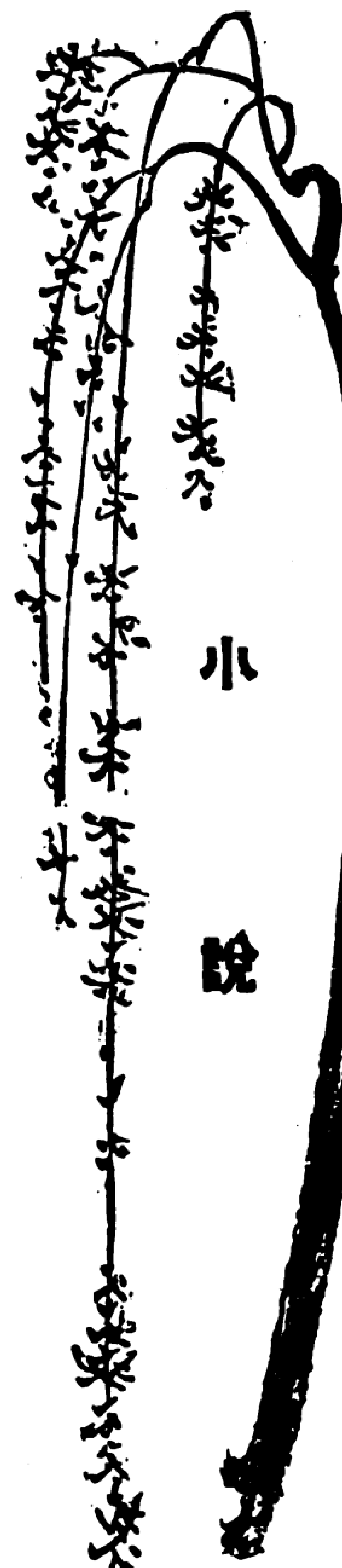
▲郭…女學生の理想」と解く。心は「姿が見たい 奈良 森島梅枝

▲柏…嬰兒」と解く。心は「葉々(母)で包まる 徳島 古田梅子

▲入…猿」と解く。心は「人に能く似てる 本郷 石原かほる

▲郭…隴頭の妻」と解く。心は「月夜に啼(泣)く

▲柏…神代の人」と解く。心は「木の葉に身を包む 駿河 富士野雲子



小說

黃金結婚

なでしこ

『ホントにもうこり〱して仕舞たのよ、妾もう一家だの一族だのと勿體臭い係累の多い處は降参よ、爵位も榮耀も有りは仕ないわ峰子さん。』

書窓に心耳をすますてふお好か、竹五六本窓際によせて眞向ふるは成りの惡い山茶花が大小二本、夫でも赤い花がチラホラ笑ひかけて居る、根方の石には緣日仕込らしい菊の鉢植を置き眞裸の棗目の手洗の傍には春まち顏の藪柑子がチョッポリ、至つて狹いが掃除のよく行屆いた日當のよい庭にそうた六疊の一室に腰高の障子ガラリと開いて更紗の座蒲團で向ひ合た主客二人。『ホヽヽマサかそうでも、だつて田鶴子さんは島木さんをあんなに愛して嫁たんぢやありませんか。それに一年經つやたゝずに御離緣だつて私しや今聞くまでチッキリ嘘だと思てたわ。』『何處でもそんなに云はれてよ、全く私の思慮が足りなかつたんですね、ホントにいま〱しいやうな思をしてよ、もう島木のしの字を聞くのもいやなの。』客の田鶴子は相手の顏を見て微笑ながら敷島錦の洒落た卷烟草入から贅澤な細卷をつまみ出し、馴れた手つきでパッと紫のけむりを吹く。一寸目を丸くした峰子は話の切目に、これ見てくれと

計り着飾た田鶴子の今日の粧を烟のひまからまじ〳〵と見るのであつた。昔ながらの美しい髪を引被つた様な束髪にして光たピンと、本甲の三枚櫛をさし、すき通た様な面に畫た様な生際、クッキリ際の美しい首に相良縫の青海波を現はした半襟をめぐらし、えんじの雨がすりのお召縮緬に變柄の下着を重ね羽二重素鼠の八掛細目に、仕立下ろしと見えて一寸折た前褄のふくらみも美しく鶯色地の金通しの丸帯の上にうづら縮緬の染色のしつくりしたのをなで肩に被り、かすみ打の紐の下からは新式九重形の鎖がギラ〳〵、白魚を並べた様な指には白いのや赤いの、眞珠と云ふのか蟲た様なのやらが光つて陶器の安火鉢が耻さう。あゝいくら自分の物、島木で拵た自分の物とは云ながら是がマア失禮ながら卅五圓の内務省の小官吏の娘のする服裝か。男爵夫人の時は時、離縁になつて歸れば元の竹中田鶴子さん、身分相應にして居らつしやれば好い事に、さらされた昔の耻をぶらさげて歩いてと、知た者は顔をしかめて居るかも知らずに御自分はこれで威張つた積りで被居んだらう。あゝ田鶴子さんも此心が抜けない中は眞の人世の幸福を授かる事は出來ないと峯子は獨りつく〳〵思のであつた。峯子は急須に湯をつぎながら『けれど田鶴子さんこり〳〵つて貴方先様の複雜な家庭は初から知れてるぢや有ませんか。阿母さんが有つてお妹さんもお有りなすつて、夫から阿母様のお里が伯爵家で。』『エヽ知てたのよ。けれど妾は島木一人にさへ愛されて居たらと、元來妾はね親類附合だつてあんな念の入た面倒なものとは知らなかつたのよ耻しい事だけれど、ねえ峯子さんお互にホンの身柄一身の處に育つてさ。一寸より合つた時、お酒の一つも飲んで、歸には車で送て上げるのが親類附合位に思つて高をくゝつて嫁たのよ。夫に何よ學問こそマア一通り了つてあるけれど外の藝事はから駄目でしよう。だけれど謝な事は些とも氣にかけないで、うつかり嫁て見ればタラ妙子さん、島木の妹ですよ。年は私に三つ下ですが琴の名人だ?そうよ。峯子さん妾には聞く耳もないんですもの、夫から盆石や、活花も出來れば

お茶の湯も、茶の間が三つも有てよ。何だか可笑な座敷だと思つたら夫が茶の間よ。妾が嫁て三日目、夫處へ呼ばれてね、妙子さんのお手前で、こう立てる事よ。阿母さんが正客に座て島木が眞中で其次が妾阿母さんのお里の姪の方が二人末席について、サアソロ〳〵譯の分らない其お手前が初まつた時には妾ホントに死んで仕舞たかつてよ。けれどマア島木の傍に居たんですから小聲で己の通りに仕ろて云つてね。マアどうなりこうなりお茶を濁したもの〻峰子さん外の人の手前、又次の間に居る召使の手前二時間計りの間に妾しや十も年をとつた樣な氣がしてよ。其日は夫れで濟だのですが親戚中に年頃の女の多い家でね何のかのと云つて集つては、ソラ茶の湯だのお花だのお琴の合せものだのつてね。夫れも好いんですが其度に妾も出なくちや惡いの、どうせ何一つも出來ない妾だもの耻計りかくのも有難くなし、夫れに妾は爾な事に趣味は持たず毎度の事で煩いから出ないで居ると阿母さんがね。機嫌が惡くつてね。親類を麁末にする嫁だつて、出たら耻をかくに極てるんですもの。だから、妾、妾は阿母さんが何と云はうと妾には男爵と云ふものを控えてるんだからと思て矢張り出ないで勝手をしてるとね。島木が又妾に阿母さんが出ると有仰るのに何是冷淡にしてると云ふんですわ。妾は耻をかく計りだからと云ひますとね。知らない物は仕方がないから耻しいと思ふのなら、稽古を初めろつて云ふんです。何と云ふ冷い言葉でしよう。妾やねあんなもの習ふより島木に云つて斯樣なこと、すつかり止めさせて仕舞と思つてたんですのに、當がはづれてね。仕方がないからマア琴を初めかけたんですの。何こんなもの直覺えてやらうと思て初かけると中々。ホヽヽ自分は一生懸命にやつてるんですけれど六ッ七ッの兒が引く樣な音がするんですもの、傍に居る召使にだつて氣が置けて彈て居られないのよ。夫でもう一切止して仕舞つたの。妾の身分が釣合はない上に又何にも知らないものだから召使が皆蔭口を阿母さんに云ひつけるし、妙子さんは意地惡だし、妾はもう二三ヶ月たつて何だか心細くなつて來て

ね。夫れはもう島木ばかりがたよりだつたのよ。處が島木がぐれ出してからは貴女一寸も妾を顧て呉れなくなつたんですもの。二日も、三日も家を明るとね。阿母さんは妾の部屋へ來て、何ぞ妾が知つた事の樣にいつ歸るの何處へ行つたのと聞くのよ。其上に、ヤレ此頃は一郎の言葉遣ひが野卑になつたの、貴族に似合はなく御酒の行儀が亂れたの、召使がお奥の一人を友達の樣になれ〳〵しく仕初てから私しや妙にさへ禮を失ふとか、成上り者が家へ這入つたので貴族の威嚴に傷がついたと遠廻しに云ふんですよ。口惜しいつたら眞實に。』といつか其時の人になつて田鶴子が面は曇りかゝる。峰子は聞くに從て幾度か頷いた。田鶴子が島木男爵夫人になつて其虚榮心を滿し、父母が言葉を堅くしりぞけて、結婚を急いだ時、峰子はかゝる事もと言葉をつくし誠をこめて意見したのが遂には其通りになつたのである。峰子は密に其先見の明の有たを見て不愉快でも無いので有つた。然し田鶴子さんは隨分つらかつたであらう。浮世の荒い浪風を生來初て味つて定て惱だ事であらう。誰とて恨む人もない皆自身の思慮の足りなかつたからと云ひ條、氣の毒であつた事よと峰子は心に慰めの言葉を考えて居る。庭に雀が二三羽下りて來て、一羽は山茶花の蕾をコツトと啄くと一羽は手洗鉢に止つて小首を傾けて中を覗いたと思つたら急にハツと立つた其羽音に驚いて皆一度にバタバタと立つた跡に花が一つホトリと落ちた。峰子は改まつて『夫れはたづ子さんそんな事も有たでしようが、其かはりソラ、貴女の好きな園遊會があつたでしやう。妾聞いてよ。此間の時には純白の洋裝だつたつてね。全で何とかの女神の像の樣だつたと聞いてよ。マア一寸其の話をなさいなと話題を造れば、田鶴子の顏にはよみがへつた樣な色が浮んでニツコリ『アラ峰子さん彼れを知つてゝ、彼は今年の夏よ。夫れは園遊會なぞ邸でもするし、方々へも招待されてよ。島木では年に二度の定めなんですが、今年は妾の結婚の披露の爲に三度になつたの。それは面白いのよ。皆なが男爵夫人男爵夫人つてね。けれどもう歸て仕舞つたんだからも

うもう仕方がないわ。春には又向島の花でも見ておくのよ。ホヽヽ『氣樂よ、田鶴子さん花なら向島、菊なら團子阪で結構よ。お宅で花見が出來てもね、召使に迄氣を置いて、旦那樣には袖にせられて何も男爵夫人の地位を保つてる事はないわ。すまない樣な挨拶だけれど、歸つていゝ事をなすつたのねえ。』田鶴子は淋しく首を垂れぬ。

『で田鶴子さん貴女は今後どんな家庭を造る積なの。』虚榮の光りにあくがれて、思はず身を燒た友を憐むが如く峰子は目を上げたが田鶴子は猶も膝を見つめたまゝ『どんな家庭つて妾もう貴族はこり〳〵よ。妾もう峰子さんが羨しいわ。貴女、樂いでしやう。』峰子はサツと晴やかな笑を浮べて『ホー　妾が羨しい？　田鶴子さん戯談よ。斯樣な鷄の巣見たいな處でお三どんをしてね。貴女ぢや可笑しいでしよう。ホヽヽ、けれと妾にしては全く樂しいのよ。』『ホントに妾はつくつく貴女が羨しいわ。今日は文雄さん矢張局なの。』『あゝ毎日腰辨當で通つてるのよ。あゝ田鶴子さん佐久間さんも矢張り相かはらずあの飛白の羽織で通つてらつしやるわ。』『アラ佐久間さん。そう。』田鶴子の顏には何だか物が掛た樣急にうつむいて仕舞た。佐久間盛男は田鶴子が初戀の愛人であつた。然も田鶴子はあらぬ物に心を奪はれて、彼をすて身は羽をのして高く飛んだのであつたが、扨て斯うなつては富貴の夢もさめて樂しからざるを悟るにつけ、今更に峰子の境遇の羨まれ。あゝ花は向島、菊は團子阪、それでも濟むものを何も氣むづかしい人の中に窮屈な思ひをして身を高めないでも、分を守て安らかに世を送るのが人の幸福と云ふものかとフト今考へ初た矢先き。ゆくりなくも今の佐久間の名に古い記臆を呼び出されて無下にすてた彼ながら何だか逢ひたい樣なつかしい樣なすまない樣な思ひに田鶴子は『峰子さん佐久間さんの奥樣どんな方。』『アラ田鶴子さん、佐久間さんは未だ獨身よ。田鶴子さん貴女全く酷いのね。』田鶴子は思はず目をふせて『峰子さん佐久間さん怒つて居らつしやるでしようね。』『イヽエ彼方はあんな順柔しい辨の分かつた方

だから怒つては居らつしやらないけれど、田鶴子さん貴女は彼の方を弄たのね。』「アラ峰子さんそれは貴女餘りだわ。』「でも夫うだわ、お氣の毒なはホントに彼方よ。彼方は正直な方だから一途に貴女計り思て居らつしやつたものと見えて今にお獨身で何して居らつしやるわ。良人が云てますよ佐久間は田鶴子さんの欲望の犠牲にされた様なものだつて。田鶴子さん怒てはいやよ。けれど眞實に佐久間さんはお氣の毒よ。田鶴子さん、貴女は何とも思はなくつて。』「峰子さん貴女は酷いのね。妾だつて人間ですもの。すまない／＼と何時も思て居るのに貴女の云分はあんまりだわ。佐久間さんには眞實に。佐久間さんにはすまないのよ。妾全くだまされたんですもの。島木の口前にだまされたのよ。佐久間さんにすまない。妾眞實にすまないわ峰子さん。』田鶴子は半帕を顔にあてゝ泣くのである。後悔の涙。口惜しさなつかしさが絞り出す後悔の涙。泣く者は其處どころではあるまいけれど、さて見れば見



る程美しい其姿、春雨の中の白ばらと計り麗はしくも香はしい田鶴子の此樣を佐久間に一目見せたら逆まに許してくれと云ふかも知れない、と峰子は何處やらに微笑みながら『えゝすまない、夫れはすまないでしやうけれど田鶴子さん佐久間さんは夫なに怒ては居らつしやらないわ。夫んなに泣く程の事もないのよ。貴女一度逢はないの。』田鶴子は顏を上げて『エ佐久間さんになの。』『逢つて昔の通りになつて上げなさいな。』峰子は微笑む。『昔の通り？』『昔の通りによ。田鶴子さん貴女園遊會は思切たのねえ。貴族にこりて今度はどんな家庭を造る積りなの。と峰子は熱心。讀めた。峰子さんは妾に、佐久間との昔の約束を履行せよと進めるのだ。ハイと承知すれば佐久間盛男の妻。淺草郵便局員月俸二十圓の判任官の奥樣に自分はなるのか。何だか情ない樣な。イヤ〳〵富貴なぞは賴むに足りない男爵夫人はこり〳〵だ、人の幸福は氣樂に〳〵暮すにある。ぐず〳〵して居て島木でなめた苦味を忘れて又繰り返す樣な事が有ては大變だ。もう傍見をしないで佐久間さんに極て置かう。そしたら阿母さんだつて安心だし。と田鶴子は心の中にうなづいて『峰子さん貴女のお心はよく分てよ。妾一度。怒て居らつしやらなけりやア逢いたいわ、そして妾お詫もしたいし、えゝ峰子さんよくつて。』峰子は滿足さうにニッコリして何か云はうとした時、格子戸の開く音がして夫の文雄が歸てきた。

釣瓶落しの秋の日を追て家に歸た田鶴子は二間間口の少な家を此處だと敎へる車夫にも耻かしい樣な氣がして忙てゝ賃錢を拂て立付の惡い格子戸を開け首を低めて中に這入ると、玄關ではない取付の二疊は眞暗。云ふべからざる淋しさを感じながら着物を着かへに二階へ上ると勝手でゴタ〳〵して居た母が後から二分心のラムプを持て上て來て『田鶴さん大分ゆつくりだつたね。もう御飯だから着替へたら直ぐおいでと云て下りて行た。屋根の上にある干場へ通ふ窓に障子が一枚はまつた計り。天井の張てない部屋の、大分すれた裏返しも、もう利かなさうな疊の上へ上から〳〵ぬいで落してさて銘仙の不斷着に着替へた田鶴子は一寸鏡の前

で前髪に櫛をあてゝ廣げた着物を疊もうともせず其まゝ下りて行た。

『阿母さんお菜はこれ丈け。何だか忘れた樣な御膳ねホヽヽ。』母は一寸眉根をよせて『又だよ、お前は其菜浸しが好だつたから馬鹿に高かつたんだけれど買たんだよ。ホントに贅澤になつたのねえ。田鶴さんお前見たいでは困て仕舞よ。』『だつて阿母さん。もうお晝のお魚はないのねえ。仕方がないわ阿母さんは吝だからホヽヽ。』田鶴子は詮方なく箸とり上ぐる。父は向いて親子の問答を笑顔で面白そうに聞て居る。やがて夜食を仕舞つた田鶴子は跡片付けに母の手傳ひ仕やうともせず、二階へ上て又干場へ出た。晴れた空には星の光が砂金を蒔いた樣にキラ〳〵輝いて冷い夜氣はしつとりと身に迫る。つい目の下の裏長屋の軒先には頭割の常夜燈、煤げた軒洋燈が四邊の暗いのにボンヤリついて居ると裏合せの家の淨房から燈火がパツとさして何やら二三人の笑ひ聲。氣迷ふた田鶴子は懐へ手を入れて沈と思に沈んだ。

　サア上つて下さいよ峰子さん。田鶴は愛憎居りませんですけれど、マア上つて下さいまし。其間に歸りましやうからねと田鶴子の母は愛想よく押入から座蒲團を出して急いで火鉢に火を入れる。峰子はゴム柄の深張の洋傘を立てかけて『イエね叔母さん今日は田鶴子さんではなく叔母さんに少し御用があつて參りましたの。』『オヤ私にマア何の御用。ぢや猶更サア通つて下さいましよ。ホントにひえ出しましたね。昨日は田鶴が出まして御邪魔を致しました。あんなに長尻を致しましてねえ。日の短い時分に定めて御用がおありなさるだらうに、少しは氣をお利かしと申して居りましたんですの。』『何の叔母さん淋しい處で丁度よかつたんですもの。夕飯をたべていらつしやいとお止め申ました位ですのホヽヽ。』時にねえ今日出ましたのは。と峰子は稍改まつた。

昨日峰子は田鶴子の歸つた跡で田鶴子の樣子を文雄に話した處、文雄もそれなら丁度好からうと直ぐに佐久間の心を聞て見たら之にも異存はなく、無い處か内

心一方ならず滿足の樣子なので夫ならよしと今日は峰子が兩親の心を聞にきたのである。峰子は夫から夫へと昨日の田鶴子の口ぶりをすつかり話して、佐久間の樣子も話し。『で仲人は及ばずながら私共夫婦でさせて戴く積りで出ましたんですが叔父さんと叔母さんの御心はどうで御座いましやう』と打ち出した。佐久間の人物は田鶴子の母はよく知て居るので、胸中承知して定めて喜ばれる事と(別に野心がないならば)峰子の思つた當ははづれて田鶴子の母は餘儀なさそうに答へた。

『貴女樣お二人の御親切は父にもよく傳へます。然し田鶴は何と思つて夫んな事申ましたか存じませんが、彼の仕ぶりを見て居りますと、佐久間さんへまゐりましても丸くは行ますまいかと存じますの。我娘の事を申すのも耻ですが峰子さん。あれはもう〱大變な贅澤者になりましてね、昨日の服裝だつて貴女。御笑いで御ざいましやう。少しも只今の身分と申すものを頓着致しませんでね。不斷着にだつて好ものを着て私が何か申ますとね、裏が絹でなくては着て居られませんとから申すんです。そして卑しい事を申す樣ですが御飯の時にはもうお菜の不足計り申ましてね。イエもうどうなりまする事やら彼には二人共困り切て居るので御ざいますよ。全く育てそこなつたと申すので御座いましやう。情ない事で御ざいますよ。ではね、何卒其事情を佐久間樣へも惡からず申上げてどうか御斷り下さいまし。眞實に御親切から斯樣な好いお談を有仰つて下さるのに御斷り申さなければならない私の情無さを峰子さん御察し下さいまし。』と母は濕りつゝ萎れて云ふのである。

峰子は遂に無爲にして歸たが其後半年計りして田鶴子は又嫁入た。今度は華族ではないが、別莊の三ヶ所もある富豪の實業家で十七歲を頭に三人の子供のある五十近い男の處へ後妻に嫁たんだそうです。

（賞金＝拾圓＝大阪渡邊民子）

淋しき家

米光關月

考へて見れば奥樣はよく〳〵御不幸なお身の上だ。お三どんの話の、音樂が一番お好きだと云つても、罪の無兒の口から出る天然の響き、美しい唱歌の方がやはり奥樣のお耳には美しく聞えるのであらう。で私は、

『あの、それでは……、奥樣　やはりお兒樣は御好きでいらツしやいますか……。』

と、我乍突然な事を云ひ出しました。奥樣は私の辭を、可笑しうお聞取りになつたものと見えて、

『お前、私を兒嫌ひとでも思つてお在でか……。』と、直ぐにお笑ひ遊ばして、

『オホヽヽ、然う見えるかね、一寸然う見えるだらうね。』と、別段お怒りの御樣子も無く、輕く有仰つた。けれども私は、惡い事を云つたと思ひました。女として兒の嫌ひなと云ふものは、それは可く〳〵の異り者、其異り者にして奥樣へ這麼事を御尋ね申たのは、甚麼に失禮だつたか知れ無いのでございます。幸ひに奥樣も御立腹で無つたから可いやうなもの〻、私も一時は眞赤になりました。

併しこれが又話に花の咲く材になつて、何時に似合はず、奥樣はいろ〳〵と御自身の、お身の上話をお始めになりました。其お話によりますと、奥樣もお若い時は、餘りお兒樣などがお好きの方では無つたらしい御樣子で、出來ても出來無くても可い、又其中には乾度出來るだらう位に覺召して、とんと兒の世話などは煩い位に思つてお在であつたさうだ。それが段々お齢を召すと共に、可愛いと云ふよりも唯欲しくなつて、其欲しくなるのは、他の皆持つて居るのが羨しいと云ふ唯それ一方で、大層御苦勞遊ばしたと云ふお話。

すると幾年經つても出來ず、これ斗りは智惠でも分別でも、何うする事も出來無いものと見えて、其中には家の跡目と云ふ事が御夫婦のお胸に起つて來たのだ

さうでとう〳〵詮方無く、旦那樣は御緣家から、御養子を御入れになるやうな仕末になつたさうです。
奥樣はこの時、心から自分の不幸を御嘆きになつたさうで、女として兒の無いものゝ不幸はこれ程につらいものかと云ふ事を切に御悟りなすつたさうで、一時は其派手好きのとんと沈み勝ちになつてお在だつたさうだ。
けれども其時も未だ、お兒樣のお好きなのは、唯羨しいが先で、欲しい〳〵であつた丈けで、心から可愛い、甚麼にか可愛いだらうと云ふ事などは、餘りは御感じ無つたらしい。それが不思議とこの節になつて、頻りに可愛氣なお兒樣が欲しくなつたのださうだ。
其上又お話によると、奥樣はお兒樣の無い御不幸斗りで無く、御兄弟と云つてはお一人も無いのださうで未だ其上に、御兩親にも早くから御別れになつたのださうです。而して御幼少の時から叔母御樣のお手一つで御成人遊ばしたので、去かも其叔母御樣と有仰るお方が、それは〳〵お厳しい方で、其御教育方が大變なものださうです。
奥樣はこの御話を遊ばす時、さも其當時の狀をお思ひ出しなすつた御樣子で、眉を顰めてはさも〳〵可厭なお顏をなさいました。私も聞いて居る中、さてはと思ふ樣な事もあつて、今更のやうに又奥樣の御顏を御見上げ申しましたが、然う有仰れば、成程お淋しい御面の中に、何處か去つかりした所のある、其寄り附き難いやうな心地のする鹽梅などは、慥に温い手でお育で上げになられた、其御方々とは違つたやうでございます。
ひよつとしたら、奥樣の心からお兒樣を愛すると云ふ、温い血の今迄に湧きませなんだのも、其御來歷が然うさしたのではあるまいかと、つい妙な方へ迄考へ出して參りました。

其　三

奥樣は長々と其來歷を御話しになつた上、徐かにお茶を召し上り乍ら、

「それで居て、この頃つく〴〵子供の欲しくなつたのも妙だね。私は何うかすると、天から與へて下さら無いものは、別段無理に御授けを願はずとも可いと思つて居たのだけれど、全くこの節は淋しくなつてね。家の中に子供の聲のせぬのは、火の消えたやうなものだと云ふが、違ひ無い、其通りだと云ふ事が釋りましたついては近い中に、又一人貰ふ樣な事に定めて居るのだよ。」

と、この御話を遊ばす時には、如何にも晴れ〴〵とした面持をなさいました。

私は不意を吃つて、

「一人お貰ひなさいますと云ッて、あの御養子をなさいますのでございますか。」

「ア丶、然う、一人貰ふ心算で居ます。」

「やはりそれは、お坊ッちやんでいらッしやいますか。」

「何、今度はね、私女の兒を貰ふ心算で居るのだがね懐いてくれゝば可いがと思つて居るの……。」

「ヲヤ、あの女のお兒樣でいらつしやいますか……、それは又可いお樂しみになりますでしよう。」

「ア丶、女は猶且女の兒が一人欲しいものでね、甚麽にしてゝも私思ふ樣に育て上げて見度いと思つて居ます。」

「御結構でございますね。」

「併し今云ふ通りね、私に懐いてくれるだらうか、何うだらうかと、それが唯心配になつてなら無いの。」

「それはもう貴方、屹度御懐きなさいますでございましよう。」

「さあ、お前が云ふ樣に行けば可いのだがね、私は何う云ふものか、兒供には左右縁の無い方でね。」

「縁が無いと有仰いますと……。」

「畢竟兒供に好かれ無いの……。」

「那樣事はございますまい……。」

「イヤ、何うも然うらしい所があるの……。」

「でもあの、京都とやらへお越しになつてお在のお方は、可くお懐きなさいましたでしよう。」

奥樣は又淋しく御笑ひなさいまして、
「あれはお前、大きくなつた所を貰つたのでね、中學に居た時も寄宿舍に居たし、家には餘り居た事は無いの……。」
「ヲヤ〳〵、左樣でいらッしやいましたか。」
と、私はなんと無く又お氣の毒になつて、それから先は何も云へませんでした。
奥樣は聞か無い先を、自分で獨りお話になつて、
「あの兒にだつて、私は別段嚴しくは無つたのだけれど、何うも性でも合は無つたのかね、なんだか始中終眞面目に斗りなつて居たの。別段嫌ふと云ふ樣子は見え無いけれど、何を云つても奥齒に物の挾つたやうな物の云ひ方をしてね、なんと無く他人行儀な所斗りあつたの、其癖旦那樣には然うでも無いらしい樣子で、酷く懐いて居たやうだよ。」
「ヘエ、旦那樣にはお懐きなすつたのでございますか……。」
と、私は又奥樣がお氣の毒になりまして今度はもうお面も見る事が出來ませんでした。而してつく〴〵考へましたのは、この奥樣は御實子の無い斗りか、其養ふ子でさへ懐がられ無いと云ふのは、何うしたまあ、不幸な上にも不幸な方だらう。よし、其御氣性が甚麽にあらうが、自分の愛しようとなさる方から、少しも温い情をもつて寄つて來られぬと云ふのは、よく〳〵の御不運な方で……と、他事ではありません、全く溜息を吐いた程でございます。
で、なんだか自分も次第に沈んで參りましたので、これは話を替へた方が可いと考へまして、
「それはさうと、其孃樣は何日頃御越しになるのでございます。」
と、新に御呼び迎へになる、御養女の事へ話を轉じました。
「ア丶、其養女かね。」、奥樣もお氣をお替へなすつて、
「それは未だ幾日と云つて定めては無いが、先方ももう略納得して居る事ではあるし、大丈夫定つたも同樣で、永い事は無いの。近い中に貰ひ受けるやうになる

でしよう。」

『ではお話斗りで無く、お近い中に孃樣がお越しになるのでございますね。」

『旦那樣も御承知なのだから、先方の日取りさへ定まれば、私は何日でも可いと思つて居る位……まあ近い中には逢ひ無いの……。」

と、一寸目を上げて天井を御覽になつたが、何をお思ひ出しになつたか、急に眼の中が冴え〲となつて次第〲に笑みが其面を蔽ふと、尠し高慢氣に唇を横の方へお曲げになつたが、これは何か得意らしい時出るお癖です。

『お前甚麽兒だと思つてお在だ……。」

と、不意に其御養女の事を御云ひ出しになつたのは多分今迄其事を考へてお在でになつたものと見える。而して急に眼の中の冴えたのも、得意氣に唇の横へ曲つたのも、皆この御養女のお身の上をお思ひになつての餘りであつたのだ……、と、直ぐに然う悟ると、必ず可い美しいお兒さんだと云ふ事が胸に浮びました。

『定めてお可愛らしいでございましよね。」

差當り恁う云ふ外には辭が無つたので、其間に合はせを云つて置くと、奥樣はそれ丈けでは御不足と云つたやうな御面附で、

『然う、まあ、可愛いには可愛いね。」

と、有仰つて、例の唇をいよ〲横へお曲げになつて、

『けれどもあの聲は、澤山無いと私は思ふの。」

『ヘエ、お聲の可い孃樣でいらツしやいますか……。」

『ア、、とんだ可い聲を持つて居る兒だよ。」

『それはいよ〲御結構でございますね。」

『だから私、立派に爲上げたら、鮀度唄なども旨くなるだらうと思のでね、それが何より樂しみなの……。」

と、奥樣はもう貰はぬ先から、其行末の事迄を樂しみにして居られるので。けれどもこの時私は不思眉を顰めました。

と、云ふのは、例の考へ過しでもございましたが、奥樣の這麽事を有仰る樣では、まだ〲本統にお兒樣

が可愛いのでは無くて、御自分のお好きな道、其音樂の方の耳から先へお惚れになつたので、例の負けん氣、御自慢の材にしやうと云ふのではあるまいかと思ひました。

若し然うだとすれば、何うなるであらう？　奧樣はそれで可からうが、今御氣使い遊ばした樣に、もしかお兄樣のお懐き遊ばさぬ樣な事はあるまいか……。

私は俄かに眼を上げ奧樣の面を見ました。併し何時より平和に、其何うかすると近寄り難いお面附も血の動きが如何にも平穩に、御眼はいよ〳〵冴えて、眞から御喜びの樣子を見ますると、那樣邪推もポーッと消えて終ひまして、唯何時に無い奧樣の御樣子が、如何にも私の眼に嬉しく映りました。

かくて淋しい日は永く續きませんで、奧樣の有仰つた日から恰度十四五日目、いよ〳〵御養女が御出になる事となりました。

お家の俄に賑はしくなつた事、私も今もツて其折りの事を忘れませんです。

けれども不幸にして、私の邪推は、邪推にならず、間も無く面白からぬ風がこの御一家に吹いて參りました。

私は其可厭な風の吹き起る前、幾度胸を痛めたか知れません。而して、成べく浪立たぬよう、六か敷い事の起らぬようと、それは〳〵毎日〳〵念掛けて居りましたが、淋しい家は何處迄も淋しくなるものと見えまして、以前よりも一層淋しい家になつたのです。

其　四

或日の事。妾は五六日前から御願ひ申して居た宿下りの事が聞届けられましたので、朝早くから、久し振りて自分の宅へ歸りました。今迄奇麗な宅に居馴れて見ると、今更らのやうに自分の宅が狹くむさくるしく、まあ這麼宅に居たのかと、云ふやうな氣が起つて參ります。けれども幾らむさくるしくても自分の宅は自分の宅、一時經てばもう其むさくるしい中に懐しいもの斗りが目について、疊の古いのもそんなに座り心の惡く無いもの、障子の破れ目もそんなに可笑しく無く、段々惡い方の感じは無くなると共に、兩親の笑顔はいよ〳〵嬉しく、前から後からも姉さん〳〵て飛ついて參ります弟や妹の手はなんとも云へぬ温い血を躍らせます。他樣の有仰る事を毎度聞いて居りま

したが、始めての御奉公は眞に淋しくつらいもの、けれども亦始めての宿下りは甚麼に嬉しい、樂しいものか知れ無い、それは〳〵もう甚麼に樂しいものか知れ無い……と、其時はつい聞流しにして居たやうなものゝ、恁うして始めての宿下りを致して見まするど、成程嘘では無い、今迄ついぞ覺えぬ、嬉しさ、樂しさで、もう二日も三日も、ならば一ト月もお邸へ歸り度く無いやうな氣がします。

別けて晝飯時の賑はしさ、久し振りで妾の顏を見た弟や妹は、珍しさうに我先と例の茶碗を突出し乍ら、『姉さん……御飯……。』を始めますので、妾の急しい事は中々で。併し其急しい中に云ふに云はれぬ面白い事がございますので、つい〳〵不知不識點燈近く迄遊びました。

兩親も驚き、妾も驚いて、惜しい別れではあるが、又來る事にして、やつとの思びで宅を出ました時は、もう表では豆腐屋のラッパ、點燈夫の駈けて行く姿、春の暮は靜かに曇つた空になりまして、明日は雨かも知れぬと思はれるやうな陽氣、趁し急ぎ足になつて歩きまするど汗ばむ程で、木の葉の青臭い匂ひが何處からとも無く匂つて、なんだかこの匂ひを嗅ぐと、もう夏のやうです。

池の端を通つて、根津へ抜けて、淋しい坂を上ると、もうお邸の通りへ出るのですが、其處迄來ると急になんだか胸をしめられるやうな心地がしました。今迄は賑やかな通りを抜けて、人通りのある路を歩いて、目も耳も其色やら其音やらに紛れて居たやうなものゝ、暗い淋しい通りへ掛ると俄かに今日の樂しかつた事が目先にちらついて、一日中賑やかであつた一家の中、兩親の笑顏、妹弟の元氣の可かつた顏が皆暗い中に浮き出すのでした。

それと同時に、胸へ浮んで參りますのはお邸の事で、不思不知立止りまするど、

『あゝ、又淋しい家へ還へるのかれ。』

と、我乍可笑しい獨り言を申したのでございます。而して旦那樣奧樣の今頃甚麼事を遊ばしてお在かと云ふ事も解ります。六疊の茶の間には臺ランプか一ッ淋しく點つて、其處へ旦那樣と奧樣のお膳が列んで居る。旦那樣は何時のやうに葡萄酒を少々召上つて、何か奧樣と御話しなすつてから、御飯になつて、それが濟むとごろりとお横になられて、雜誌などを御覽になる、奧樣は淋しさうに獨り楊子を御使ひなすつて、これも雜誌を御覽になる、それでお二人とも暫らく無言、『あゝもう寢ようか』と、有仰る旦那樣の聲に、『お寢みですか』と、お答へになる奧樣の聲、それッきりで又茶の間には聲がせぬ。妾が御床を延べる、旦那樣がお二階にお上りになる。それで奧樣は又御自分の御部屋へ御這入りになる。犬が啼く、玄關で大欠伸の聲がする。妾はお三どんと默つた儘でお針を持つ。……と、定つたやうな毎晩の淋しさ。幾度も繰返へされるのは、『これでお兒樣がお一人でもあつたらばなあ……。』と、

私は愚痴になる程その事を思ひ續ける。

這麼考への中に、何時とも無しにお邸の前へ參りました。さて此處

迄参りまするると、又胸を躁がせますのは、還りの遅くなつた事で、旦那様奥様御二方ともそんなにむづかしい事を有仰る御方ではありませんが、始めての宿下りに這麽に遅くなつて……と、奉公馴れぬ妾などは何うも其事が氣になつてなりません。御門をそつと這入つて、玄關を見ると、書生さんは外へでも出たのか燈が點ッて居りません、暗い井戸の端を通つて勝手の方へ廻ると、腰高障子が一枚開けてあつて、明々とした燈の光りが、水溜りに可く映つて居る。

「今還りました。」と、聲を掛け乍ら上つて行くと、お三どんは居無いで、今御座敷は御夕飯の最中か、七輪に掛けてある鍋物がジヤ〜〜と獨り淋しく煮えて居りまする。

私はなんだか理は解りませぬが、ハつと胸が逼つて、何時も私の爲る事に定つて居るお二方の御給仕を、お三どんにさせたかと思ふといよいよ濟まないやうな氣がしました。而して、幾ら御氣の可い奥様でも、これでは餘り可いお顔色も遊ばすまいと、もう其御顔附が目に見えるやうで。

不意に旦那様の高く御笑ひになる聲がしました。私はハツト身が竦むやうでした。續いて奥様の高く御笑ひになる聲がしました。私は又ハツト身を小さくしました。するとお二方の御笑ひになる聲は段々入れ交つて高くなるやうで、果てはお三どんの馬鹿笑ひをして居る聲も聞えます。なんにせよ何時とは餘程變つた御夕飯で、其御陽氣な事は、御客來でもあつたやうで這麽事はこれまでとんとありませんでした。私は身を小さくして居ながらも、この陽氣な笑ひ聲、何時とは大變に違つた御座敷の御様子に、なんとは無しに釣り込まれるやう、逼つた胸も何時か開いて參りました。

汗ばむだ額をハンケチで拭いて、帶を一寸揺つて、直ぐに御座敷へ出やうとした時、バタ〜〜と椽端を足音荒く、お三どんが勝手へ參りました。

「チヤ、今お還り……。」と、莞爾〜〜もので、赤い面が一層赤くなつて居ります。

私は氣が咎めますから、お三どんにも負け無い程面を眞赤にして「何うも遅くなつて濟みません……。」と、お詫びを云ひますと、お三どんは如何にも氣輕な調子で「なあに、この位に還つてお在のは當り前さ……。」と口早に云つて、又莞爾笑ひ乍ら、「それよりもお前の留主に、とう〜〜やつて來たのよ。」と、座敷の方を見返り乍ら、何が解らぬ事を云ひました。

「御客でもあるの……。」と、訊れると、

「何、然うぢやあ無いよ。」と又笑つて、

「まあ、行つて御覧んな。」と、お三どんは首を縮めて面白さうな顔をして居る。

「大變御陽氣ぢやあ無いかね。何が面白い事でもあつて……。」と、聞くと、

「ウフヽヽとんだ面白い事があるのだよ。お前さんが行けば甚麽に

面白がるか知れ無い。」

と、お三どんは獨り合點で、なんの事だか私には解らぬ事を繰り返して云ふ。

妾は何うも腑に落ちませなんだけれど、左も右も御座敷へ面を出さ無ければなりませんので、椽端を通つて、例の茶の間へ參りまするど暖かいのでお庭に向いた方の障子は開いてゐます。臺ランプの明りも今宵はなんと無く何時より明るいやうで、お庭の燈籠や立樹の姿が鮮明見えて、何うしても夏の景色としか見られません。

隔の襖を靜かに開くと、お二方様は直ぐ私の方を御見返りになりました。

私は座敷に這入らず、次の間から俯向いた儘。

「只今歸りました。」と、苦しさうに、「何うも遲くなりまして相濟みません。」と、御詫びを云ひまするど、奥様は御笑ひなすつて、

「ちつとも遲くはありません、可くお還りだつた……。」と、大層な御機嫌で。

「まあ、それよりも、連れて來た兒を見ておくれ……。」と、變つた事を有仰るのです。

私もこの變つた御辭に、いさゝか吃驚して、今迄俯向けて居た面を上げると、明るいランプの光りは眞向に私の目を射て、なんだか極りが惡いやうでございましたが、六疊の狹い茶の間にあるものは悉く私の目に映りましたので、襖を開きまする時は氣が付きませなんだが、椽端近う奥様の陰に座つて、恰度旦那様と對座になつてお在のお兒様が一人見えるのでした。

私はハツト思ひました。而して直ぐに悟りました。御座敷の陽氣であつたのも、お二方の常に無い御笑ひ聲の高かつた事も、お三どんの言葉も皆この小さな珍客の爲めであつたのです。

「まあ、お可愛らしい……。」と、私は不思聲を立てまするど、旦那様もお笑ひなすつて、

「へゝゝ、今日から宅にも孃が一人出來たのぢや。」と、さもさもお嬉しいと云つたやうなお顔附。

お膳の上には例の小さなコツプがあつて、今夜は其召上りものを少し御過ごしなすつたものと見えて、御顔色の元氣可く赤い事、御額などはテカテカと、光澤が出て居る。奥様もお一ツ御過ごしになつたものか、これもほんのりと頬が染つて、始終お顔に陽氣な笑みが浮んで、其晴れ晴れしい御様子、如何にもお胸の中の嬉しい様がありありと顯はれて居ります。

「何うもお目出度い事で……。」と、私は漸く御挨拶を申して、偖て改めて孃様を見ました。

孃様は數へ齡の五ツ位で、お顔の色は白くて、肌理が細くて、兩頬に紅をさしたやうに美しい血の氣が浮んで、如何にもお可愛らしいのです。そのお可愛いらしいのは、其お色の白いのよりも頬紅のましたのよりも、何よりも彼よりも先一番に其眼が人を引付るので

一寸見てもう頻笑ますには居られぬ樣な、愛くるしい、涼しい、淸らかなお眼元。妾が一寸御顏を見ると、首を傾げて、其涼しい眼をくる〳〵となさいました。其可愛いらしい事、私はもうなんとも云はれぬ程嬉しうございました。

「何うだ、これから可愛いがつてやつてくれ、なあ……。」

と、旦那樣は反身になつて笑ひ乍ら、心地可氣に有仰いました。這麼事はもう有仰らずとも、私が可愛いがらずに居られましよう。今即座に口へ出してこそ申上げませんでも心の中の嬉しさは隱されず、自然顏に顯はれて參りますので、奧樣は又其樣子を御覽になりつゝ、始終頻笑んで居られました。

其五

孃樣は名をお葉と有仰つて、これは奧樣の御親類の知邊先から貰はれてお在になつたさうで、奧樣がたつての御所望と云ふお話。

それは私も豫て存じて居りましたが、孃樣の御越しになると共に、もうそんな御話なども忘れて終ひまして、唯もう毎日御對手をするのが何よりの樂しみでした。殊に不思議と孃樣が私へ御懷きなさいまして、何一つなさるにも私を御召になるのです。朝はお起きになる、御召替へをなさるそれも私、御手水の御世話も私、お風呂に召すのも猶且私、そして夜は乾度一度づゝ妾共の部屋へ御越しになつて、「何か話せ……」が始まるのです。

私はかち〳〵山も話しました。花咲爺も話しました西洋の御話だと云ふ、又聞きの御伽話も話しました。話しても〳〵聞手の孃樣は御飽きになりません。其中には私ももう話す材に盡きて終ひまして、又繰り返へしてかち〳〵山から始めますと、猶且知つてお在の御話も飽かずに「それから……それから……。」と御聞きになるのです。這麼事で毎夜お宅の賑はしさ、お兒樣お一人あれば恁うも變るものかと、今更らのやうにつく〴〵妾は感心致しました。

偖て肝腎の奧樣は何うかと申せば、これは丁度神樣から愛子を授かつた樣に、とんと平常の御樣子ではありません。一にも二にも孃や孃やでお在なさる。又孃樣のお懷き遊ばす事も別段變りません。

私も始めの内は何うあらうかと思つて居りましたが、それも案じた程では無つたやうです。して見るとお齢の爲と、お可愛いもの丶出來た爲め、心からお兒樣をお可愛いがりになる氣が出たものと見えます。孃樣の涼しい眼元は、奥樣の淋しいお胸に賑やかな温い氣を起させたものと見えます。從つて、然う思つて見ますると、あの、何うか遊ばすと、稍險しくなります奥樣の御眼元、あの御眼元の險しい處が見え無いやうです一寸何うかした拍子に、むづかしさうな御口を御利きになる、それがとんと無くなつたやうで。

旦那樣は無論およろしいお方、其御柔しさうな眼は増々慈愛に柔しく輝いて、御笑ひ遊ばす聲も心から御嬉しさうでございます、夕飯のお膳の上で上る葡萄酒も、平常より多樣に召すやうになりました。而して今迄淋しかつた御夕飯も、この御可愛いらしい、美しいお肴の爲め眞に賑はしくなりまして、私もお給使を爲乍ら甚麼に氣が晴れ〱するか知れません。

這麼事で私は何時か自分の宅の事も忘れて終ひました。唯お一人の孃樣の爲め、恁うお邸が賑やかになつて見ると、すつかり自分の宅の事などは忘れて終ひました。

陽氣は次第に暖かくなるし、お邸は毎夜恁う賑やかだし、御用と云つては別段にあるでは無し、私は眞に獨りで自分の幸福を喜びました。

あれは恰度、孃樣がお越しになつて、五六日目の事でした。もう其時はすつかりお邸にも御馴れ遊ばして何處の御座敷へも臆せず飛んで歩いてお在でしたが、靴脱ぎにあつた小さな草履をお召しになると、籠を離れた小鳥のやうに、さも嬉しさうに、ぴよん〱お庭を撥廻つてお遊びになる。始めは小さな泉水の傍へ行つて、珍らしさうに手を打つて金魚を見て喜んでお在でした。それもお飽きになつたか、若葉の下を彼方此方と歩いてお在でしたが、銀杏の樹の見事に伸びた根方へ廻つてお出になると、其青々と小さな葉を吐き出しかけた梢を見上げて、暫らくはうつとりなすつた御樣子で、軈て美しい聲で唱歌を御唱ひ出しになりまし

た。

其聲のお美しい事、私は椽端に立つてじつと聽いて居ましたが、なんだか凄然とするやうで、しかも節廻しの旨い事、調子の合つてる事、故意となさるのでは無くて、自然に出て來るのです。

唱歌は折々文句の間違つた處もありましたが、其間違つて居る文句の爲め、毫しも調子が狂ひません、幼い方には珍らしい其間を取つて御謠ひになる樣子つたら無い。

私も始めは唯珍らしく、孃樣の御謠いになるのを、なんの氣無しで聞いて居ましたが、段々お聲が調子に乘つて大きくなると共に、もうすつかり其方へ氣をとられて終ひまして、晝前の雑巾掛けも忘れて涙ぐむやうやうになつて居ました。

すると、不意に後から私の肩を叩くものがありますはつと驚いて振り返へつて見ると、それは奥樣で、立つた儘莞爾御笑ひなすつて、

「ねエ……。」と、小首を傾げて、唯一言有仰るのです

私はこのお一言で可く奥樣のお胸の中を知りましたそれは豫て聞いて居た事があるからで、

「何うも大變に可いお聲でいらつしやいますね。」と、早速御挨拶を申上げると、

「あの節廻しが全く感心だよ。」

「然うですね。」

「文句を忘れて居て、それで調子可く謠つて居るのね。」

「私もそれを今感心して居る處です。」

「何時か話したが噓では無つたゝらう。」

「全くですね。」

其中、元氣の可かつたお聲がはたと止んで、奥樣の立姿が孃樣のお目に着いたものか、莞爾笑つて、すた〳〵と椽端へ駈けてお出でした。

私はこのお美しい聲を聞いてから、いよ〳〵孃樣の可愛いくおなりになると共に、奥樣の御自慢も無理では無いのだと思ひました。而してお二方樣の毎夜の御話に、「天才」と云ふ御辭を承りましたが、多分この

「天才」とやら云ふのが、嬢様の事なのでしやうか。

私どもには其「天才」とやらは可く解りませねが、吃度然うなんでせう。

それから後で聞きましたが、奥様もあの、天才とやらで、音楽の方では、おえらい方だつたと云ふ事。

其　六

淋しい家はかくて全くお賑やかな家となりました。私の考へ過しも幸福と外れたやうでございます。嬢様は毎日〳〵元氣可く御遊びになる。奥様も變らず御可愛いがりになる。こういふ工合で行けば御奉公申すにも結構なお邸ですが、情無い事には何時からとも無く、私の考へ過しはとう〳〵當る事になりました。

それは嬢様のお越しになつてから、慥か一ト月位經つた時、袷から單衣物に移り替つた折の事でございました。

奥様はそれ迄、例の書斎でピヤノ、ヴアイオリン、琴、三味線、何かしら毎日のやうに取り代へ引代へ御慰みにしてお在でしたが、それは唯自分丈けの御慰み、決して嬢様に強ひて唱歌をお敎へになるでも無く、聽きたければ聽け、飽いたら遊べと云ふやうな調子にお見受けましたが、其中嬢様もお好きなり、奥様は無論其下心があるのですから。ピヤノに合せてお謡ひになる事があり、ヴアイオリンに合してお歌ひになる事があり、果ては三味の長唄も始まる、琴に合したお唄もある、毎日のやうに御慰みになつて居たものが、とう〳〵本物の御稽古になりました。

一體奥様はそんなに癇性な方ではありません。随分時によると例の嶮しい眼使ひを遊ばしたり、むづかしい口の利き方をなさる事もあるが、ついぞ私どもを、口汚なくお叱りになつた事は無く、随分失策があッても、以後氣を着けて……と有仰る計りで、少しお顔色の面白く無いのが目に立てば立つと云ふ位。其の邊は至つて務め可い奥様。

けれども人間には何處か弱い處があるものと見え、これ程お謹しみ深い奥様にも、猶且癇性な處があるのです。其癇性の尤も能く顯はれるのは、藝事を遊ばす時です。無論毎日の鳴り物いぢりは御慰みになつてるのですが、それでも思ふ壺に呼吸がはまらないと、幾度も〳〵同じ所を繰り返へしになつて、それは〳〵、私どもが聞いて居ましても氣の遠くなる程幾度も遊ばすので。

私は何日か不圖其場に出會して、奥様の恐ろしい劍幕でいらッしやる時を見た事がございます。矢張り隱されぬ癇性と見て取りました。

私の父へこの事を話しまするど、名人氣質は皆然うしたものだと言ひました。

父はこれでも鼓が上手で、少しは自慢にして居るのでした。

で、奥様は藝事に掛けては[illegible]御癖があるのでございます。それが孃様を御教へ遊ばすやうになツてから、我子となつて見れば可愛いのと慾目がついて能くしたいのが人情、殊に奥様は最始この孃様を御貰ひなさるにも、顏より姿より、何より御聲の可い、美しい處に心からお惚れ遊ばしたので、御自分の御胸には、御貰ひになる當時から、「物にして見せる」と云ふ氣があつたので、その私が氣遣つてたのもそれでした。

處が其物にして見せるが、いよ〳〵始まり掛けたのです。私はなんと無く、孃様の御稽古をお始めになつた時から、胸騷ぎがするやうでした。

しかし奥様も充分に注意遊ばしたと見えて、餘程根氣可く、滅多に「それはいけません」など、有仰る事もなく、大體の事は大目に見て默つてお在の御様子でした。

孃様は御好きですから、毎日飽かずに面白う謠つてお在なさる。奥様もそんな御様子ですから先つ御無事、まあこの「物にして見せる」の御稽古が、これ限りでありましたら、それこそお二人の御幸福、賑はしかつた御邸が急に淋しくもならず、私の落膽する事もなかつたでしようが、元々押へても押へ切れぬ奥様の御氣性です。殊に藝事に掛けての御熱心がある。つい一ツ有仰るお小言が二ツになり三つになり。小さな聲で有仰つたのが高い調子になる。段々それが本當の癇聲になつて來るのでした。

「アレ、然うでは無い、イヽエ、然うでは無い……。」

と、焦りに焦つて氣をお揉みになるやうになりました。

すると又今迄空で長閑に啼いて居た鳥の聲のやうであつた孃様のお聲がヘタヘタと變つて、何やら陰氣に沈んで聞えるやうになりました。奥様のお焦りになる程、孃様の調子が亂れるやうになりました。

不思議は稽古の時斗りで無く、常の時と何うやら沈んでお在のやうに見受けました。次第々々に冴えた處が無くなるやうに見受けました夕方椽端で泣いてお在の處も見ました、其泣き方はお兒様に可くある泣き方とは違ふ様でした。

それと同じく奥様も亦違ひました。お稽古の時斗りで無く、平常もなんと無く、孃様にお當りの様子が見えて以前とは違ふ様になりました。

早く申せば、奥様のお胸にはもう愛は無いかのやうでした。一個に「物にして見せる」と、云ふお心斗りの様でした。

私は唯もうはら〳〵とする斗りで、何うしやうもありませんでした。

御夕飯も以前の様におもしろ可笑しく、お賑やかでは無いやうになりそれでも旦那様丈けはお變り無く孃や〳〵でお可愛いがりになるやうです。けれども孃様はもう以前のやうに思ひ切つてれ、だりがましい事は有仰らぬやうになりました。つまり無邪氣がなくなツて、どことなく義理ある母に對する所爲となりました。

恰度油の乏しくなッたランプの火、次第〳〵に薄暗くなるやうに孃樣は増々冴え無い方におなりでした。

或夜の事で、私は勝手の用を終つて、獨り風を入れる心算で。御椽へ出て居りますと、其夜も書齋で稽古が始まッたものと見えて、あはれ氣な孃樣の聲が聞こえて居ました。

私は其御聲を聞くと、「ア、又今夜も……。」と、胸が一杯になるやうでした。しかし又其中に節の面白い處もあれば、調子の可い處もあるので、不思議惚れて居ますと、私の前をふわ〳〵と螢が飛んで居ます。私は何時ものやうに團扇を上げて捕らうともせず、唯その飛ぶのを見ては、依然孃樣のお歌に聞き惚れて居ますと、螢は庭中を飛び廻つて、ふうわりと板塀の外へ消えて終ひました。

私はこの時、なんと云ふ事は無しにハット致しました。

「もしや孃樣は、此御邸をお出になるやうな事はあるまいか……。」

眞に女の蟲にもつかぬ考へではございますが、然う考へたのです。

* * * * *

私の不思議な考へは其後不幸にも當つて、孃樣は遂にお里へおかへりになりました。淋しいお家は又以前に増して淋しい家となりました。



▲自殺統計

世界各國中統計上より觀たる自殺者の多少は確かに其國文明の奈何を表示するものにして、社會學者の参考資料とする處なるが、最近普西亞に於ける自殺の數を聞くに

原因	一九〇四年
人生悲觀	四四三
不治病症	八六三
精神病	二一六四
激情	二一二
犯罪	五三一
悲哀	四五
苦悶	七七四
懺悔恥辱	五二七
忿怒爭闘	一五五
不明	一七五六

以上七千四百七十人の自殺者中男子は五千八百七十八人、女子は千五百九十二人にて更に其年齢に於ては一般に高齢に達するに從て益増加するの傾向を有し而も之が誘引となるものは不治の疾病、人生を悲觀し浮世の生活を倦厭せるもの、激情、悲哀、苦悶、懺悔、恥辱等の順序によつて數を現はせるなりと云ふ、

六月號記事要目

（六月五日發行）

▲婦人への注文……江原素六氏
▲黄金と結婚する女の内心解剖　元祿女史
▲自由戀愛論……安部磯雄氏
▲實務上の婦人……嘉悦女史
▲放蕩息子戒心の實例……×　×　×
▲歐米漫遊雜觀……麻生正藏氏
▲茶の湯の話……松浦老伯
▲情死を遂げざりし人の實話……×　×　×
▲貧困に堪へたる良妻の一生　中村鈴子
▲美人の勢力範圍……泊　子
▲人事判斷……（解答三十五種）
▲婦人立志の礎……白鷺生
▲家政學校（小説）……巖谷小波

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ケ月分）……前金七十五錢
八冊（半ケ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ケ年分）……前金二圓八十錢
内（定刊數……十二冊
　一增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵税　一冊　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	二十圓	割引　四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引　三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引　二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引　二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文畧規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年五月五日發行　第六卷第七號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番　二千六百二十番
千十八番　三千二百二十九番

統計學專攻伊東祐穀君著

明治三十九年

袖珍 世界年鑑

全一册 洋装菊判半截縦五寸〇分横三寸八分總布金文字入 紙數六百餘頁◉五月上旬發行

日本の部　各國の部　世界の部　實業の部

本書は四大部に分ち著者の心血を濺ぎたる世界年鑑の内容に倣ひ更に其粋を抜き精を萃め重きを新事實の報道に措き記事の簡潔と携帯の便とを以て刻下の需用に供せんとするものなり著者の統計學に篤き世既に定評あり本館曩に著者と相謀り明治卅七年世界年鑑を發刊したるに大方の高需に倍し殊に著者伊東君の客歳十月擧行臨時臺灣戸口調査事務視察の爲め渡臺の折は同地官私の世界年鑑需用高實に三百部を超へ同君往返の途次に於ける各府縣の購需亦豫想以上に達し發兌以來數月を出ですして豫約注文の外諸方よりの清需に應ずる能はざるに至れり

則ち著者の臺灣より歸るや時偶々歳尾に瀕し明治卅八年世界年鑑の再版に暇なく遂に同君と謀り其勵精に依りて急劇斯巻を出だすこととせり本書素と袖珍書なれば常にポケットに挿入して一たび繙かば宇内の大勢を窺ふに足るべし氏が大書冊の編纂に長ぜるのみにあらず即ち本館從前政教、地理、文化等に關する編修を試むる毎に同氏の統計表を載錄し來り殊に客年末刊行の當用日記及懐中日記も仰ぐに同君が統計の正確至便なるを以てしたるに我國戰後の需用頓に進みたるものか無慮百萬部を賣盡したるが如き私かに本館の誇りとする所併せて本書内容の簡にして要を逸せざるを知るに難からず

思ふに戰捷の國民は遂に世界を知らざるべからず一部倭小の冊子能く精を悉すとのみ言はず然れども廣汎の記事細大の事跡之を索むるに舊來の世界年鑑あり今本書を發行する所以抑も期する所なくんばあらず乃ち本書も又た逐年發刊の期を過たず世界年鑑に先んじて恒に新事實の報道を任とせば庶幾は江湖需用の在る所に適ひ以て國勢の隆運に副ふを得ん故敢て大方諸賢の座右に一本を薦む

▲正價七拾五錢　▲郵税八錢

◉豫約——明治三十九年五月廿日迄申込に限り金六拾錢(外に要送料)

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

(後付の一)

毎月五日廿日發行

日露戰史

四六二倍判本文二百餘頁寫眞版廿四頁

正價一冊參拾錢○八冊貳圓廿錢○十六冊四圓廿錢△郵稅參錢

第七卷 遼陽の包圍攻擊……四月五日發行

▲題辭 西大將◎兒玉大將 大島大將◎大久保中將

▲口繪 滿洲軍總司令部、第二軍司令部、鞍山店の急追擊、遼陽城外の激戰、首山堡の激戰、太子河の軍用架橋、第一軍司令部太子河の前進 兵燹中の遼陽停車場、分捕重砲隊遼陽の總攻擊、外拾數葉

第一編 總說
第一章 露軍の防禦配備
第二章 日本軍の攻擊準備
第二編 黑木軍の戰況
第一章 初期の戰鬪
第二章 側面攻擊
第三編 野津軍の勇戰
第一章 鞍山店及孀家爐の戰
第二章 野津軍の總攻擊
第三章 遼陽城下の戰鬪
第四編 奧軍の戰況
第一章 奧軍遼陽準備戰
第二章 大島師團の奮戰
第三章 大久保師團の戰鬪
第五章 遼陽郊外の激戰
第五編 結論

附錄
▲遼陽戰に於ける兵力の對照
▲日露陸軍の公報
補記
◎海外戰評と影響
◉戰局地圖
●遼陽戰に於ける各軍行進經過圖
●遼陽附近戰鬪圖

第八卷 第三軍初期の活動……四月二十日發行

▲題字 乃木大將◎大島中將 中村少將◎馬塲少將

▲口繪 第三軍の各將軍、旅順要塞の敵壘、旅順の激戰塲、松樹山砲壘破壞の一部、水師營鬪帝廟、破壞せる旅順新聞社、兵燹に罹れる大連、後甲子山海軍繃帶所、旅順用水の水源、外拾數葉

第一編 旅順前進陣地の戰鬪
第一章 南山占領後の經過
第二章 フィン山及歪頭山
第三章 攻圍軍の前進
第四章 中央縱隊の行動
第五章 右縱隊の行動
第六章 左縱隊の行動
第七章 平大山附近の戰鬪
第八章 右縱隊の前進
第九章 大小孤山攻略
第十章 敵艦隊の絕望
第十一章 至仁の聖旨
第十二章 旅順要塞の防禦
第十三章 攻城作戰
第十四章 右縱隊の準備戰
第二編 第一回總攻擊
第一章 右縱隊の動作
第二章 中央縱隊の戰鬪
第三章 左縱隊の動作
第三編 部分攻擊
第一章 右縱隊方面
第二章 中央縱隊方面
第三章 爾後の經過
第四編 第二回旅順總攻擊
第一章 松樹山方面
第二章 中央方面
第三章 右縱方面
第四章 砲擊の効果
第五章 爾後の經過

附錄
▲帝國陸軍公報
▲旅順攻圍軍に於ける個人
補記
◎軍陣雜記◎美譚逸話
●戰局地圖
●旅順金州附近略圖

東京 博文館 本町

（後付の二）

東京美術學校教授 白井雨山君閲
森田洪君 鈴木古拙君 牧野等君共著

應用家庭美術

全一册

(新刊發賣)

洋裝四六判美本 紙數三百四十頁 正價金四拾錢 郵税八錢

▲口繪!! 鮮魚之圖(三色版)石膏型像(寫眞銅版)磁器花瓶圖(石版彩色刷)

本書概目

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(後付の四)

文學士 久保天隨君著

五月上旬發行

著者の博洽該實、殊に史學に精通し、獨創の所見に富むこと、世皆すでに之を知る。本書は、主として日本歷史の參考に供せむが爲に、緻密なる注意を以て纂述せしものにして、はじめに綱目を擧げ、次に個條的に之を細述し、鉅細悉く羅し、幽顯すべて搜り、筆を太古に起して、最近日露戰役に及び、治亂盛衰の外、人文史上の

日本歷史寶鑑

諸種現象、一として包括せざるなく、材料精確、引證該博、秩序整然として、筆力犀利。加ふるに、數種の索引を附して、檢出に便にしたれば、その使用如何によりては、又完全なる一個の歷史辭書たるべし。中等教育に關係ある者は、固より論なく、苟くも國民たるものは、何人と雖も、一本を座右に備ふべく、眞に寶鑑の名に負かざる要册といふべきなり。

●洋裝菊版上製○裝幀優美○紙數約千頁

（後の五）

東京 博文館 本町

幼年畫報

發行元　東京　博文館



さあ〳〵皆さん本年初めて當館より發行しました、幼年畫報は、日本に是迄類のない、ごく面白い繪雜誌で御座りまして到る所に大好評を蒙つて居り升が、定價は拾錢でどこの雜誌やでも、どこの繪雙子屋でも、賣つて居ります、さあ〳〵評判〳〵

●毎月五日發行●菊判美本本文石版極彩色刷及活版彩色寫眞入　正價　一册拾錢●六册五拾六錢●十二册壹圓拾錢▲郵税五厘宛

第六號目次

五月五日發行

主筆 日本中學校教授 攻玉社中學校教授 竹貫登代多君

數學世界

第二卷第壹號＝四月一日發行

數學世界 算術之部
數學世界 代數之部
數學世界 幾何之部

三科共毎月一回一日發行
各一ヶ年卒業
洋裝菊判
毎號八十餘頁

正價

一冊金拾錢▲三冊前金貳拾八錢▲六冊金五拾七錢▲一ヶ年十二冊金壹圓拾錢▲外に郵稅一冊壹錢宛▲三科全部一年卅六冊金三圓貳拾錢●外要郵稅

三十八年五月を以て第壹號を發刊したる本誌は刊行以來學生諸君の大々喝采を博し臨時增刊を數する事二回爾來學期の都合に由り一月三月は各二回宛の發行を重ね三月十五日第十四號を以て三科共完了を告げたり。

今從來の經驗に基づき大に面目を新にし四月一日を以て三十九年度第貳卷第壹號を出せり、本年度に於ける内容は如何？各科の講義は順序を追て初學者と雖も直に了解し得る如く親切に說明し、且之に新なる問題を課するは勿論每號研究資料欄には斯道知名なる學者の意見を載し、尙每號に課題を拔出して諸子の解答を求め、自問自答欄は廣く開放して大方の投書を蒐め、殊に各種學校の試驗問題は汎く拾集して之れが解法の指針を示さんとす。

第壹號要目

算術（第一號）

▲珍乘積に就て……理學士 松村定次郎
▲記數法……出野淺治君
▲算術講義
▲雜錄
數の呼び方ト數の書き方○寄せ算○引き算○掛ケ算○割算自問自答○研究課題○質義應答○諸學校入學試驗問題○同解義

代數學（第一號）

▲方程式の根に就て……數理學館長 松岡文太郎
▲代數學の一問題……廣田金吾
▲代數學講義
▲雜錄
因數、係數、冪數、項法○代數式○方程式負數○以上の問題 自問自答○研究課題○質義應答 諸學校入學試驗問題○同解義

幾何學（第一號）

▲極大及極小問題に就て……理學士 藤田外次郎
▲幾何學の一問題……飯田與三
▲幾何學講義
▲雜錄
緒論○一點に於ての角○平行直線○三角形○以上問題 自問自答○研究課題○質義應答 諸學校入學試驗問題○同解義

東京本町 博文館

（後付の七）

主筆　農學士　石阪橘樹君

農業世界

第壹卷第貳號目次

▼毎月一回十日發行◉第壹卷第貳號五月十日發行◉年刊十二册外に臨時增刊發行

▼菊判　毎號　本文二百四十頁
口繪光澤寫眞版四頁普通寫眞版四頁
彩色石版二頁

◉定價一册貳拾錢　郵稅貳錢
△四册前金七拾五錢八册壹圓四拾五錢
△十六册で圓八拾錢●外要郵稅

東京本町　博文館

（後付の八）

女學世界
(明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可) 第六卷第七號 (明治卅九年五月五日發行 每月一回五日發行)



(定價金貳拾錢)